国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第 9 冊

沖遺跡

2024.2

香 川 県 教 育 委 員 会

国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第 9 冊

沖遺跡

2024.2

香 川 県 教 育 委 員 会

序　文

国道438号道路改築事業(飯山工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書も、本報告で9冊目となりました。開発事業で失われる遺跡の情報を後世に伝えるための記録資料が、本報告書です。

丸亀平野中央部を流れる土器川と、平野東部の大束川との間の平野部のうち、飯野山より南側は、かつて律令国家により褐足郡坂本郷・小川郷・井上郷とされた地域です。この地域での埋蔵文化財の知見は、これまで限られたものでしたが、国道438号道路改築事業に伴う発掘調査により、地域がたどってきた土地の履歴を明らかにすることができました。

今回報告する沖遺跡(丸亀市飯山町上法軍寺)では、弥生時代から江戸時代に至る遺構・遺物が見つかっています。「遺構」は地面や地形を加工して造られた施設の痕跡、「遺物」は様々な生活で使われた広い意味での道具や材料のことです。時代とともに変わる地形環境に応じて、先人たちが土地を切り拓き、生活の場としていたことが、遺構や遺物から読み取ることができます。土地の開発や彼らの生活が必ずしも安定したものでないことは、遺構・遺物の中に空白期があることからうかがえますが、幾度にもわたる大地への働きかけの結果が、現在の田園風景であることを知るならば、唯一無二の歴史がここで営まれてきたことを実感することができるのではないでしょうか。

本報告書の「まとめ」では、現在の景観の重要な基盤をなす条里型地割の成立過程、小範囲に分布する特徴的な土器椀、火鉢形土器の様相について考察しています。また、これまで明確でなかった県内における室町時代から江戸時代頃の土器について、把手付鍋や擂鉢を題材に時代による変化を検討した編年案も提示しています。これらを、今後も検討すべき点の多い課題として、多くの方々に御活用いただき、また御批判をいただけることを切望しております。

最後になりますが、発掘調査から本報告書刊行に至るまで、多大な御理解と御協力をいただきました関係諸機関、地元関係者の方々に、深甚なる感謝を申し上げて、序文の結びといたします。

令和6年2月

香川県埋蔵文化財センター
所長　佐藤　竜馬

例　言

1　本報告書は、国道438号道路改築事業(飯山工区)に伴い実施した、沖遺跡(香川県丸亀市飯山町上法軍寺)の発掘調査の本報告である。

2　発掘調査及び整理作業は香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査及び整理作業においては、次の方々、機関の協力を得た。
地元自治会、地元水利組合、丸亀市文化財保存活用課、丸亀市飯山南コミュニティセンター、岡山理科大学、香川県土木部道路課、中讃土木事務所、香川県産業技術センター、東信男、荻野繁春、首藤久士、高上拓、富岡直人、乗岡実、松田朝由、真鍋一生　(順不同、敬称略)
　角礫凝灰岩製五輪塔の記載については、石材などを含め大川広域行政組合松田朝由氏よりご教示を得た。記して感謝申し上げます。

4　報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆は第1章、第2章第1節、第5章第2・3節を益崎卓己、第2章第2節、第3章第4節、第5章第1・4節を溝上千穂、第3章第1～3節を蔵本晋司・益崎・溝上、第5章第5節を益崎・溝上・佐藤竜馬が分担して行った。第3章第1～3節の執筆者は各文章末尾に記載した。第4章の執筆者については目次を参照されたい。なお、編集は山元素子が担当した。

6　本書で用いる座標系は世界測地系(国土座標第Ⅳ系)で、標高は東京湾平均海水面を基準とした。

7　遺構は、次の略号により表示した
SA：柵　SB：建物　SD：溝　SK：土坑等　SP：柱穴　SR：自然河川　SX：その他の遺構

8　遺構断面図の水平線上の数値は標高(m)である。

9　遺構断面図中の注記については、色調に小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。

10　土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。同表中の残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

11　遺物の時期は、次の文献を参照した。
上田秀夫1982「14～16世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
荻野繁春1985「西日本における中世須恵器系陶器の生産と資料」『福井考古学会会誌』第3号福井考古学会

小野正敏 1982「15、16 世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
尾上実 1983「南河内の瓦器碗」『藤澤一夫先生古稀記念　古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
佐藤竜馬 1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 18 冊　国分寺楠井遺跡』香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 4 冊　空港跡地遺跡Ⅳ』 香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター
鈴木康之 1996「土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ―中世瀬戸内の集落遺跡―』広島県教育委員会
野上建紀 2000「磁器の編年 (色絵以外)」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
乗岡実 2002「近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』 岡山市教育委員会
藤沢良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
間壁忠彦 1991『考古学ライブラリー 60　備前焼』ニューサイエンス社
松本和彦 2003「西の丸町地区出土の陶磁器について」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 5 冊　高松城跡 (西の丸町地区) Ⅲ』香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター
盛峰雄 2000「陶器の編年」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
山本信夫 2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市教育委員会

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯……1
第２節　発掘調査と整理作業の経過……2

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境……4
第２節　歴史的環境……6

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法……8
第２節　基本層序……10
第３節　１～３区の調査……38
第４節　4・5区の調査……178

第４章　自然科学分析

第１節　香川県沖遺跡出土動物遺存体の分析……186
第２節　プラント・オパール分析（令和元年度調査）……189
第３節　プラント・オパール分析（令和３年度調査）……193
第４節　放射性炭素年代測定……199
第５節　沖遺跡出土土師器の胎土材料……204
第６節　出土木製品の樹種調査結果……216
第７節　沖遺跡出土のサヌカイト製石器の産地推定……218
第８節　沖遺跡出土鍛冶・鋳造関連遺物の調査……223
第９節　沖遺跡出土木製品の樹種同定……231

第５章　まとめ

第１節　遺構の変遷……236
第２節　沖遺跡周辺における条里型地割の展開……243
第３節　「特徴的な」土師質土器椀の分布と展開……248
第４節　沖遺跡出土の土師質土器火鉢について……252
第５節　中世後期～近世前期における土師質土器把手付鍋・擂鉢について……271

挿図目次

第１図　遺跡の位置……1
第２図　地質分類図……5
第３図　周辺の遺跡……7
第４図　調査区配置図……9
第５図　基本土層模式図……10
第６図　2-3 区北壁・東壁・西壁土層断面図……12
第７図　1-1 区東壁土層断面図……13
第８図　1-1 区北壁、2-1 区北壁・西壁土層断面図……14
第９図　2-2 北区西壁・南壁土層断面図……15
第 10 図　1-2 区東壁、2-2 南区西壁土層断面図……17
第 11 図　1-3 区東壁・南壁土層断面図……18
第 12 図　3-5 区南壁・西壁・北側拡張部東壁土層断面図…19
第 13 図　3-4 区北壁土層断面図……20
第 14 図　3-4 区東壁・北側拡張部東壁、
3-3 区北壁・北東壁土層断面図……21
第 15 図　3-3 区東壁・西壁土層断面図……23
第 16 図　3-1 区東壁土層断面図……24
第 17 図　3-1 区西壁土層断面図……25
第 18 図　3-1 区北壁、3-1 北拡張区北　南壁・北壁
・西壁土層断面図……26
第 19 図　3-2 区東壁土層断面図……27
第 20 図　3-2 区東壁土層断面図（土壌注記）……28
第 21 図　3-2 区西壁土層断面図……29
第 22 図　3-2 区南壁土層断面図……30
第 23 図　4 区東壁土層断面図……31
第 24 図　4 区西壁土層断面図 1……32
第 25 図　4 区西壁土層断面図 2……33
第 26 図　5 区東壁土層断面図……34
第 27 図　5 区西壁土層断面図……35
第 28 図　5 区西壁土層断面図（土壌注記）……36
第 29 図　4 区北東隅・南壁（東半）土層断面図……36
第 30 図　4 区南壁（西半）、5 区南壁土層断面図……37
第 31 図　1 ～ 3 区遺構配置図（弥生時代後期以前）‥39 ～ 40
第 32 図　3-3 区 SK3030 平・断面図……41
第 33 図　1-1 区 SD1016 平・断面図……41
第 34 図　1-1 区 SD1020 平・断面図……41
第 35 図　2-1 区 SD2001 平・断面図……42
第 36 図　2-1 区 SD2002 平・断面図……42
第 37 図　1-3・3-2 区 SD3022 平・断面図……43
第 38 図　1-1・2-3・3-3 区 SD3054 平・断面図……44
第 39 図　1-3・3-2 区 SR3004 平面図……45
第 40 図　1-3・3-2 区 SR3004 断面図、出土遺物……46
第 41 図　1 ～ 3 区遺構配置図（古墳時代～古代）‥‥49 ～ 50
第 42 図　1-1・2-1 区 SD1005 平面図……51
第 43 図　1-1・2-1 区 SD1005 断面図……52
第 44 図　1-1・2-1 区 SD1005 出土遺物……53
第 45 図　1-1・2-1・3-1 区 SD1006 平・断面図、
出土遺物……54
第 46 図　1-1・2-1 区 SD1008 平・断面図……55
第 47 図　1-3 区 SD1019 平・断面図……55
第 48 図　2-3 区 SD2003 平・断面図……55
第 49 図　1-3・3-2 区 SD3019 平・断面図……56
第 50 図　3-2 区 SD3020 平・断面図、出土遺物……57
第 51 図　3-2 区 SD3021 平・断面図、出土遺物……58
第 52 図　1-2・2-2・3-1 区 SD3039 平面図……59
第 53 図　1-2・2-2・3-1 区 SD3039 断面図 1……60
第 54 図　1-2・2-2・3-1 区 SD3039 断面図 2・出土遺物‥‥61
第 55 図　1-2・3-1 区 SD3040 平・断面図、出土遺物‥‥‥62
第 56 図　3-3 区 SD3049 平・断面図……63
第 57 図　1-2・3-1・3-2 区 SR3001 SR3002 平面図……64
第 58 図　1-2・3-1・3-2 区 SR3001 SR3002 断面図……65
第 59 図　1-2・3-1・3-2 区 SR3001 出土遺物……66
第 60 図　2・3 区遺構配置図（中世以降）1……68
第 61 図　1 ～ 3 区遺構配置図（中世以降）2‥‥‥69 ～ 70
第 62 図　1-1・2-1 区 SB1002 平・断面図、出土遺物‥‥‥72
第 63 図　2-3 区 SB2001 平・断面図、出土遺物……73
第 64 図　2-3 区 SA2001 平・断面図……73
第 65 図　3-1 区 SB3101 平・断面図……74
第 66 図　3-1 区 SB3102 平・断面図、出土遺物……75
第 67 図　3-1 区 SB3103 平・断面図……76
第 68 図　3-1 区 SB3104 平・断面図、出土遺物……77
第 69 図　3-1 区 SB3105 平・断面図……78
第 70 図　3-2 区 SB3201 平・断面図……79
第 71 図　3-2 区 SB3202 平・断面図……80
第 72 図　3-2 区 SB3203 平・断面図……81
第 73 図　3-2 区 SB3204 平・断面図、出土遺物……82
第 74 図　3-2 区 SB3205 平・断面図……82
第 75 図　3-2 区 SA3201 平・断面図……83
第 76 図　3-2 区 SA3202 平・断面図……83
第 77 図　3-2 区 SA3203 平・断面図……84
第 78 図　3-2 区 SA3204 平・断面図……85
第 79 図　3-2 区 SA3205 平・断面図……86
第 80 図　3-2 区 SA3206 平・断面図……87
第 81 図　3-2 区 SA3207 平・断面図、出土遺物……88
第 82 図　3-3 区 SB3301 平・断面図……89
第 83 図　3-4 区 SB3401 平・断面図……90
第 84 図　3-4 区 SB3402 平・断面図……91
第 85 図　3-4 区 SA3403 平・断面図……91
第 86 図　3-2 区 SK3001 平・断面図、出土遺物……92
第 87 図　3-2 区 SK3002 平・断面図、出土遺物……92
第 88 図　3-2 区 SK3003 平・断面図……93
第 89 図　3-2 区 SK3004 平・断面図、出土遺物……93
第 90 図　3-2 区 SK3005 平・断面図……93
第 91 図　3-1 区 SK3006 平・断面図、出土遺物……94
第 92 図　3-1 区 SK3008 平・断面図……94
第 93 図　3-1 区 SK3009 平・断面図、出土遺物……95
第 94 図　3-1 区 SK3010 平・断面図……95
第 95 図　3-1 区 SK3011 平・断面図……95
第 96 図　3-1 区 SK3011 出土遺物……96
第 97 図　3-1 区 SK3012 平・断面図……97
第 98 図　3-1 区 SK3013 平・断面図……97
第 99 図　3-1 区 SK3014 平・断面図、出土遺物……97
第 100 図　3-1 区 SK3015 平・断面図……97
第 101 図　3-1 区 SK3016 平・断面図……98
第 102 図　3-1 区 SK3017 平・断面図……98
第 103 図　3-1 区 SK3018 平・断面図……98
第 104 図　3-1 区 SK3018 出土遺物 1……99
第 105 図　3-1 区 SK3018 出土遺物 2……100
第 106 図　3-1 区 SK3019 平・断面図、出土遺物……100
第 107 図　3-1 区 SK3020 断面図……100
第 108 図　3-1 区 SK3021 平・断面図……101
第 109 図　3-1 区 SK3022 平・断面図……101
第 110 図　3-1 区 SK3023 平・断面図、出土遺物……101
第 111 図　3-1 区 SK3024 平・断面図……102

第 112 図　3-3 区 SK3025 平・断面図、出土遺物……102
第 113 図　3-3 区 SK3027 平・断面図……103
第 114 図　3-3 区 SK3028 平・断面図……103
第 115 図　3-4 区 SK3029 平・断面図……103
第 116 図　3-4 区 SK3031 平・断面図、出土遺物……104
第 117 図　3-4 区 SK3032 平・断面図……104
第 118 図　3-5 区 SK3033 平・断面図、出土遺物……105
第 119 図　3-2 区 SX3001 平・断面図、出土遺物……105
第 120 図　3-2 区 SX3003 平・断面図、出土遺物……106
第 121 図　3-2 区 SX3008 平・断面図、出土遺物……106
第 122 図　1-1・2-1・3-3 区 SD1001 SD1002
平・断面図……107
第 123 図　1-1・2-2 区 SD1007 平・断面図、出土遺物……108
第 124 図　1-1・2-2 区 SD1009 平・断面図、出土遺物……109
第 125 図　1-1 区 SD1010 平・断面図……109
第 126 図　3-2 区 SD3001 SD3004 平・断面図、
出土遺物……110
第 127 図　3-2 区 SD3003 平・断面図……111
第 128 図　3-1・3-2 区 SD3005 SD3011 平・断面図、
出土遺物……112
第 129 図　3-2 区 SD3007 平・断面図……114
第 130 図　3-2 区 SD3007 出土遺物 1……115
第 131 図　3-2 区 SD3007 出土遺物 2……116
第 132 図　3-2 区 SD3010 平・断面図……117
第 133 図　1-3・2-4・3-2 区 SD3013 SD3014
平・断面図……118
第 134 図　3-2 区 SD3014 出土遺物 1……119
第 135 図　3-2 区 SD3014 出土遺物 2……120
第 136 図　1-3・2-4・3-2 区 SD3014 出土遺物……121
第 137 図　3-2 区 SD3013 出土遺物……122
第 138 図　3-2 区 SD3016 平・断面図、出土遺物……124
第 139 図　1-3・3-2 区 SD3023 平・断面図……124
第 140 図　3-2 区 SD3025 SD3026 SD3027
平・断面図……126
第 141 図　3-1 区 SD3028 SD3029 SD3033 平・断面図……128
第 142 図　3-1 区 SD3028 出土遺物 1……129
第 143 図　3-1 区 SD3028 出土遺物 2……130
第 144 図　3-1 区 SD3029 SD3033 出土遺物……130
第 145 図　3-1 区 SD3030 平・断面図……131
第 146 図　3-1 区 SD3032 平・断面図……132
第 147 図　3-1 区 SD3032 出土遺物 1……133
第 148 図　3-1 区 SD3032 出土遺物 2……134
第 149 図　3-1 区 SD3032 出土遺物 3……135
第 150 図　3-1 区 SD3032 出土遺物 4……136
第 151 図　3-1 区 SD3032 出土遺物 5……137
第 152 図　3-1 区 SD3034 平・断面図、出土遺物……138
第 153 図　3-1 区 SD3035 平・断面図……139
第 154 図　3-1 区 SD3036 平・断面図……139
第 155 図　3-1 区 SD3037 平・断面図、出土遺物……140
第 156 図　3-1 区 SD3041 平・断面図、出土遺物……141
第 157 図　3-3 区 SD3042 SD3043 平・断面図……142
第 158 図　3-3 区 SD3042 SD3043 断面図……143
第 159 図　3-3 区 SD3042 出土遺物 1……144
第 160 図　3-3 区 SD3042 出土遺物 2……145
第 161 図　3-3 区 SD3042 出土遺物 3……146
第 162 図　3-3 区 SD3042 出土遺物 4……147
第 163 図　3-3 区 SD3042 出土遺物 5……148
第 164 図　3-3 区 SD3042 出土遺物 6……149
第 165 図　3-3 区 SD3042 SD3043 出土遺物……150
第 166 図　3-4 区 SD3044 平・断面図……151
第 167 図　3-3 区 SD3045 平・断面図……152
第 168 図　3-3 区 SD3047 平・断面図……153
第 169 図　3-3 区 SD3050 平・断面図……154
第 170 図　3-4 区 SD3051 平・断面図、出土遺物……155
第 171 図　3-4 区 SD3052 平・断面図……155
第 172 図　3-4 区 SD3053 平・断面図……155
第 173 図　3-4 区 SD3055 SD3056 SD3057 SD3059
平・断面図……157
第 174 図　3-4 区 SD3058 平・断面図……158
第 175 図　3-5 区 SD3061 平・断面図、出土遺物……158
第 176 図　3-5 区 SR3003 平・断面図、出土遺物……159
第 177 図　2 区ピット平・断面図……164
第 178 図　3-1 区 ピット平・断面図 1……165
第 179 図　3-1 区 ピット平・断面図 2……166
第 180 図　3-1 区 ピット平・断面図 3……167
第 181 図　3-1 区 ピット平・断面図 4……168
第 182 図　3-2 区 ピット平・断面図 1……169
第 183 図　3-2 区ピット平・断面図 2……170
第 184 図　3-2 区 ピット平・断面図 3……171
第 185 図　3-4・5 区ピット平・断面図……172
第 186 図　1・2・3-1 区遺構外出土遺物……174
第 187 図　3-1 区遺構外出土遺物……175
第 188 図　3-2 区遺構外出土遺物……176
第 189 図　3-3 区遺構外出土遺物……177
第 190 図　3-4・3-5・3 区遺構外出土遺物……178
第 191 図　4・5 区 遺構平面図……179
第 192 図　5 区 SK5013 平・断面図……180
第 193 図　4 区 SD4012 平・断面図……180
第 194 図　4 区 SD4018 平面図……181
第 195 図　4 区 SD4018 SD4019 断面図……182
第 196 図　5 区 SD5014 平・断面図……183
第 197 図　5 区 SA5001 平・断面図、出土遺物……183
第 198 図　4・5 区 ピット平・断面図……184
第 199 図　4・5 区遺構外出土遺物……185
第 200 図　おもな動物遺存体……188
第 201 図　分析試料の採取位置……190
第 202 図　植物珪酸体分布図……191
第 203 図　産出した植物珪酸体……192
第 204 図　分析サンプル断面……193
第 205 図　花粉分布図……194
第 206 図　植物珪酸体分布図……195
第 207 図　7 層から算出した花粉化石……197
第 208 図　7 層から算出した植物珪酸体……198
第 209 図　年代測定を行った試料（№ 1）
（ピンは 5 年間隔）……201
第 210 図　年代測定を行った試料（№ 2）
（ピンは 5 年間隔）……202
第 211 図　ポイントカウント法による粒子組成図 1
（番号は分析№に対応）……209
第 212 図　ポイントカウント法による粒子組成図 2
（番号は分析№に対応）……210
第 213 図　ポイントカウント法による粒度分布図
（番号は分析№に対応）……211
第 214 図　遺跡と周辺の地質
（松浦ほか（2002）の 20 万分の 1 の地質図幅
「岡山及び丸亀」を編集）……212
第 215 図　分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真……214
第 216 図　胎土の偏光顕微鏡写真……215
第 217 図　樹種同定　顕微鏡写真……217
第 218 図　香川県内のサヌカイト原石採取位置……219

第219図　サヌカイト産地推定判別図1……221
第220図　サヌカイト産地推定判別図2……222
第221図　鍛冶滓（250）の顕微鏡写真・EPMA
調査結果……228
第222図　鍛造鉄器片（214）の顕微鏡写真・
EPMA調査結果……229
第223図　ガラス質滓（400）の顕微鏡写真・
EPMA調査結果……230
第224図　光学顕微鏡写真（1）……233
第225図　光学顕微鏡写真（2）……234
第226図　遺構変遷図（1）……237～238
第227図　遺構変遷図（2）……239～240
第228図　遺構変遷図（3）……241
第229図　岸の上遺跡周辺の推定条里坪界線と
溝・掘立柱建物の配置……245
第230図　沖遺跡周辺の推定条里坪界線と
掘立柱建物の配置……246
第231図　特徴的な土師質土器椀……249
第232図　出土地点分布図……251
第233図　沖遺跡出土の火鉢（1）……253
第234図　沖遺跡出土の火鉢（2）……254
第235図　土師質土器火鉢の変遷表……255
第236図　対象遺跡位置……271
第237図　土師質土器把手付鍋の形態的変異（バリエーション）
……274
第238図　土師質土器擂鉢の形態的変異（バリエーション）
……275
第239図　土師質土器把手付鍋・擂鉢編年図……282

表目次

第1表　統一した遺構番号の一覧……8
第2表　2・3区ピット一覧……162
第3表　3区ピット一覧……163
第4表　4・5区ピット一覧……185
第5表　動物遺存体属性表……187
第6表　プラントオパール分析試料（令和元年度）
一覧表……189
第7表　試料1g当りのプラント・オパール個数……190
第8表　プラントオパール分析試料（令和3年度）
一覧表……193
第9表　産出花粉胞子一覧表……194
第10表　試料1g当りのプラント・オパール個数……195
第11表　ウィグルマッチング測定試料および処理……199
第12表　試料№1の放射性炭素年代測定、暦年較正、
ウィグルマッチングの結果……200
第13表　試料№2の放射性炭素年代測定、暦年較正、
ウィグルマッチングの結果……200
第14表　土師器の胎土分析試料の詳細……204
第15表　試料の粘土中の微化石類と砂粒組成の
特徴記載……207
第16表　胎土中の粘土および砂粒の特徴一覧表……207
第17表　岩石片の起源と組み合わせ……207
第18表　ポイント法による粒子の同定・計測結果……208
第19表　出土木製品樹種同定表……216
第20表　サヌカイト分析試料一覧……218
第21表　原石採取地と判別群名称……220
第22表　測定値および産地推定結果……220
第23表　鋳造関係遺物の供試材の履歴と調査項目……227
第24表　鋳造関係遺物の供試材の化学組成……227
第25表　樹種同定結果……231
第26表　樹種同定結果一覧……232
第27表　沖遺跡周辺における推定条里坪界線溝の展開…243
第28表　沖遺跡周辺における掘立柱建物主軸方向の変遷　244
第29表　香川県域における出土事例一覧……250
第30表　火鉢観察表（沖遺跡）……257
第31表　共伴関係表……257
第32～44表　火鉢観察表（1）～（13）……258～270
第45表　対象遺跡の所在地および報告書……272
第46表　見せかけ上の共伴関係一覧……273
第47表　土師質土器把手付鍋・擂鉢の変遷と仮共伴関係の対応
278
第48表　土師質土器把手付鍋の各属性と型式設定……279
第49表　土師質土器擂鉢の各属性と型式設定……280
第50表　土師質土器把手付鍋・擂鉢の併行関係……281
第51～69表　土器観察表（1）～（19）……287～305
第70表　瓦観察表……306
第71表　土錘観察表……307
第72表　用途不明土製品観察表……307
第73表　石器観察表……308
第74表　金属器観察表……309
第75表　木器観察表……309
第76～77表　掘立柱建物・柵列一覧表（1）・（2）310～311

図版目次

写真表紙
　令和元年度　現地説明会終了後
図版 1
　1-2 区全景　北から
　1-3 区全景　南から
　1-3 区（3 面）完掘状況　南から
　2-1 区全景　南から
　2-1 区 SD1005・SD1006 周辺　南から
図版 2
　2-2 北区遺構検出状況　北から
　2-3 区全景　南から
　2-4 区全景　南から
　3-1 区全景　北から
図版 3
　3-1 区全景　南から
　3-1 区全景（3 面）　南から
　3-1 区南拡張部・3-2 区北拡張部全景　東から
　3-2 区全景　南西から
図版 4
　3-3 区全景　南から
　3-3 区全景　北から
　3-4 区全景　西から
　3-4 区全景　南東から
図版 5
　1-1 区東壁　南西から
　1-1 区東壁（SD1005 部分）　南西から
　1-2 区東壁　南西から
　1-2 区東壁　南西から
　1-3 区東壁（SD3019 部分）　北西から
　1-3 区北壁　南から
図版 6
　2-1 区西壁（北半）　北東から
　2-1 区西壁（南半）　北東から
　2-1 区北壁　南から
　2-2 北区西壁　北東から
　2-2 北区西壁南端（SD3039・SD1008 部分）東から
　2-2 北区南壁（SD3039 部分）北から
図版 7
　2-2 南区西壁　南東から
　2-3 区北壁　南西から
　2-3 区東壁　南西から
　3-1 区北壁（SD3039 部分）　南から
　3-1 区西壁（SR3001 部分）　北東から
図版 8
　3-1 区北壁　南から
　3-1 区東壁　北西から
　3-2 区東壁　西から
　3-2 区下層確認　西から
図版 9
　3-2 区西壁　東から
　3-3 区東壁　西から
　3-4 区東壁　西から
図版 10
　3-3 区西壁 SK3030 断面　東から
　2-1 区 2 面 SD2001b-b' 断面　東から
　1-3 区東壁 SD3022 断面　西から
　2-3 区 3 面 SD3054e-e' 断面　西から
　3-2 区 SR3004 遺物出土状況　東から
　3-2 区 SR3004 断面　北西から
　1-1 区東壁 SD1005 断面　西から
　2-1 区 SD1005　東から
図版 11
　1-1 区 SD1005 土器（25）出土状況　北西から
　1-1 区 SD1005 土器（25）出土状況　東から
　1-1 区 SD1005 土器（21・24）出土状況　北から
　1-1 区 SD1005 土器（24）出土状況　西から
　1-1 区 SD1005 土器（25）出土状況　上から
　1-1 区 SD1006 完掘状況　東から
　1-1 区西壁（SD1006 部分）断面　東から
　1-1 区 SD1006b-b' 断面　西から
　3-1 区 SD1006e-e' 断面　東から
　1-1 区 SD1006 土器（29）出土状況　西から
図版 12
　1-1 区 SD1007・SD1008 付近　西から
　2-2 区 SD1008-c-c' 断面　北東から
　2-3 区 SD2003a-a' 断面　北東から
　1-3 区東壁 SD3019 断面　西から
　3-2 区 SD3020 土器（44・45）出土状況　南から
　3-2 区 SD3020 完掘状況　北西から
　3-2 区 SD3020a-a' 断面　東から
　3-2 区 SD3021 断面　東から
　1-2 区 SD3039 完掘状況　南西から
図版 13
　1-2 区 SD3039b-b' 断面　南東から
　3-1 区 SD3040 完掘状況　南西から
　3-1 区 SD3040b-b' 断面　東から
　1-2 区 SD3040d-d' 断面　南東から
　3-3 区 SD3049 断面　北から
　3-3 区 SD3049 完掘状況　南から
　3-1 区 SR3001・SR3002 完掘状況　東から
　3-1 区 SR3001・SR3002 完掘状況　西から
　3-1 区西壁 SR3001 断面　東から
　3-1 区 SR3001 断面　東から
図版 14
　3-2 区 SR3001 検出状況　東から
　3-2 区 SR3001 完掘状況　北から
　3-1 区 SR3001 獣骨出土状況　東から
　3-2 区 SR3001b-b' 断面　東から
　3-2 区 SR3001 遺物出土状況　西から
　1-1 区 SB1002-SP1004 断面　東から
　1-1 区 SB1002-SP1011 断面　南から
　1-1 区 SB1002-SP2018 断面　西から
　2-1 区 SB1002-SP2010 断面　西から
　1-1 区 SB1002-SP2008 断面　西から
図版 15
　2-3 区 SB2001・SA2001 完掘状況　南から
　3-1 区 SB3101・SB3102 完掘状況　北から
　3-1 区 SB3101-SP3239 断面　南から
　3-1 区 SB3101-SP3263 断面　南から
　3-1 区 SB3101-SP3265 断面　北から
　3-1 区 SB3102-SP3240 断面　西から
　3-1 区 SB3102-SP3273 断面　南から
　3-1 区 SB3102-SP3244 断面　東から
　3-1 区 SB3103 完掘状況　北から

3-1 区 SB3103-SP3295 断面　北から

図版 16

3-1 区 SB3103-SP3298 断面　西から
3-1 区 SB3103-SP3317 断面　東から
3-1 区 SB3103-SP3331 断面　西から
3-1 区 SB3104・SB3105 完掘状況　南から
3-1 区 SB3104-SP3348 断面　東から
3-1 区 SB3104-SP3372 断面　西から
3-1 区 SB3104-SP3401 断面　西から
3-1 区 SB3104-SP3401 遺物出土状況　西から
3-1 区 SB3105-SP3368 断面　東から
3-1 区 SB3105-SP3374 断面　西から
3-1 区 SB3105-SP3416 断面　南から
3-2 区 SB3201 ～ SB3205・SA3201 ～ SA3207　南西から

図版 17

3-3 区 SB3301a・b 完掘状況　北から
3-3 区 SB3301-SP3604 断面　東から
3-3 区 SB3301-SP3612 断面　北から
3-3 区 SB3301-SP3614 断面　東から
3-3 区 SB3301-SP3603 断面　東から
3-4 区 SB3401 完掘状況　南東から
3-4 区 SB3401-SP3627 断面　東から
3-4 区 SB3401-SP3678 断面　西から
3-4 区 SB3401-SP3694 断面　南から
3-4 区 SB3402 完掘状況　南東から
3-4 区 SB3402-SP3619 断面　東から

図版 18

3-4 区 SB3402-SP3625 断面　西から
3-4 区 SB3402-SP3642 断面　西から
3-4 区 SA3403-SP3620 断面　西から
3-4 区 SA3403-SP3711 断面　西から
3-4 区 SA3403-SP3712 断面　西から
3-2 区 SK3001 断面　南から
3-2 区 SK3002 断面　東から
3-1 区 SK3006 断面　南から
3-1 区 SK3009 断面　南から
3-1 区 SK3010 断面　南から
3-1 区 SK3012 石検出状況　東から
3-1 区 SK3013 断面　北から
3-1 区 SK3014 断面　南から
3-1 区 SK3015 断面　東から
3-1 区 SK3011 断面　南から
3-1 区 SK3011 完掘状況　西から
3-1 区 SK3018 断面　西から

図版 19

3-1 区 SK3018 遺物出土状況　西から
3-1 区 SK3019 断面　東から
3-1 区 SK3023 遺物出土状況　南西から
3-3 区 SK3024 断面　西から
3-3 区 SK3025 断面　北から
3-3 区 SK3025 断面　東から
3-3 区 SK3025 遺物出土状況　東から
3-3 区 SK3027 断面　南から
3-3 区 SK3027 断面　東から
3-3 区 SK3027 遺物出土状況　東から
3-3 区西壁 SK3027 断面　東から
3-4 区 SK3029 断面　南から
3-2 区 SX3001a-a′断面　南から
3-2 区 SX3003a-a′断面　西から
2-1 区 SD1001・SD1002 完掘状況　東から

図版 20

1-1 区西壁 SD1001・SD1002 断面　東から
1-1 区 SD1001・SD1002b-b′断面　西から
3-3 区西壁 SD1001 断面　東から
1-1 区西壁 SD1007 断面　西から
3-2 区 SD3001a-a′断面　南から
3-2 区 SD3001d-d′断面　南から
3-2 区 SD3005b-b′断面　南から
3-2 区 SD3005d-d′断面　南から
3-1 区 SD3005a-a′断面　西から
3-2 区 SD3007b-b′断面　北から
3-2 区 SD3007c-c′断面　東から
3-2 区 SD3007 動物遺存体・鉄製品（145）出土状況　南西から
3-2 区 SD3007 完掘状況　南から

図版 21

3-2 区 SD3007 完掘状況　東から
3-2 区 SD3007 完掘状況　西から
3-2 区 SD3013・SD3014 完掘状況　西から
3-2 区 SD3010b-b′断面　西から
3-2 区 SD3013b-b′断面　西から
3-2 区 SD3013・SD3014 断面　東から
3-2 区 SD3013・SD3014c-c′断面　東から
3-2 区 SD3013・SD3014d-d′断面　東から
3-2 区 SD3014 東壁断面　西から
1-3 区 SD3014a-a′断面　東から
1-3 区南拡張 SD3014 西壁断面　東から

図版 22

3-2 区 SD3023 完掘状況　西から
3-2 区 SD3025・SD3026 完掘状況　南から
3-2 区 SD3025・SD3026b-b′断面　南から
3-2 区 SD3027c-c′断面　南から
3-1 区 SD3028d-d′断面　南から
3-1 区 SD3028・SD3029a-a′断面　北から
3-1 区 SD3029b-b′断面　北から
3-1 区 SD3028 遺物出土状況　北から
3-1 区 SD3028 遺物出土状況　西から

図版 23

3-1 区 SD3030a-a′断面　東から
3-1 区西壁 SD3032 断面　東から
3-1 区 SD3032a-a′断面　東から
3-1 区 SD3032 土器（272）出土状況　南から
3-1 区 SD3032 土器（274・313）出土状況　西から
3-1 区 SD3032 五輪塔（308）出土状況　西から
3-1 区 SD3037a-a′断面　東から
3-1 区 SD3041a-a′断面　南から
3-3 区 SD3042 遺物出土状況　南から
3-3 区 SD3042b-b′断面　北から
3-3 区 SD3042c-c′断面　北から
3-3 区南壁 SD3042a-a′断面　北から
3-3 区 SD3042 ①土器（368）出土状況　西から
3-3 区 SD3042 ①遺物出土状況　東から
3-3 区 SD3042 ③遺物出土状況　北から

図版 24

3-3 区 SD3042 ③木器（401）出土状況　東から
3-3 区 SD3042 ③木器（401）出土状況　北から
3-3 区 SD3042 ④遺物出土状況　北から
3-3 区 SD3042・SD3043　南から
3-4 区 SD3044b-b′断面　北から
3-3 区 SD3045b-b′断面　北から

3-3 区 SD3047b-b′ 断面　北から
3-3 区北壁 SD3050 断面　南西から
3-3 区 SD3050b-b′ 断面　北から
3-4 区 SD3051 断面　東から
3-4 区 SD3052 断面　南から
図版 25
3-1 区 SP3261 断面　南から
3-1 区 SP3299 断面　南から
3-1 区 SP3319 断面　西から
3-1 区 SP3304 断面　北から
3-1 区 SP3323 断面　西から
3-1 区 SP3354 断面　西から
3-1 区 SP3422 断面　東から
3-1 区 SP3432 断面　北東から
3-1 区 SP3442 断面　東から
3-2 区 SP3083・SP3084 断面　南西から
3-4 区 SP3633 断面　南から
3-4 区 SP3690 断面　北から
4 区遺構検出状況　南から
5 区遺構検出状況　南から
図版 26
4 区西壁　東から
5 区南壁（SK5013 部分）　北から
4 区 SD4012 断面　南から
4 区 SD4018・SD4019 完掘状況　南から
4 区 SD4018・SD4019c-c′ 断面　南から
4 区南壁（SD4018・SD4019 部分）　北から
4 区西壁（SD4018・SD4019 部分）　東から
5 区 SA5001-SP5005 断面　東から
図版 27
遺物写真
図版 28
遺物写真
図版 29
遺物写真
図版 30
遺物写真
図版 31
遺物写真
図版 32
遺物写真
図版 33
遺物写真
図版 34
遺物写真
図版 35
遺物写真
図版 36
遺物写真
図版 37
遺物写真

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

香川県坂出市と徳島県徳島市を結ぶ国道 438 号は、中讃地域を南北に貫く主要幹線道路である。近年の交通量の増加による慢性的な渋滞の緩和や交通事故の軽減などを目的として、香川県土木部道路課 (以下、道路課と略称) では、同路線の改修工事を計画した。

これをうけて香川県教育委員会 (以下、県教委 と略称) では、同路線周辺に多くの埋蔵文化財包蔵地が所在することから、平成５年度より道路課と協議を進め、条件の整った地点から順次試掘調査等を実施し、対象地内の埋蔵文化財の包蔵状況を確認した上で、文化財保護法に基づく保護措置を実施してきた。

沖遺跡は、平成 29 年度・令和２年度に実施した試掘調査の結果、新たに周知の埋蔵文化財包蔵地に登載された遺跡である。

国道 438 号改築工事予定地のうち水田部分については平成 29 年 11 月までに用地取得が完了したことから、平成 29 年 11 月・平成 30 年１月に試掘調査を実施し、対象地内の埋蔵文化財の包蔵状況について確認を行った。その結果、一部のトレンチで、古代～中世を中心とした溝や柱穴などが検出されたことから、試掘調査対象地のうち 1449.76㎡を新たに「沖遺跡」として、文化財保護法にもとづく保護措置が必要と判断した。その後、沖遺跡の南隣接地 1546㎡について令和２年９月までに用地取得・既設建物の解体が完了したことから、令和２年 10 月に試掘調査を実施した。結果、沖遺跡で検出した遺構面が連続することを確認したため、試掘調査対象地の全域にあたる 1546㎡を「沖遺跡」の範囲に追加した。なお、試掘調査の詳細については、既に報告されている (香川県教育委員会編 2018、同 2021)。

第１図　遺跡の位置

第２節　発掘調査と整理作業の経過

沖遺跡の発掘調査は、道路課と県教委との間で、道路改築工事範囲のうち市道名沖線東側の境界構造物設置範囲 130㎡ (1-1 区～ 1-3 区) について平成 30 年度 (第 1 次調査) に、市道名沖線東側の残る 499㎡と同西側 1407㎡について令和元年度 (第 2 次調査) に、市道五反地沖線南側の 1543㎡について令和 4 年度 (第 3 次調査) に、それぞれ香川県埋蔵文化財センターを調査担当として実施することで合意した。

第 1 次調査は平成 30 年 9 月 1 日～ 10 月 31 日、第 2 次調査は平成 31 年 4 月 1 日～令和元年 9 月 30 日、第 3 次調査は令和 4 年 4 月 1 日～ 6 月 30 日の期間で、それぞれ香川県教育委員会を調査主体とし、香川県埋蔵文化財センターが担当して実施した。

各調査区の実施時期と調査面積

調査区名	調査調査期間	調査面積（㎡）
1 区	平成 30 年 9・10 月	130
2 区	平成 31 年 4 月～令和元年 9 月	1,906
3 区		
4 区	令和 4 年 4 月～ 6 月	1,543
5 区		

整理作業は、令和 4 年 4 月 4 月 1 日～ 5 月 31 日、令和 5 年 4 月 1 日～ 8 月 31 日に、香川県埋蔵文化財センターにおいて実施した。遺物の接合・図化・写真撮影と遺構図の浄書、遺構写真の整理などを行い、本書にまとめた。出土遺物量は、28㌔入りコンテナ 52 箱である。本報告を作成するにあたり、本遺跡を評価する上で必要と認めるすべての遺構・遺物について報告することを原則とした。また、調査時に作成した図面については、ほぼ全てを本書に掲載し、撮影した写真は、類似したカットを選択するなどして、必要最低限のものを収録した。また、出土遺物は遺構出土遺物の図化を最優先とし、遺構外出土遺物については特に必要と認めるもののみ図化・掲載することとした。

発掘調査及び整理作業の体制は以下のとおりである。(益崎)

平成 30 年度発掘調査の体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
統括	課長	白井通代	統括	所長	西岡達哉
	副課長	片桐孝浩		次長	時松弘志
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長 (兼務)	時松弘志
	課長補佐	中川聡朗		副主幹	斎藤政好
	主事	山下詩織		主任	高橋範行
文化財グループ	課長補佐 (兼務)	片桐孝浩		主任	丸尾麻知子
	主任文化財専門員	信里芳紀		主任	木村義信
	主任技師	真鍋貴匡		主任	横井隆史
			調査課	課長	古野徳久
				文化財専門員	森下友子
				嘱託	角野熱

令和元年度発掘調査の体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
統括	課長	原田智	統括	所長	西岡達哉
	副課長	片桐孝浩		次長	石野高雄
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長 (兼務)	石野高雄
	課長補佐	中川聡朗		副主幹	斎藤政好
	主事	辻おしえ		主任	高橋範行
文化財グループ	課長補佐 (兼務)	片桐孝浩		主任	丸尾麻知子
	主任文化財専門員	松本和彦		主任	横井隆史
	文化財専門員	真鍋貴匡		主任	寺尾一夫
			調査課	課長	古野徳久
				文化財専門員	森下友子
				文化財専門員	山元素子
				技師	益崎卓己
				嘱託	今井由佳
				嘱託	名倉美保
				嘱託	濱田邦彦

令和４年度発掘調査の体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
統括	課長	荻原絢嗣	統括	所長	高原康
	副課長	佐藤竜馬		次長	北山健一郎
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長（兼務）	北山健一郎
	課長補佐	長谷川江里		主任	岩西清二
	主事	安藤瑞基		主任	石田こずえ
文化財グループ	課長補佐（兼務）	佐藤竜馬		主任	松浦佐和
	主任文化財専門員	森下英治		主任	遠山豊
	文化財専門員	宮崎哲治		主任	寺尾一夫
			調査課	課長	北山健一郎
				文化財専門員	長井博志
				技師	溝上千穂
				会計年度任用職員	今井由佳
				会計年度任用職員	徳永貴美

令和４年度整理作業体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
統括	課長	荻原絢嗣	統括	所長	高原康
	副課長	佐藤竜馬		次長	北山健一郎
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長（兼務）	北山健一郎
	課長補佐	長谷川江里		主任	岩西清二
	主任主事	安藤瑞基		主任	石田こずえ
文化財グループ	課長補佐（兼務）	佐藤竜馬		主任	松浦佐和
	主任文化財専門員	森下英治		主任	遠山豊
	文化財専門員	宮崎哲治		主任	寺尾一夫
			資料普及課	課長	信里芳紀
				主任文化財専門員	蔵本晋司
				会計年度任用職員	土井美穂
				会計年度任用職員	中野優美
				会計年度任用職員	加藤恵子
				会計年度任用職員	大山和子
				会計年度任用職員	大林真沙代

令和５年度整理作業体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
統括	課長	佐々木隆司	統括	所長	佐藤竜馬
	副課長	白川晩美		次長	萱原育純
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長（兼務）	萱原育純
	課長補佐（兼務）	白川晩美		副主幹	高原保弘
	主任主事	安藤瑞基		主任	十川晃
文化財グループ	課長補佐	森下英治		主任	松浦佐和
	主任文化財専門員	蔵本晋司		主任	遠山豊
	文化財専門員	竹内裕貴	資料普及課	課長	信里芳紀
				主任技師	益崎卓己
				技師	溝上千穂
				文化財専門員	山元素子
				会計年度任用職員	北濱敦子
				会計年度任用職員	小早川真由美
				会計年度任用職員	土井美穂
				会計年度任用職員	中野優美
				会計年度任用職員	加藤恵子
				会計年度任用職員	大山和子
				会計年度任用職員	小林奈充子
				会計年度任用職員	山本基公美
				会計年度任用職員	佐立晶子
				会計年度任用職員	池内妙子
				会計年度任用職員	大林真沙代
				会計年度任用職員	池田匠
				会計年度任用職員	竹内悦子

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境

沖遺跡は、丸亀平野の南東部、香川県丸亀市飯山町上法軍寺に所在する。調査地の西方 1.5kmには土器川が北流し、周辺に大規模な扇状地が形成される。南方には土器川の扇状地起源と考えられる岡田台地が広がり、南方約 300m には旧綾川によって侵食され形成された岡田台地北縁の段丘崖が東西に伸びる。東方には、旧綾川によって形成された谷底平野と考えられる大束川低地が広がる。調査地は、これらの扇状地・谷底平野の境界付近に位置する。

調査地北側隣接地には大束川が東流する。この大束川は仲多度郡まんのう町・丸亀市綾歌町付近のため池の水を集めて岡田台地上を北流し、段丘崖を下って大束川低地へと流れ出る。段丘崖下で東へと流下方向を転じ、調査地の西方約 200 mで大窪池から流れ出る大窪谷川と合流した後、調査地北側隣接地をさらに東へ流れる。調査地は大窪谷川によって開析された大窪谷谷口の北東側前面にあたり、調査地の西側には北東方向へ開く小規模な扇状地が広がる。調査地付近の現在の水田面標高をみても、北東方向へわずかに傾斜する様子が認められる。

また、周辺の現地表面の標高をみると、調査地北半から名遺跡南半付近には南西－北東方向の帯状の低地の存在が想定できる。実際に現在の大束川はこの低地帯内を東流するほか、平成 30 年度に実施した名遺跡の発掘調査でも、調査地南半で古代から中世にかけての東西流する自然河川、河川由来の洪水砂により埋没した古代の水田を検出している (香川県教育委員会 2021)。付近に先行する古代以前の埋没河川が存在する可能性も想定でき、弥生時代から現代に至るまで、調査地付近は小規模な河川に面した低地であったと推定される。

そのほか、調査地周辺には、現在の市道・農業用水路等が概ね 100 ～ 120 m間隔で規則的に配される様が確認でき、古代から中世にかけて施工された条里地割の痕跡と考えられている (金田 1988)。これらの南北軸は北から 30° 前後西へ振れており、丸亀平野における既知の条里地割の方向とも概ね一致する。今回の調査でも、この推定条里方向に並行する 12 世紀後半から 13 世紀代の溝を複数条検出しており、古代末から中世前半期にかけて、周辺微地形の改変と土地区画の整備が行われたものと推定できる。

一方で、沖遺跡の約 1km北方では条里型地割は明瞭には観察できず、南西－北東方向の帯状に地割が乱れる。この乱れの南北両岸には、高さ 0.5 ～ 1 mほどの段丘崖が認められ、旧土器川などの埋没河道の痕跡と考えられる。これらの旧河道については、古代末から中世初頭にかけて土器川・大束川の河床の下刻により徐々に周辺の扇状地面や谷底平野が段丘化・高燥化し、河道はしだいに埋没したことが指摘される (木下 1991・1995)。そのほかにも、岸の上遺跡北側から飯野山南麓にかけて、主に条里型地割南北坪界線の乱れが確認でき、条里地割施工に前後する時期に埋没した複数条の旧河道の存在が推定できる。

また、大束川は調査地の西 400 mにある古代寺院法勲寺跡付近で南へと逆流し、岡田台地北縁の段丘崖に当たって再び北東方向へと流れを変える。北東方向へ緩く傾斜する扇状地の地形に逆らい、法勲寺跡を迂回するような流形であり、人為的に付け替えられた可能性がある。その後は地形の傾斜に沿って東流するが、沖遺跡北側では推定条里坪界線に沿って直線的に流れる。法勲寺跡付近での不自然なクランクとの前後関係は定かでないが、人為的な付け替えの可能性が考えられる。古代のいずれかのタイミ

地理院地図（陰影起伏図・地形分類図）を加工・加筆して作成

地理院地図（陰影起伏図・地形分類図）を加工し三次元化して作成

第２図　地質分類図

ングで周辺微地形の開発・改変が行われたものと推定できる。現在の沖遺跡周辺は、本来の自然地形と人為的に改変された地形が混在する地形環境と理解できる。

引用・参考文献
香川県教育委員会編 2021『名遺跡』香川県教育委員会
金田章裕 1988「条里と村落生活」香川県編『香川県史 1　通史編　原始・古代』四国新聞社
木下晋一 1991「条里型地割施工以後の地形変化」『香川理学会会報　No.11』香川県地理学会
木下晋一 1995「大東川流域の段丘崖」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 16　川津二代取遺跡』香川県教育委員会ほか
長谷川修一ほか 2010「丸亀平野と飯野山」香川大学公開講座「讃岐ジオサイト探訪」資料

第 2 節　歴史的環境

沖遺跡の周辺の低地部では、弥生時代以前にさかのぼる遺跡は認められない。しかし飯野山の山裾部に位置する坂元神社遺跡、岡田台地上の開析谷内に位置する大窪池遺跡、仁池遺跡からは、旧石器時代もしくは縄文時代とされる石器が採集されており、周辺での人間活動の痕跡は認められる。

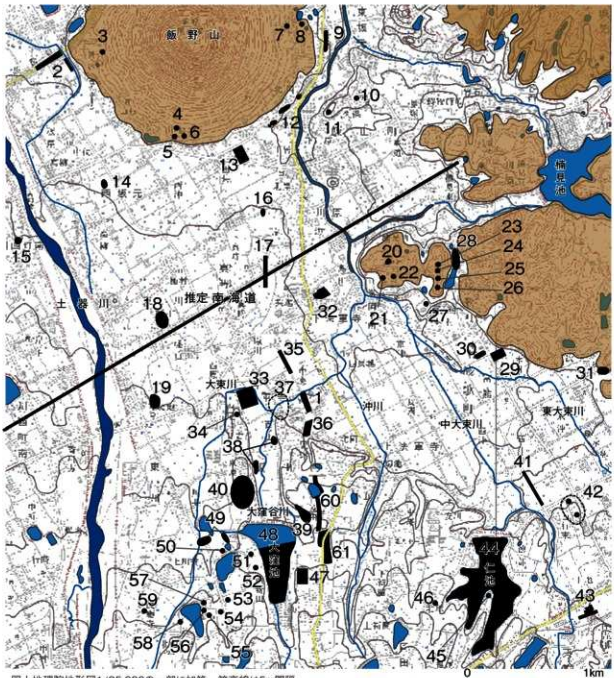
弥生時代から古墳時代中期には、調査地の北東側、大東川沿いの微高地上を中心に集落が展開する。一方の低地部では、当該期の遺構は自然流路が主体で遺物量も乏しく、明確な居住の痕跡は認められない。大東川の河岸段丘上に位置する北岸南遺跡では、弥生時代後半～古墳時代前期の大型灌漑水路を含む複数の溝を検出した。溝は流路方向から土器川旧河道または大東川より取水し、灌漑用水として利用した後、土器川等の旧河道へと排水していたものと考えられ、北岸南遺跡周辺は水田等の耕作地として開発されたことが明らかになっている。土器川東岸に位置する西坂元内板遺跡、西内遺跡では、当該期の明確な遺構は認められず、土層堆積状況から土器川の氾濫原であったと理解されている。

続く古墳時代後期になると、集落遺跡の立地に変化が認められる。岸の上遺跡や名遺跡など大東川低地の中央に位置する旧河道に近接した微高地上で、竪穴建物や総柱建物が出現する。また第 1 節に既述したように名遺跡からは古代の自然流路と水田跡が検出されており、微高地上を居住域として、近接する低地を生産域として開発・利用した様子がみられる。

古代になると、7 世紀後半頃に岸の上遺跡において、官衙的な性格が推定される大型掘立柱建物群が出現し、8 世紀前半頃には付近に南海道が敷設される。周辺の現地形に認められる条里型地割は、同時期以降、順次整備が進められたものと推定される。沖遺跡周辺では、大型掘立柱建物群が検出された東原遺跡や遠田遺跡など、岡田台地上の開発が活発化する様子が認められる。そのほか、沖遺跡南方に近接する沖南遺跡からは、当該期に法勲寺と同文の軒瓦や多くの輸入陶磁器類が出土しており、法勲寺に関係のある人物の住居を想起させる。

中世になると、飯野山の南麓付近に所在する飯山北土居遺跡や東坂元秋常遺跡で居館の堀や屋敷地が確認されるほか、岸の上遺跡、名遺跡、沖遺跡でも中世の集落跡や遺物が認められるなど、遺跡の周辺に当該期の集落が点在することがわかる。また周辺低地部での段丘化の進行に伴い、低地部の開発が活発化する可能性が考えられる。

近世以降になると、岸の上遺跡や北岸南遺跡で土坑などは検出されるが集落跡は検出されていない。各遺跡の調査結果より遺跡周辺の大部分は耕地化されていたものとみられる。



国土地理院地形図1/25,000の一部に加筆　等高線は5m間隔

1 沖遺跡
2 飯野東二瓦礫遺跡
3 真時古墳
4 坂元神社西古墳群2号墳
5 坂元神社西古墳群1号墳
6 坂元神社西古墳群3号墳
7 大谷古墳
8 西の宮古墳
9 東坂元北岡遺跡
10 極楽寺古墳
11 久保大塚
12 東坂元秋常遺跡
13 飯山北土居遺跡
14 西坂元内板遺跡
15 原竜王山2号墳
16 北岸南遺跡
17 岸の上遺跡
18 若宮遺跡
19 西内遺跡
20 法勲寺城跡
21 次郎山1号墳
22 次郎山2号墳
23 富熊4号墳
24 富熊5号墳
25 富熊6号墳
26 富熊神社古墳
27 富熊神社神事場古墳
28 十三塚古墳
29 新土井遺跡
30 堂ノ元遺跡
31 次見遺跡
32 下法軍寺館跡
33 法勲寺跡
34 謂留霊王古墳
35 名遺跡
36 沖南遺跡
37 西の山遺跡
38 大窪谷遺跡
39 遠田遺跡
40 東原遺跡
41 行末西遺跡
42 行末遺跡
43 佐古川・窪田遺跡
44 仁池遺跡
45 椎尾東遺跡
46 北原古墳
47 大坪屋敷跡
48 大窪池遺跡
49 上川井遺跡
50 前谷古墳
51 内光寺荒神塚
52 内光寺梅塚
53 富野氏車古墳
54 渋谷氏古墳
55 大道墓地古墳
56 大林氏2号墳
57 大林氏1号墳
58 車塚
59 成願寺跡
60 岡遠田遺跡
61 岡遠田南遺跡

第３図　周辺の遺跡

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

調査地は国道 438 号改築事業対象地のうち、バイパス新設予定地である。南北約 145m、東西約 25m と南北に細長く、調査地内を東西・南北に市道が交差する。調査区は、第４図に示すとおり、主に市道を境に５区に大別し、調査時の工程や調査開始前に設置されていた隣接耕地への用排水に使用する仮設水路、私道等により、調査段階でさらに小区画に分割して調査を実施した。

1・2・3 区は市道五反地沖線北側に位置し、南北延長約 90m、最大幅約 20m を測る。調査は直営方式により実施し、遺構検出面までの各層は重機により掘削、以降の各層と遺構は人力により掘削した。また、調査に伴う掘削に先立って、業者委託により基準杭を設置し、遺構図面の作成に使用した。各遺構図については、各遺構の状況に応じて、遺構実測支援システムまたは手描きにより実施した。

1・2・3 区ともに、遺構名は原則として検出順に付したが、調査年度や市道をまたいで検出し、調査時には異なる番号を付した遺構で、整理作業の過程で同一遺構と考えた遺構については、遺構番号の統一を行なっている。統一後の遺構番号は第１表のとおりである。(益﨑)

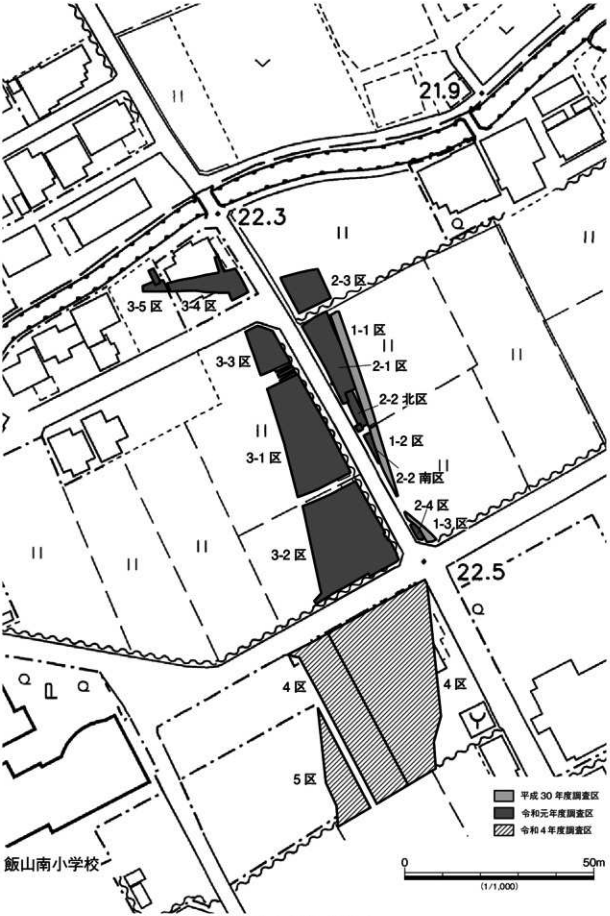
4·5 区の調査対象地は、南北延長約 45 m、最大幅約 35 mであり、調査区西部を水路が南北に横断する。調査区は、第４図に示すように水路より東側を４区、西側を５区と大きく区分し、調査段階でさらに小区画に分割して調査を実施した。調査前は飯山南コミュニティセンター及び駐車場として使用されていた。

調査は直営方式により実施し、基本的に遺構検出面までは重機により掘削し、それ以下は人力にて掘り下げを行った。また、測量に要する基準杭は、業者に委託して設置した。包含層等の遺物は調査小区が狭小であるため、特にグリット設定は行わず、必要と認められた遺物については、トータルステーションで出土位置を測量、記録し、出土状況を写真撮影するなどして取り上げた。

遺構名は、調査時には検出順に付したが、本書を作成するにあたり、すべて新たな番号を付して統一した。(溝上)

第１表　統一した遺構番号の一覧

報告書遺構名		変更した遺構名		報告個所
区	遺構名	区	変更前の遺構名	
3-2 区	SD3022	1-3 区	SD1017	第３節 -1
3-3 区	SD3054	2-3 区 1-1 区	SD2004 SD1015	第３節 -1
3-2 区	SR3004	1-3 区 3-2 区	SR1002 SX3007	第３節 -1
1-1 区	SD1006	3-1 区	SD3038	第３節 -2
3-2 区	SD3019	1-3 区	SD1014	第３節 -2
3-1 区	SD3039	1-1 区	SD1011	第３節 -2
3-1 区	SD3040	1-2 区 2-2 区	SD1012	第３節 -2
3-1 区 3-2 区	SR3001	1-2 区	SR1001	第３節 -2
1-1 区	SD1001	3-3 区	SD3046	第３節 -3
3-2 区	SD3005	3-1 区	SD3031	第３節 -3
3-2 区	SD3014	1-3 区 2-4 区	SD1013	第３節 -3
3-2 区南拡張部	SD3023	1-3 区	SD1018	第３節 -3


21.9
22.3
22.5
2-3 区
3-5 区
3-4 区
1-1 区
3-3 区
2-1 区
2-2 北区
1-2 区
3-1 区
2-2 南区
2-4 区
1-3 区
3-2 区
4 区
4 区
5 区
飯山南小学校
平成 30 年度調査区
令和元年度調査区
令和４年度調査区
0
50m
(1/1,000)

第４図　調査区配置図

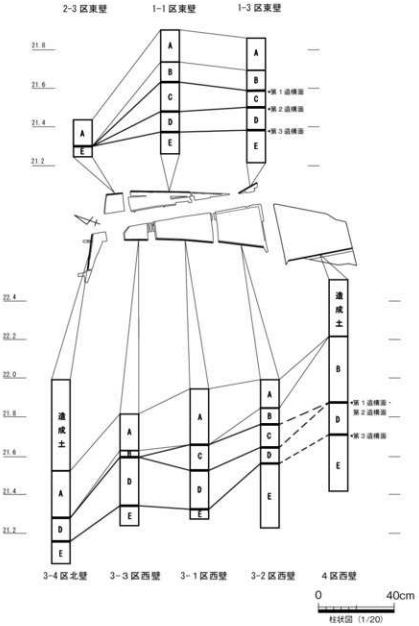
第２節　基本層序

対象地内の土層は、調査区ごとに土色・土質にわずかな差異はあるものの、概ねＡ～Ｅ層に大別できる (第５図)。

Ａ層は、現代の水田耕作に伴う耕作土である。Ａ層上面の標高は、3-4 区・4 区・5 区では造成により上面が削平された可能性もあるが、南西から北東方向に緩やかに傾斜する様子が認められる。

Ｂ層は、Ａ層直下に認められる水平堆積層で、旧耕作土と考えられる。調査区により、２～３層に細分できる。重機掘削中に近世後半期の遺物を包含することを確認しており、同時期以降の堆積と理解した。

Ｃ層は、調査地中央部の 1-1 ～ 1-3 区、3-1 ～ 3-2 区で認められる黄褐色～褐灰色系の砂質シルト～シルト質細砂層である。上面で古墳時代～近世後半期までの遺構が検出でき、第１遺構面として調査を実施した。検出した中世後半期～近世前半期と推定される柱穴等の大半が残存深 10cm前後と極めて浅く、



第５図　基本土層模式図

近世後半期以降の耕地化に伴い、上部が削奪された可能性が高い。3-3 区以北および 4・5 区では堆積を確認できないものの、上記の削奪により消失した可能性が推定できる。

D 層は、C 層直下に堆積する黒褐色系粘質シルトである。上面で溝２条を検出したことから、第２遺構面として調査を実施した。2-3 区を除く全ての調査区で 10 ～ 30㎝の堆積を確認できる。上下の第１遺構面・第３遺構面で検出した遺構の出土遺物より、弥生時代後期～古墳時代前期の間に形成された堆積層と理解できるが、D 層上面で検出した遺構に遺物は認められず、詳細な形成年代の絞り込みは困難である。

E 層は、D 層下位に堆積する黄褐色系粘質シルト～細砂で、上面で溝・自然河川を検出したことから、第３遺構面として調査を実施した。3-2 区で検出した SR3004 埋土最上層より弥生時代後期の甕体部片が出土しており、同時期以前に形成されたものと推定できる。なお、本遺構面より下位の土層については、各調査区においてトレンチ等で確認したものの、遺構・遺物は確認できなかった。

以下各調査区の土層堆積状況について詳述する。(益﨑)

2-3 区（第６図）

調査前は水田等の耕作地として利用されていた。現地表面の標高は 21.6 m前後である。調査区壁面東・北・西の３面において、層序の記録を作成した。

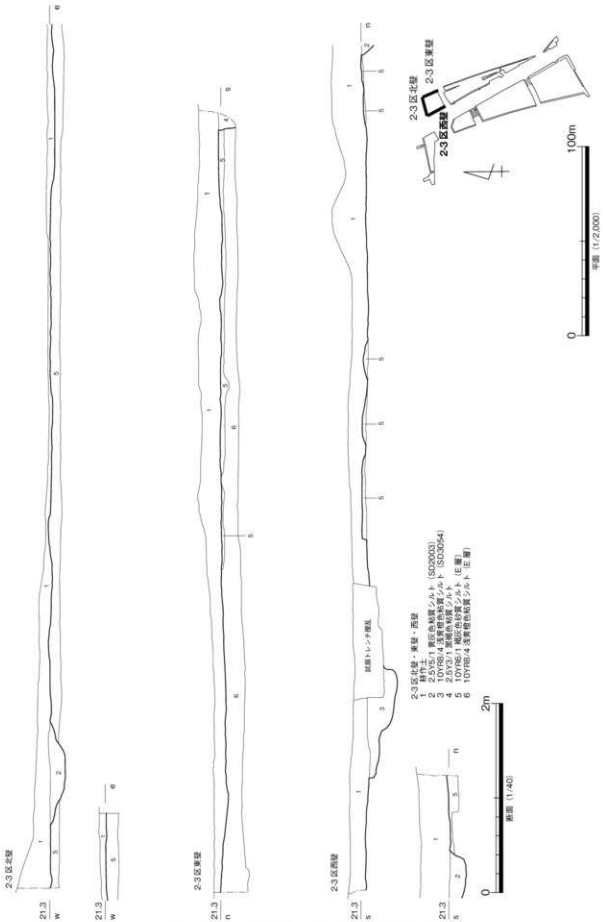
本区では、現耕作土 (A 層) 直下に、褐灰色砂質シルト (E 層) が堆積していた。溝や柱穴等の遺構が検出されたため、第１遺構面として調査を実施した。遺構面の標高は 21.3 m前後で一定し、遺構面上に旧耕作土層等の堆積が認められなかったことから、近年の地下げ等により、遺構面上面が強い削奪を被っていると判断した。また、遺構面の標高値は、後述する南に隣接する 1-1 区・2-1 区の第３遺構面の標高とほぼ等しく、おそらく南に隣接する各調査区で確認された第１・２遺構面は、本区では削奪された可能性が高いと判断される。(蔵本)

1-1・2-1・2-2 北区（第７～９図）

調査前は水田等の耕作地として利用されていた。現地表面の標高は、21.95 m前後である。本調査区では、1-1 区北・東壁、2-1 区北・西壁、2-2 北区西・南壁の各壁面において、基本層序の記録を作成した。

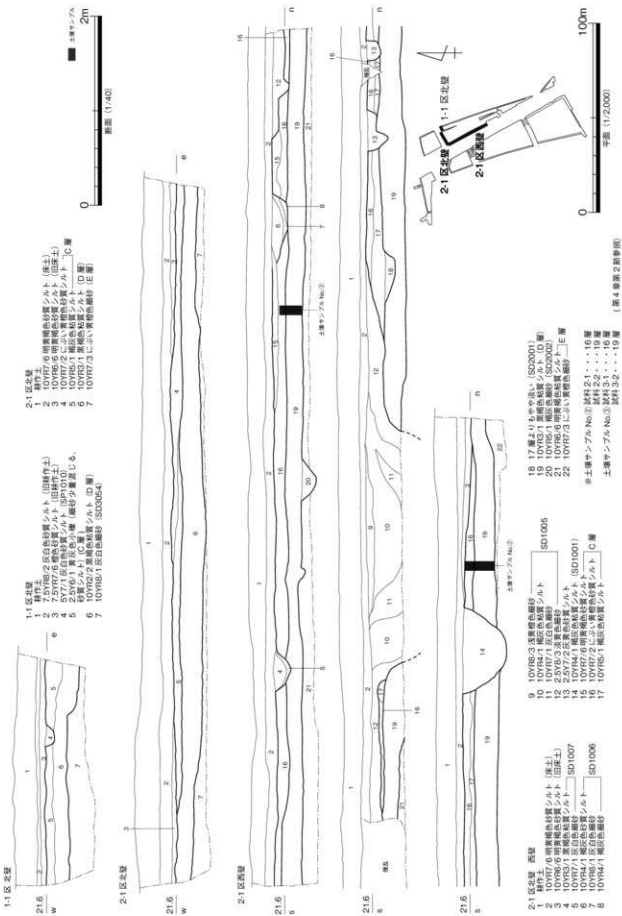
本区では、現耕作土 (A 層) 下で、最大２層に細分される旧耕作土とみられる水平堆積層 (B 層) が認められた。それら旧耕作土層からの出土遺物に近世後半以降に位置付けられる遺物が認められることから、近世後半～近代の耕作土層と考えられる。旧耕作土層 (B 層) 直下には、黄灰色砂質シルト (C 層 : 第７図 1-1 区 44・45 層) やにぶい黄橙色砂質シルト (C 層 : 第８図 2-1 区 16 層)、褐灰色粘質シルト (同図 2-1 区 17 層) 等が水平に堆積しており、溝等の遺構が検出されたことから、第１遺構面として調査を実施した。遺構面上面には、若干の起伏が認められるものの、標高 21.65 m前後で概ね一定しており、上面に堆積していた旧耕作土層の存在からも、本遺構面も近世以降の耕地化により、顕著な削奪を被っている可能性が高い。

第１遺構面のベースとなる黄灰色砂質シルト等を掘り下げると、黒褐色粘質シルト (D 層 : 第７図 1-1 区 47 層、第８図 2-1 区 19 層) 上面で、溝 SD2001 を検出した。検出した遺構は SD2001 のみであるが、本遺構面を第２遺構面として調査を実施した。本遺構面上面も若干の起伏が認められるものの、その標高は概ね 21.5 m前後で一定している。検出された遺構の残存深は浅く、本遺構面上面も人為的に削奪・

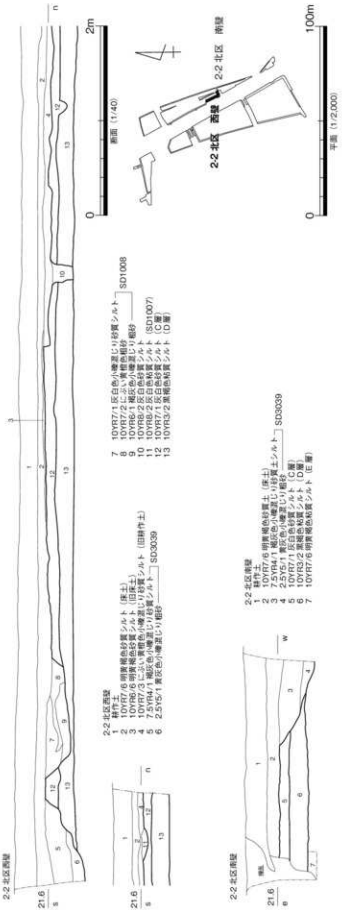


第6図　2-3区北壁・東壁・西壁土層断面図

第７図　1-1 区東壁土層断面図



第8図　1-1 区北壁、2-1 区北壁・西壁土層断面図



第9図　2-2 北区西壁・南壁土層断面図

平坦化され、上面に堆積した第 1 遺構面のベース層を耕作土として、水田等として利用された可能性が考えられる。

第 2 遺構面のベースとなる黒褐色粘質シルトを掘り下げると、黄褐色系粘質シルト (E 層 : 第 7 図 1-1 区 51 層・第 8 図 2-1 区 21 層) やにぶい黄橙色細砂 (同図 22 層) 上面で、溝 SD3054 や SD1016 等の遺構を検出したことから、本遺構面を第 3 遺構面とした調査を行った。本遺構面より下位の各層から遺物は出土しておらず、遺構も確認されなかったことから、本遺構面が最終遺構面となる。本遺構面の標高は、調査区北端で 21.25 m 前後、南端で 21.35 m 前後をそれぞれ測り、緩やかに北へ傾斜して検出された。(蔵本)

1-2・1-3・2-2 南区（第 10・11 図）

本調査区も調査前は水田等の耕作地として利用されていた。現地表面の標高は、21.85 m 前後であった。本調査区では、1-2 区東壁、1-3 区東・南壁、2-2 南区西壁の各壁面で、層序の記録を作成した。

本区でも、現耕作土 (A 層) 下で、最大 2 層に細分される旧耕作土とみられる水平堆積層 (B 層) が認められた。おそらく上述した 1-1 区等の堆積層と同質であることから、近世後半期以降の耕作土層と考えられる。旧耕作土層下には、褐灰色砂質シルト (C 層 : 第 10 図 1-2 区 42 層・第 11 図 1-3 区 10 層) が堆積し、その上面で溝 SD3039・SD3040・SD3014 等や自然河川 SR3001 を検出したことから、本遺構面を第 1 遺構面として調査を実施した。SD3039 は上述した 2-2 北区 (南拡張部) 第 1 遺構面へ延長し、遺構面として連続することが確認された。遺構面上面には、若干の起伏が認められるものの、標高 21.6 m 前後で概ね一定しており、本遺構面も耕地化による削奪を顕著に被っている可能性が高い。

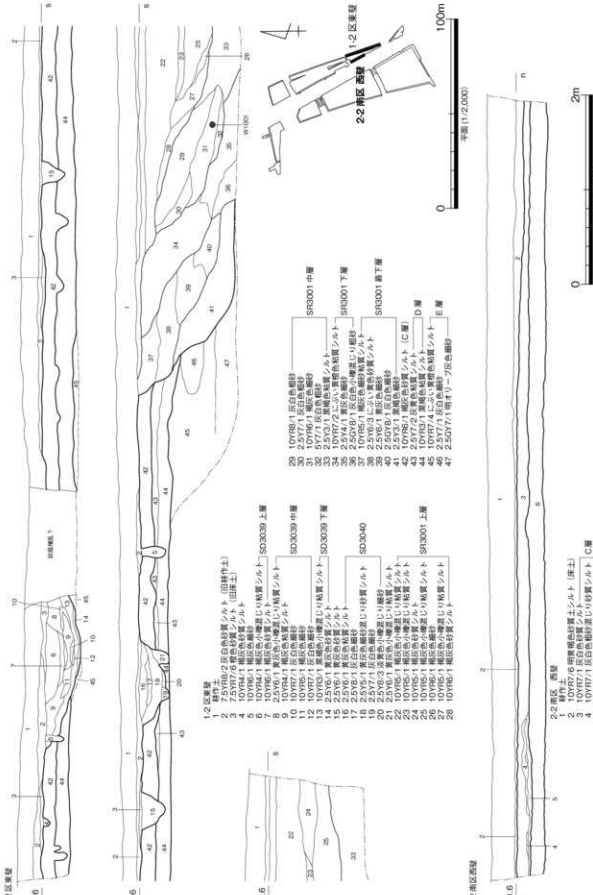
第 1 遺構面のベースとなる褐灰色砂質シルト層を掘り下げると、上述した 1-1 区等より連続する黒褐色粘質シルト (D 層 : 第 10 図 1-2 区 44 層・第 11 図 1-3 区 11 層) や灰黄色粘質シルト (D 層 : 第 10 図 1-2 区 43 層) の水平堆積が確認された。検出レベルや堆積層より、本層上面が 1-1 区等の第 2 遺構面に連続することから、本区においても第 2 遺構面として調査を実施したが、明確な遺構は確認できなかった。また、当該遺構面上面には、若干の起伏が認められるものの、標高は 21.45 m 前後で一定しており、1-1 区等同様、耕地化に伴い上面が平坦に削奪された可能性が考えられる。

第 2 遺構面のベースとなる黒褐色粘質シルト等を掘り下げると、黄色系粘質シルト (E 層 : 第 10 図 1-2 区 45 層・第 11 図 1-3 区 21 層) の上面で溝 SD3022 や自然河川 SR3004 を検出したことから、本遺構面を第 3 遺構面として調査を行った。ベース層や後述する遺構面の標高が近似することから、上述した 1-1 区等の第 3 遺構面に相当する遺構面と判断する。本遺構面の標高は、1-2 区北端で 21.3 m 前後、1-3 区南端で 21.4 m 前後をそれぞれ測り、上述した 1-1 区等と同様に緩やかに北へ傾斜する。(蔵本)

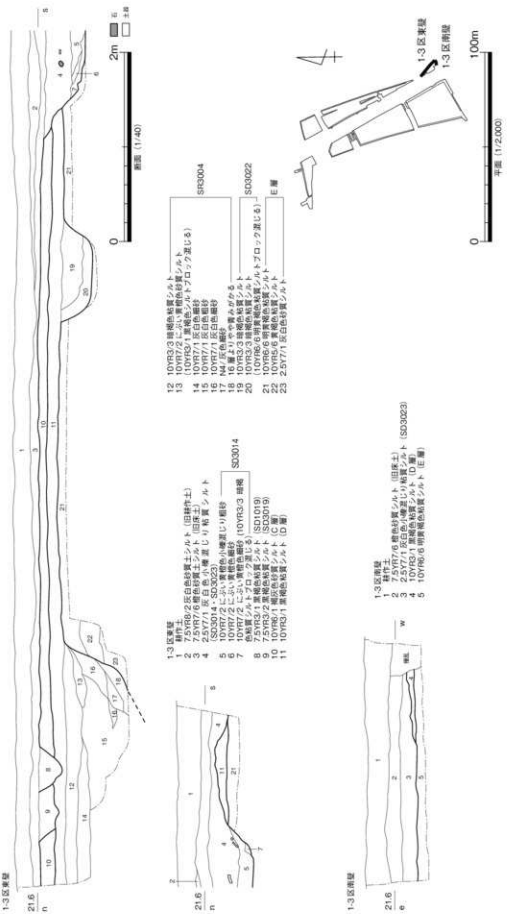
3-4・3-5 区（第 12 ～ 14 図）

調査前は水田等の耕作地として利用されていた。現地表面の標高は 21.92 m 前後である。本調査区では、3-4 区北壁・東壁、3-4 区北側拡張部東壁、3-5 区南壁・西壁、3-5 区北側拡張部東壁の各壁面において、層序の記録を作成した。

3-4 区では、花崗土 (1 層) 下に 4 層に細分される旧耕作土や盛り土とみられる水平堆積 (B 層 : 第 13 図 3-4 区北壁 2 ～ 5 層、第 14 図 3-4 区北側拡張部東壁 3 ～ 6 層)、3-5 区では現耕作土 (A 層) 下で、旧耕作土層とみられる水平堆積 (B 層 : 第 12 図 3-5 区南壁 2 層) が認められた。この旧耕作土層直下で黒



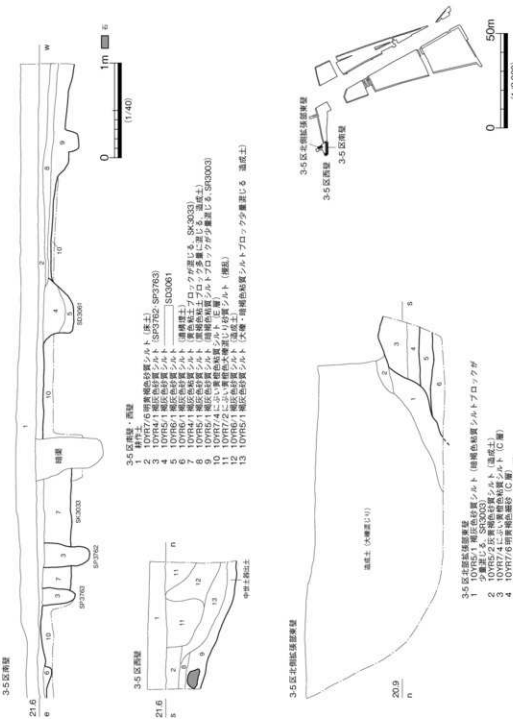
第10図　1-2区東壁、2-2南区西壁土層断面図



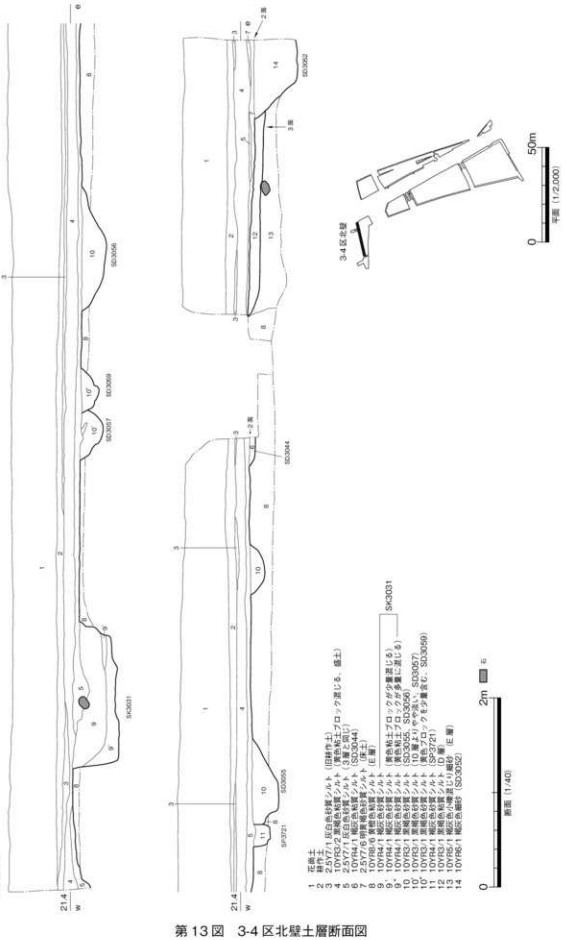
第 11 図　1-3 区東壁・南壁土層断面図

褐色粘質シルト (D 層 : 第 14 図 3-4 区東壁 9 層、第 13 図 3-4 区北壁 12 層) が水平に堆積しており、溝等の遺構が検出されたため、第 1 遺構面として調査を実施した。遺構面上面には、若干の起伏が認められるものの、標高 21.4 m前後で概ね一定している。3-4 区の大部分で黄橙色粘質シルト (E 層 : 第 13 図 3-4 区北壁 8 層),3-5 区でにぶい黄橙色粘質シルト (E 層 : 第 12 図 3-5 区南壁・西壁 10 層) が検出されており、上面に堆積していた旧耕作土層の存在からも、本遺構面も近世以降の耕地化により、顕著な削奪を被っている可能性が非常に高い。

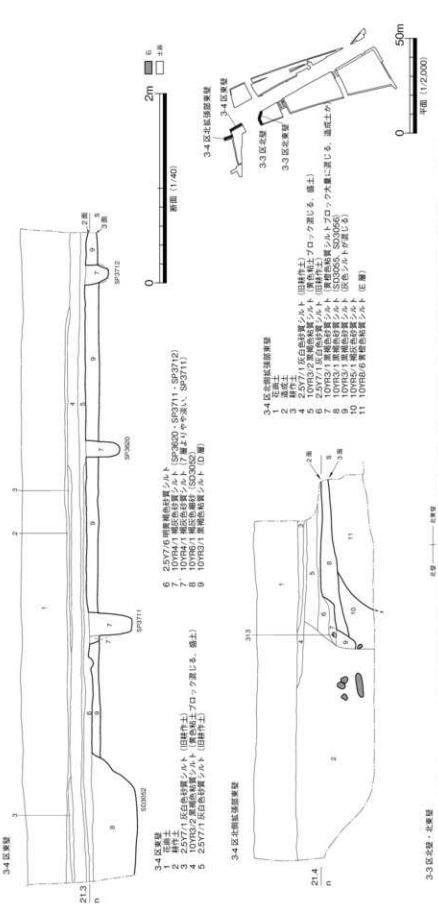
第 1 遺構面のベースとなる黒褐色粘質シルトや黄橙色粘質シルト、にぶい黄橙色粘質シルトを掘り下



第 12 図　3-5 区南壁・西壁・北側拡張部東壁土層断面図



第 13 図　3-4 区北壁土層断面図



第 14 図　3-4 区東壁・北側拡張部東壁、3-3 区北壁・北東壁土層断面図

げると、褐灰色小礫混じり細砂 (E 層 : 第 13 図 3-4 区北壁 13 層) が堆積していた。検出レベルより、本層面が 1-1 区等の第 2 遺構面に連続することから、3-4 区においても第 2 遺構面として調査を実施したが、明確な遺構は確認できなかった。本遺構面の標高は、調査区北端で 21.31 m前後、南端で 21.29 m前後をそれぞれ測り、ほぼ平坦ながらも若干南へ傾斜して検出された。(溝上)

3-3 区（第 14・15 図）

調査前は水田等の耕作地として利用されていた。現地表面の標高は 21.79 m前後である。本調査区では、調査区東、北東、北、西の各壁面において、層序の記録を作成した。

本区では、現耕作土 (A 層) 下で最大 2 層に細分される旧耕作土とみられる水平堆積層 (B 層 : 第 15 図 3-3 区東壁 2・3 層、第 14 図 3-3 区北・北東壁 2 層、第 15 図 3-3 区西壁 2 層) が認められた。これらの旧耕作土層直下で、黒褐色粘土層 (D 層 : 第 15 図 3-3 区東壁 15 層、第 14 図 3-3 区北・北東壁 3 層、第 15 図 3-3 区西壁 3 層) が水平に堆積しており、溝等の遺構が検出されたため、第 1 遺構面として調査を実施した。遺構面上面には若干の起伏が認められるものの、標高 21.56 m前後で概ね一定しており、上面に堆積していた旧耕作土層の存在からも、本遺構面も近世以降の耕地化により、顕著な削奪を被っている可能性が高い。

第 1 遺構面のベースとなる黒色粘土を掘り下げると、黄色粘土 (E 層 : 第 15 図 3-3 区東壁 20 層、第 14 図 3-3 区北・北東壁 20 層)、灰白色粘土 (第 15 図 3-3 区西壁 5 層) 上面で、土坑 SK3030、溝 SD3054 を検出した。検出した遺構は SK3030、SD3054 のみであるが、本遺構面を第 2 遺構面として調査を行った。なお本遺構面のベースは 1-1 区等の第 3 遺構面のベースと同等のものである。本遺構面の標高は、調査区北端で 21.2 m前後、南端で 21.23 m前後をそれぞれ測り、ほぼ平坦な状態で検出された。(溝上)

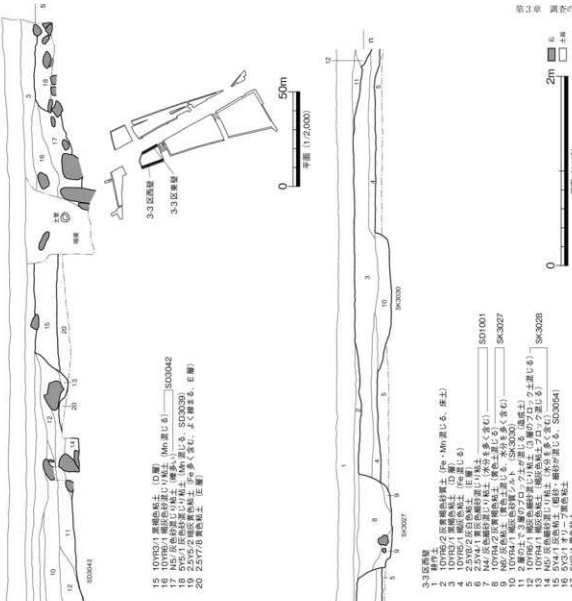
3-1 区（第 16 ～ 18 図）

調査前は水田等の耕作地として利用されていた。現地表面の標高は 21.97 m前後である。本調査区では、調査区東・北・西、3-1 区北側拡張区北・南・西の各壁面において、基本層序を記録した。

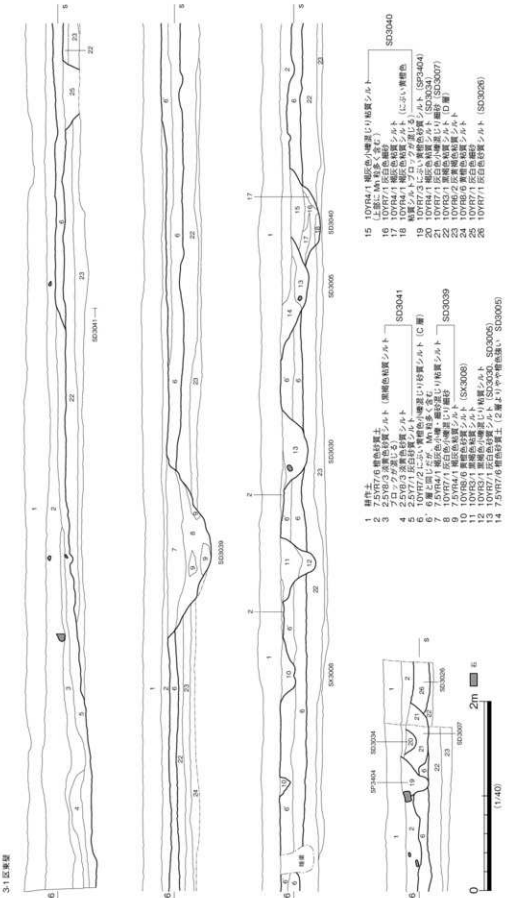
本区では、現耕作土 (A 層) 直下ににぶい黄橙色小礫混じり砂質シルト (C 層 : 第 16 図 3-1 区東壁 6 層)、褐灰色小礫混じり粘質シルト (C 層 : 第 18 図 3-1 区北壁 20 層)、浅黄色砂質シルト (C 層 : 第 17 図 3-1 区西壁 10 層) が水平に堆積しており、溝や性格不明遺構、自然河川が検出されたため、第 1 遺構面として調査を実施した。遺構上面には、若干の起伏が認められるものの、標高 21.67 m前後で概ね一定しており、上面に堆積していた旧耕作土の存在からも、本遺構面も近世以降の耕地化により、顕著な削奪を被っている可能性が高い。

第 1 遺構面のベースとなるにぶい黄橙色小礫混じり砂質シルト等を掘り下げると、黒褐色粘質シルト (D 層 : 第 16 図 3-1 区東壁 22 層、第 18 図 3-1 区北壁 22 層、第 17 図 3-1 区西壁 11 層) の水平堆積が確認された。検出レベルや堆積層より、本層上面が 1-1 区等の第 2 遺構面に連続することから、本区においても調査を実施したが、明確な遺構は確認できなかった。

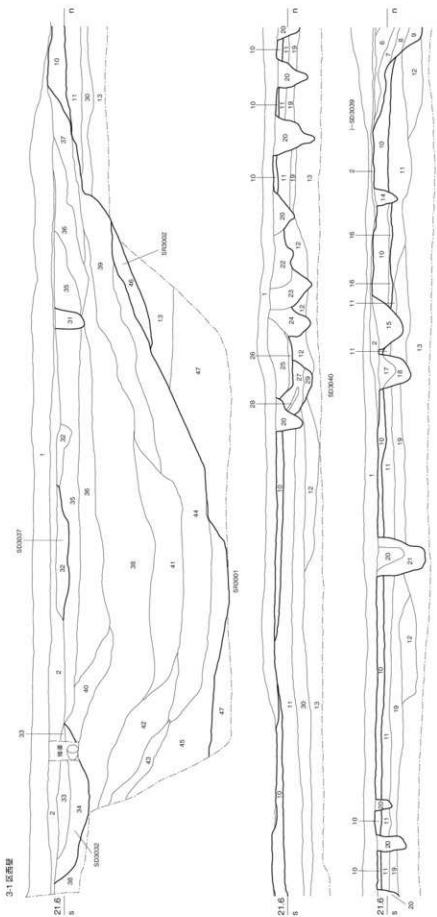
本遺構面の標高は、調査区北端で 21.5 m前後、南端で 21.47 m前後をそれぞれ測り、緩やかに南に傾斜して検出された。(溝上)



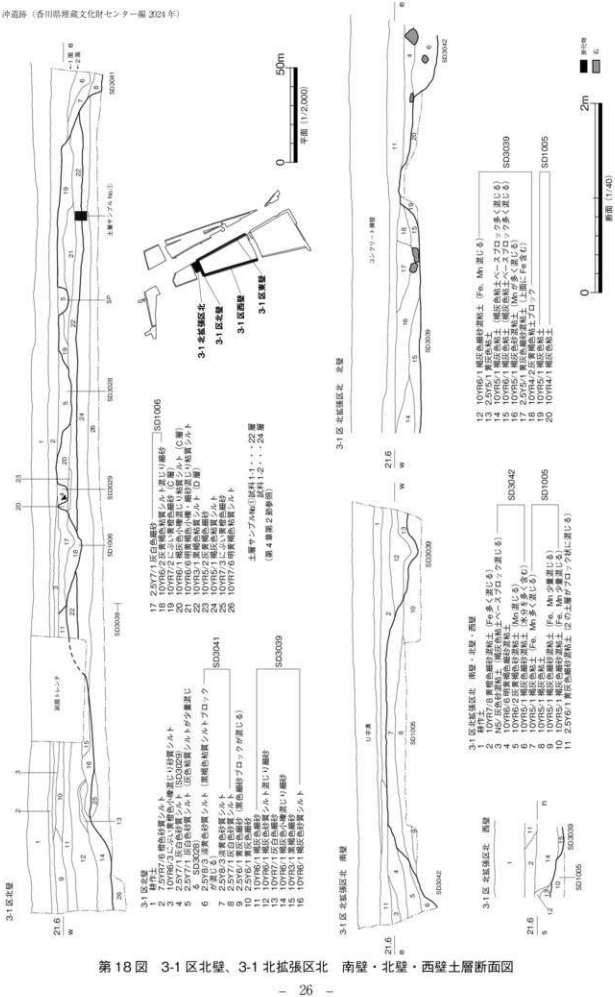
第 15 図　3-3 区東壁・西壁土層断面図



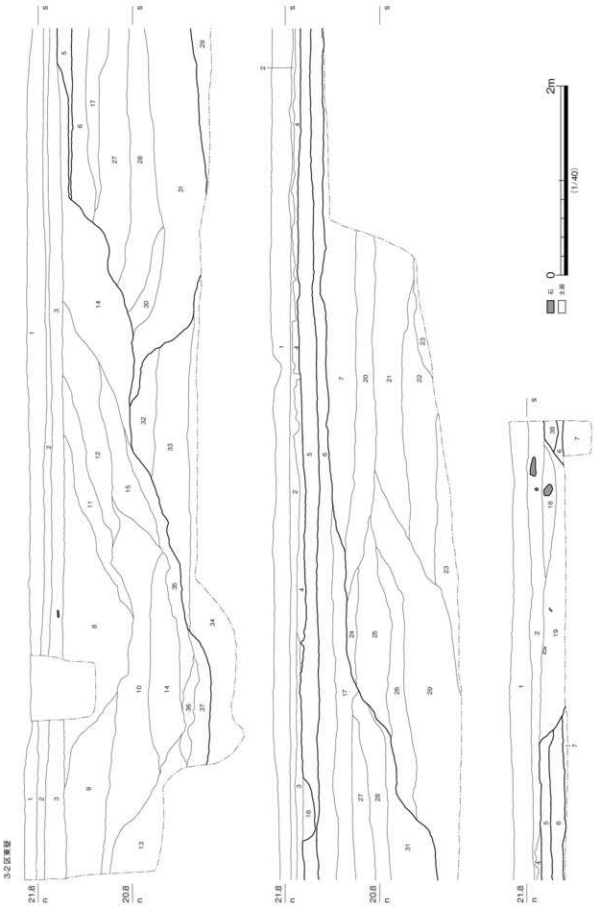
第 16 図　3-1 区東壁土層断面図



第17図　3-1区西壁土層断面図



第 18 図　3-1 区北壁、3-1 北拡張区北　南壁・北壁・西壁土層断面図



第19図　3-2区東壁土層断面図

3-2 区東壁
1　2.5Y4/1 灰色シルト～細砂（現代耕作土）
2　10YR7/1 灰白シルト（Fe・Mn 斑紋、床土、南壁 2 層に対応）
3　2.5Y7/2 灰黄色シルト混じり細砂（Fe・Mn 斑紋、白色中粒砂を少量含む、SD3026）
4　10YR5/1 褐灰色シルト～極細砂（Mn 斑紋、白色中粒砂を少量含む）
5　10YR6/1 褐灰色シルト混じり極細砂～細砂（Fe・Mn 斑紋、C 層、南壁 5 層に対応）
6　10YR4/1 褐灰色シルト（白色細砂粒を少量含む、D 層、南壁 8 層に対応）
7　2.5Y6/3 オリーブ黄色細砂混じりシルト（南壁 9 層に対応）
8　10YR6/1 褐灰色シルト混じり極細砂（黄褐色シルトをラミナ状に含む、SR3001 上層）
9　2.5Y7/2 灰白色細砂（Fe・Mn 斑紋、灰色極細砂をラミナ状に含む、SR3001 中層、南壁 8 層に対応）
10　10YR3/1 黒褐色シルト～極細砂（灰色細砂をラミナ状に含む、SR3001 中層）
11　10YR4/1 褐灰色シルト～極細砂（灰黄色細砂をラミナ状に含む、SR3001 中層）
12　2.5Y3/1 黒褐色シルト～粘土（自然木の細片をまばらに含む、SR3001 中層）
13　2.5Y3/1 黒褐色シルト～粘土（灰白色極細砂をラミナ状に含む、SR3001 下層）
14　10YR7/1 灰白色細砂～中粒砂（SR3001 中層）
15　2.5Y3/1 黒褐色シルト（SR3001）
16　2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト（SD3010）
17　10YR8/2 灰白色細砂～極細砂（黒褐色シルトブロックを含む、SR3004）
18　10YR7/1 灰白色シルト混じり細砂～中粒砂（Fe・Mn、炭化物細片を少量含む、SD3013）
19　10YR6/1 褐灰色シルト混じり細砂（白色細砂をラミナ状に含む、SD3014 上層）
20　10YR7/3 にぶい黄橙色シルト混じり細砂～極細砂（Fe・Mn 斑紋）
21　5Y6/2 灰オリーブ色細砂（Fe・Mn 斑紋、著しい漸次とグライ化）
22　2.5Y3/1 黒褐色シルト（灰色細砂をラミナ状に含む）
23　10YR2/2 黒褐色シルト
24　10YR4/1 褐灰色シルト混じり極細砂（黄灰色シルトを含む）
25　5Y6/1 灰色シルト混じり細砂～極細砂（炭化物細片を含む）
26　5Y4/1 灰色シルト混じり細砂～極細砂（黒色シルトをラミナ状に含む）
27　2.5Y6/1 黄灰色シルト混じり極細砂（青灰色細砂をラミナ状に含む、SR3004）
28　2.5Y5/1 黄灰色シルト～細砂（灰色細砂をラミナ状に含む、多量の木片、炭化物を含む、SR3004）
29　5Y4/1 黄灰色シルト～細砂（灰色細砂をラミナ状に含む）
30　2.5Y3/1 黒褐色シルト（灰白色細砂をラミナ状に含む、SR3004）
31　2.5Y3/1 黒褐色シルト（灰色細砂～中粒砂をラミナ状に含む、自然木の木片、種子、炭化物を含む、SR3004）
32　5Y6/2 灰オリーブ色細砂（Fe・Mn 斑紋、著しい漸次とグライ化、21 層に対応）
33　2.5Y3/1 黒褐色シルト（灰色細砂をラミナ状に含む、22 層に対応）
34　10YR2/2 黒褐色シルト（23 層に対応）
35　10YR3/1 黒褐色シルト（32 層由来のシルトブロックをまばらに含む、SR3001 下層）
36　10YR6/1 褐灰色細砂～中粒砂（SR3001 下層）
37　2.5Y4/1 黄灰色シルト（Fe・Mn 斑紋、SR3001 最下層）
38　10YR7/2 にぶい黄橙色シルト混じり細砂（Fe・Mn 斑紋・斑晶、SD3027）

第 20 図　3-2 区東壁土層断面図（土層注記）

3-2 区（第 19 ～ 22 図）

調査以前には水田・畑地等の耕作地として利用されており、現地表面の標高は 22.1 m前後であった。本調査区では、東壁、南壁、西壁の各壁面で、層序の記録を作成した。

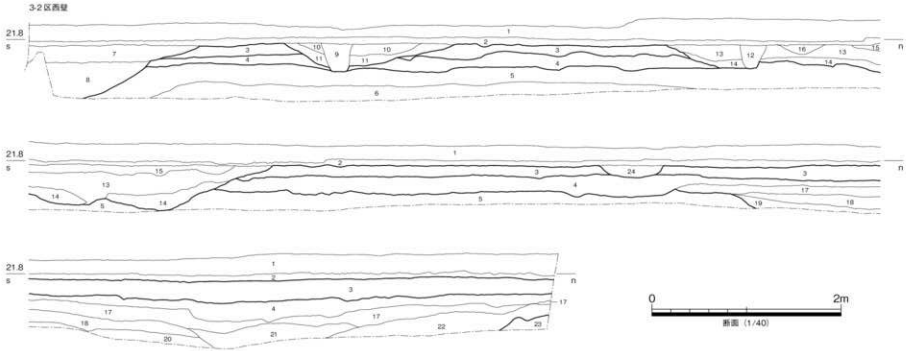
本区でも、現耕作土 (A 層) 下で、旧耕作土とみられる水平堆積層 (B 層 : 第 19・20 図東壁 4 層) が認められた。1 ～ 2 区の耕作土層と同質であり、近世後半期以降の耕作土層と考えられる。旧耕作土層下には、褐灰色シルト混じり細砂 (C 層 : 第 19・20 図東壁 5 層・第 22 図南壁 5 層・第 21 図西壁 3 層) が堆積する。上面で溝 SD3001 ～ SD3027 や自然河川 SR3001、多数の柱穴群を検出したことから、本遺構面を第 1 遺構面として調査を実施した。遺構面上面には若干の起伏が認められるが、概ね標高 21.7 m前後で一定している。後述のとおり大部分の柱穴群が残存深 10cm 以下であることから、本遺構面も耕地化による削奪を被っている可能性が高い。

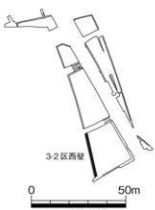
第 1 遺構面のベースとなる褐灰色シルト混じり細砂の下には、褐灰色シルト (D 層 : 第 19・20 図東壁 6 層・第 22 図南壁 8 層・第 21 図西壁 4 層) の水平堆積が認められた。検出レベル・土質より、本層上面が 1 ～ 2 区の第 2 遺構面に連続すると判断し、第 2 遺構面として調査を実施したが、遺構は確認できなかった。

第 2 遺構面のベースとなる褐灰色シルト混じり細砂を掘り下げると、黄色系砂質シルト (E 層 : 第 19・20 図東壁 7 層・第 22 図南壁 9 層・第 21 図西壁 5 層) の上面で自然河川 SR3004 を検出したことから、本遺構面を第 3 遺構面として調査を行った。遺構面レベル・土質の類似から、上述した 1 ～ 2 区等の第 3 遺構面に相当すると考えられる。本遺構面の標高は、3-2 区北西端で 21.3 m前後、3-2 区南西端で 21.6 m前後、3-2 区南東端で 21.7 m前後をそれぞれ測り、緩やかに北東方向へ傾斜する。(益崎)

4・5 区（第 23 ～ 30 図）

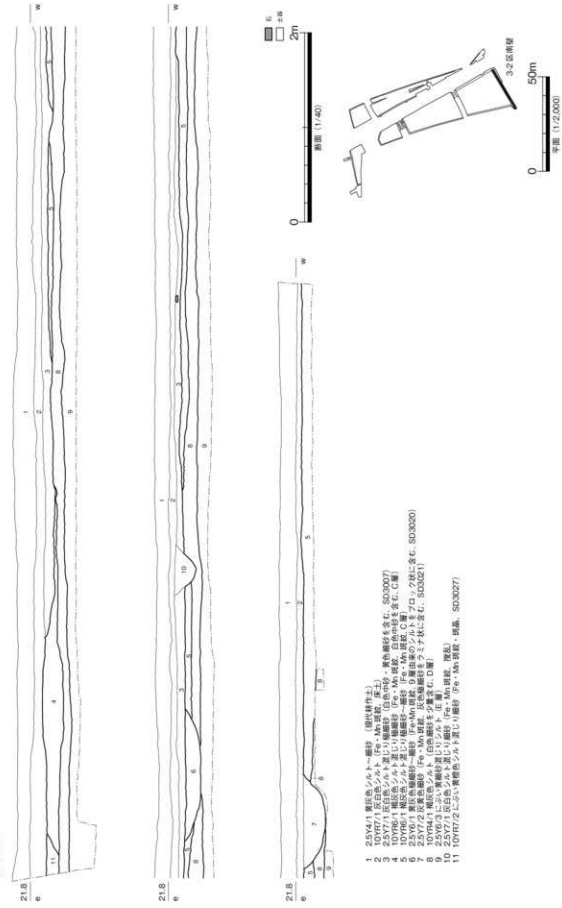
4・5 区は 1 ～ 3 区の南側に位置する調査区である。現地表面の標高は 22.28 m前後である。本調査区では、4 区北東、東、南、西、5 区東、南、西の各壁面において、層序の記録を作成した。



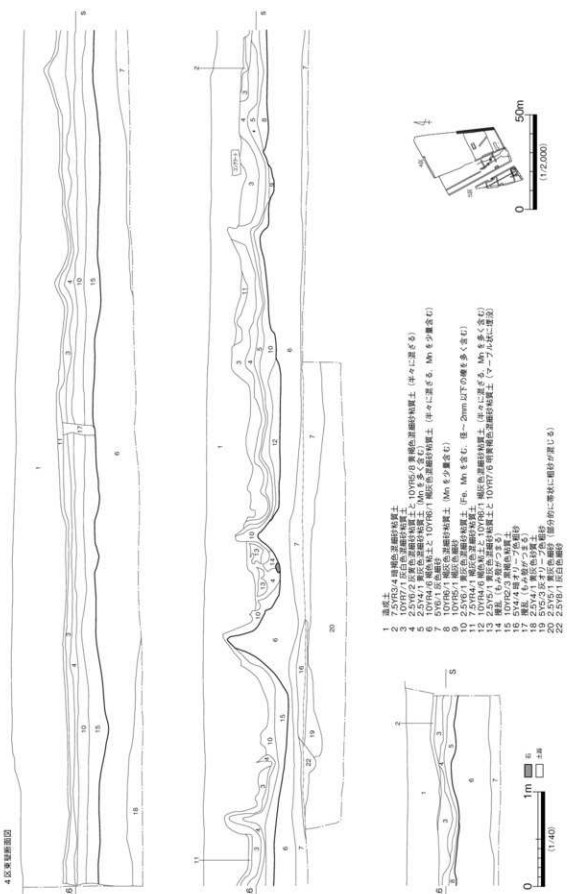


1　2.5Y4/1 灰色シルト～細砂（現代耕作土，南壁 1 層に対応）
2　10YR7/1 灰白シルト（Fe・Mn 斑紋，床土，南壁 2 層に対応）
3　10YR6/1 褐灰色シルト混じり極細砂～細砂（Fe・Mn 斑紋，斑晶あり，C 層，南壁 5 層に対応）
4　10YR4/1 褐灰色シルト（白色細砂粒を少量含む，D 層，南壁 8 層に対応）
5　2.5Y6/3 オリーブ黄色細砂混じりシルト（ベース，E 層，南壁 9 層に対応）
6　10YR6/1 褐灰色極細砂～細砂（黒褐色シルトブロックを少量含む，ベース）
7　2.5Y7/1 灰白色シルト混じり細砂（白色中粒砂を少量含む）
8　10YR6/1 褐灰色シルト混じり極細砂（黄色シルトをラミナ状に含む，下層）　SD3014
9　2.5Y6/1 黄灰色シルト混じり細砂（SP 埋土）
10　2.5Y7/1 灰白色シルト混じり極細砂～細砂
11　2.5Y6/1 黄灰色シルト混じり細砂（黄色細砂を含む）　SD3021
12　10YR6/1 褐灰色シルト混じり極細砂（Mn 斑紋，SP 埋土）
13　5Y7/1 灰白色極細砂～細砂（白色極細砂をラミナ状に含む，Fe・Mn 斑紋，上層）
14　10YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂～中粒砂（0.1～0.3cm の礫を少量含む，Fe 斑紋，下層）　SD3020
15　10YR6/1 褐灰色シルト～細砂（Fe・Mn 斑紋，上層）
16　10YR7/1 灰白色シルト混じり細砂（Fe・Mn 斑紋・斑晶あり，SD3016）
17　10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂～極細砂（Fe・Mn 斑紋）
18　10YR6/1 褐灰色シルト混じり極細砂（灰色極細砂をラミナ状に含む）
19　2.5Y7/1 灰白色極細砂～細砂（黒褐色シルトブロックを少量含む）
20　19 層に対応　SR3004
21　10YR3/1 黒褐色シルト
22　2.5Y7/1 灰白色シルト混じり極細砂（Fe・Mn 斑紋）
23　2.5Y5/1 黄灰色シルト混じり極細砂
24　10YR6/1 褐灰色シルト混じり細砂（白色中粒砂を少量含む，SD3005）

第 21 図　3-2 区西壁土層断面図

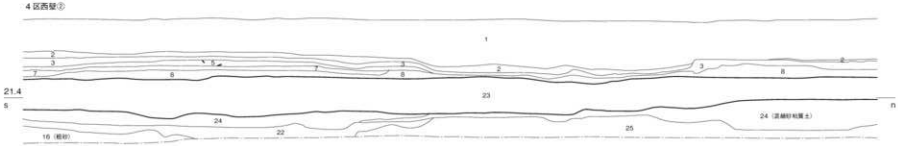


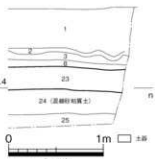
第 22 図　3-2 区南壁土層断面図



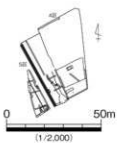
第 23 図　4 区東壁土層断面図

第 24 図　4 区西壁土層断面図 1

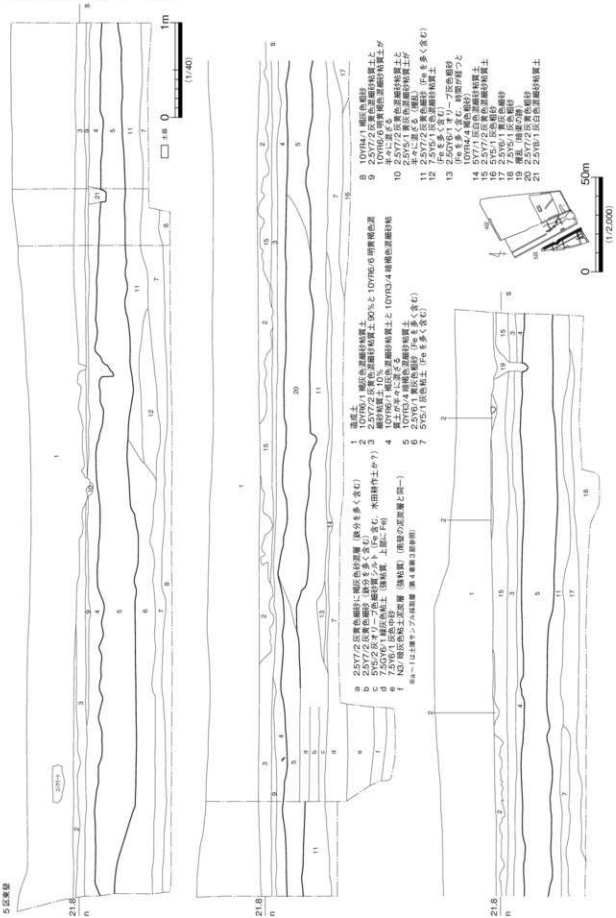




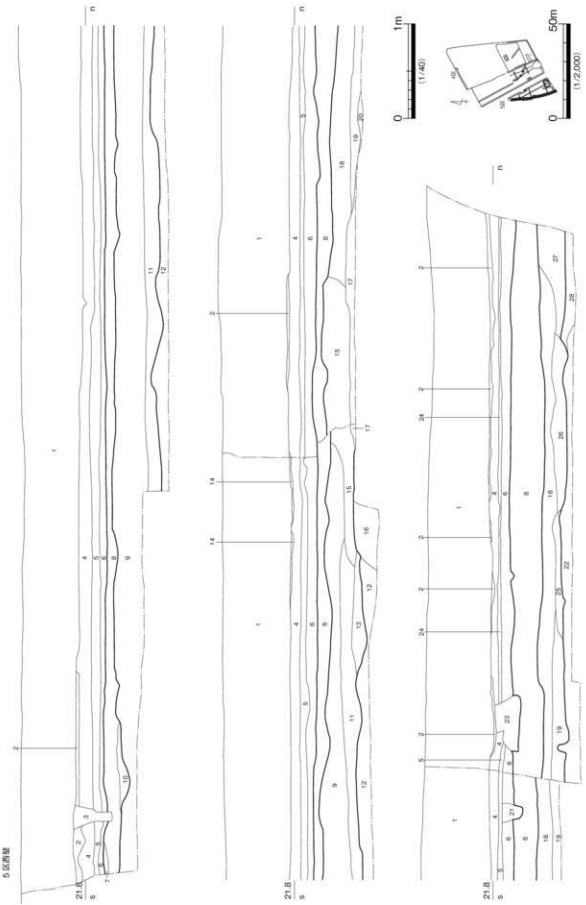
1　盛成土
2　10YR6/1 褐灰色混細砂粘質土
3　2.5Y7/2灰黄色混細砂粘質土と 10YR6/6明黄褐色混細砂粘質土が半々に混ざる
4　2.5Y7/1灰白色混細砂粘質土（所々に明黄褐色混細砂粘質土が混じる）
5　10YR7/1灰白色混細砂粘質土20%と 10YR5/8黄褐色混細砂粘質土80%
6　5Y7/1灰白色混細砂粘質土80%と 10YR6/8明黄褐色混細砂粘質土20%
7　10YR5/1 褐灰色混細砂粘質土（Feを少量含む）
8　10YR7/1灰白色混細砂粘質土と10YR4/3にぶい黄褐色混細砂粘質土が半々に混ざる（上層に砂が5cm程の幅で連なる）
9　10YR4/6褐色混細砂粘質土80%と 10YR5/1 褐灰色混細砂粘質土20%（下層になるほど砂気が強い）
10　5Y7/1灰白色細砂（Feを多く含む）
11　2.5Y7/1灰白色混細砂粘質土（砂気を多く含む）
12　10YR7/1灰白色粗砂（下層にFeを多く含む）
13　2.5Y6/1青灰色粗砂（Feを多く含む，砂の粒が大きい）
14　5Y7/1灰白色粗砂
15　10YR7/1灰白色粘質土～粘土（Feを多く含む）（揺っている（植物か動物の移動の影響か））
16　2.5Y7/2灰黄色細砂（下層にFeが多くたまる）
17　10YR5/1 褐灰色混細砂粘質土（砂気が強い）
18　10YR4/1 褐灰色粗砂（Feを多く含む）
19　10Y5/1灰色混細砂粘質土
20　5Y6/1灰色粘土（Feを少量含む）
21　7.5YR3/4暗褐色混細砂粘質土と10YR2/2黒褐色混細砂粘質土が半々で混ざる
22　10YR5/1 褐灰色混細砂粘質土（Feを少量含む）
23　10YR2/2黒褐色粘土と7.5YR3/4暗褐色粘土
24　5Y3/1オリーブ黒色粗砂（鉄分を多く含む）
25　7.5GY7/1明緑灰色混細砂粘質土（鉄分を中量含む，酸化すると10YR6/2灰黄褐色になる）



第25図　4区西壁土層断面図2



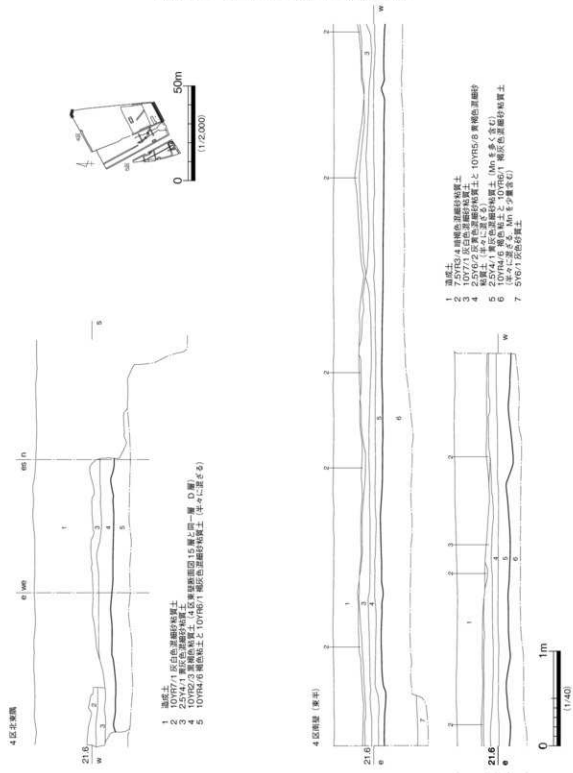
第 26 図　5 区東壁土層断面図



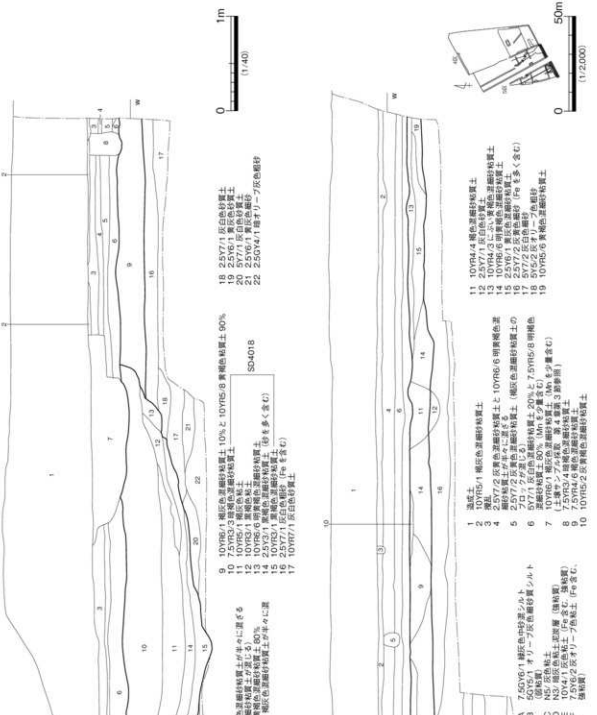
第27図　5区西壁土層断面図

1　造成土
2　10YR5/1 褐灰色混細砂粘質土
3　撹乱（根株の跡）
4　2.5Y7/2 灰黄色混細砂粘質土と
10YR6/6 明黄褐色混細砂粘質土が半々に混ざる
5　5Y7/1 灰白色混細砂粘質土 20%と
7.5YR5/8 明褐色混細砂粘質土 80%（Mn を少量含む）
6　10YR6/1 褐灰色混細砂粘質土（Mn を少量含む）
7　10YR4/3 に ぶい黄褐色混細砂粘質土
8　10YR3/4 暗褐色混細砂粘質土
9　2.5Y7/2 灰黄色混細砂粘質土（Fe を多く含む）
10　2.5Y6/1 黄灰色砂質土（径～ 5mm の石を多く含む）
11　5Y7/1 灰白色混細砂粘質土（Fe を多く含む）
12　2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粗砂
13　5Y6/1 灰色細砂
14　10YR4/4 褐色混細砂粘質土
15　10YR6/1 褐灰色粗砂
16　2.5Y7/1 灰白色細砂
17　5G6/1 緑灰色混細砂粘質土（Fe を多く含む）
18　2.5Y7/2 灰黄色細砂
19　2.5Y7/1 灰白色粘土（Fe を多く含む）
20　10YR5/1 褐灰色粗砂
21　2.5Y8/1 灰白色混細砂粘質土（SP5006）
22　5Y5/1 灰色粗砂
23　撹乱
24　10YR6/8 明黄褐色混細砂粘質土 80%と
5Y7/1 灰白色混細砂粘質土 20%
25　5Y5/1 灰色砂質土（Fe を多く含む）
26　10YR7/1 灰白色粘土（Fe を多く含む）
27　10YR8/1 灰白色砂質土（Fe を多く含む）
28　10YR6/1 褐灰色粘土

第 28 図　5 区西壁土層断面図（土層注記）



第 29 図　4 区北東隅・南壁（東半）土層断面図



第30図　4区南壁（西半）、5区南壁土層断面図

4 区では、造成土 (1 層) 下で褐灰、灰白、灰黄、黄灰色などの細砂が混じった粘質土層の水平堆積 (B 層 : 第 23 図 4 区東壁 2 ～ 5、10、11、15 層、第 24･25 図 4 区西壁 2 ～ 8 層、第 29 図 4 区南壁東半部 2 ～ 5 層、第 30 図 4 区南壁西半部 2 ～ 5 層)、5 区では造成土 (1 層) 下で褐灰、灰白、灰黄、黄灰色などの細砂が混じった粘質土層の水平堆積 (B 層 : 第 26 図 5 区東壁 2 ～ 4・9・15 層、第 27・28 図 5 区西壁 2・4 ～ 6・14・24 層、第 30 図 5 区南壁 2・4 ～ 7 層) が認められた。4 区の中でも 1 ～ 3 区に近い北東隅では、1-1 区などで第 2 遺構面として調査を行った黒褐色粘質土層 (D 層 : 第 29 図 4 区北東隅 4 層) が確認されたが、北東隅から西側、南側ともに攪乱を受けており 4 区内では 1 ～ 3 区で確認された層の連続性を確認することができなかった。なお、攪乱中より土師質土器足釜の脚部など中世の遺物の出土が認められる。

上記の理由により、以下で呼称する遺構面は 1 ～ 3 区で確認された堆積の遺構面とは異なる遺構面である。検出順に従って上層から第Ⅰ遺構面、第Ⅱ遺構面と呼称する。4 区では、上記の層の直下に、褐色と褐灰色の土が混ざって堆積した層 (D 層相当か : 第 23 図 4 区東壁 6 層、第 24・25 図 4 区西壁 9 層、第 29 図 4 区南壁東半部 6 層、第 30 図 4 区南壁西半部 9 層) が堆積しており、溝 SD4018 を検出したため、第Ⅰ遺構面として調査を実施した。本遺構面は、4 区の東壁付近ではコミュニティセンター建設に伴う攪乱のため上面が破壊されており本来の標高は不明だが、その他の部分では概ね標高 21.5 m 前後で一定していた。

5 区では、暗褐色、にぶい黄褐色、明黄褐色混細砂粘質土もしくは灰黄色粗砂 (D 層相当か : 第 26 図 5 区東壁 5・20 層、第 30 図 5 区南壁 13・14 層) が第Ⅰ遺構面に相当する。遺構面の上面には、若干の起伏が認められるものの、標高 21.58 m 前後で概ね一定していた。この遺構面では溝や少量のピットを検出したのみである。

第Ⅰ遺構面のベースとなる層を掘り下げると、4 区では灰白、灰黄色細砂、もしくは粗砂 (E 層相当か : 第 24･25 図 4 区西壁 10･12 ～ 14･16 層、第 30 図 4 区南壁西半部 16 層) 上面で、溝 SD5014 を検出した。検出した遺構は SD5014 のみであるが、本遺構面を第Ⅱ遺構面として調査を実施した。本遺構面上面も若干の起伏が認められるものの、標高 21.3 m 前後で概ね一定しており、本遺構面も耕地化による削奪を顕著に被っている可能性が高い。

5 区では 4 区第Ⅱ遺構面に相当する層として、灰白、灰黄色の細砂や粗砂もしくは混細砂粘質土 (E 層相当か : 第 26 図 5 区東壁 6・11 層、第 27・28 図 5 区西壁 9・15・18 層、第 30 図 5 区南壁 16・17 層) の水平堆積が確認された。本遺構面上面も若干の起伏が認められるものの、標高 21.3 m 前後で概ね一定しており、本遺構面も耕地化による削奪を顕著に被っている可能性が高い。

本遺構面の標高は、調査区北端で 21.36 m 前後、南端で 21.28 m 前後をそれぞれ測り、緩やかに南に傾斜して検出された。(溝上)

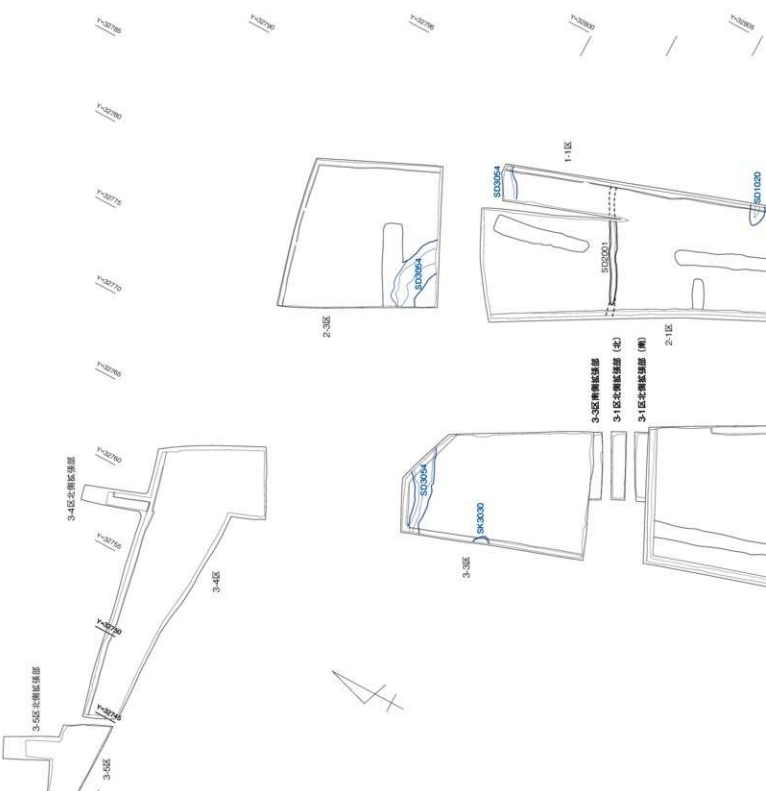
第 3 節　1 ～ 3 区の調査

1　弥生時代後期以前の遺構

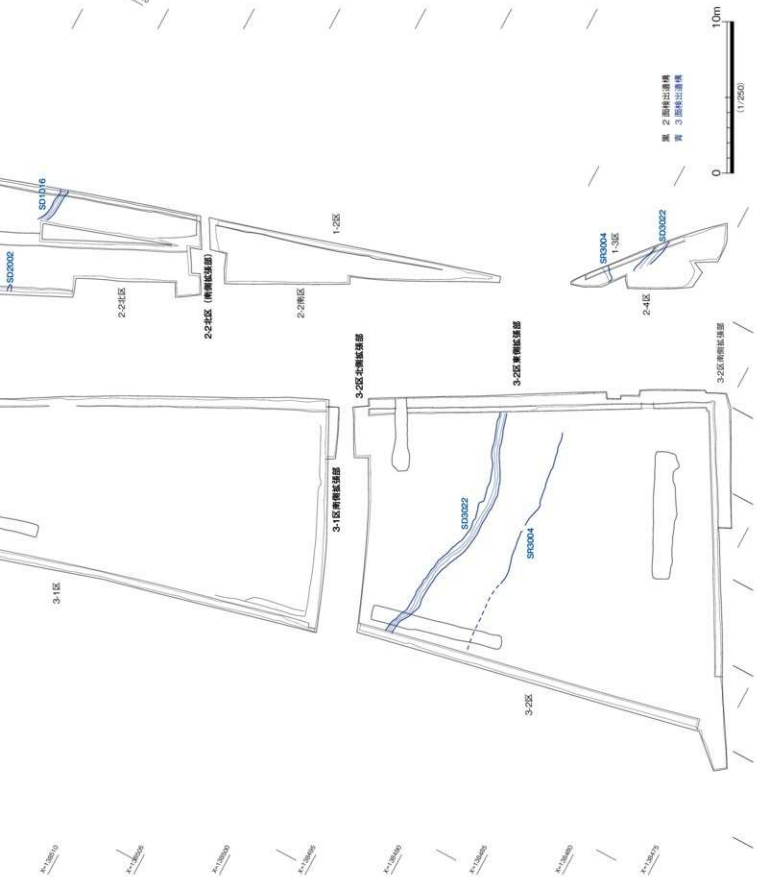
①土坑

3-3 区 SK3030（第 32 図）

3-3 区第 2 遺構面中央部西壁沿いで検出した土坑である。長軸 1.02 m 以上、短軸 0.4 m 以上、残存深 0.16 m をそれぞれ測り、平面形の全形は不詳、断面形は浅い逆台形状を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトの


1-1区
2-1区
2-3区
3-1区北側拡張部（北）
3-1区北側拡張部（南）
3-3区南側拡張部
3-3区
3-4区
3-4区北側拡張部
3-5区
3-5区北側拡張部
SD3054
SD1020
SD2021
SD3004
SK3030
Y=32765
Y=32760
Y=32755
Y=32750
Y=32745
Y=32740
X=136850
X=136845
X=136840
X=136835
X=136830
X=136825
X=136820
X=136815

第 31 図　1 ～ 3



区遺構配置図（弥生時代後期以前）

単層であった。

遺物は出土しておらず、検出面より弥生時代後期以前に位置付けられるものの、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

②溝

1-1 区 SD1016（第 33 図）

1-1 区第３遺構面中央部で、やや南に弧を描いて配された東西溝である。隣接する 2-1・3-1 区で延長溝は確認していない。検出面幅 0.44 m前後、残存深 0.10 m前後、断面形は浅い皿状を呈する。調査範囲が限られるため、流下方向は不明である。埋土は褐灰色細砂の単層であった。

遺物は出土しておらず、第３遺構面で検出したことから、弥生時代後期以前の遺構と考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

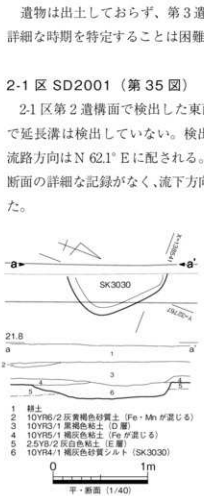
1-1 区 SD1020（第 34 図）

1-1 区第３遺構面中央部で検出した東西溝とみられる遺構である。西端は調査区内で途切れ、延長 1.27 mを検出したのみである。検出面幅 0.95 m前後、残存深 0.30 m前後、断面形はＵ字状を呈する。調査範囲が限られるため、流下方向は不明である。また埋土は、上面に堆積したＤ層の黒褐色粘質シルトと分層されておらず、調査成果より溝の埋没と包含層の形成が連続していたと考えられる。

遺物は出土しておらず、第３遺構面で検出したことから、弥生時代後期以前の遺構と考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

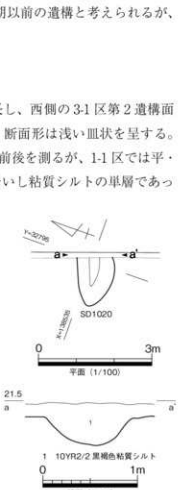
2-1 区 SD2001（第 35 図）

2-1 区第２遺構面で検出した東西溝である。東西両端は調査区外へ延長し、西側の 3-1 区第２遺構面で延長溝は検出していない。検出面幅 0.42 m前後、残存深 0.12 m前後、断面形は浅い皿状を呈する。流路方向はＮ 62.1° Ｅに配される。溝底面の標高は、2-1 区西端で 21.36 m前後を測るが、1-1 区では平・断面の詳細な記録がなく、流下方向は特定できない。埋土は、褐灰色粘土ないし粘質シルトの単層であった。

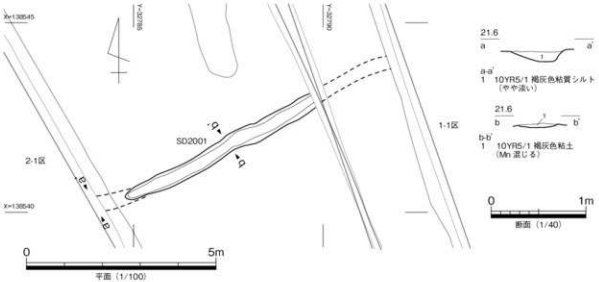


第 32 図　3-3 区 SK3030
平・断面図

第 33 図　1-1 区 SD1016
平・断面図



第 34 図　1-1 区 SD1020
平・断面図



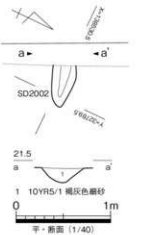
第 35 図　2-1 区 SD2001 平・断面図

遺物は出土しておらず、第 2 遺構面で検出したことから、弥生時代後期以前の遺構と考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

2-1 区 SD2002（第 36 図）

2-1 区第 3 遺構面南半部で検出した遺構である。東端は調査区内で途切れ、延長 0.43 m を検出したのみである。検出面幅 0.24 m 前後、残存深 0.16 m 前後、断面形は U 字状を呈する。調査範囲が限られるため、流下方向は不明である。埋土は褐灰色細砂の単層であった。

遺物は出土しておらず、第 3 遺構面で検出したことから、弥生時代後期以前の遺構と考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)



第 36 図　2-1 区 SD2002 平・断面図

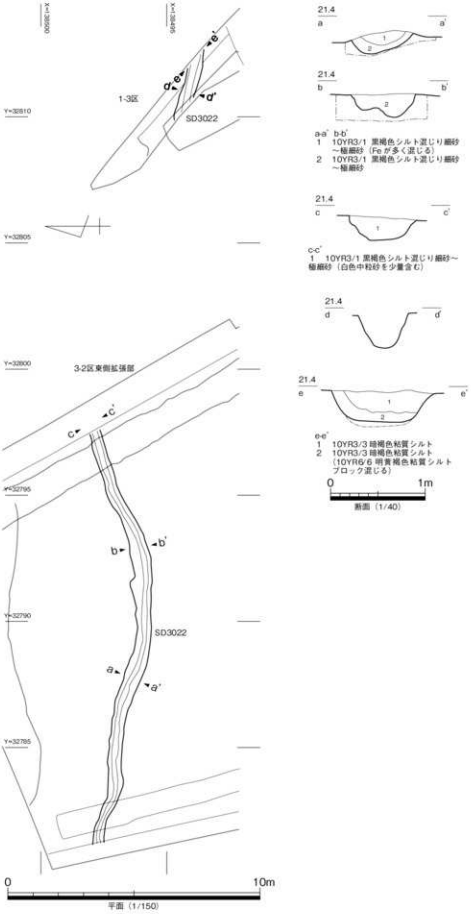
1-3・3-2 区 SD3022（第 37 図）

1-3・3-2 区第 3 遺構面北半部で検出した東西溝である。両端は調査区外へ延長し、隣接する 2-4 区で延長溝は確認していない。検出面幅 0.52 m 前後、残存深 0.34 m 前後、断面形は整った逆台形状を呈する。流路方向は N 77.74° W に配され、周辺の地割の方向とは合致しない。調査範囲が限られるため、流下方向は不明である。埋土は 2 層に分層され、褐色系粘質シルトが堆積していた。上位層は下位層上面を削奪して堆積しており、改修の可能性が考えられる。

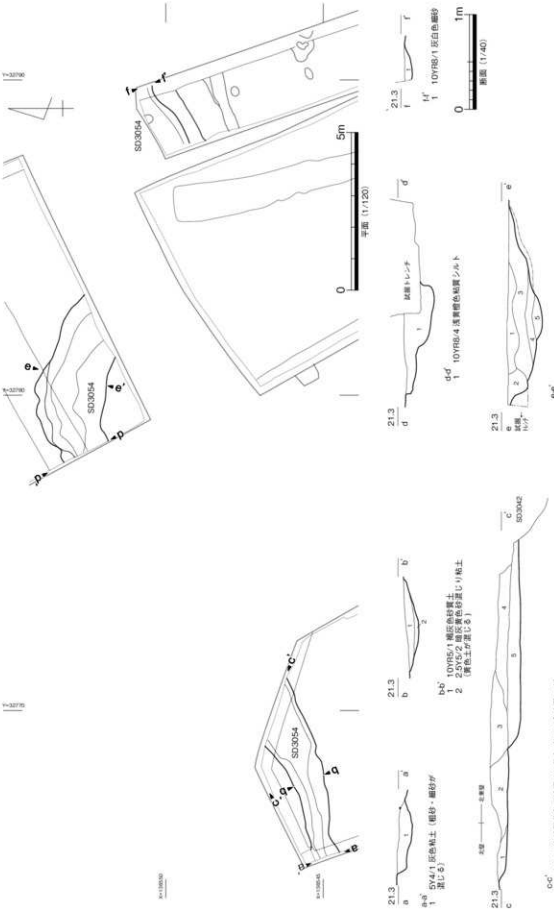
遺物は出土しておらず、第 3 遺構面で検出したことから、弥生時代後期以前の遺構と考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

1-1・2-3・3-3 区 SD3054（第 38 図）

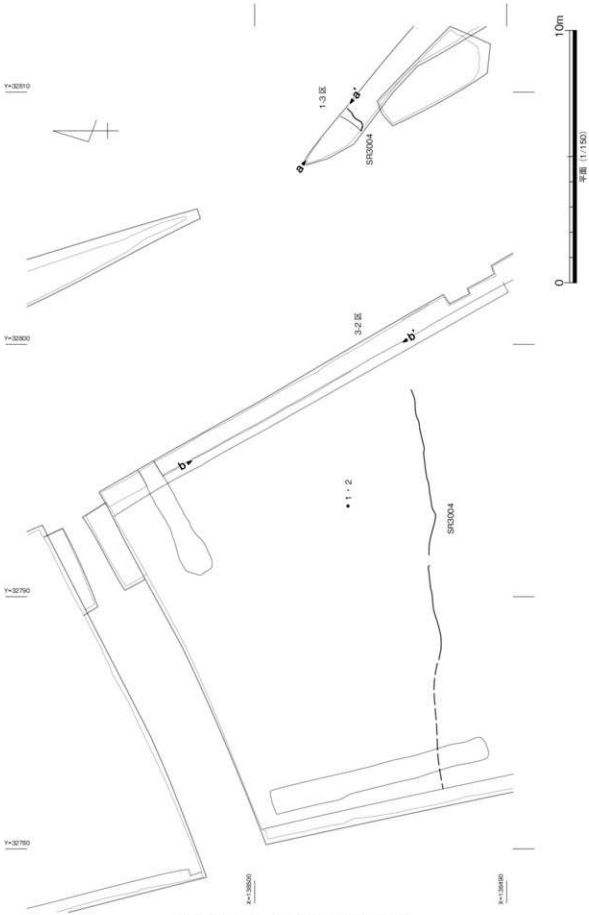
1-1 区では第 3 遺構面、2-3 区・3-3 区では第 2 遺構面で検出した 3 条の溝を、遺構の規模や流路方向、埋土等より判断し、一連の遺構として報告する。遺構の連続から、1-1・2-3 区第 3 遺構面と 3-3 区第 2



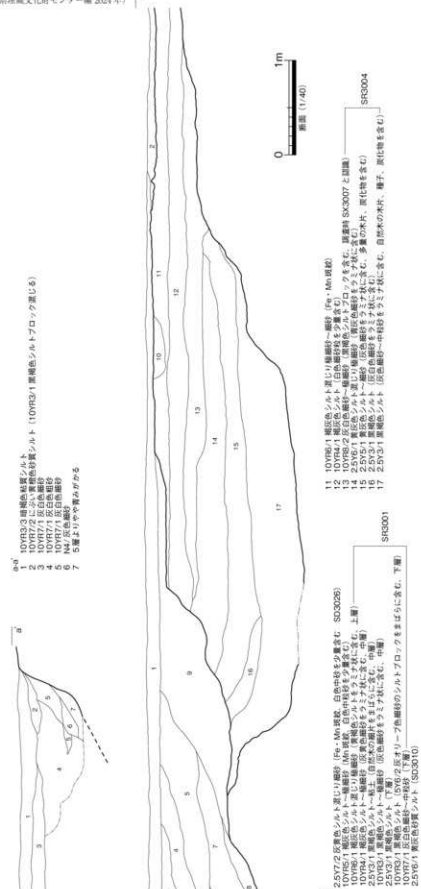
第 37 図　1-3・3-2 区 SD3022 平・断面図



第 38 図　1-1・2-3・3-3 区 SD3054 平・断面図



第 39 図　1-3・3-2 区 SR3004 平面図



第 40 図　1-3・3-2 区 SR3004 断面図、出土遺物

遺構面が相当する遺構面であることが確認できる。3-3区より緩やかに蛇行しながら東へ延び、2-3区で南へクランクして、1-1区北端部を東へ延長する溝として復元する。3-3区の東西溝は、検出面幅0.89～1.44 m、残存深0.16～0.32 m、断面形は逆台形状ないし皿状を呈する。底面の標高は、3-3区西端で21.16 m前後、2-3区で20.92 m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性を想定する。埋土は、記録位置により大きな相違を認めるが、概ね1～5層に細分され、下位には溝機能時の堆積層である灰色系細～粗砂が、上位に溝廃棄後の自然堆積層と思われる褐灰色粘土が水平堆積していた。おそらくは緩急のある流水下で堆積した後、徐々に埋没・平準化したと考える。

遺物は出土していないが、第3遺構面で検出したことから、弥生時代後期以前に位置付けることは確実であるが、詳細な時期を特定することはできない。(蔵本)

③自然河川

1-3・3-2区 SR3004（第39・40図）

1-3区第3遺構面から3-2区第3遺構面において検出した、東西流する自然河川である。北岸はSR3001に切られて消失しており、幅は推定で8 m以上、残存深約1.3 mを測る。埋土は記録位置により大きく相違するが、下位は細砂をラミナ状に含む黒褐色シルト、上位は灰色系細砂により埋没する。

遺物は3-2区での埋土最上層にあたる13層中で2点のみ出土した。1は弥生土器壺の体部片である。内外面ともに磨滅が著しいが、外面にわずかにハケ目が認められる。2は弥生土器壺の底部片で、平底の底部から体部が丸みをもって立ち上がる。外面には上下方向のミガキがわずかに認められる。胎土の共通性、出土位置から1と同一個体の可能性もあるが、直接の接合はできなかった。

出土遺物が極めて少なく、詳細な埋没時期の比定は困難だが、SR3001との重複関係、最上層出土の1・2から、弥生時代後期後半までに埋没したものと考える。(益崎)

2　古墳時代～古代の遺構

①溝

1-1・2-1区 SD1005（第42～44図）

1-1区から3-1区北拡張部において第1遺構面で検出した東西溝で、東西両端は調査区外へ延長する。3-1区では、現代の構造物によって狭小な範囲の調査にとどまったが、掘り方の北肩の一部を検出することができた。以下の記述は主に1・2区の調査所見に基づく。なお、SB1002と重複し、溝底面で柱穴を確認したが、出土遺物の点からSB1002より先行することは間違いない。また、3区ではSD3042やSD3029等より先行する。検出面幅5.5 m前後、残存深0.98 m前後、断面形は緩やかな逆台形状ないしU字状を呈する。埋土は15層前後に細分され、大きく3層に大別する。1-1区東壁にあたるa-a'断面と2-1区b-b'断面では堆積状況が大きく異なるため、b-b'図をもとに以下記述する。上層(第43図b-b'断面1～5層)は、中層埋没後の溝上面の窪地を埋める堆積層で、一部流水下堆積を認めるが、基本的には溝機能停止後の自然堆積層と考える。また溝開削後に、南北両岸が雨水等により削奪されて生じた浅い窪地に自然堆積した土壌を含む。したがって上述した検出面幅は、窪地部分を含めたものであり、本来的な溝幅は3.2 m前後に復元される。中層(第43図b-b'断面6～8・11層)は、後述する下層上面を一部削奪して堆積していることから、下層溝埋没後の改修溝の可能性を想定する。上位に灰色系砂質シルト、下位に改修溝機能時の堆積層である、灰白色粗砂ないし細砂がレンズ状に堆積する。下層(第43

図 b-b' 断面 9・10・12 ～ 14 層) は、灰色系細砂ないし粗砂を主体とし、最下層に黒褐色粘質シルトがレンズ状に堆積する。溝開削後は一時的に滞水下の低湿地状を呈し、後に緩急のある流水下で埋没したことが想像される。

遺物は、図示した以外に弥生土器や古式土師器の壺や甕、高杯、鉢、小型丸底土器、須恵器壺等の小片がコンテナ半箱程度出土した。3 ～ 9 は古式土師器小形鉢。3・4 は、外反して開く小さな口縁部を有する。3 の底部は、ケズリ調整により丸く仕上げる。7 は、丸底の浅い皿状を呈する。9 は、強い指オサエにより成形された粗製の鉢。底部は尖底状を呈する。10 ～ 14 は小型丸底壺。10・11 は、口縁部は小さく外反し、体部は球胴に近く、底部は丸底である。13 は、口縁部は内湾気味に小さく開き、体部はやや張りの強い扁球状を呈する。14 は粗製の小型丸底土器。口縁部は内湾気味に直立する。15・16 は、小形鉢もしくは小型丸底土器の体～底部片。いずれも底部は凸面底を呈する。以上の小型土器群のうち、3・7・15・16 は、調整や胎土、焼成等が近似し、同一の工房で製作された可能性が考えられる。17・18・19・20 は弥生土器甕。17 の口縁端部は、上方へ小さく摘まみ上げる。胎土中に黒雲母粒を含み、他地域からの搬入品の可能性が高い。弥生時代終末期前後に位置付けられる。19 は口縁外面に 2 条の凹線を施す。弥生時代後期前半に位置付けられる。20 は平底を呈する底部片。21 は布留系の古式土師器甕である。口縁部はやや外反気味に外上方へ開き、体部最大径は中央よりやや下方にあり、底部は丸底である。体部内面は頸部付近までケズリ調整を施す。22 は緩やかに外反して開く弥生土器広口壺。口縁部は上下に小さく拡張して、端面に 2 条の凹線を施す。23・24 は古式土師器高杯。23 は椀形杯部片。脚部との接合は円盤充填法である。24 は、杯上半部がやや内湾気味に開き、下半部との境に鈍い段を認める。脚部は円柱状を呈し、内面はケズリ調整が施される。裾部は低い円盤状を呈する。25 は完形に近く復元される古式土師器二重口縁壺。体部はほぼ球胴で、底部は丸底である。口頸部の形態に畿内的な特徴を認めるが、頸部や体部の成･整形には、在地系の手法を認める。26 は須恵器の底部片。内面が磨滅することから鉢の可能性を想定する。中世前半の所産であり、他の出土遺物と時期が大きく異なることから、混入資料と考える。

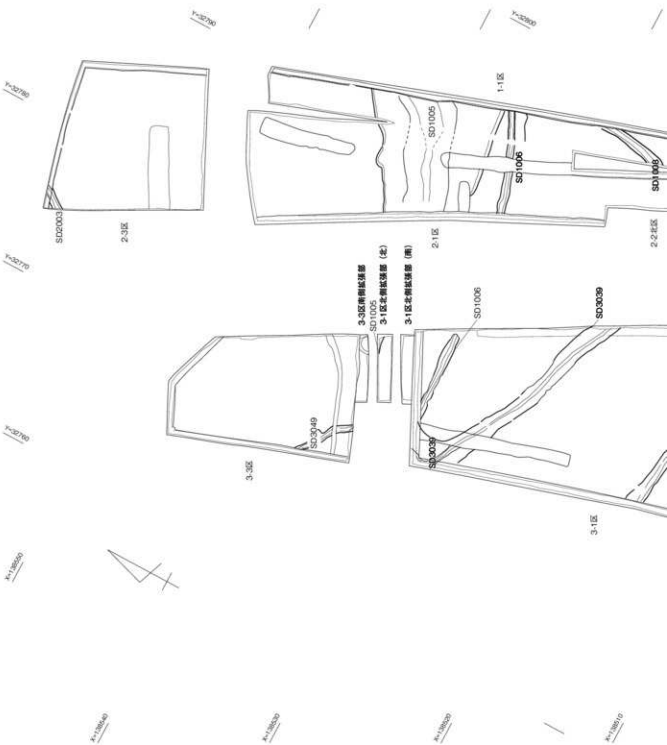
遺構の時期は、出土遺物より、古墳時代前期前半期の埋没の可能性を想定する。(藏本)

1-1・2-1・3-1 区 SD1006（第 45 図）

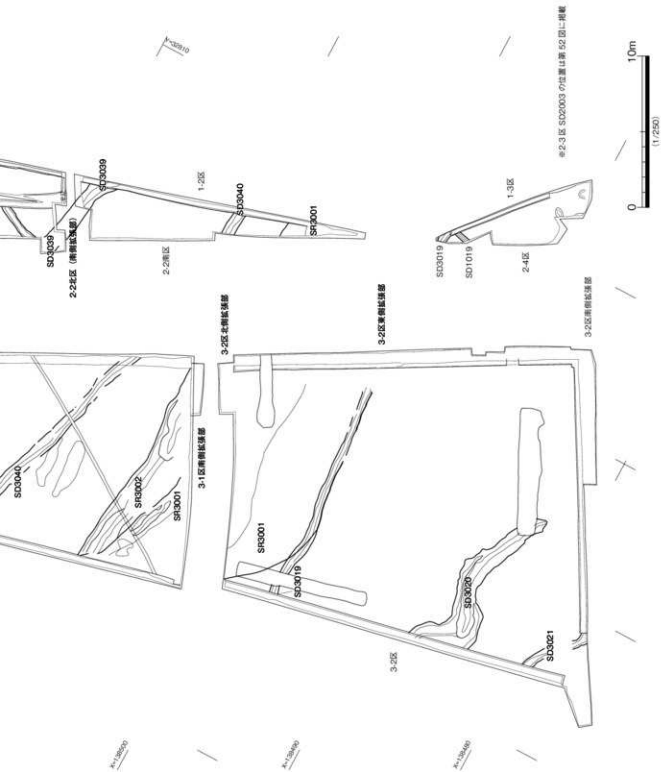
1-1・2-1 区第 1 遺構面と 3-1 区第 1 遺構面で検出した溝状遺構を、遺構の規模や流路方向、埋土等より判断し、一連の遺構として報告する。溝は、緩やかに南に弧を描いて東西に配される。検出面幅 0.41 ～ 0.58 m、残存深 0.11 ～ 0.24 m前後、断面形は概ね皿状を呈する。溝底面の標高は、3-1 区北端で 21.41 m前後、2-1 区西端で 21.50 m前後、1-1 区東端で 21.44 m前後をそれぞれ測り、溝底面は起伏が認められ、流下方向は特定できない。埋土は、記録位置により相違を認めるが、1 ～ 3 層に細分され、灰色系ないし褐色系細砂が概ね水平堆積していた。

遺物は、図示した以外に弥生土器甕等の体部片や器種不詳の土器小片が 10 点程度出土した。27 は古式土師器小形鉢。口縁部は緩やかに外反して開く。28 は、弥生土器甕。胎土中に角閃石細粒を多量に含み、高松平野からの搬入資料である。弥生時代終末期に位置付けられる。29 は古式土師器甕の底部片。底部は丸底。30 は土師質土器皿。溝の形状や他の出土遺物より、詳細な時期は不明であるが中世の所産であり、混入の可能性を想定する。

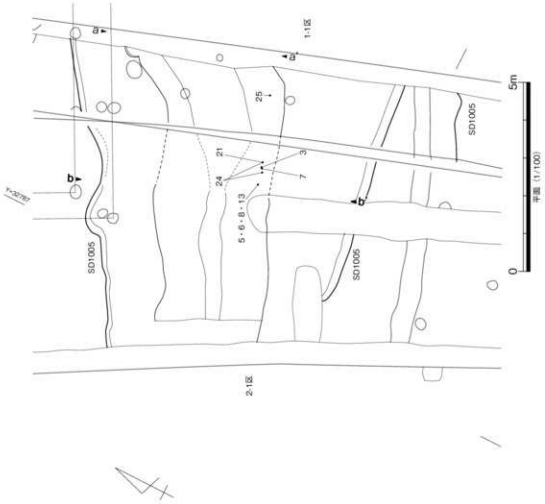
遺構の時期は、遺構検出面、流路方向、出土遺物を考え併せ、SD1005 と同様古墳時代前期前半頃と

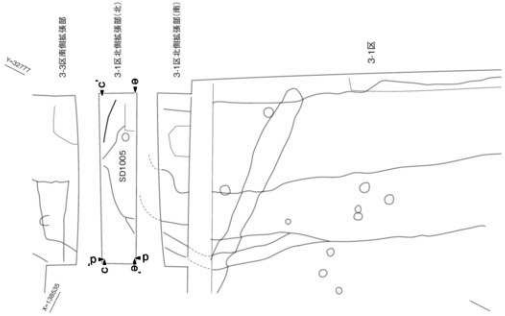

Y=32780
Y=32770
Y=32760
X=138640
X=138630
X=138620
X=138610
SD2003
2-3区
1-1区
SD1005
SD1006
SD1008
2-1区
2-2区
3-3区南側拡張部
SD1005
3-1区北側拡張部（北）
3-1区北側拡張部（南）
SD1006
SD3039
SD3049
SD3038
3-3区
3-1区

第 41 図　1～3 区遺構

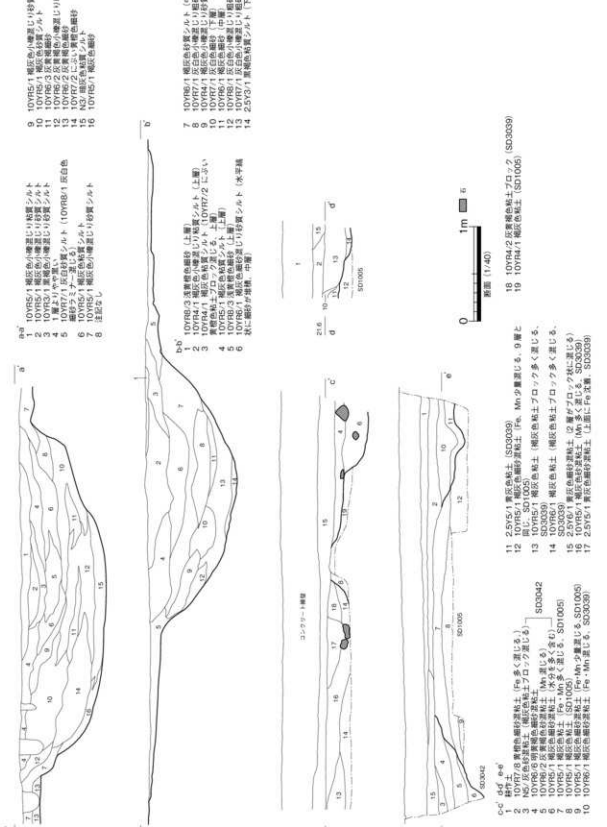

SD3040
SR3002
SR3001
3-1区南側拡張部
SD3039
SD3038
2-2区（南側拡張部）
2-2南区
1-2区
SD3040
SR3001
3-2区北側拡張部
SR3001
SD3019
3-2区
3-2区東側拡張部
SD3020
SD3021
SD3019
SD1019
2-4区
1-3区
※2-3区 SD2003 の位置は第 52 図に掲載
3-2区南側拡張部
0
10m
(1:250)

配置図（古墳時代～古代）

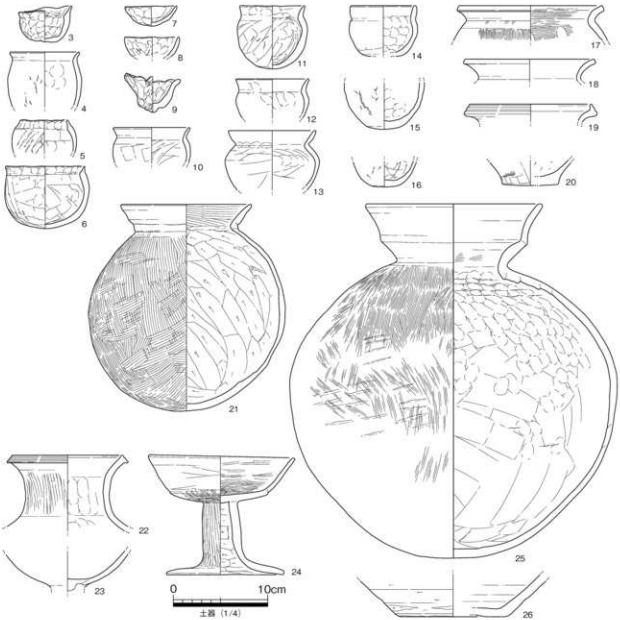




第42図　1-1・2-1区 SD1005 平面図



第 43 図　1-1・2-1 区 SD1005 断面図

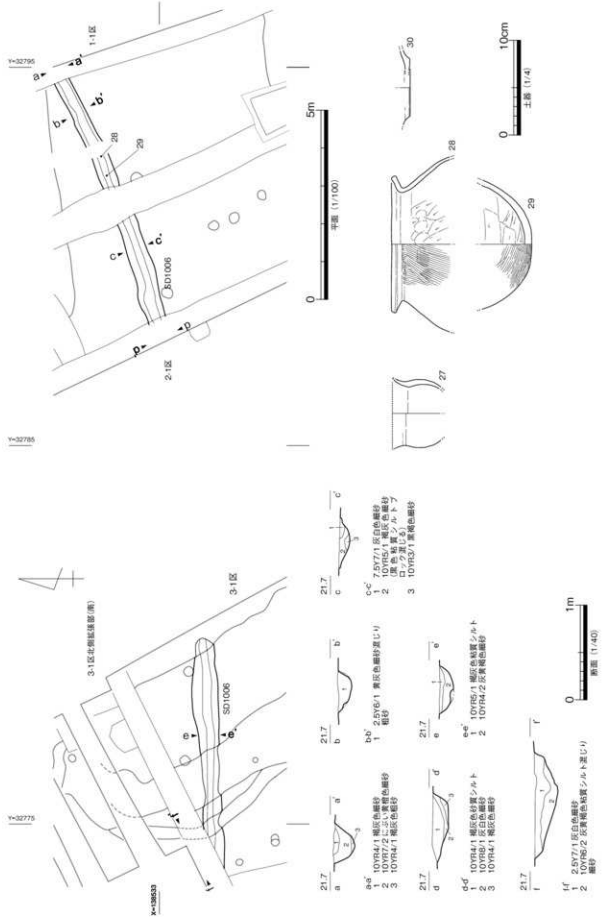


第 44 図　1-1・2-1 区 SD1005 出土遺物

考えられる。(蔵本)

1-1・2-2 北区 SD1008（第 46 図）

1-1・2-2 北区第 1 遺構面で検出した南北溝で、やや南東に弧を描いて配される。南北両端は調査区外へ延長し、3 区で延長溝は確認していない。重複関係より SD1007 より先行し、また 2-2 北区南側拡張部で延長が確認されず、したがって SD3039 より先行する可能性が考えられる。検出面幅 0.44 ～ 0.61 m、残存深 0.16 m前後、断面形は皿状ないし逆台形状を呈する。流路方向は溝底面の標高は、2-2 区西端で 21.36 m前後を、1-1 区東端で 21.48 m前後をそれぞれ測り、高低差より南西へ流下していた可能性が考えられる。埋土は、記録位置により相違し、1 ないし 3 層に細分され、主に灰色系のシルトや粗砂が堆積していた。遺物は、土師質土器皿等の小片 5 ～ 6 点が出土したのみである。



第 45 図　1-1・2-1・3-1 区 SD1006 平・断面図、出土遺物

遺構の時期は明らかではないが、第1遺構面で検出したこと、SD3039に先行すること、流路方向から古代以前に遡ると考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

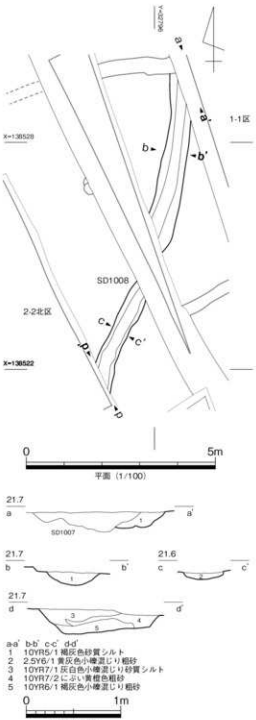
1-3区 SD1019（第47図）

1-3区第1遺構面北端部で検出した南北溝である。南北両端は調査区外へ延長し、南西側の3-2区で延長溝は確認していない。重複関係からSD3019より後出する。検出面幅0.33 m前後、残存深0.25 m前後、断面形はU字状を呈する。流路方向はN 13.73° Eに配され、周辺の地割の方向とは合致しない。流路底面の標高は、1-3区東端で21.34 m前後を測る。調査範囲が限られるため、流下方向は特定できない。埋土は黒褐色粘質シルトの単層であった。

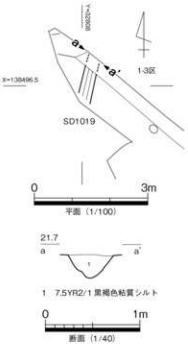
遺物は出土していない。溝の流路方向は、条里型地割の方向と合致せず、その点を重視すれば、古代以前に遡ると考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

2-3区 SD2003（第48図）

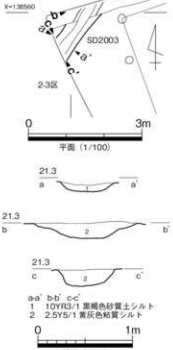
2-3区第1遺構面北西隅で検出した直線溝である。南北両端は調査区外へ延長し、約1.4 mを調査したにとどまる。市道西側の3区では、相当する延長溝は確認していない。検出面幅0.5 m前後、残存深0.09 m前後、断面形は浅い皿状を呈する。流路方向はN 33.22° Eに配され、周辺の条里型



第46図　1-1・2-2北区 SD1008
平・断面図



第47図　1-3区 SD1019
平・断面図



第48図　2-3区 SD2003
平・断面図

地割の方向とは合致しない。溝底面の標高は 21.11 m前後で一定し、流下方向は不明である。埋土は黒褐色砂質シルトまたは黄灰色粘質シルトの単層であった。

遺物は出土しておらず、流路方向が条里型地割の方向と合致しないことから、地割施工前の古代以前の溝の可能性が高いと判断されるが、より詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

1-3・3-2 区 SD3019（第 49 図）

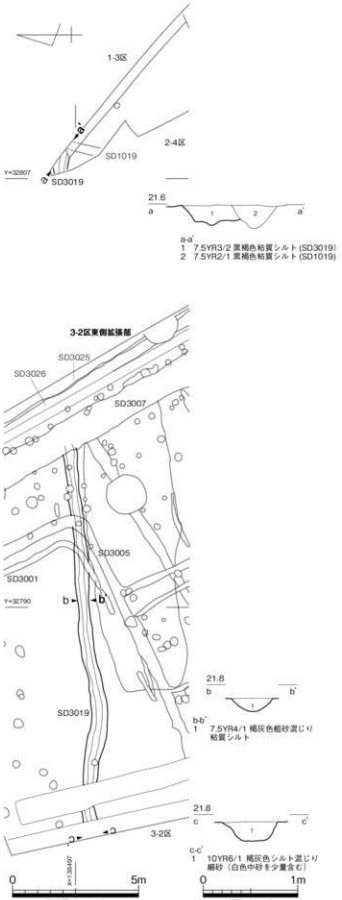
1-3 区第 1 遺構面と 3-2 区第 1 遺構面で検出した溝状遺構を、遺構の規模や流路方向等より判断し、一連の遺構として報告する。1-3 区北端から 3-2 区北半を東西走し、両端は調査区外へ延長する。やや蛇行しつつも、概ね正方位に配される。重複関係より、柱穴群や SD1019、SD3001、SD3005、SD3025、SD3026 より先行する。検出面幅 0.40 ～ 0.53 m、残存深 0.2 m前後、断面形は概ね逆台形状ないし U 字状を呈する。底面の標高は 3-2 区で 21.52 m前後、1-3 区東端で 21.38 m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していたと考えられる。埋土は単層で、褐灰色細砂や粘質シルトが堆積していた。

遺物は、器種不詳の土器小片 1 点が出土したのみである。溝の流路方向は、条里型地割の方向と合致せず、その点を重視すれば、古代以前に遡ると考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

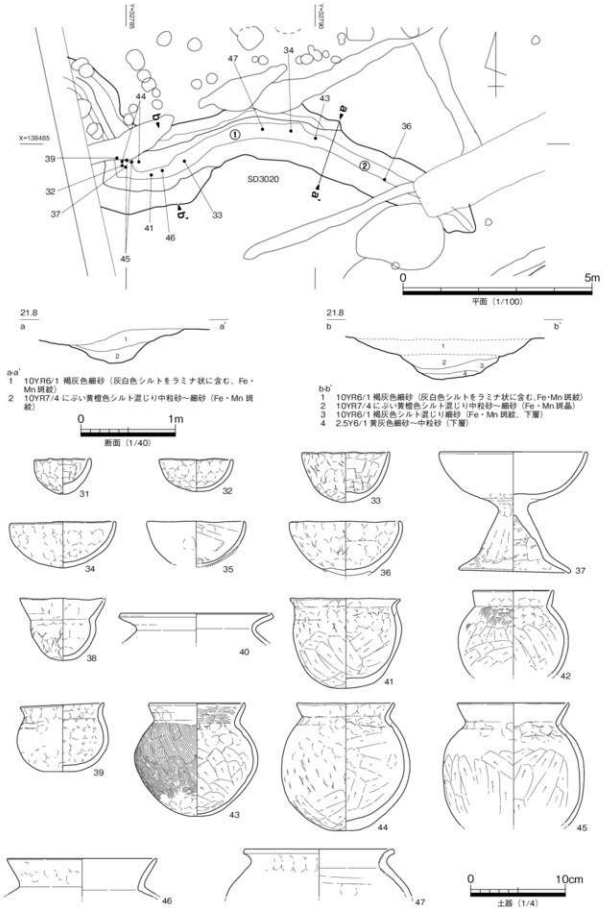
3-2 区 SD3020（第 50 図）

3-2 区第 1 遺構面南西部で検出した溝である。流路方向は大きく蛇行を繰り返しながら、概ね南－北西方向となる。南側は市道下を経て 4 区方向へ、西側は西側隣接地の水田下へと延長する。

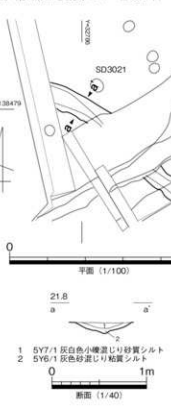
重複関係から、SD3005・SD3011・SD3016・



第 49 図　1-3・3-2 区 SD3019 平・断面図



第 50 図　3-2 区 SD3020 平・断面図、出土遺物



第 51 図　3-2 区 SD3021 平・断面図、出土遺物

SX3003 に先行する。

最大幅 3.12m、最小幅 0.98m、深さ 0.36 ～ 0.43m を測り、断面形は皿形から逆台形となる。底面標高は測定箇所により大きく差があるが、西壁で 21.2m、a-a' 断面で 21.1m を測り、周辺地形を踏まえると北西から南東方向に流下する可能性がある。埋土は褐灰色～黄灰色の細砂～中粒砂を主体とし、各層中に明瞭なラミナが認められる。

遺物は図示のほか、器種特定不能な土師器細片が出土した。31 ～ 36 は粗製の土師器小形鉢である。37 は土師器高杯。杯部下位に明瞭な段は認められず、径の小さい脚接合部から脚柱部はやや膨らみながら屈曲点を経て裾部は短く開く。38 ～ 47 は土師器甕および壺である。41・42・44・45 の胴下半部には、内外面ともにヘラケズリが認められる。

38 ～ 47 から、古墳時代前期を中心とした時期に位置付けられる。(益﨑)

3-2 区 SD3021（第 51 図）

3-2 区第 1 遺構面南西端部で検出した溝である。緩く蛇行しつつ、流路方向は北西 – 南東方向となる。SD3020 と同様に、南側は市道下を経て 4 区方向へ延長し、西側は西側隣接地の水田へと延長する。

重複関係から、SD3013・SD3014 に先行する。

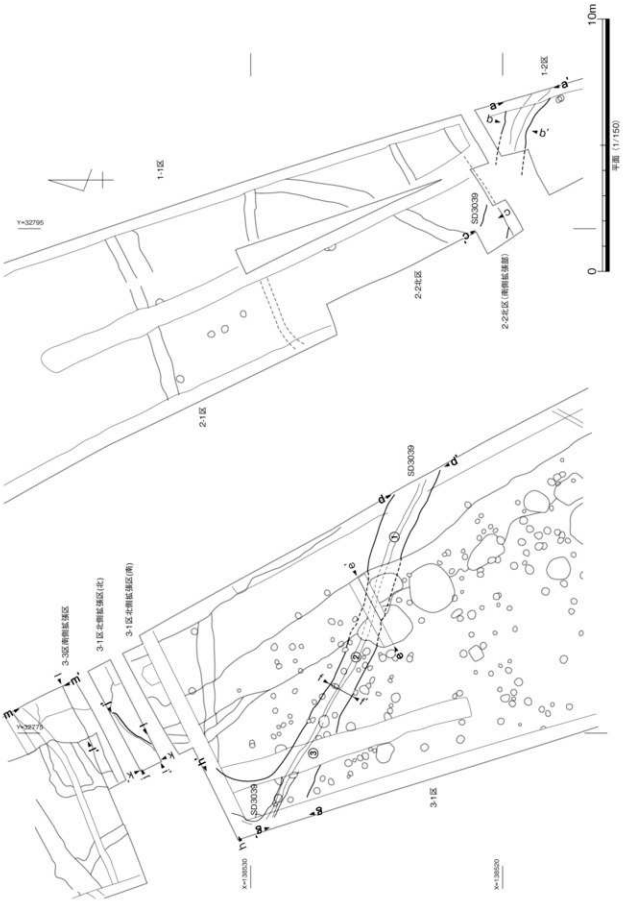
最大幅 0.61m、最小幅 0.45m、深さ 0.12 ～ 0.23m を測り、断面形は皿形となる。底面標高は測定箇所により大きく差があるが、南壁で 21.5m、a-a' 断面で 21.4 m、西壁で 21.5m とほぼ一定である。埋土は上下 2 層に細分でき、上層は灰白色のシルトを主体に細粒砂・少量の礫が混じる。下層は上層と同質の灰白色シルト主体だが、上層と比較してシルトがちで粘性が強い。

遺物は 48 のほか、器種特定不能な土師器細片が認められる。48 は下層出土の土師器甕である。磨滅が著しく、内外面ともに調整は判然としない。口縁部の形状から、古墳時代前期と推定した。

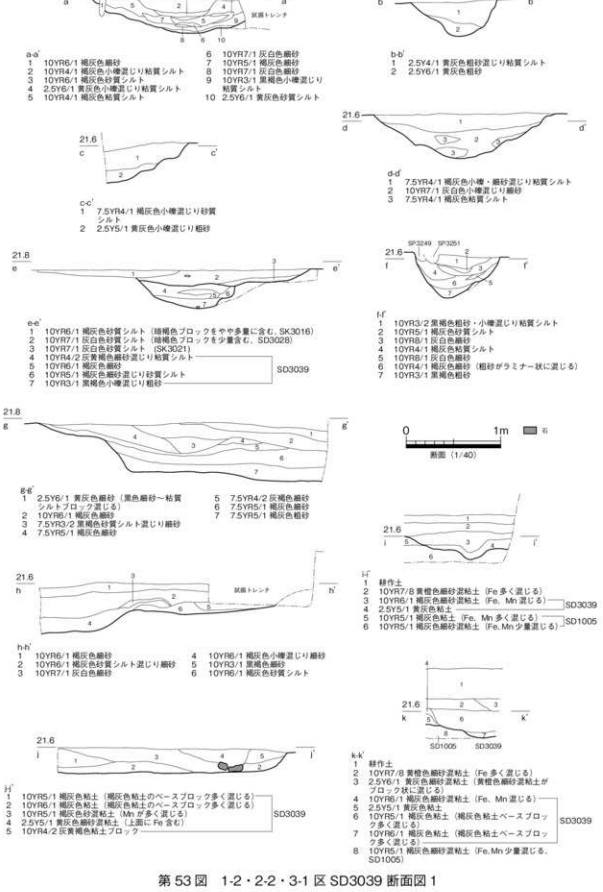
詳細な時期の比定は出土遺物の少なさから困難だが、流路方向が条里方向と一致しない点、48 から、古墳時代の遺構とした。(益﨑)

1-2・2-2・3-1 区 SD3039（第 52 ～ 54 図）

1-2・2-2 北区第 1 遺構面と 3-1 区第 1 遺構面、3-1 区北側拡張区 (北) 第 1 遺構面で検出した溝を、規模や流路方向等より判断し、一連の遺構として報告する。1-2・2-2 区から 3-1 区にかけて平面 L 字状に配された溝で、1-2、2-2、3-1 区で検出した東西溝の東端は調査区外へ延長し、3-1 北拡張区 (北) で検出した南北溝の北端は、2-1・2-3 区で延長溝が確認されておらず、おそらくは遺構面の削奪により減失



第52図　1-2・2-2・3-1区 SD3039 平面図



第 53 図　1-2・2-2・3-1 区 SD3039 断面図 1

第54図　1-2・2-2・3-1 区 SD3039 断面図2・出土遺物

した可能性が高い。調査区北半部をL字状に区画する、区画溝の可能性を考える。なお、3-1 北拡張区(北)で検出した南北溝部分は、当初は隣接する別の溝と同じ遺構番号を付して掘り下げており、遺物が混在した可能性がある。東西溝の延長31 m以上、南北溝約7 mを調査した。重複関係より、柱穴群やSK3016、SK3021、SD3028、SD3041、SD3042 より先行する。検出面幅 1.05 ～ 1.42 m、残存深 0.40 m前後、断面形はU字状や逆台形状等を呈し、記録位置により一定しない。溝底面の標高は、3-1 区西端で21.34 m前後、3-1 区東端で 21.22 m前後、1-2 区東端で 21.19 m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していたと考えられる。埋土は2～9層に細分され、記録位置により精粗があり、また一部に改修溝の可能性がある堆積層も認められるが、溝全域で確認された訳でもなく詳細は不明である。下位層には主に灰色系細～粗砂が堆積し、溝機能時の堆積層と考えられる。

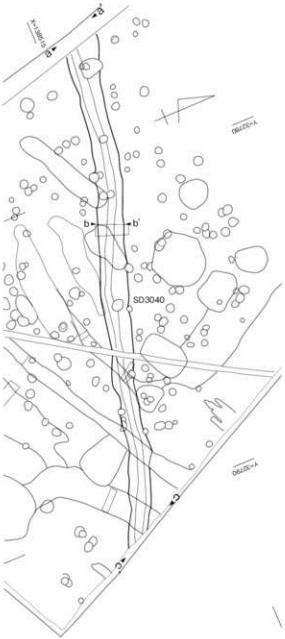
遺物は、図示した以外に土師質土器皿の小片、器種不詳の土器小片が出土した。49・50 は弥生土器甕口縁部。49 は口縁部をツマミ上げている。50 は全体に磨滅が激しい。51 は土師質土器椀。器表面に鉄分が沈着し調整等の観察は困難だが、199 などと同様の杯形椀とみられ中世前半の所産である。

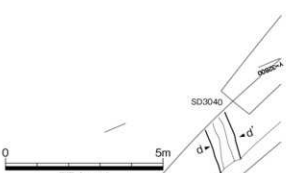
遺構の時期は、第1遺構面で検出したこと、溝の流路方向から古墳時代以降古代以前と考えられる。遺物はいずれも混入と考えられる。(蔵本)

1-2・3-1 区 SD3040（第55図）

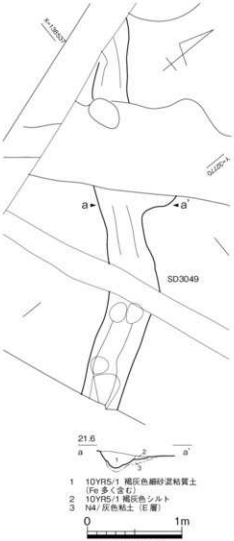
1-2 区第1遺構面で検出した溝と 3-1 区第1遺構面で検出した溝を、遺構の規模や流路方向、埋土等より判断し、一連の遺構として報告する。1-2 区から 3-1 区にかけて、やや蛇行しながら東西走する直線溝である。東西両端は調査区外に延長し、約 27.5 mを調査した。SD3039 の南約 9.1 mを並走し、流路方向より両溝が有機的な関係にあることが想像される。重複関係より、柱穴群や SK3014、SD3030、SD3031、SD3033、SD3036 より先行する。検出面幅 0.77 ～ 0.87 m前後、残存深 0.16 m前後、断面形は皿状を呈する。流路方向は概ねN 79.63° Wに配される。溝底面の標高は 21.38 m前後を測り、1-2 区と 3-1 区部分の溝底面の標高に大きな差は認められないことから、流下方向を特定することは困難と判断した。埋土は2層に細分され、灰色系シルトがレンズ状に堆積していた。遺物は、掲載遺物の他は、器種不詳の土器小片がわずかに出土したのみである。52 は土師質土器の杯。全体を回転ナデで調整する。佐藤編年中世Ⅱ-1 ～ 3 期の幅で捉えられ、混入と考えられる。

遺構の時期は流路方向から古代以前と考えられるが、詳細な時期は不明である。(蔵本)





第 55 図　1-2・3-1 区 SD3040 平・断面図、出土遺物



第 56 図　3-3 区 SD3049
平・断面図

3-3 区 SD3049（第 56 図）

3-3 区南西部で検出した溝である。西端と南端は遺構外へ延長し、隣接する調査区では確認できていない。重複関係よりSD1001、SP3646に先行する溝である。検出面幅0.4 ～ 0.7m、残存深0.18mをそれぞれ測り、断面形は浅いU字状を呈する。溝底面の標高は北端部で 21.06 m前後、南端部で 21.02 m前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下していた可能性が高い。埋土は褐灰色シルト～粘質土が堆積している。

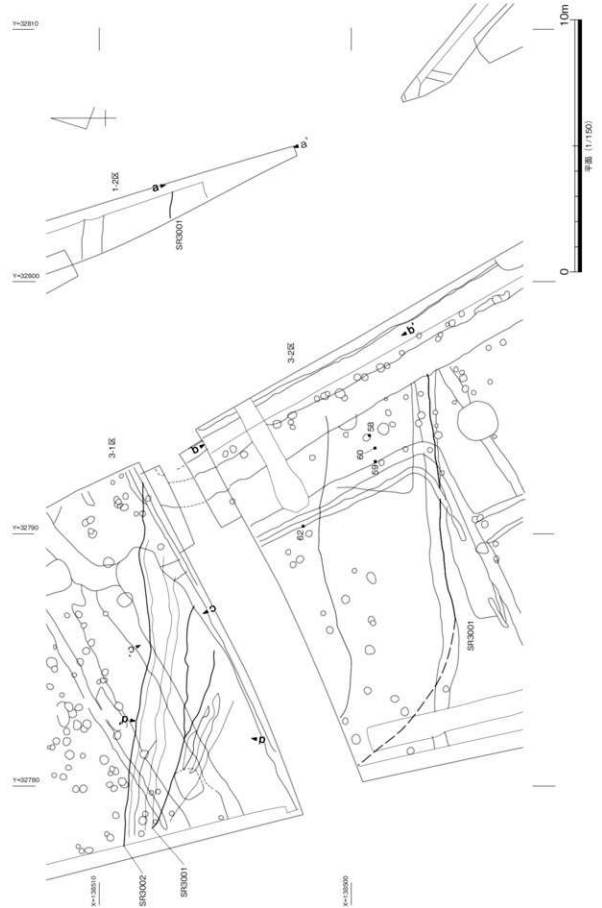
遺物は図示していないが、土師質土器の小片が出土しているのみである。遺物も乏しく、切り合い関係と流路方向より古代以前に位置付けられる可能性が高いものの詳細な時期を特定することは困難である。(溝上)

②自然河川

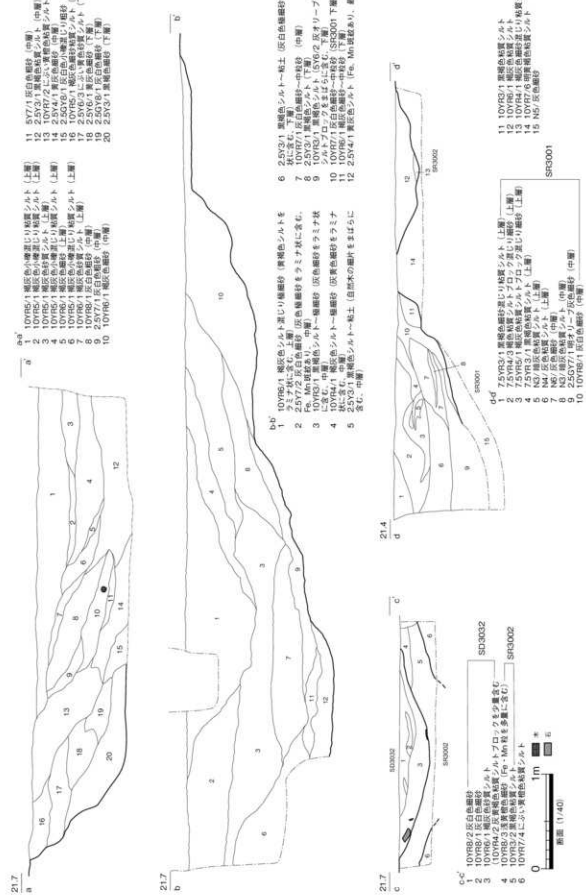
1-2・3-1・3-2 区 SR3001（第 57 ～ 59 図）

3-1・3-2 区第 1 遺構面から 1-2 区第 1 遺構面南端に東西走する自然河川で、東西両端は調査区外へ延長する。重複関係より、柱穴群や SK3023、SD3001、SD3005、SD3007、SD3025、SD3026、SD3030、SD3032、SD3037 より先行し、SR3002 より後出する。検出面幅 5.4 m前後、残存深 1.16 m以上、断面形はやや歪な逆台形を呈するとみられる。流路底面の標高は、記録位置により最大 0.4 m前後の起伏が認められ、流下方向を特定することが困難だが、遺跡北側を東へ流下する大東川の旧流路だとすれば、流下方向は東であった可能性が高い。埋土は 1 区と 3 区で相違するものの、概ね褐色系ないし灰色系のシルト及び細～粗砂がラミナ堆積し、基本的に上方級化が観察される。また、1-2 区東壁 (第 10 図) での堆積状況から、本流路は 4 ～ 5 条以上の小流路単位 (上層～最下層) に細分され、検出面幅内で若干流路位置を変更しながら、埋没が進行したことが考えられる。

遺物は、図示した以外に弥生土器や古式土師器の甕や鉢等の小片が 40 ～ 50 点と近世焼締陶器擂鉢の小片 1 点、木製品 3 点が出土した。53 は上層より出土した土師器壺である。形状から古墳時代と推定できるが、中層出土遺物の年代観と矛盾しており、混入の可能性がある。54 ～ 57 は中層出土遺物である。55 ～ 57 は用途不明の木製品である。55 は板状の木製品で、図下方は厚さ 0.8 ～ 1cm 程に薄く削り出す。何らかの部材と考えられるが、器種の特定には至らない。56 は板材の図下端部を、鉄製の斧状工具で両切刃状に削りだす。出土位置が近接しており、加工痕も類似することから、55 と同一製品の別部材の可能性がある。57 は板材の先端部のみを表面側から杭状に削り出す。58 ～ 61 は下層出土遺物である。58 ～ 60 は土師器高杯である。いずれも口縁部は直線的に外反し、脚柱部はわずかに膨らみをもち、脚裾部は屈曲して短く開く。いずれもほぼ完形で他の同一遺構内出土遺物と比べて磨滅も少なく、出土位置付近から投棄された可能性が想定される。61 は土師器小型丸底壺の口縁部片である。器表面の剥落

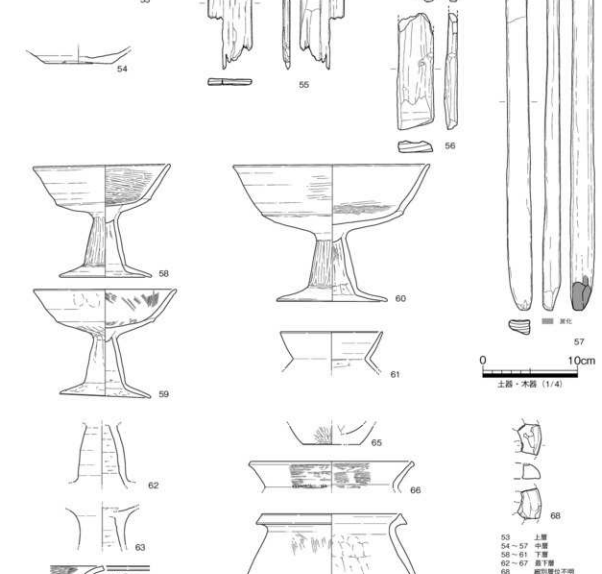


第 57 図　1-2・3-1・3-2 区 SR3001 SR3002 平面図



第58図　1-2・3-1・3-2区 SR3001 SR3002 断面図

により、調整は判然としない。62 ～ 67 は最下層出土遺物である。62・63 はいずれも磨滅の著しい小片で全形不明だが、土師器高杯の脚部片として図化した。62 は脚柱部にやや強い膨らみをもつ。64 は土師器壺のまたは甕の口縁部片か。65 は弥生土器甕の底部片。体部は平底の底部より丸みをもって立ち上げる。66 は土師器甕の口縁部片。口縁部はくの字状に外反し、口縁端部内面は上方に肥厚する。67 は弥生土器甕の口縁部片である。口縁端部は上下に拡張する。口縁端面の凹線の有無は、磨滅と剥落により判別できない。内外面ともに磨滅が著しく調整は判然としないが、わずかにハケ目状の線状痕が認められる。68 は、径約 8cmに復元される半球形状の土製品である。形状は紡錘車に近似するが、復元径は通有の紡錘車より大きく、残存部に 2 孔の上部より穿った径 1cm程度の円孔が確認され、用途は不明



第 59 図　1-2・3-1・3-2 区 SR3001 出土遺物

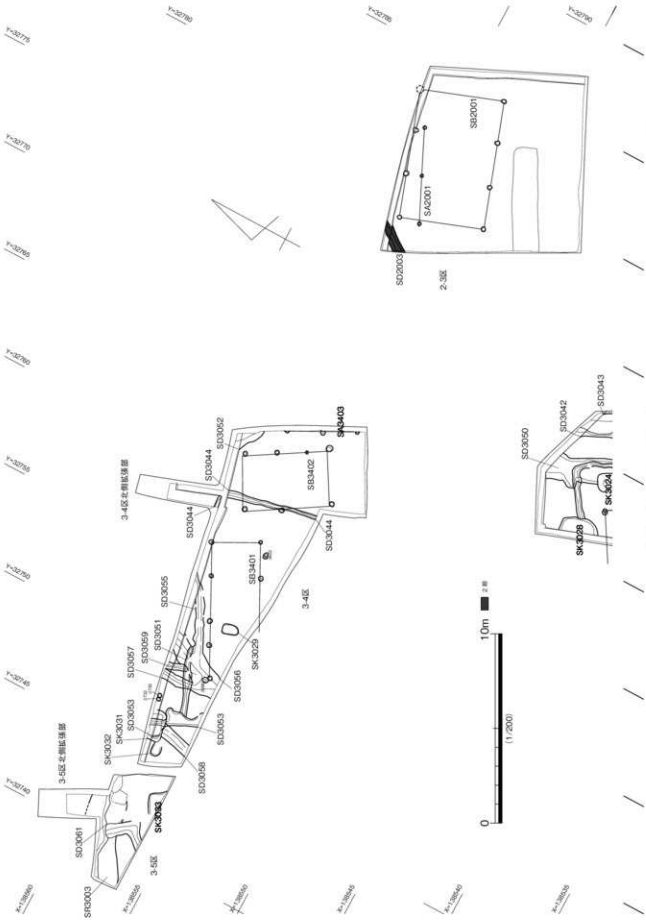
である。胎土中に角閃石や雲母細粒を含み、高松平野中央部もしくは丸亀平野西部地域からの搬入品の可能性がある。

1点のみ出土した近世陶器片は混入の可能性が高く、SR3004との重複関係と他の遺物より弥生時代後期後半から古墳時代にかけて徐々に埋没が進行し、後述の鉄鉢形須恵器鉢(127)の存在から最終埋没は8～9世紀代前後と理解した。(蔵本・益崎)

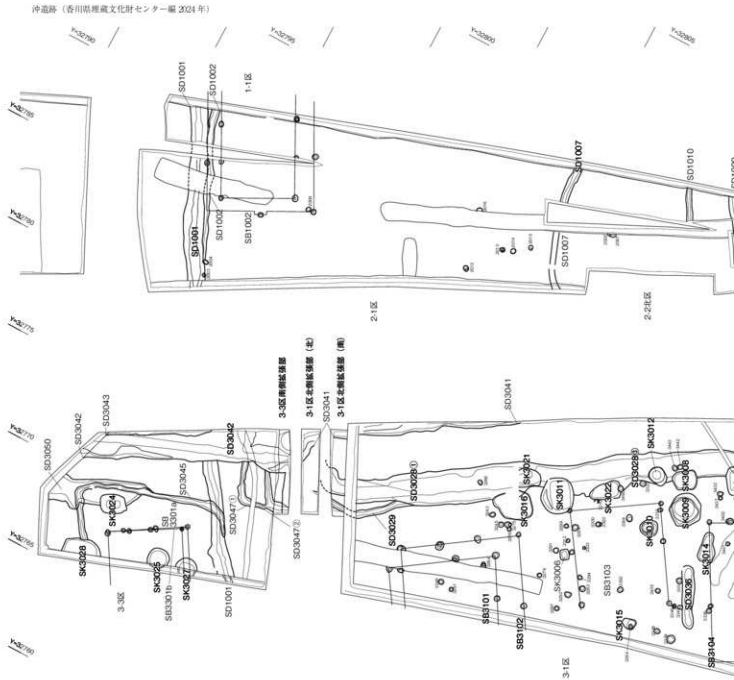
3-1区 SR3002（第57・58図）

3-1区南端で検出した東西流する自然河川である。大部分がSR3001に切られ、調査区内西側では流路の大部分が消失する。幅は推定で2.6 m以上、残存深はc-c'断面で推定0.6 m以上を測る。埋土は記録位置により相違するが、下位に褐灰色～黒褐色のシルト、上位には西半部で黄橙色系細砂が認められる。

遺物は出土せず詳細な時期の比定は困難だが、SR3001との重複関係から、古墳時代前期以前に埋没したものと推定できる。(益崎)



第60図　2・3区遺構配置図（中世以降）1


SD1001
SD1002
1-1区
SD1001
SD1002
SB1002
SD1007
SD1007
SD1010
2-1区
2-2区
3-3区南拡張部
3-1区北拡張部（北）
3-1区北拡張部（南）
SD3050
SD3042
SD3043
SD3042
SD3045
SD3047(1)
SD3047(2)
SD3041
SD3041
SD3029(1)
SD3029
SK3024
SK3028
SK3025
SK3027
SB3010
SD1005
3-3区
SK3021
SK3016
SK3012
SK3022
SK3011
SK3008
SK3009
SK3014
SK3006
SB3103
SK3015
SK3036
SB3101
SB3102
SB3104
3-1区
Y=52790
Y=52785
Y=52780
Y=52775
Y=52770
Y=52765
Y=52760
Y=52755
Y=52750
X=136835
X=136830
X=136825
X=136820
X=136815
X=136810
X=136805

第61図　1～3区

10m
0
(1/200)
1-2区
2-2区
2-2区（南側拡張部）
1-3区
2-3区
3-1区南側拡張部
3-2区北側拡張部
3-2区南側拡張部
3-2区
SD3008
SK3008
SK3013
SD3003
SK3017
SK3020
SD3030
SK3019
SD3005
SD3035
SD3007
SD3026
SD3037
SK3018
SD3032
SD3034
SB3176
SK3023
SB3202
SB3201
SD3004
SK3003
SB3203
SB3204
SB3205
SD3001
SD3002
SA3204
SA3203
SD3005①
SD3010
SK3001
SD3003
SD3005②
SD3005③
SD3005④
SD3011
SA3201
SA3202
SD3012
SD3025
SK3005
SA3205
SA3206
SD3026
SA3207
SD3013
SD3027
SK3004
SD3023
SK3003
SD3014
SD3007
SD3014
SD3023
K=130810
K=130815
K=130820
K=130825
K=130830
K=130835
K=130840
K=130845
K=130875

遺構配置図（中世以降）2

3　中世以降の遺構・遺物

①掘立柱建物・柵列

1-1・2-1 区 SB1002（第 62 図）

1-1・2-1 区北半部で検出した掘立柱建物である。複数年度にまたがり調査したため、調査時には建物としての復元には至らず、図上で梁行 1 間 (3.90 m)、桁行 2 間 (3.92 m) 以上、床面積 15.29㎡以上の東西棟の側柱建物として復元した。梁行の柱間は桁行と比して長く、柱穴の規模から柱材も細身 (径 0.1m 程度) と考えられることから、本来は梁行 2 間であった可能性が高い。また図に示したように、北東隅柱等の一部の柱穴を欠くものの、その他の柱穴は身舎の柱配置と整合性が高く配されることから、少なくとも北・西・東の 3 面に庇を伴う可能性が想定される。重複関係や出土遺物の点から、SD1001、SD1002、SD1005 より後出する。建物主軸はN 62.19° E に配され、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致する。身舎の柱穴は、長径 0.25 ～ 0.34 m の略円ないし楕円形を呈し、残存深 0.16 ～ 0.35 m、断面形は箱形ないし逆台形状を呈する。また、柱通りはよく揃うが、桁行方向の柱間間隔は 1.95 ～ 2.16 m と一定せず、柱穴底面の標高は、21.25 ～ 21.35 m と若干の高低差を認める。なお、各柱穴に柱痕は認められず、根石等も出土していない。

遺物は、図示した以外に、SP1017 と SP2017 より器種不詳の土器小片 1 点が、SP1016 より器種不詳の土師質土器小片 2 点がそれぞれ出土したのみである。69 は SP2008 より出土した土師質土器椀である。外面には回転ミガキ、内面には分割ミガキを施す。出土遺物より、佐藤編年中世Ⅰ-3 期に位置付けられる。(蔵本)

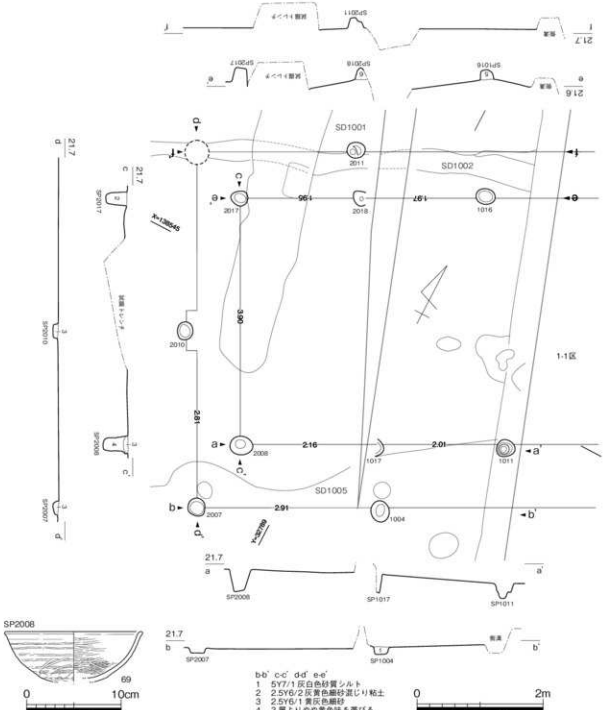
2-3 区 SB2001（第 63 図）

2-3 区北端部で検出した掘立柱建物である。調査時には柱列として調査していたが、図上で梁行 1 間 (4.48 m)、桁行 3 間 (6.86 m)、床面積 30.73㎡の東西棟の側柱建物として復元した。梁行の柱間は桁行と比して長く、本来は梁行 2 間であった可能性が高い。建物主軸はN 70.97° W を測り、周辺の地割の方向とは合致しない。柱穴は、長径 0.21 ～ 0.28 m の略円ないし楕円形を呈し、残存深 0.12 ～ 0.26 m、断面形は箱形ないし逆台形状を呈する。SP2032、SP2033、SP2044、SP2048 の各柱穴において、径 0.1 ～ 0.16 m の柱痕を確認した。柱通りはよく揃う。柱穴底面の標高は、21.02 ～ 21.16 m と若干の高低差を認める。

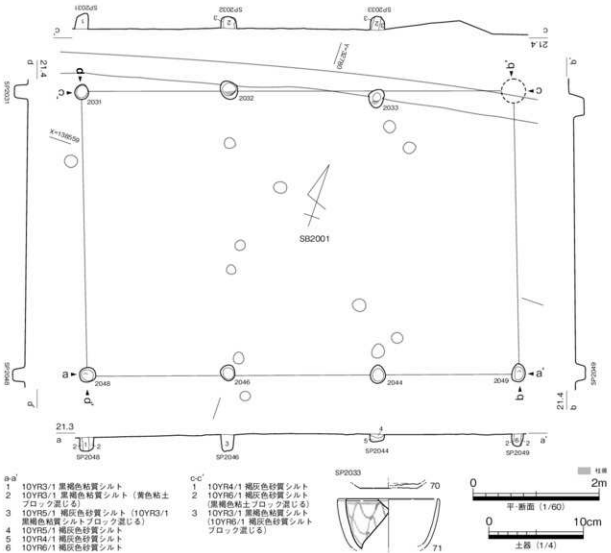
遺物は、図示した以外に SP2031 と SP2049 より器種不詳の土器小片 1 点、SP2046 より土師質土器足釜の底部とみられる土器小片 1 点、SP2044 より土師質土器皿とみられる土器小片 1 点が、それぞれ出土したのみである。70・71 は SP2033 より出土した。70 は土師質土器皿。底部は回転ヘラ切りである。71 は SP2033 より出土した肥前系染付磁器椀で、外面に緩やかな曲線の網目文を描く。肥前系染付磁器椀より、本建物は 17 世紀後半 (野上 2000) に位置付けておく。(蔵本)

2-3 区 SA2001（第 64 図）

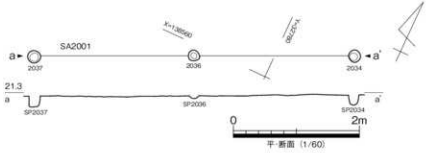
2-3 区北部で検出した柵列である。2 間分を検出した。検出長 5.10m、柱間は 2.55m、主軸方位は N65.0° E である。柱穴は円形で、直径 0.16 ～ 0.20m、残存深 0.05 ～ 0.26m である。SB2001 と重複する位置にあるが、柱穴に切り合い関係はなく、SB2001 との前後関係は不明である。出土遺物は、SP3034 から時期不明の土器小片が出土したのみである。(蔵本)



第 62 図　1-1・2-1 区 SB1002 平・断面図、出土遺物



第 63 図　2-3 区 SB2001 平・断面図、出土遺物

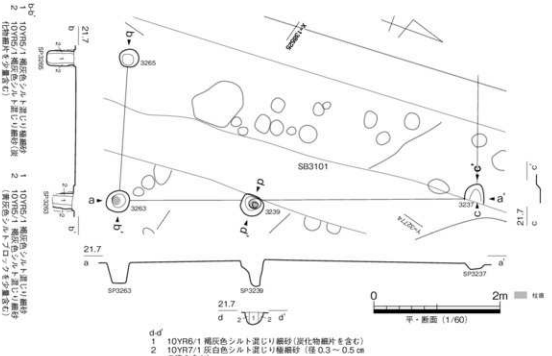


第 64 図　2-3 区 SA2001 平・断面図

3-1 区 SB3101（第 65 図）

3-1 区北部で検出した掘立柱建物で、西半部は調査区外へ延長するため、全形は不詳である。本書作成時に図上で復元した。一部を除き柱穴埋土は不明である。梁行 1 間 (2.25 m) 以上、桁行 2 間 (5.73 m)、床面積 12.89㎡以上、主軸方向N 34.83° W をそれぞれ測る側柱建物として復元する。主軸方位は概ね条里型地割に合致する。柱穴堀り方は、径 0.25 ～ 0.39 m の楕円形を呈し、底面の標高 21.17 ～ 21.47 m、残存深 0.3 ～ 0.45 m をそれぞれ測る。

遺物は SP3037 より器種不詳の土師質土器片が出土したのみである。後述する SB3102 との重複関係より、SB3102 より古いものの近接した時期の遺構の可能性を想定する。(溝上)



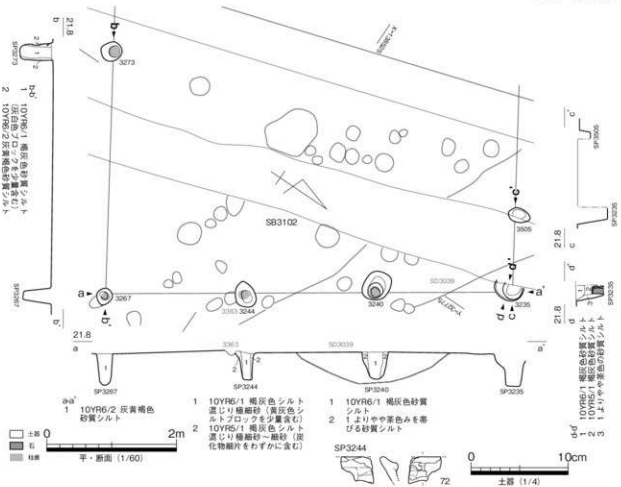
第 65 図　3-1 区 SB3101 平・断面図

3-1 区 SB3102（第 66 図）

3-1 区北部で検出した掘立柱建物で、西半部は調査区外へ延長するため、全形は不詳である。SB3101 と重複する。本書作成時に図上で復元した。一部を除き柱穴埋土は不明である。

梁行 1 間 (3.76 m) 以上、桁行 3 間 (6.34 m)、床面積 23.84㎡以上、主軸方向N 34.31° W をそれぞれ測る側柱建物として復元する。主軸方位は概ね条里型地割と合致する。梁行 1 間以上として復元したが、SP3235 の西側に SP3505 のように間柱の可能性のある柱穴があり、3.76 m の間に間柱がある梁行が 2 間もしくは 3 間の建物の可能性がある。柱穴掘り方は、径 0.26 ～ 0.47 m の楕円形を呈し、底面の標高 21.09 ～ 21.18 m、残存深 0.4 ～ 0.5 m をそれぞれ測る。SP3235 の断面図において石を検出した記録はあるものの、石材、形状に関しての記録はない。

遺物は SP3235、SP3240、SP3244、SP3273 の各柱穴より、器種不詳の土師質土器の小片が少量出土した。72 は SP3244 から出土した土師質土器の把手付鍋口縁部片。口縁部はナデ、体部外面はナデ、内面はナデ後板ナデで調整する。第 5 章第 5 節でまとめたＣ期 (1- Ⅳ型式) に相当し中世後期の所産である。把手付鍋の年代観を建物の上限年代と想定する。(溝上)



第66図　3-1区 SB3102 平・断面図、出土遺物

3-1区 SB3103（第67図）

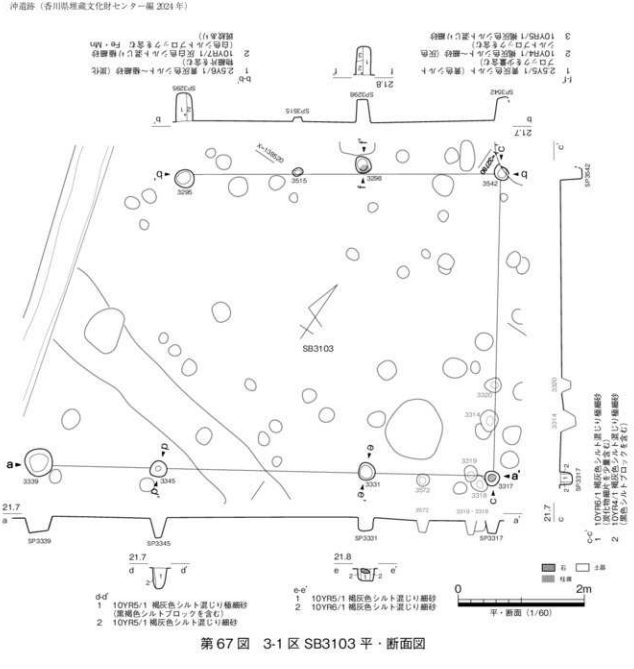
3-1区中央部で検出した掘立柱建物である。本書作成時に図上で復元した。一部を除き柱穴埋土は不明である。梁行1間(4.79 m)、桁行3間(7.14 m)、床面積23.78㎡以上、主軸方向N 31.75° Wをそれぞれ測る側柱建物として復元する。主軸方位は概ね条里型地割と合致する。柱穴掘り方は、径0.23～0.27 mの円ないし楕円形を呈し、底面の標高21.16～21.41 m、残存深0.2～0.45 mをそれぞれ測る。

遺物は、SP3295、SP3298、SP3331、SP3317の各柱穴より、器種不詳の土師質土器小片、土師質土器皿が少量出土した。SK3011にSB3103を構成する柱穴の一部が切られることから、中世後期の可能性を指摘できるが、詳細な時期を決定することは困難である。(溝上)

3-1区 SB3104（第68図）

3-1区南部で検出した掘立柱建物で、本建物も本書を作成時に図上で復元した。SP3381の対になる北辺の柱穴と北西隅柱を欠き、一部を除き柱穴埋土は不明である。梁行3間(3.55 m)、桁行3間(7.25 m)、床面積25.74㎡、主軸方向N59.57° Eをそれぞれ測る側柱建物として復元する。柱穴掘り方は、径0.27～0.4 mの円ないし楕円形を呈し、底面の標高21.11～21.55 m、残存深0.1～0.5 mをそれぞれ測る。柱間間隔は一定せず、整った矩形を呈し、柱通りも概ね揃う。

遺物はSP3356、SP3380、SP3401の各柱穴より、器種不詳の土師質土器小片、土師質土器皿が少量

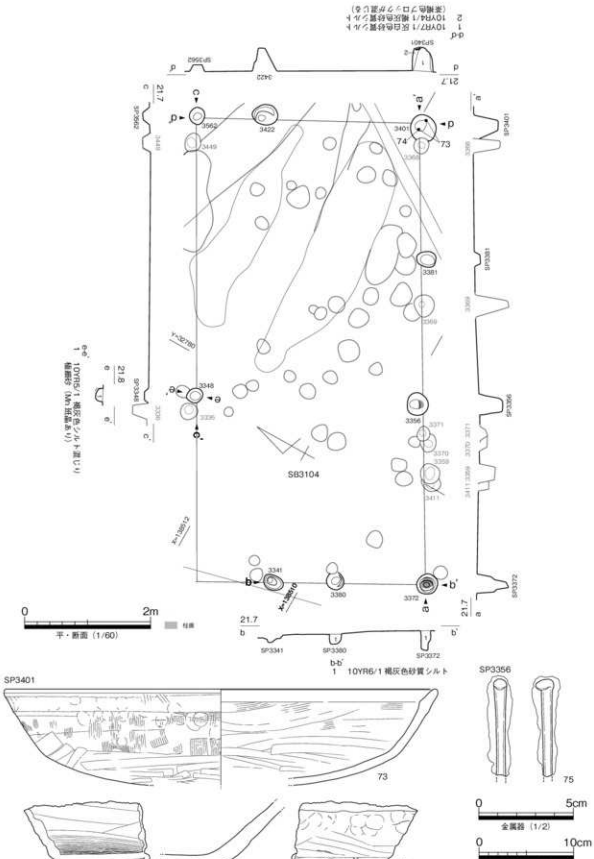


第 67 図　3-1 区 SB3103 平・断面図

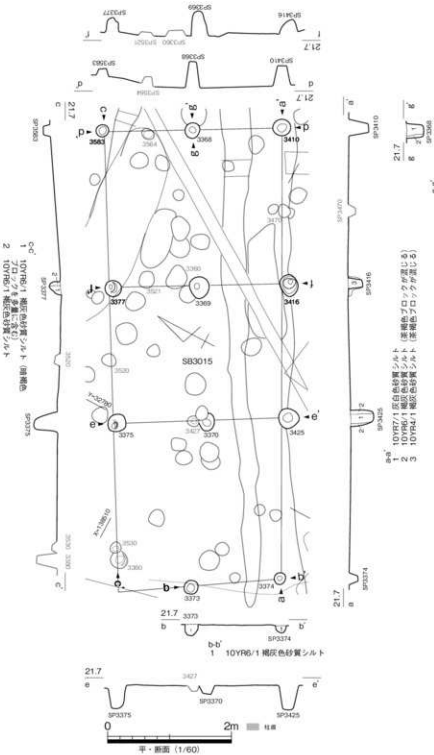
出土した。73・74 は SP3401 で出土した土師質土器。73 は鍋。体部外面は指オサエ後縦方向に板ナデや横方向のハケを施す。体部内面は指ナデ、口縁部はヨコナデ、底部は板ナデである。土器の調整順としては、全体的な指オサエ後、体部内外面や口縁部を調整し、最後に底部内外面の板ナデを施している。74 は火鉢。外面は指オサエやナデで、内面はナデやハケ目で調整する。内面には煤が付着する。足がついていた部分は欠損している。75 は和釘。SP3356 より出土した。いずれも近世前期 (17 世紀) に位置付けられ、建物の上限の年代を示していると考えられる。(溝上)

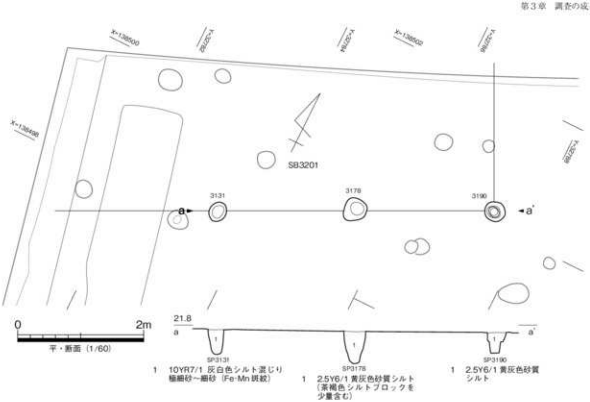
3-1 区 SB3105（第 69 図）

3-1 区南部で検出した掘立柱建物で、本建物も本書を作成時に図上で復元した。北西隅柱を欠き、ほとんどの柱穴埋土は不明である。東辺中央の間柱の重複関係より、SB3104 より後出する建物である。梁行 2 間 (2.95 m)、桁行 3 間 (7.29 m)、床面積 21.5㎡、主軸方向 N62.54° E をそれぞれ測る総柱建物と



第68図　3-1区 SB3104 平・断面図、出土遺物


SB3015
SP3375
SP3377
SP3370
SP3373
SP3374
SP3425
SP3416
SP3410
SP3368
SP3366
SP3364
SP3362
SP3360
SP3358
SP3356
SP3354
SP3352
SP3350
SP3348
SP3346
SP3344
SP3342
SP3340
SP3338
SP3336
SP3334
SP3332
SP3330
SP3328
SP3326
SP3324
SP3322
SP3320
SP3318
SP3316
SP3314
SP3312
SP3310
SP3308
SP3306
SP3304
SP3302
SP3300
SP3298
SP3296
SP3294
SP3292
SP3290
SP3288
SP3286
SP3284
SP3282
SP3280
SP3278
SP3276
SP3274
SP3272
SP3270
SP3268
SP3266
SP3264
SP3262
SP3260
SP3258
SP3256
SP3254
SP3252
SP3250
SP3248
SP3246
SP3244
SP3242
SP3240
SP3238
SP3236
SP3234
SP3232
SP3230
SP3228
SP3226
SP3224
SP3222
SP3220
SP3218
SP3216
SP3214
SP3212
SP3210
SP3208
SP3206
SP3204
SP3202
SP3200
SP3198
SP3196
SP3194
SP3192
SP3190
SP3188
SP3186
SP3184
SP3182
SP3180
SP3178
SP3176
SP3174
SP3172
SP3170
SP3168
SP3166
SP3164
SP3162
SP3160
SP3158
SP3156
SP3154
SP3152
SP3150
SP3148
SP3146
SP3144
SP3142
SP3140
SP3138
SP3136
SP3134
SP3132
SP3130
SP3128
SP3126
SP3124
SP3122
SP3120
SP3118
SP3116
SP3114
SP3112
SP3110
SP3108
SP3106
SP3104
SP3102
SP3100
SP3098
SP3096
SP3094
SP3092
SP3090
SP3088
SP3086
SP3084
SP3082
SP3080
SP3078
SP3076
SP3074
SP3072
SP3070
SP3068
SP3066
SP3064
SP3062
SP3060
SP3058
SP3056
SP3054
SP3052
SP3050
SP3048
SP3046
SP3044
SP3042
SP3040
SP3038
SP3036
SP3034
SP3032
SP3030
SP3028
SP3026
SP3024
SP3022
SP3020
SP3018
SP3016
SP3014
SP3012
SP3010
SP3008
SP3006
SP3004
SP3002
SP3000
SP2998
SP2996
SP2994
SP2992
SP2990
SP2988
SP2986
SP2984
SP2982
SP2980
SP2978
SP2976
SP2974
SP2972
SP2970
SP2968
SP2966
SP2964
SP2962
SP2960
SP2958
SP2956
SP2954
SP2952
SP2950
SP2948
SP2946
SP2944
SP2942
SP2940
SP2938
SP2936
SP2934
SP2932
SP2930
SP2928
SP2926
SP2924
SP2922
SP2920
SP2918
SP2916
SP2914
SP2912
SP2910
SP2908
SP2906
SP2904
SP2902
SP2900
SP2898
SP2896
SP2894
SP2892
SP2890
SP2888
SP2886
SP2884
SP2882
SP2880
SP2878
SP2876
SP2874
SP2872
SP2870
SP2868
SP2866
SP2864
SP2862
SP2860
SP2858
SP2856
SP2854
SP2852
SP2850
SP2848
SP2846
SP2844
SP2842
SP2840
SP2838
SP2836
SP2834
SP2832
SP2830
SP2828
SP2826
SP2824
SP2822
SP2820
SP2818
SP2816
SP2814
SP2812
SP2810
SP2808
SP2806
SP2804
SP2802
SP2800
SP2798
SP2796
SP2794
SP2792
SP2790
SP2788
SP2786
SP2784
SP2782
SP2780
SP2778
SP2776
SP2774
SP2772
SP2770
SP2768
SP2766
SP2764
SP2762
SP2760
SP2758
SP2756
SP2754
SP2752
SP2750
SP2748
SP2746
SP2744
SP2742
SP2740
SP2738
SP2736
SP2734
SP2732
SP2730
SP2728
SP2726
SP2724
SP2722
SP2720
SP2718
SP2716
SP2714
SP2712
SP2710
SP2708
SP2706
SP2704
SP2702
SP2700
SP2698
SP2696
SP2694
SP2692
SP2690
SP2688
SP2686
SP2684
SP2682
SP2680
SP2678
SP2676
SP2674
SP2672
SP2670
SP2668
SP2666
SP2664
SP2662
SP2660
SP2658
SP2656
SP2654
SP2652
SP2650
SP2648
SP2646
SP2644
SP2642
SP2640
SP2638
SP2636
SP2634
SP2632
SP2630
SP2628
SP2626
SP2624
SP2622
SP2620
SP2618
SP2616
SP2614
SP2612
SP2610
SP2608
SP2606
SP2604
SP2602
SP2600
SP2598
SP2596
SP2594
SP2592
SP2590
SP2588
SP2586
SP2584
SP2582
SP2580
SP2578
SP2576
SP2574
SP2572
SP2570
SP2568
SP2566
SP2564
SP2562
SP2560
SP2558
SP2556
SP2554
SP2552
SP2550
SP2548
SP2546
SP2544
SP2542
SP2540
SP2538
SP2536
SP2534
SP2532
SP2530
SP2528
SP2526
SP2524
SP2522
SP2520
SP2518
SP2516
SP2514
SP2512
SP2510
SP2508
SP2506
SP2504
SP2502
SP2500
SP2498
SP2496
SP2494
SP2492
SP2490
SP2488
SP2486
SP2484
SP2482
SP2480
SP2478
SP2476
SP2474
SP2472
SP2470
SP2468
SP2466
SP2464
SP2462
SP2460
SP2458
SP2456
SP2454
SP2452
SP2450
SP2448
SP2446
SP2444
SP2442
SP2440
SP2438
SP2436
SP2434
SP2432
SP2430
SP2428
SP2426
SP2424
SP2422
SP2420
SP2418
SP2416
SP2414
SP2412
SP2410
SP2408
SP2406
SP2404
SP2402
SP2400
SP2398
SP2396
SP2394
SP2392
SP2390
SP2388
SP2386
SP2384
SP2382
SP2380
SP2378
SP2376
SP2374
SP2372
SP2370
SP2368
SP2366
SP2364
SP2362
SP2360
SP2358
SP2356
SP2354
SP2352
SP2350
SP2348
SP2346
SP2344
SP2342
SP2340
SP2338
SP2336
SP2334
SP2332
SP2330
SP2328
SP2326
SP2324
SP2322
SP2320
SP2318
SP2316
SP2314
SP2312
SP2310
SP2308
SP2306
SP2304
SP2302
SP2300
SP2298
SP2296
SP2294
SP2292
SP2290
SP2288
SP2286
SP2284
SP2282
SP2280
SP2278
SP2276
SP2274
SP2272
SP2270
SP2268
SP2266
SP2264
SP2262
SP2260
SP2258
SP2256
SP2254
SP2252
SP2250
SP2248
SP2246
SP2244
SP2242
SP2240
SP2238
SP2236
SP2234
SP2232
SP2230
SP2228
SP2226
SP2224
SP2222
SP2220
SP2218
SP2216
SP2214
SP2212
SP2210
SP2208
SP2206
SP2204
SP2202
SP2200
SP2198
SP2196
SP2194
SP2192
SP2190
SP2188
SP2186
SP2184
SP2182
SP2180
SP2178
SP2176
SP2174
SP2172
SP2170
SP2168
SP2166
SP2164
SP2162
SP2160
SP2158
SP2156
SP2154
SP2152
SP2150
SP2148
SP2146
SP2144
SP2142
SP2140
SP2138
SP2136
SP2134
SP2132
SP2130
SP2128
SP2126
SP2124
SP2122
SP2120
SP2118
SP2116
SP2114
SP2112
SP2110
SP2108
SP2106
SP2104
SP2102
SP2100
SP2098
SP2096
SP2094
SP2092
SP2090
SP2088
SP2086
SP2084
SP2082
SP2080
SP2078
SP2076
SP2074
SP2072
SP2070
SP2068
SP2066
SP2064
SP2062
SP2060
SP2058
SP2056
SP2054
SP2052
SP2050
SP2048
SP2046
SP2044
SP2042
SP2040
SP2038
SP2036
SP2034
SP2032
SP2030
SP2028
SP2026
SP2024
SP2022
SP2020
SP2018
SP2016
SP2014
SP2012
SP2010
SP2008
SP2006
SP2004
SP2002
SP2000
SP1998
SP1996
SP1994
SP1992
SP1990
SP1988
SP1986
SP1984
SP1982
SP1980
SP1978
SP1976
SP1974
SP1972
SP1970
SP1968
SP1966
SP1964
SP1962
SP1960
SP1958
SP1956
SP1954
SP1952
SP1950
SP1948
SP1946
SP1944
SP1942
SP1940
SP1938
SP1936
SP1934
SP1932
SP1930
SP1928
SP1926
SP1924
SP1922
SP1920
SP1918
SP1916
SP1914
SP1912
SP1910
SP1908
SP1906
SP1904
SP1902
SP1900
SP1898
SP1896
SP1894
SP1892
SP1890
SP1888
SP1886
SP1884
SP1882
SP1880
SP1878
SP1876
SP1874
SP1872
SP1870
SP1868
SP1866
SP1864
SP1862
SP1860
SP1858
SP1856
SP1854
SP1852
SP1850
SP1848
SP1846
SP1844
SP1842
SP1840
SP1838
SP1836
SP1834
SP1832
SP1830
SP1828
SP1826
SP1824
SP1822
SP1820
SP1818
SP1816
SP1814
SP1812
SP1810
SP1808
SP1806
SP1804
SP1802
SP1800
SP1798
SP1796
SP1794
SP1792
SP1790
SP1788
SP1786
SP1784
SP1782
SP1780
SP1778
SP1776
SP1774
SP1772
SP1770
SP1768
SP1766
SP1764
SP1762
SP1760
SP1758
SP1756
SP1754
SP1752
SP1750
SP1748
SP1746
SP1744
SP1742
SP1740
SP1738
SP1736
SP1734
SP1732
SP1730
SP1728
SP1726
SP1724
SP1722
SP1720
SP1718
SP1716
SP1714
SP1712
SP1710
SP1708
SP1706
SP1704
SP1702
SP1700
SP1698
SP1696
SP1694
SP1692
SP1690
SP1688
SP1686
SP1684
SP1682
SP1680
SP1678
SP1676
SP1674
SP1672
SP1670
SP1668
SP1666
SP1664
SP1662
SP1660
SP1658
SP1656
SP1654
SP1652
SP1650
SP1648
SP1646
SP1644
SP1642
SP1640
SP1638
SP1636
SP1634
SP1632
SP1630
SP1628
SP1626
SP1624
SP1622
SP1620
SP1618
SP1616
SP1614
SP1612
SP1610
SP1608
SP1606
SP1604
SP1602
SP1600
SP1598
SP1596
SP1594
SP1592
SP1590
SP1588
SP1586
SP1584
SP1582
SP1580
SP1578
SP1576
SP1574
SP1572
SP1570
SP1568
SP1566
SP1564
SP1562
SP1560
SP1558
SP1556
SP1554
SP1552
SP1550
SP1548
SP1546
SP1544
SP1542
SP1540
SP1538
SP1536
SP1534
SP1532
SP1530
SP1528
SP1526
SP1524
SP1522
SP1520
SP1518
SP1516
SP1514
SP1512
SP1510
SP1508
SP1506
SP1504
SP1502
SP1500
SP1498
SP1496
SP1494
SP1492
SP1490
SP1488
SP1486
SP1484
SP1482
SP1480
SP1478
SP1476
SP1474
SP1472
SP1470
SP1468
SP1466
SP1464
SP1462
SP1460
SP1458
SP1456
SP1454
SP1452
SP1450
SP1448
SP1446
SP1444
SP1442
SP1440
SP1438
SP1436
SP1434
SP1432
SP1430
SP1428
SP1426
SP1424
SP1422
SP1420
SP1418
SP1416
SP1414
SP1412
SP1410
SP1408
SP1406
SP1404
SP1402
SP1400
SP1398
SP1396
SP1394
SP1392
SP1390
SP1388
SP1386
SP1384
SP1382
SP1380
SP1378
SP1376
SP1374
SP1372
SP1370
SP1368
SP1366
SP1364
SP1362
SP1360
SP1358
SP1356
SP1354
SP1352
SP1350
SP1348
SP1346
SP1344
SP1342
SP1340
SP1338
SP1336
SP1334
SP1332
SP1330
SP1328
SP1326
SP1324
SP1322
SP1320
SP1318
SP1316
SP1314
SP1312
SP1310
SP1308
SP1306
SP1304
SP1302
SP1300
SP1298
SP1296
SP1294
SP1292
SP1290
SP1288
SP1286
SP1284
SP1282
SP1280
SP1278
SP1276
SP1274
SP1272
SP1270
SP1268
SP1266
SP1264
SP1262
SP1260
SP1258
SP1256
SP1254
SP1252
SP1250
SP1248
SP1246
SP1244
SP1242
SP1240
SP1238
SP1236
SP1234
SP1232
SP1230
SP1228
SP1226
SP1224
SP1222
SP1220
SP1218
SP1216
SP1214
SP1212
SP1210
SP1208
SP1206
SP1204
SP1202
SP1200
SP1198
SP1196
SP1194
SP1192
SP1190
SP1188
SP1186
SP1184
SP1182
SP1180
SP1178
SP1176
SP1174
SP1172
SP1170
SP1168
SP1166
SP1164
SP1162
SP1160
SP1158
SP1156
SP1154
SP1152
SP1150
SP1148
SP1146
SP1144
SP1142
SP1140
SP1138
SP1136
SP1134
SP1132
SP1130
SP1128
SP1126
SP1124
SP1122
SP1120
SP1118
SP1116
SP1114
SP1112
SP1110
SP1108
SP1106
SP1104
SP1102
SP1100
SP1098
SP1096
SP1094
SP1092
SP1090
SP1088
SP1086
SP1084
SP1082
SP1080
SP1078
SP1076
SP1074
SP1072
SP1070
SP1068
SP1066
SP1064
SP1062
SP1060
SP1058
SP1056
SP1054
SP1052
SP1050
SP1048
SP1046
SP1044
SP1042
SP1040
SP1038
SP1036
SP1034
SP1032
SP1030
SP1028
SP1026
SP1024
SP1022
SP1020
SP1018
SP1016
SP1014
SP1012
SP1010
SP1008
SP1006
SP1004
SP1002
SP1000
SP998
SP996
SP994
SP992
SP990
SP988
SP986
SP984
SP982
SP980
SP978
SP976
SP974
SP972
SP970
SP968
SP966
SP964
SP962
SP960
SP958
SP956
SP954
SP952
SP950
SP948
SP946
SP944
SP942
SP940
SP938
SP936
SP934
SP932
SP930
SP928
SP926
SP924
SP922
SP920
SP918
SP916
SP914
SP912
SP910
SP908
SP906
SP904
SP902
SP900
SP898
SP896
SP894
SP892
SP890
SP888
SP886
SP884
SP882
SP880
SP878
SP876
SP874
SP872
SP870
SP868
SP866
SP864
SP862
SP860
SP858
SP856
SP854
SP852
SP850
SP848
SP846
SP844
SP842
SP840
SP838
SP836
SP834
SP832
SP830
SP828
SP826
SP824
SP822
SP820
SP818
SP816
SP814
SP812
SP810
SP808
SP806
SP804
SP802
SP800
SP798
SP796
SP794
SP792
SP790
SP788
SP786
SP784
SP782
SP780
SP778
SP776
SP774
SP772
SP770
SP768
SP766
SP764
SP762
SP760
SP758
SP756
SP754
SP752
SP750
SP748
SP746
SP744
SP742
SP740
SP738
SP736
SP734
SP732
SP730
SP728
SP726
SP724
SP722
SP720
SP718
SP716
SP714
SP712
SP710
SP708
SP706
SP704
SP702
SP700
SP698
SP696
SP694
SP692
SP690
SP688
SP686
SP684
SP682
SP680
SP678
SP676
SP674
SP672
SP670
SP668
SP666
SP664
SP662
SP660
SP658
SP656
SP654
SP652
SP650
SP648
SP646
SP644
SP642
SP640
SP638
SP636
SP634
SP632
SP630
SP628
SP626
SP624
SP622
SP620
SP618
SP616
SP614
SP612
SP610
SP608
SP606
SP604
SP602
SP600
SP598
SP596
SP594
SP592
SP590
SP588
SP586
SP584
SP582
SP580
SP578
SP576
SP574
SP572
SP570
SP568
SP566
SP564
SP562
SP560
SP558
SP556
SP554
SP552
SP550
SP548
SP546
SP544
SP542
SP540
SP538
SP536
SP534
SP532
SP530
SP528
SP526
SP524
SP522
SP520
SP518
SP516
SP514
SP512
SP510
SP508
SP506
SP504
SP502
SP500
SP498
SP496
SP494
SP492
SP490
SP488
SP486
SP484
SP482
SP480
SP478
SP476
SP474
SP472
SP470
SP468
SP466
SP464
SP462
SP460
SP458
SP456
SP454
SP452
SP450
SP448
SP446
SP444
SP442
SP440
SP438
SP436
SP434
SP432
SP430
SP428
SP426
SP424
SP422
SP420
SP418
SP416
SP414
SP412
SP410
SP408
SP406
SP404
SP402
SP400
SP398
SP396
SP394
SP392
SP390
SP388
SP386
SP384
SP382
SP380
SP378
SP376
SP374
SP372
SP370
SP368
SP366
SP364
SP362
SP360
SP358
SP356
SP354
SP352
SP350
SP348
SP346
SP344
SP342
SP340
SP338
SP336
SP334
SP332
SP330
SP328
SP326
SP324
SP322
SP320
SP318
SP316
SP314
SP312
SP310
SP308
SP306
SP304
SP302
SP300
SP298
SP296
SP294
SP292
SP290
SP288
SP286
SP284
SP282
SP280
SP278
SP276
SP274
SP272
SP270
SP268
SP266
SP264
SP262
SP260
SP258
SP256
SP254
SP252
SP250
SP248
SP246
SP244
SP242
SP240
SP238
SP236
SP234
SP232
SP230
SP228
SP226
SP224
SP222
SP220
SP218
SP216
SP214
SP212
SP210
SP208
SP206
SP204
SP202
SP200
SP198
SP196
SP194
SP192
SP190
SP188
SP186
SP184
SP182
SP180
SP178
SP176
SP174
SP172
SP170
SP168
SP166
SP164
SP162
SP160
SP158
SP156
SP154
SP152
SP150
SP148
SP146
SP144
SP142
SP140
SP138
SP136
SP134
SP132
SP130
SP128
SP126
SP124
SP122
SP120
SP118
SP116
SP114
SP112
SP110
SP108
SP106
SP104
SP102
SP100
SP098
SP096
SP094
SP092
SP090
SP088
SP086
SP084
SP082
SP080
SP078
SP076
SP074
SP072
SP070
SP068
SP066
SP064
SP062
SP060
SP058
SP056
SP054
SP052
SP050
SP048
SP046
SP044
SP042
SP040
SP038
SP036
SP034
SP032
SP030
SP028
SP026
SP024
SP022
SP020
SP018
SP016
SP014
SP012
SP010
SP008
SP006
SP004
SP002
SP



第70図　3-2区 SB3201 平・断面図

SB3104の建物の上限年代である17世紀以降の可能性を想定する。(溝上)

3-2区 SB3201（第70図）

3-2区北西隅部で検出した掘立柱建物である。調査時には建物として認識されておらず、図上で梁行1間(2.02 m以上)以上、桁行3間(4.30 m)以上、床面積15.23㎡以上の東西棟の側柱建物として復元した。重複関係からSR3001に後出するのは明らかだが、後述のSB3202との先後関係は不明である。

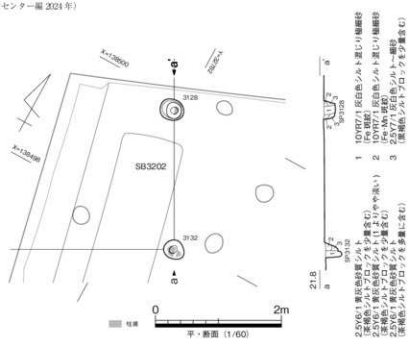
建物主軸はN 63.56° Eに配され、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致する。柱穴は、径0.23～0.34mの略円形を呈し、残存深0.33～0.5m、断面形は逆台形ないしU字形を呈する。SP3190において、径0.12～0.16 mの柱痕を確認した。柱穴底面の標高は、21.2～21.35 mと若干の高低差が認められる。そのほかの柱穴に柱痕は認められず、根石等の出土もない。埋土は灰白色～黄灰色のシルト～細砂で、土質は中世後半～近世の遺物が出土した柱穴と共通する。

遺物は出土せず詳細な時期の比定は困難であるが、埋土から中世後期以降の建物と推定される。(益崎)

3-2区 SB3202（第71図）

3-2区北西隅部で検出した掘立柱建物である。調査時には建物として認識されていないが、各柱穴埋土の類似から掘立柱建物の可能性を想定し、図上で復元した。梁行1間(2.22 m)以上、桁行1間(2.27 m以上)以上、床面積6.25㎡以上と推定されるが、検出範囲は建物南東隅部の柱穴2基のみであり、詳細な建物規模の特定はできない。重複関係からSR3001に後出するが、SB3201との先後関係は不明である。

建物主軸はN 61.04° Eに配され、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致する。柱穴は、長径0.24～0.29 mの略円形を呈し、残存深0.18～0.26 m、断面形は逆台形ないしU字形を呈する。SP3128・SP3132ともに、



第 71 図　3-2 区 SB3202 平・断面図

径 0.12 ～ 0.16 m の柱痕を確認した。柱穴底面の標高は、21.45 ～ 21.55 m と若干の高低差が認められる。根石等の出土はなく、SP3132 では底部に柱材の沈下痕跡が認められる。

遺物は出土せず建物時期の特定は困難であるが、建物主軸が条里型地割と合致すること、SB3201 と重複することから、中世以降と理解した。(益崎)

3-2 区 SB3203（第 72 図）

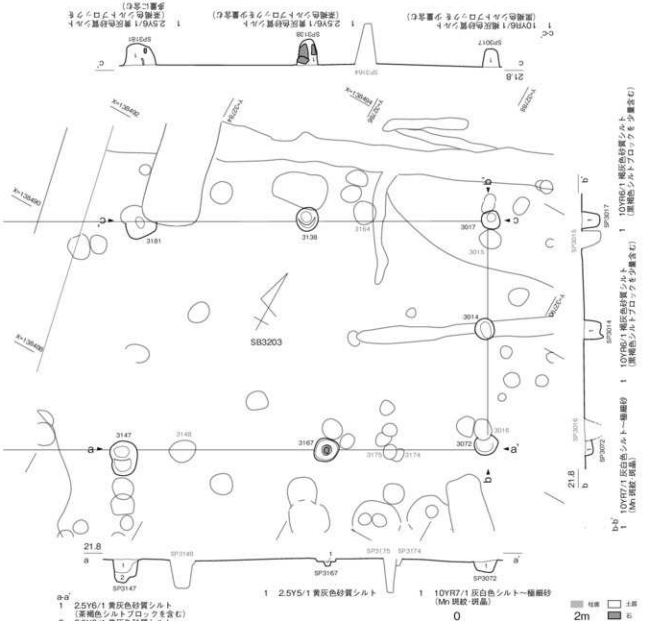
3-2 区中央部西寄りで検出した掘立柱建物である。調査時には建物として認識されておらず、図上で梁行 2 間 (3.60 m)、桁行 3 間 (5.80 m) 以上、床面積 27.21㎡以上の東西棟の側柱建物として復元した。SP3147 南側に埋土の類似する複数の小柱穴が認められ、南面に庇を伴う可能性が考えられるが、SP3167・SP3172 南側は複数の土坑・性格不明遺構が重複しており、庇の有無を判断できない。重複関係から、SD3010・SB3205 に後出する。また、復元した建物は SB3204 と重複するが、柱穴の切り合いは認められず先後関係は不明である。

建物主軸はＮ 60.76° Ｅに配され、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致する。柱穴は、径 0.27 ～ 0.52m の略円形を呈し、残存深 0.20 ～ 0.41m、断面形は逆台形ないし U 字形を呈する。SP3167 以外のいずれの柱穴にも明確な柱痕は認められず、根石等の出土もない。柱穴底面の標高は、21.3 ～ 21.5 m と高低差が認められる。埋土は灰白色～黄灰色のシルト～細砂主体で、土質は中世後半～近世の遺物が出土した柱穴と共通する。

遺物は出土せず詳細な時期の比定は困難であるが、埋土の類似性から中世以降の建物と推定される。(益崎)

3-2 区 SB3204（第 73 図）

3-2 区中央部西壁付近で検出した掘立柱建物である。調査時には建物として認識されておらず、図上で梁行 2 間 (4.20 m)、桁行 1 間 (2.26 m) 以上、床面積 12.60㎡以上の側柱建物として復元した。重複関



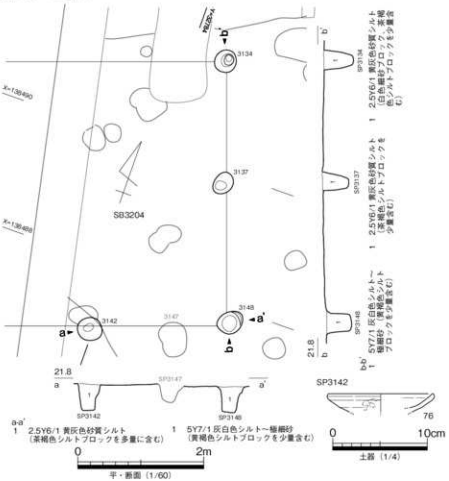
第72図　3-2区 SB3203 平・断面図

係から SD3020 に後出する。また、復元した建物は SB3203・SB3205 と重複するが、柱穴の切り合いは認められず先後関係は不明である。

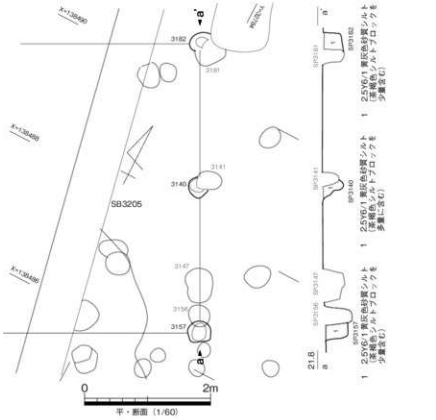
建物主軸はN 70.49° E に配され、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致する。柱穴は、径 0.30 ～ 0.39m の略円形を呈し、残存深 0.42 ～ 0.48m、断面形は逆台形状を呈する。いずれの柱穴にも明確な柱痕は認められず、根石等も出土していない。柱穴底面の標高は、概ね 21.2 m前後で一定である。

遺物は図示のほか、土師質土器と考えられる細片が認められる。76 は肥前系陶器皿の口縁部片である。口縁部形態から、高松城跡様相 1 ～ 3 の幅で捉えられる。

出土遺物が小片 1 点のみであり、建物時期の絞り込みは困難であるが、76 の年代観から 17 世紀前半以降に位置付けたい。(益崎)



第 73 図　3-2 区 SB3204 平・断面図、出土遺物

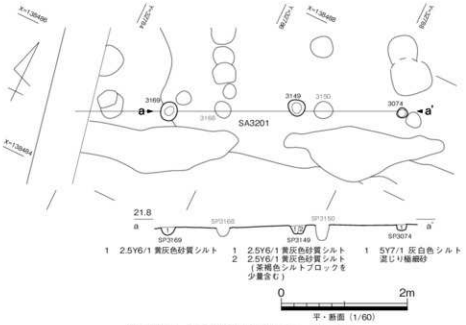


第 74 図　3-2 区 SB3205 平・断面図

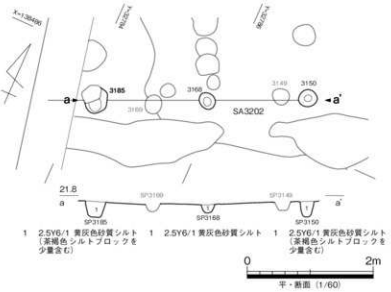
3-2 区 SB3205（第 74 図）

3-2 区中央部西壁付近で検出した掘立柱建物である。調査時には建物として認識されておらず、図上で梁行 2 間 (4.54 m)、桁行 1 間 (2.13 m) 以上、床面積 12.56㎡以上の側柱建物として復元した。重複関係から SB3203 に先行する。また、復元した建物は SB3204 と重複するが、柱穴の切り合いは認められず先後関係は不明である。

建物主軸はＮ 63.23° Ｅに配され、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致する。柱穴は、いずれも他の柱穴と切り合うために正確な規模は不明だが、少なくとも径 0.3m 以上の略円形と考えられる。残存深 0.32 ～ 0.35m、断面形は逆台形ないし U 字形を呈する。いずれの柱穴にも明確な柱痕は認められず、根石等の出土もない。柱穴底面の標高は、概ね 21.4 m前後で一定である。埋土は灰白色～黄灰色のシルト～細砂主体で、土質は中世後半～近世の遺物が出土した柱穴と共通する。



第 75 図　3-2 区 SA3201 平・断面図



第 76 図　3-2 区 SA3202 平・断面図

遺物は出土しておらず、建物時期の特定は困難である。建物主軸が条里型地割と合致すること、埋土の類似から中世後期以降の建物と推定される。(益崎)

3-2 区 SA3201（第 75 図）

3-2 区中央部西側で検出した柱穴列である。調査時には個別の柱穴として認識されているが、柵列の可能性を想定し図上で復元した。SB3203・SB3204・SB3205 の周囲を区画する SD3005・SD3016 に並行しており、屋敷地の区画施設の可能性がある。

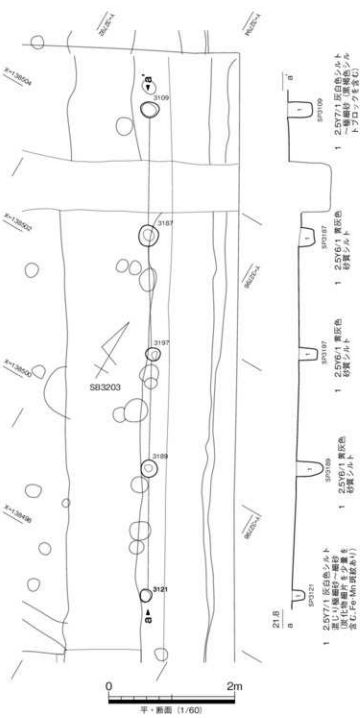
主軸方向は N 63.68° E で、条里型地割の方向に概ね合致する。柱間間隔は推定で 1.69 ～ 2.03 m を測る。柱穴は径 0.16 ～ 0.25m の略円形を呈し、残存深は 0.09 ～ 0.13m と極めて浅く、上部は大きく削奪されているとみられる。埋土はいずれも黄灰色～灰白色シルトで、底部の標高は 21.5 m と概ね一定である。SD3001・SD3005 に並行して東へ延長する可能性が考えられるが、対応する柱穴は認められない。

遺物は出土せず詳細な時期を特定することは困難であるが、SD3005・SD3016 との位置関係から中世以降の遺構と推定した。(益崎)

3-2 区 SA3202（第 76 図）

3-2 区中央部西側で検出した柱穴列である。調査時には個別の柱穴として認識されているが、柵列の可能性を想定し図上で復元した。SA3201 と重複するが、柱穴の切り合いはなく、先後関係は不明である。SA3201 同様に屋敷地の区画施設の可能性がある。

主軸方向は N 65.76° E で、条里型地割の方向に概ね合致する。柱間間隔は推定で 1.59 ～ 1.79 m を測る。柱穴は径 0.22 ～ 0.32m の略円形を呈し、残存深は 0.14 ～ 0.25m と浅い。埋土はいずれも黄灰色シルトを主体に、茶褐色シルトをブロック状に含む。SD3005・SD3016 に並行して東へ延長する可能性が考えられるが、対応する柱穴は認



第 77 図　3-2 区 SA3203 平・断面図

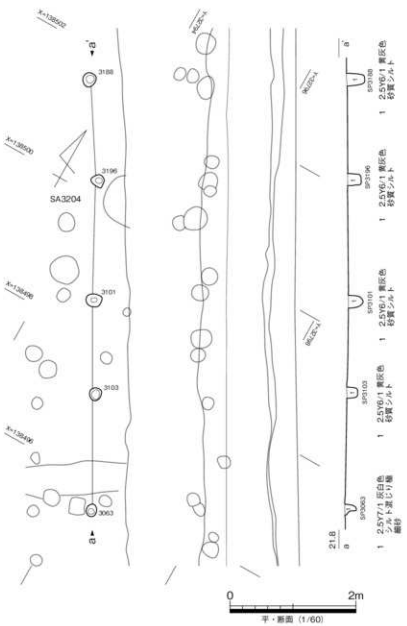
められない。

遺物は出土せず詳細な時期を特定することは困難であるが、SA3201 と同様に中世以降の遺構とした。(益﨑)

3-2 区 SA3203（第 77 図）

3-2 区北東部で検出した柱穴列である。調査時には個別の柱穴として認識されているが、柵列の可能性を想定し図上で復元した。SD3007・SD3026 に並行しており、上部の削平を考慮すれば、大部分が SD3007 と重複すると考えられる。SD3007 との先後関係は不明だが、調査時の掘削順序から推定すれば、SD3007 に先行する可能性がある。

主軸方向はN 28.22° W で、条里型地割の方向に概ね合致する。柱間間隔は 1.79 ～ 2.01 m と一定しないが、柱穴底面の標高は 21.3 m前後で概ね一定である。柱穴は、径 0.17 ～ 0.31m の略円形を呈し、残



第 78 図　3-2 区 SA3204 平・断面図

存深は 0.21 ～ 0.42 m と浅い。SD3007・SD3026 に並行して南へ延長すると考えられ、SA3207 と連続する可能性があるが、両柱穴列間に対応する柱穴は認められない。

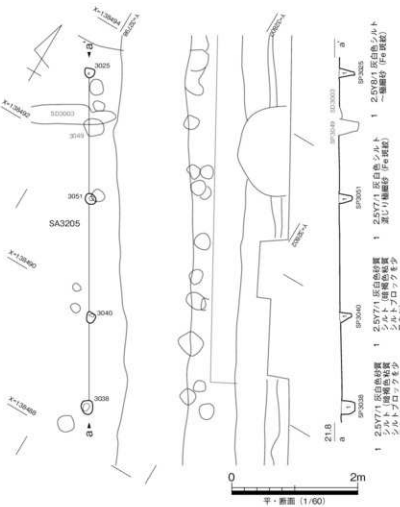
遺物は出土せず、詳細な時期の特定は困難だが、SD3007 との重複関係から中世後期の遺構と推定した。（益﨑）

3-2 区 SA3204（第 78 図）

3-2 区北東部で検出した柱穴列である。調査時には個別の柱穴として認識されているが、埋土の類似性から柵列の可能性を想定し図上で復元した。SD3007 との先後関係は不明だが、SD3007 西側に並行しており、同時期の区画施設の可能性が考えられる。

主軸方向はN 28.93° W で、条里型地割の方向に概ね合致する。柱間間隔は 1.51 ～ 1.86 m と一定しないが、柱穴底面の標高は 21.4 m 前後で概ね一定である。柱穴は、径 0.17 ～ 0.19m の略円形を呈し、残存深は 0.19 ～ 0.29m と浅い。SD3007 に並行して南へ延長すると考えられ、SA3205 と連続する可能性があるが、SP3063-SP3025 間に対応する柱穴は認められない。

遺物は出土せず詳細な時期の特定は困難だが、SD3007 との位置関係から近世前期の遺構と推定した。（益﨑）



第 79 図　3-2 区 SA3205 平・断面図

3-2 区 SA3205（第 79 図）

3-2 区中央部東側で検出した柱穴列である。調査時には個別の柱穴として認識されているが、埋土の類似性から柵列の可能性を想定し図上で復元した。SD3007 との先後関係は不明だが、SD3007 西側に並行しており、同時期の区画施設の可能性が考えられる。

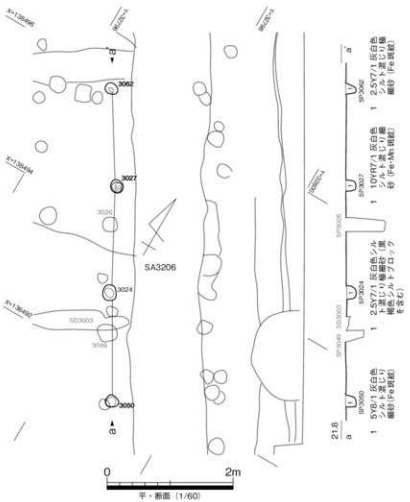
主軸方向はN 29.94° W で、条里型地割の方向に概ね合致する。柱間間隔は 1.47 ～ 1.98 m と一定しないが、柱穴底面の標高は 21.45 m前後と概ね一定である。柱穴は径 0.16 ～ 0.23m の略円形を呈し、残存深は 0.18 ～ 0.22m と浅い。埋土はいずれも灰白色砂質シルトを主体に、少量の暗褐色シルトブロックを含む。SD3007 に並行して北へ延長すると考えられ、SA3205 と連続する可能性がある。

遺物は出土せず詳細な時期の特定は困難だが、SD3007・SD3026 との位置関係から近世前期の遺構と推定した。(益﨑)

3-2 区 SA3206（第 80 図）

3-2 区北東部で検出した柱穴列である。調査時には個別の柱穴として認識されているが、埋土の類似性から柵列の可能性を想定し図上で復元した。SA3204・SA3205 と同様に SD3007 西側に並行しており、同時期の区画施設の可能性が考えられる。

主軸方向はN 30.01° W で、条里型地割の方向に概ね合致する。柱間間隔は 1.47 ～ 1.98 m と一定しな



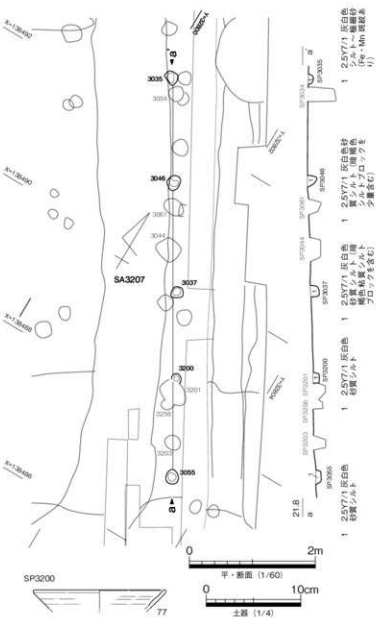
第 80 図　3-2 区 SA3206 平・断面図

いが、柱穴底面の標高は 21.5 ～ 21.6 m と概ね一定である。柱穴は、径 0.17 ～ 0.22m の略円形を呈し、残存深は 0.15 ～ 0.16m と極めて浅い。SD3007 に並行して南北へ延長すると考えられるが、SA3204・SA3205 とは主軸方向がやや異なり、一連の柵列とは考え難い。

遺物は出土せず、詳細な時期の特定は困難だが、SD3007 との位置関係から近世前期の遺構と推定した。(益﨑)

3-2 区 SA3207（第 81 図）

3-2 区北東部で検出した柱穴列である。調査時には個別の柱穴として認識されているが、埋土の類似性から柵列の可能性を想定し図上で復元した。SD3007・SD3026 に並行しており、上部の削平を考慮すれば、大部分が SD3007 と重複すると考えられる。SD3007 との先後関係は不明だが、調査時の掘削順序から推定すれば、SD3007 に先行すると理解できる。また、南端は SD3014 と重複しており、SD3014



第 81 図　3-2 区 SA3207 平・断面図、出土遺物

に後出することがわかる。

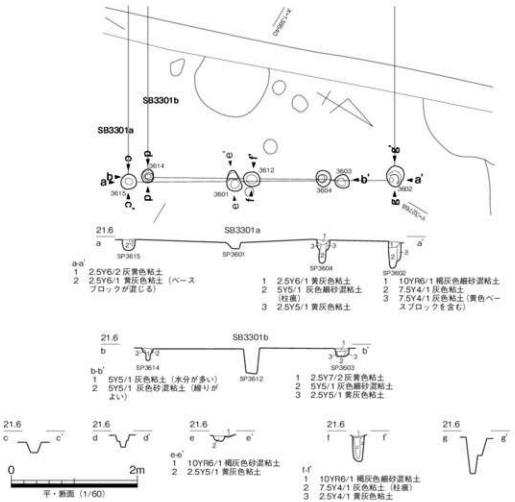
主軸方向はN 30.94° Wで、条里型地割の方向に概ね合致する。柱間間隔は1.66 mと概ね一定である。柱穴は、径0.17 ～ 0.22mの略円形を呈し、残存深は0.08 ～ 0.15mと浅い。SD3007・SD3026に並行して南へ延長すると考えられ、SA3203と連続する可能性があるが、両柱穴列間に対応する柱穴は認められない。

遺物は、SP3200より土師質土器杯の口縁部片(77)が出土した。口径は推定14cm前後、体部の外傾度はやや強いと考えられる。形態から佐藤編年Ⅱ-1 ～ 2期(12世紀後葉～ 13世紀初頭)と考えられるが、重複するSD3014埋土からの混入の可能性もあり、SA3207の時期を特定するには至らない。SD3014との重複、SD3007との位置関係から中世後期～近世前期の遺構と推定した。(益崎)

3-3区 SB3301（第82図）

3-3区中央部で検出した掘立柱建物である。本書作成時に図上で復元した。東側柱列以外を検出できておらず柵列の可能性も残るが、柵列とした場合には区画の意図が不明瞭なため、建物遺構として報告する。

SB3301aは南北4.19 m、主軸方向N31.41° Wを測る。柱穴堀り方は、径0.22 ～ 0.32 mの円ないし楕円形を呈し、床面の標高20.9 ～ 21.4 m、残存深0.1 ～ 0.45 mをそれぞれ測る。



第82図　3-3区 SB3301 平・断面図

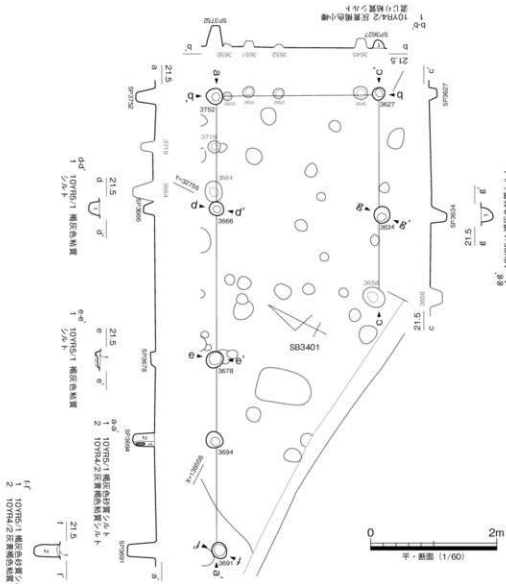
SB3301b は南北 3.07 m を測る。柱穴の掘り方は、径 0.22 ～ 0.24 m の円形を呈し、底面の標高は 21.34 ～ 21.39 m、残存深 0.15 ～ 0.4 m をそれぞれ測る。

遺物は SP3602、SP3603、SP3604、SP3615 の各柱穴より、器種不詳の土師質土器小片、土師質土器皿、土師質土器の擂鉢体部片が少量出土した。出土遺物は乏しいが、概ね条里型地割の方向を示すため中世の遺構として報告する。(溝上)

3-4 区 SB3401（第 83 図）

3-4 区中央部で検出した掘立柱建物である。本建物も本書を作成時に図上で復元した。南辺の桁行は調査区外に延長すると考える。梁行 1 間 (2.6 m)、桁行 4 間 (7.72 m) 以上、床面積 20.01㎡以上、主軸方向 N28.38° W を測る側柱建物として復元する。柱穴の堀り方は径 0.21 ～ 0.29 m の円ないし楕円形で、底面の標高 20.94 ～ 21.31 m、残存深 0.08 ～ 0.45 m をそれぞれ測る。

遺物はどの柱穴からも出土していない。SB3401 を構成する SP3691 が SD3056 より後出すること、概



ね条里型地割に合致することから、中世以降の可能性を指摘できるが詳細な時期決定は困難である。(溝上)

3-4 区 SB3402（第 84 図）

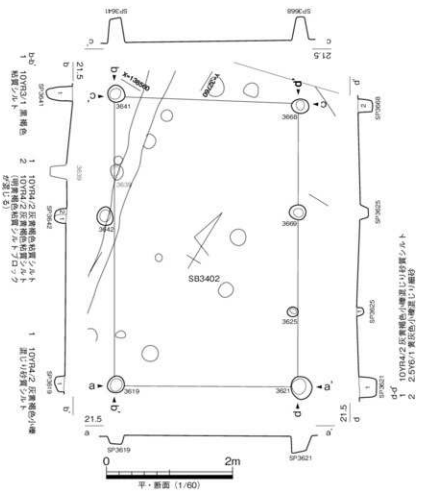
3-4 区東部で検出した掘立柱建物で、本建物も本書を作成時に図上で復元した。一部を除き柱穴埋土は不明である。梁行 1 間 (2.94 m)、桁行 3 間 (4.64 m)、床面積 13.64㎡、主軸方向N 31.14° W をそれぞれ測る側柱建物として復元する。柱穴の掘り方は径 0.17 ～ 0.31 m の円形で、底面の標高 20.99 ～ 21.24 m、残存深 0.1 ～ 0.4 m をそれぞれ測る。柱穴間隔は一定せず、床面は整った矩形を呈するが、一部柱通りが揃わない。

遺物は SP3619、SP3621、SP3641 の各柱穴より、器種不詳の土師質土器が少量出土した。SB3402 を構成する SP3642 が SD3044 より先行することから近世以前と考えられるが、詳細な時期決定は困難である。(溝上)

3-4 区 SA3403（第 85 図）

3-4 区東端で検出した南北延長 3.73 m の柵列である。SB3402 に伴う柵列の可能性が想定できるが、柱穴が 3 穴しか検出されていないため断定はできない。主軸方向はN 27.36° W である。柱間間隔は 1.83 m と 1.9 m であり、柱通りも概ね揃う。柱穴の半分が調査区外へ延長すると考えられ、平面に記録されている柱穴の長軸は 0.19 ～ 0.26 m である。残存深は 0.12 ～ 0.4 m である。

遺物は SP3620、SP3711 の



各柱穴より、器種不詳の土師質土器が少量出土した。条里型地割の方向に合致することより、中世以降と考えられるが、詳細な時期決定は困難である。(溝上)

②土坑

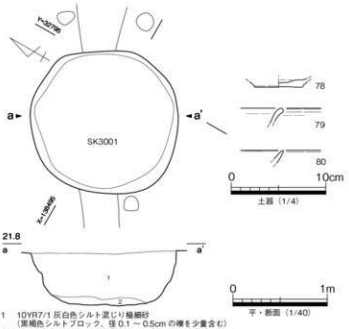
3-2 区 SK3001（第 86 図）

3-2 区中央部で検出した土坑である。重複関係から、SD3010 に後出する。

平面プランは東西 1.50m、南北 1.56m の円形を呈し、残存深は 0.54m、断面形は概ね逆台形状である。埋土は 2 層に細分される。いずれも耕作土由来と考えられる黒褐色シルトをブロック状に含み、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は 78 ～ 80 のほか、土師質土器細片が少量出土した。78 は土師質土器皿の底部片で、切り離し技法は回転ヘラ切りである。79 は中世後半期の中国製青磁椀の口縁部片、80 は近世の施釉陶器椀の口縁部片で、口縁端部の釉を剥いでいる。いずれも 1cm 程度の細片のために時期の比定は困難である。

遺構の開削・埋没時期の特定は困難だが、埋土中への耕作土の混入から、近世後期以降とした。(益崎)



第 86 図　3-2 区 SK3001 平・断面図、出土遺物

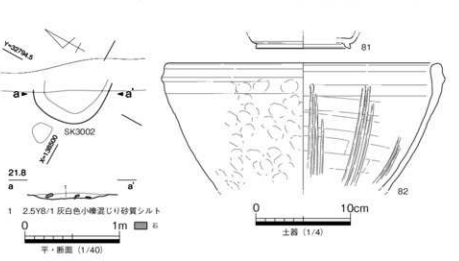
3-2 区 SK3002（第 87 図）

3-2 区北東部で検出した土坑である。重複関係から、SR3001 に後出し、SD3007 に先行する。

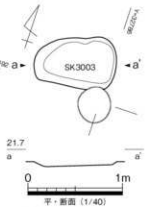
規模は南北 0.79m 以上を測り、東西は SD3007 による破壊のために不明である。残存深は 0.07m と極めて浅い。

遺物は、81・82 の 2 点を図示した。81 は須恵器杯の底部片である。重複する SR3001 埋土等からの混入の可能性がある。82 は土師質土器擂鉢である。口縁部は強い指ナデによりわずかに内傾し、端部は丸くなる。本書編年の D 期 (V 型式) に相当する。

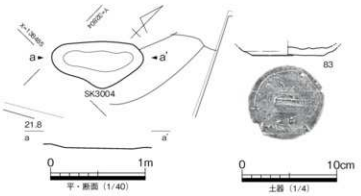
詳細な時期の比定は困難だが、82 の編年観と SD3007 との重複か



第 87 図　3-2 区 SK3002 平・断面図、出土遺物



第88図　3-2区 SK3003 平・断面図



第89図　3-2区 SK3004 平・断面図、出土遺物

ら、近世前期の遺構とした。(益崎)

3-2区 SK3003（第88図）

3-2区中央部で検出した土坑である。重複関係から、SP3138に先行する。

平面プランは東西0.86m、南北0.52mの楕円形状を呈し、残存深は0.05mと極めて浅い。埋土は調査時の断面図に土層注記が欠落しており詳細は不明だが、調査時の写真を見る限り灰白色系のシルト～細砂と考えられ、周辺の柱穴群の埋土と類似する。

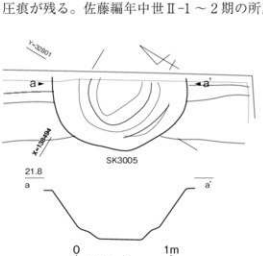
遺物は出土しておらず、詳細な時期の特定は困難だが、埋土の特徴から中世後半期～近世前半期に位置付けたい。(益崎)

3-2区 SK3004（第89図）

3-2区南東隅部で検出した土坑である。重複関係から、SD3027に後出する。

平面プランは長軸0.97m、短軸0.24mの楕円形状を呈し、残存深は0.04mと極めて浅い。埋土は調査時の断面図に土層注記が欠落しており詳細は不明だが、調査時の写真をみると、水田耕地化後の耕作土由来と考えられる黒褐色シルトブロックを含む。

遺物は土師質土器杯の底部片1点が出土した(83)。底径7.5cm、切離し技法は回転ヘラ切りで、板目圧痕が残る。佐藤編年中世Ⅱ-1～2期の所産である。遺物は底部片1点のみと少なく時期の比定は困難だが、SD3027との重複関係と埋土に耕作土を含む点から、近世後期以降とした。(益崎)



第90図　3-2区 SK3005 平・断面図

3-2区 SK3005（第90図）

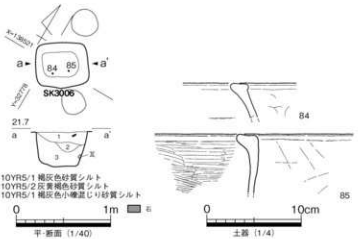
3-2区中央部東壁付近で検出した土坑である。重複関係から、SD3025・SD3027に後出する。

規模は南北1.40mを測り、東西は調査区外東側へと続くために不明である。検出部での残存深は0.58mで、断面形は概ね逆台形状である。埋土は耕作土由来と考えられる黒褐色シルトブロックを多量に含む。

遺物は出土せず詳細な時期は不明である。SD3025・SD3027 との先後関係と埋土に耕作土を含む点から、近世後期以降とした。(益崎)

3-1 区 SK3006（第 91 図）

3-1 区中央部で検出した土坑である。長軸 0.56 m、短軸 0.48 m、残存深 0.36 m をそれぞれ測り、平面形は整った隅丸長方形、断面形は底面が平坦な箱型を呈する。埋土は 3 層に細分されいずれも砂質シルトが堆積している。



第 91 図　3-1 区 SK3006 平・断面図、出土遺物

84 は土師質土器把手付鍋。本書編年 B 期 (1- Ⅲ型式) に相当する。85 は土師質土器深鉢。外面はナデ、内面はハケで調整する。どちらも 3 層からの出土であるため、近世前期頃を上限とする。(溝上)

3-1 区 SK3008（第 92 図）

3-1 区中央部やや東寄りで検出した土坑である。重複関係より SD3028 に後出する。長軸 1.28 m、短軸 0.94 m、残存深 0.1 m をそれぞれ測り、平面形はやや歪な隅丸方形、断面形は皿状を呈する。埋土は SD3028 に近似する褐灰色細砂混じり砂質シルトの単層であった。

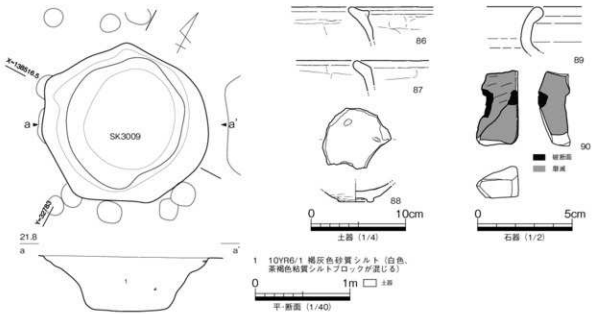
遺物は図示していないが土師質土器擂鉢の体部など 10 点程度出土している。SD3028 を切ることから 17 世紀以降と想定する。(溝上)

第 92 図　3-1 区 SK3008 平・断面図

3-1 区 SK3009（第 93 図）

3-1 区中央部やや南寄りで検出した土坑である。重複関係より SP3561、3578、3579、3580 より先行する。長軸 1.76 m、短軸 1.68 m、残存深 0.58 m をそれぞれ測り、平面形は歪な円形、断面形は逆台形状を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトの単層だが、茶褐色粘質シルトブロックが混じる。

遺物は図示した以外にも、土師質土器足釜、本書編年 B 期 (1-Ⅱ型式) に相当する土師質土器把手付鍋などが 20 点程度出土した。86 は土師質土器の把手付鍋口縁部片。本書編年 B 期 (1-Ⅱ型式) に相当する。87 は土師質土器鉢。88 は肥前系陶器皿。体部内面底部には胎土目積の跡が残る。89 は備前焼の甕口縁部片。小片のため口径の復元は困難であるが、間壁編年の Ⅲ 期に相当する。90 は流紋岩製の砥石。現存の断面形は概ね三角形を呈するが、うち一面は石が割れたままの状態のため本来は三角形ではなかったと推定する。2 面砥石として使用している。出土遺物は、14 世紀中葉～ 17 世紀前半代の年代を示すが、86･87･89 は小片であり、遺存状況が良好な 88 が示す 17 世紀前半が遺構の埋没年代として適当と考える。(溝上)



第93図　3-1区 SK3009 平・断面図、出土遺物

3-1区 SK3010（第94図）

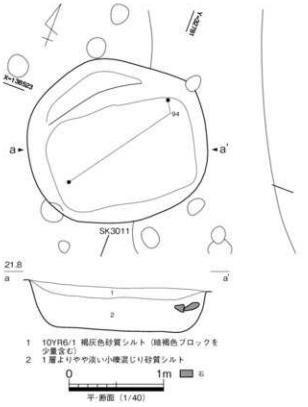
3-1区中央部で検出した土坑である。長軸0.94 m、短軸0.88 m、残存深0.32 mをそれぞれ測り、平面形は概ね円形、断面形は一部がへこんだ丸底状を呈する。埋土は褐灰色粘質シルトの単層で茶褐色粘質シルトが混じる。

遺物は図示していないが器種不詳の土師質土器口縁部片などが10点程度出土している。出土遺物より時期を特定することは困難であるが、埋土がSK3009に近似することから近接した時期に埋め戻しが行われたと想定する。(溝上)

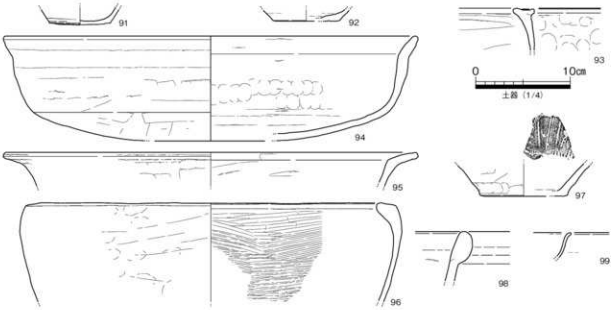
3-1区 SK3011（第95・96図）

3-1区中央部やや北よりで検出した土坑である。重複関係よりSP3542に後出し、SD3028、SP3488に先行する。長軸1.9 m、短軸1.74 m、

第94図　3-1区 SK3010 平・断面図



第95図　3-1区 SK3011 平・断面図



第 96 図　3-1 区 SK3011 出土遺物

残存深 0.44 m をそれぞれ測り、平面形は隅丸方形、断面形は箱型を呈する。埋土は 2 層に細分されており、上層では暗褐色ブロックを含む褐灰色砂質シルト、下層では上層よりやや淡い褐灰色砂質シルトが堆積している。上層の土にベース層のブロックを含んでいることから下層上部の浅い皿状に窪んだ部分を人為的に埋めた可能性が考えられる。

遺物は図示した以外にも、本書編年 B 期 (1-Ⅱ型式) と D 期 (1-Ⅴ型式) に相当する土師質土器把手付鍋、備前焼の底部などが 60 点程度出土している。91 は土師質土器杯。底部外面は回転ヘラ切り。佐藤編年の中世Ⅱ-5 期に相当する。92 は古代須恵器杯の底部。底部は回転ヘラ切り。93 は土師質土器把手付鍋。体部外面に煤が付着する。本書編年 B 期 (1-Ⅲ型式) に相当する。94・95 は土師質土器鍋。96 は土師質土器火鉢。口縁部～体部の内外面に煤が付着している。97 は土師質土器擂鉢の底部。98 は備前焼甕の口縁部片。99 は白磁端反皿の口縁部片。土坑の底部付近から 94 が出土していることから、17 世紀前半頃に埋め戻しが行われたと考える。(溝上)

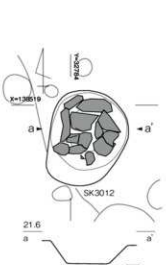
3-1 区 SK3012（第 97 図）

3-1 区中央部やや東寄りで検出した土坑である。重複関係より SD3028 に後出する。長軸 1.0 m、短軸 0.82 m、残存深 0.22 m をそれぞれ測り、平面形は歪な隅丸方形、断面形は逆台形状を呈する。埋土は SK3012 の土層断面図、堆積状況を示す記録がないため層の堆積状態、埋土は不明である。土坑の中で亜角礫状の石を複数検出している。石はいずれも 0.2 m以上の大きさがある。

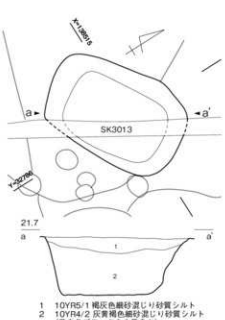
遺物は図示していないが、本書編年 A 期 (Ⅰ型式) に相当する土師質土器把手付鍋などが数点出土している。出土遺物より 14 世紀以降の可能性が指摘されるのみで、詳細な時期を特定することは困難である。(溝上)

3-1 区 SK3013（第 98 図）

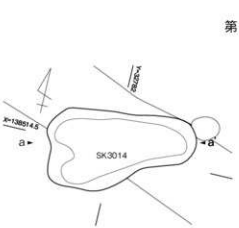
3-1 区の中央部からやや南東寄りで検出した土坑である。重複関係より SD3028 に後出する。長軸 1.5



第97図　3-1区SK3012
平・断面図



第98図　3-1区SK3013
平・断面図



第100図　3-1区SK3015
平・断面図

第99図　3-1区SK3014
平・断面図、出土遺物

m、短軸1.0 m、残存深0.6 mをそれぞれ測り、平面形は隅丸方形、断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は2層に細分されており、上層には褐灰色細砂混じり砂質シルト、下層には灰黄褐色細砂混じり砂質シルトが堆積する。上層の埋土はSD3028、SD3033の埋土と相似している。

遺物は図示していないが、土師質土器擂鉢体部片・足釜脚部などが20点程度出土している。出土遺物と切り合いの関係より近世前期(17世紀中葉)以降と考えられる。(溝上)

3-1区SK3014（第99図）

3-1区中央部やや南寄りで検出した土坑である。重複関係よりSD3040、SP3449に後出する。長軸1.54 m、短軸0.86 m、残存深0.12 mをそれぞれ測り、平面形は歪な隅丸三角形、断面形は皿状を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトの単層であった。

遺物は図示した以外にも、施釉陶器の口縁部片、土師質土器の細片などが10点程度出土している。100は土師質土器鍋。口縁部は外傾せず、口縁部は内外ともにナデで調整する。出土遺物より17世紀前半頃の遺構と考える。(溝上)

3-1区SK3015（第100図）

3-1区西側で検出した土坑である。重複関係よりSD3040、SP3354、SP3574に後出する。長軸0.68 m、短軸0.6 m、残存深0.14 mをそれぞれ測り、平面形は隅丸三角形、断面形は底面が平坦な逆台形状を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトの単層であった。

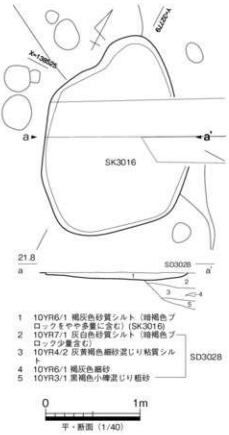
遺物は図示していないが、器種不詳の土師質土器片などが少量出土している。埋土が中世以降の他の

遺構と酷似することから当該期の遺構として報告する。(溝上)

3-1 区 SK3016（第 101 図）

3-1 区中央部やや北寄りで検出した土坑である。重複関係より SD3028、SD3039 に後出する。長軸 2.0 m、短軸 1.56 m、残存深 0.06 m をそれぞれ測り、平面形は歪な円形、断面形は皿状を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトの単層。埋土中にベース層のブロックを多く含むことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は図示していないが、土師質土器足釜脚部などが少量出土している。SD3028 との切り合い関係から、17 世紀中葉以降の可能性が指摘できる。(溝上)



第 101 図　3-1 区 SK3016 平・断面図

3-1 区 SK3017（第 102 図）

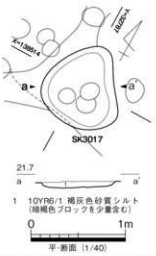
3-1 区南部で検出した土坑である。重複関係より SD3033 より後出し、SP3547、SP3548、SP3549 より先行する。長軸 0.88m、短軸 0.8 m、残存深 0.06 m をそれぞれ測り、平面形は不定形、断面形は浅い皿型を呈する。埋土は暗褐色ブロックを含む褐灰色砂質シルトの単層であった。

遺物は図示していないが、土師質土器片が少量出土している。SD3028、SD3033 との切り合い関係から、17 世紀の遺構の可能性が指摘できる。(溝上)

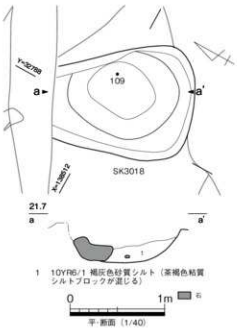
3-1 区 SK3018（第 103 ～ 105 図）

3-1 区南部で検出した土坑である。重複関係より SD3030 に先行する土坑のため、土坑の北部を SD3030 に切られる。重複関係より SD3005 より後出する。長軸 1.5 m以上、短軸 1.2 m、残存深 0.18 m、平面形はやや歪な隅丸方形状、断面形は浅い U 字形を呈する。埋土はベース層のブロック土を含む褐灰色砂質シルトが堆積し、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は図示した以外にも、土師質土器足釜、備前焼、擂鉢などが 40 点程度出土している。101 は古代の土師器杯底部。102 は古代の土師器甕で

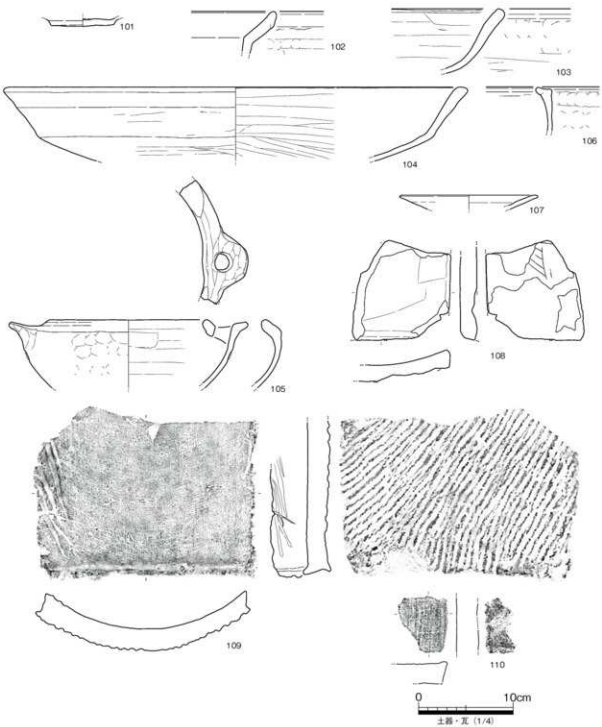


第 102 図　3-1 区 SK3017 平・断面図

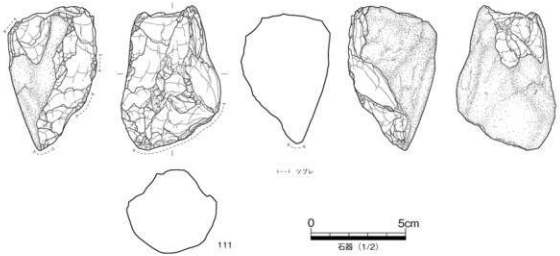


第 103 図　3-1 区 SK3018 平・断面図

口縁部に明確な屈曲点を持ち、大きく外傾する。103・104 は土師質土器焙烙。口縁部に屈曲点がなく、大きく外傾せず僅かに外傾するのみである。粗質の胎土中に金雲母を多量に含む。胎土・形態の特徴から、岡本系の焙烙である。105・106 は土師質土器把手付鍋。105 の外面は煤に覆われている。本書編年の D 期 (1-Ⅳ型式) に相当する。106 は本書編年の B 期 (1-Ⅲ型式) に相当する。107 は肥前系陶器皿。内外面に施釉するが、外面の底部付近は無釉である。108 ～ 110 は平瓦。108 は近世瓦で磨滅が激しく調整は確認しにくいが、凸面と凹面に糸切り痕 (コビキ A) が認められる。凹面狭端部は面切される。109 は古代末～中世前半の瓦で、凸面は縄目で凹面は布目で調整する。110 は中世前半の瓦で、やや甘いが表



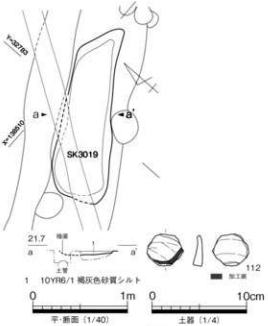
第 104 図　3-1 区 SK3018 出土遺物 1



第 105 図　3-1 区 SK3018 出土遺物 2

面は燃されている。凸面に叩き目、凹面に布目が残る。111 は石英の亜円礫を利用した火打石として図示した。打ち欠いた稜線部に、火打石として使用した際の敲打痕が認められるが、敲打痕はあまり顕著ではない。このほかに 263、270 が出土している。これらは SD3028 との接合資料であり、SD3028 で報告している。

出土遺物は、古代後半（9 ～ 10 世紀）の 101・102、中世前半の 109・110 を除き、高松城跡様相 1 ～ 3 の幅で捉えられるため、遺構埋没の年代を示しているとみてよかろう。（溝上）

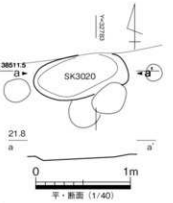


第 106 図　3-1 区 SK3019
平・断面図、出土遺物

3-1 区 SK3019（第 106 図）

3-1 区南部で検出した土坑である。重複関係より一部を SD3030 に切られるように見えるが、後世に作られた暗渠が重複部分の上部を通ることで攪乱され、詳細を知ることはできない。重複関係より SP3416 より先行する。長軸 1.88 m、短軸 0.6 m、残存深 0.04 m をそれぞれ測り、平面形は隅丸方形、断面形は皿状を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトの単層であった。

遺物は図示した以外にも、土師質土器の細片が少量出土している。112 は用途不明の土製品である。須恵器片を丸く加工している。SD3030 に先行する遺構である SK3018 と埋土が近似することから、同時代の遺構と考える。（溝上）



第 107 図　3-1 区 SK3020
断面図

3-1 区 SK3020（第 107 図）

3-1 区南部で検出した土坑である。重複関係より、SP3536 より後出

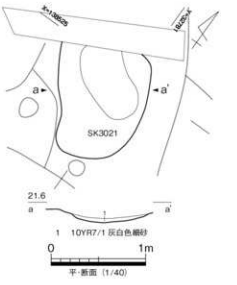
し、SP3415 より先行する。長軸 1.0 m、短軸 0.6 m、残存深 0.04 mをそれぞれ測り、平面形は楕円形状、断面形は逆台形状を呈する。

遺物は図示していないが、土師質土器片が少量出土している。出土遺物も年代決定が困難であるため、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

3-1 区 SK3021（第 108 図）

3-1 区やや北寄りで検出した土坑である。土坑の上部は SD3028 によって削奪されている。長軸 1.18 m以上、短軸 0.96 m、残存深 0.04 mをそれぞれ測り、平面形は歪な隅丸方形、断面形は皿状を呈する。埋土は灰白色細砂の単層であった。

遺物は図示していないが、土師質土器の杯口縁部片などが少量出土している。出土遺物と切り合い関係より、中世の遺構であると想定する。(溝上)

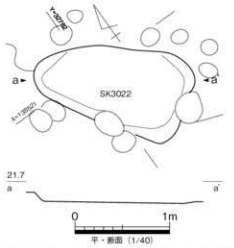


第 108 図　3-1 区 SK3021 平・断面図

3-1 区 SK3022（第 109 図）

3-1 区中央部で検出した土坑である。重複関係から SD3028 より先行し、SP3460、SP3490、SP3491 より後出する。長軸 1.7 m、短軸 0.96 m、残存深 0.1 mをそれぞれ測り、平面形は東西に長い楕円形状、断面形は逆台形状を呈する。

遺物は出土していない。SD3028 に先行することから中世後期以前の可能性が指摘されるのみで、詳細な時期を決定することは困難である。(溝上)

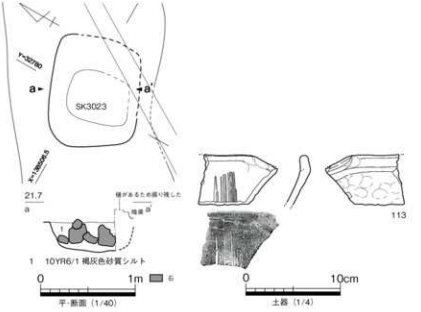


第 109 図　3-1 区 SK3022 平・断面図

3-1 区 SK3023（第 110 図）

3-1 区南部で検出した土坑である。遺構の南部は後世の暗渠によって破壊されている。長軸 1.16 m以上、短軸 0.94 m以上、残存深 0.3m をそれぞれ測り、平面形は隅丸方形、断面形は底面が平坦な逆台形状を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトの単層で、0.1 ～ 0.2 m の石が多数検出された。

遺物は図示していないが、土師質土器の細片が少量出土



第 110 図　3-1 区 SK3023 平・断面図、出土遺物

している。SD3037 を掘削後に、SK3023 を検出したため、SK3023 の遺物が SD3037 に混入している可能性も考えられる。113 は土師質土器擂鉢。口縁部に片口を作る。本書編年 D 期 (Ⅴ型式) に相当する。

遺構の時期は出土遺物より、17 世紀前半と考えられる。(溝上)

3-3 区 SK3024（第 111 図）

3-3 区北部で検出した土坑である。重複関係から SD3050 より後出する。長軸 1.34 m、短軸 1.0 m、残存深 0.38 m をそれぞれ測り、平面形はやや歪な隅丸方形、断面形は逆台形状を呈する。埋土は褐灰色細砂混粘土の単層。埋土中には灰黄褐色粘土、黄橙色粘土のブロックが混じる。

遺物は土師質土器片、擂鉢の体部片など 10 点程度出土している。出土遺物より時期を特定することは困難だが、SD3050 との切り合い関係から中世後期～近世前期の遺構と考える。(溝上)

3-3 区 SK3025（第 112 図）

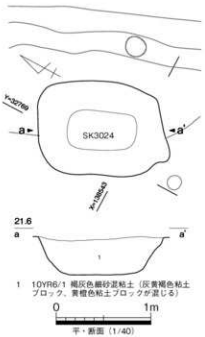
3-3 区中央部西壁沿いで検出した土坑である。土坑の西側は調査区外へ延長するため、土坑の全形は検出できていない。長軸 1.16 m、短軸 0.88 m 以上、残存深 0.36 m をそれぞれ測り平面形は円形、断面形は逆台形状を呈する。埋土は 3 層に細分され、2 層で検出された水分を多く含む灰色砂混粘土を除きいずれもベース層のブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は土師質土器細片が少量出土している。114 は肥前系陶器皿の口縁部片。出土遺物より埋め戻しの時期を 17 世紀と想定する。(溝上)

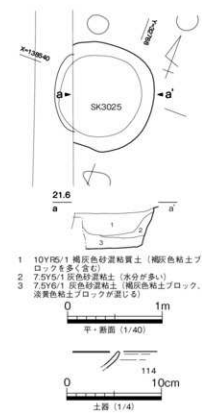
3-3 区 SK3027（第 113 図）

3-3 区中央部西壁沿いで検出した土坑である。遺構の西側は調査区外へ延長するため、土坑の全形は検出できていない。長軸 1.16 m、短軸 0.56 m 以上、残存深 0.32 m をそれぞれ測り、平面形は円形、断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰黄褐色粘土ブロックの単層であった。埋土中にはベース層のブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は図示していないが、土師質土器片、本書編年 D 期 (Ⅴ型式) に相当する土師質土器把手付鍋などが少量出土したほか、ウマの上腕骨 (第 4 章第 1 節参照) が出土している。形状から SK3025 と類似する性格が想定され、近接した時期に埋め戻しが行われたと考える。(溝上)



第 111 図　3-1 区 SK3024 平・断面図

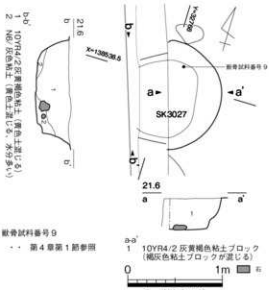


第 112 図　3-3 区 SK3025 平・断面図、出土遺物

3-3 区 SK3028（第 114 図）

3-3 区北部、西壁沿いで検出した土坑である。遺構の西側は調査区外へ延長するため、土坑の全形は検出できていない。重複関係より SD3045 に後出する。長軸 2.1 m、短軸 0.76 m以上をそれぞれ測る。残存深は西壁で 0.4 mの堆積が確認できる。平面形は隅丸方形を呈すると想定され、断面形は皿状を呈する。埋土は 3 層に細分されている。最下層は水分を多く含む灰色細砂混粘土だが、上層、中層はベース層のブロック土を含むことから人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は土師質土器片、陶器片などが少量出土している。SK3025、SK3027 と形状は似ていないものの検出場所から類似する性格が想定され、これらと近接した時期に埋め戻しが行われた可能性がある。(溝上)



第 113 図　3-3 区 SK3027 平・断面図

3-4 区 SK3029（第 115 図）

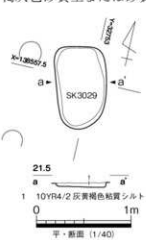
3-4 区中央部で検出した土坑である。長軸 0.86 m、短軸 0.54 m、残存深 0.04 mをそれぞれ測り、平面形はやや歪な隅丸方形、断面形は浅い逆台形状を呈する。埋土は灰黄褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

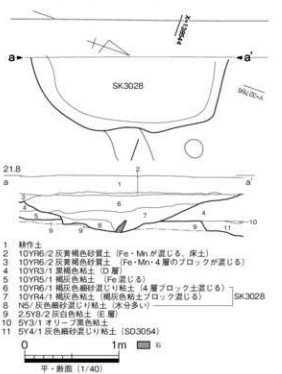
3-4 区 SK3031（第 116 図）

3-4 区西部北壁沿いで検出した土坑である。遺構北部は調査区外へ延長し、土坑の全形は不明である。重複関係より SD3053、SP3706・3748・3760 に先行し、SP3749、SD3058 より後出する。長軸 1.62 m、短軸 0.64 m以上、残存深 0.46 m前後をそれぞれ測り、平面形は隅丸方形を呈すると想定されるが不詳である。断面形は逆台形状を呈する。埋土は 3 層に細分されているが、褐灰色砂質土または砂質シルトが堆積し、黄色粘土ブロックの多寡によって分層が行われている。

遺物は土師質土器足釜などが 50 点程度出土している。115・116 は土師質土器皿。115 の底部はヘラ切り、底部付近に明確



第 115 図　3-4 区 SK3029 平・断面図



第 114 図　3-3 区 SK3028 平・断面図

な屈曲点を持つ。佐藤編年中世Ⅱ-1 ～ 2 期 (12 世紀後半～ 13 世紀前葉) に相当し、この年代の遺構と考えられる。(溝上)

3-4 区 SK3032（第 117 図）

3-4 区西部で検出した土坑である。重複関係より SP3695、SP3749、SK3031 に先行する。長軸 0.7 m 以上、短軸 0.52 m、残存深 0.06 m をそれぞれ測り、平面形は隅丸方形状、断面形は浅い逆台形状を呈する。埋土は黄色粘土ブロックを含む褐灰色粘質シルトの単層であった。

遺物は出土部位不明の土師質土器、須恵器などが少量出土している。切り合い関係から、13 世紀以前の可能性が指摘されるのみで、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

3-5 区 SK3033（第 118 図）

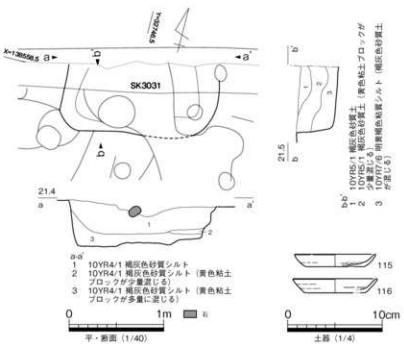
3-5 区南壁沿いで検出した土坑である。南側は調査区外へ延長し、西側は暗渠に切られる。重複関係より SP3762、SP3763 に先行する。長軸 1.4m 以上、短軸 0.7 m 以上、残存深 0.18 ～ 0.28 m をそれぞれ測り、平面形は不詳である。断面形は箱型を呈する。埋土は黄色粘土ブロックを含む褐灰色粘質シルトの単層であった。

遺物は図示した以外にも、本書編年 B 期 (Ⅱ型式) に相当する土師質土器把手付鍋、同じく D 期 (V 型式) に相当する土師質土器擂鉢を含む土師質土器片などが 10 点程度出土している。117 は中世前半の土師質土器の皿口縁部片。118 は土師質土器の把手付鍋。内外面とも指オサエ後ナデで調整する。本書編年の C 期 (1-Ⅳ型式) に相当する。出土遺物より、中世後期の遺構と考える。(溝上)

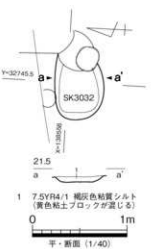
③性格不明遺構

3-2 区 SX3001（第 119 図）

3-2 区中央部西側で検出した土坑状遺構である。平面プランは長軸 2.32m、短軸 0.61m の長方形状を



第 116 図　3-4 区 SK3031 平・断面図、出土遺物



第 117 図　3-4 区 SK3032 平・断面図

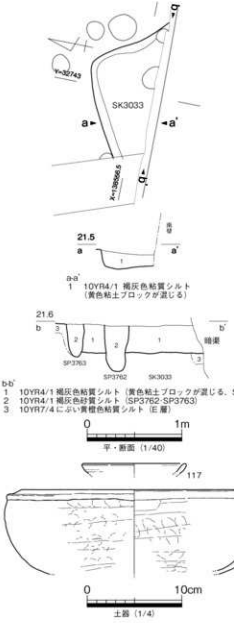
呈し、残存深は0.42m、断面形は逆台形状である。埋土は耕作土由来と考えられる黒褐色シルトブロックを多量に含み、周辺の耕地化後に埋め戻された可能性が高い。

119は埋土中より出土した中世前半期の土師質土器杯の底部片である。小片のために体部以上の形態は不明だが、底部にはわずかにヘラ切りの痕跡が認められる。そのほか、埋土中より径約40cm、長さ1.5mの丸太材が出土した。両端面には鋸状工具による切断痕が残り、側面には洋丸釘が打ち付けられる。

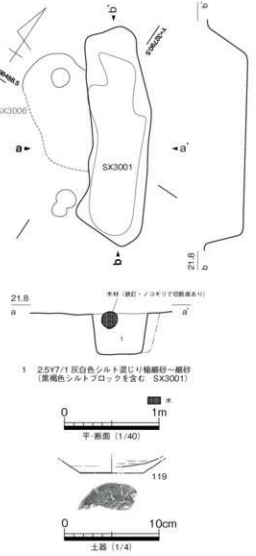
埋土中に耕作土ブロックを多量に含む点、丸太材に打ち込まれた洋丸釘から、近代以降の遺構と理解する。(益﨑)

3-2区 SX3003（第120図）

3-2区南部で検出した土坑状遺構である。平面プランは長軸2.36m、短軸1.54mの楕円形状を呈し、残存深は0.64m、断面形は逆台形状である。埋土は2層に細分され、上層には耕作土由来と考えられる黒褐色シルトブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。2層には、拳大から人頭



第118図　3-5区 SK3033 平・断面図、出土遺物



第119図　3-2区 SX3001 平・断面図、出土遺物

大の礫石、木材片を多量に含む。

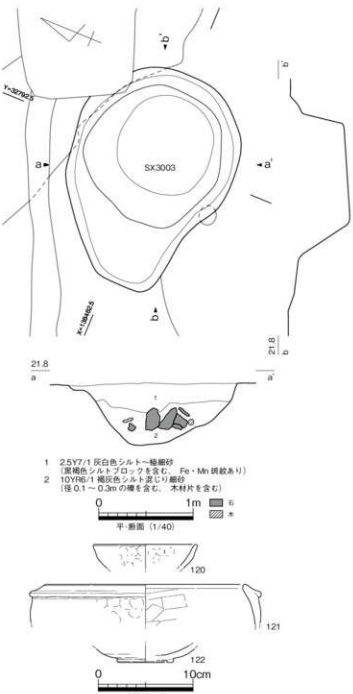
遺物は、120 ～ 122 のほか、土師質土器細片、凝灰岩製の五輪塔地輪が出土した。120 は土師器小形鉢の口縁部片。古墳時代前期と考えられ、混入と考えられる。121 は土師質土器足釜の口縁部～体部片である。口縁端部は丸く、鍔部は短く小さい。122 は十瓶山窯系須恵器椀の底部片である。内外面ともに磨滅し、調整は判別できない。高台高は 3mm 程度と低く、貼付けは粗雑である。

古墳時代から近世前期までの遺物を含むが、埋土に耕作土ブロックを含む点から、近世後期以降に埋め戻されたものと理解した。(益﨑)

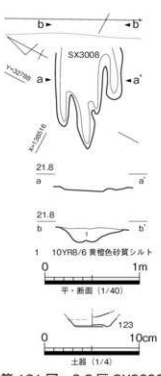
3-1 区 SX3008（第 121 図）

3-1 区中央部東壁沿いで検出した。東側は調査区外へ延長するとみられ、全形は不明である。検出形は不定形を呈する。南北長 0.7 m、東西長 1.1 m、残存深 0.04m 前後をそれぞれ測り、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は単層で黄橙色砂質シルトが堆積している。

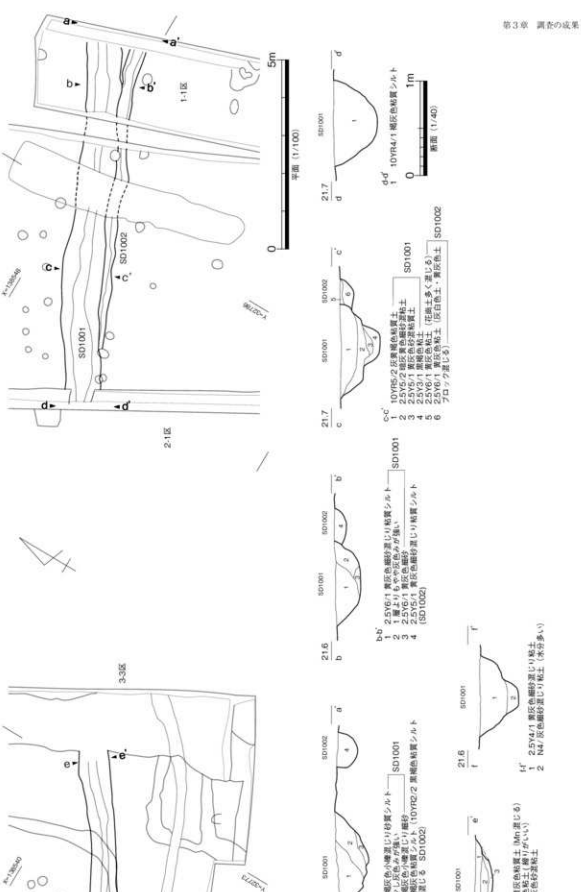
遺物は図示した以外に、土師質土器の小片が出土している。123 は肥前系陶器皿の底部片。出土遺物より 17 世紀前半頃の遺構と考える。(溝上)



第 120 図　3-2 区 SX3003 平・断面図、出土遺物



第 121 図　3-2 区 SX3008
平・断面図、出土遺物



第 122 図　1-1・2-1・3-3 区 SD1001 SD1002 平・断面図

④溝

1-1・2-1・3-3 区 SD1001（第 122 図）

1-1 区・2-1 区で検出した溝と 3-3 区で検出した溝を、遺構の規模や流路方向、埋土等より判断し、一連の遺構として報告する。遺構の重複関係より、SB1002 と SD3042 より先行する。検出面幅 0.88 ～ 0.98 m前後、残存深 0.27 ～ 0.46 m、断面形は逆台形状ないし皿状を呈する。流路方向はN 62.63° E 前後に配され、丸亀平野の条里型地割の方向と概ね合致する。溝底面の標高は、3-3 区西端部で 21.18 m前後、3-3 区東端部で 21.34 m前後、2-1 区西端部で 21.22 m前後、1-1 区東端部で 21.31 m前後をそれぞれ測り、流路底面は計測位置により起伏に富み、高低差より流下方向を特定することはできなかった。埋土は 1 ～ 4 層に細分され、記録位置により顕著な差異を認める。一部に溝底面に溝機能時の細砂の堆積を認めるが、大半は改修等により削奪され、溝廃絶後の主に灰黄色系粘土により穏やかに埋没・平準化したものと考える。

遺物は、図示していないが、弥生土器甕等の小片 6 点が出土した。流路方向が条里型地割の方向と概ね合致することから、出土した遺物は混入の可能性が高いと判断される。したがって、流路方向から中世以降に所属する可能性が考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

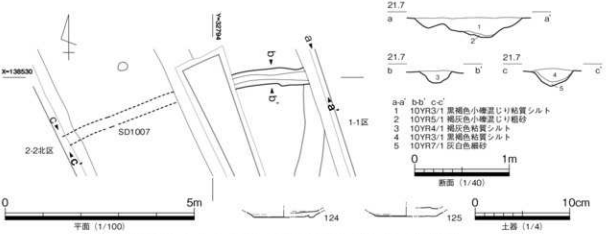
1-1 区 SD1002（第 122 図）

1-1 区北端部で検出した東西溝で、上述した SD1001 の南側に配される。東端は調査区外へ延長し、西端は SD1001 に攪乱され途切れるが、西側の 3 区で延長溝は確認していない。流路方向が SD1001 と近似することから、SD1001 の前身溝と考えられる。検出面幅 0.41 m前後、残存深 0.15 m前後、断面形はU字状を呈する。確認できる溝底面の標高は、西端部で 21.46 m前後、東端部で 21.42 m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が高い。埋土は 2 層に細分され、黄灰色粘土が概ね水平堆積し、埋土中にはベース層由来とみられるブロック土が多量に含まれることから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難である。SD1001 の前身溝と考えられることから、SD1001 に近接した時期に位置付けられると考える。(蔵本)

1-1・2-2 区 SD1007（第 123 図）

1-1・2-2 区で検出した東西溝で、2 区では平面の検出に至らず、2-1 区西壁での断面観察により、その



第 123 図　1-1・2-2 区 SD1007 平・断面図、出土遺物

存在を確認した。重複関係よりSD1008より後出する。緩やかに北に弧を描いて配されるとみられ、東西両端は調査区外へ延長し、西側の3区で延長溝は確認していない。検出面幅0.38 m前後、残存深0.13 m前後、断面形は皿状を呈する。溝底面の標高は、2-1区西端で21.6 m前後、1-1区東端で21.4 m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が高い。埋土は、褐灰色粘質シルトの単層であった。

遺物は、図示した以外に器種不詳の土師質土器細片1点が出土したのみである。124は、土師質土器皿で125は土師質土器杯であり、佐藤編年中世Ⅱ-1～2期と考えられる。

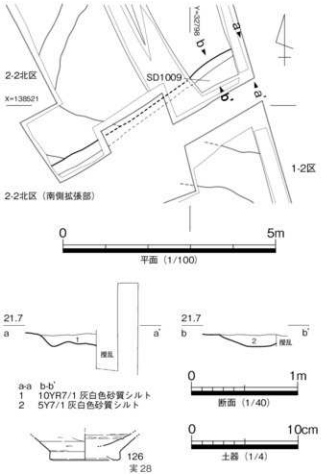
遺構の時期は、124により13世紀代頃と考えられる。(蔵本)

1-1・2-2区 SD1009（第124図）

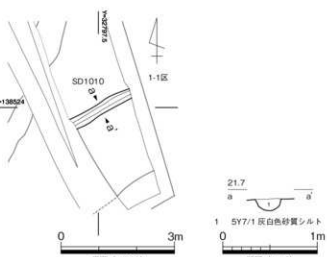
1-1・2-2北区南側拡張部で検出した東西直線溝で、東西両端は調査区外へ延長し、3区で延長溝は確認していない。また、調査区内では北側掘り方を検出したのみで、南側掘り方は調査区外へ延長し、溝の全形は不詳である。重複関係からSD3039より後出する。検出面幅0.6 m以上、残存深0.12 m前後、断面形は皿状を呈する。流路方向はN 58.81° Eに配され、丸亀平野の条里型地割の方向と概ね合致する。溝底面の標高は21.50 m前後で一定し、流下方向を特定することは困難であった。埋土は、灰白色砂質シルトの単層であった。

遺物は、図示した以外に土師質土器皿や杯等の小片6点と瓦質土器細片1点が出土したのみである。126は白磁椀。内面見込みに段と沈線が施され、体部下端から高台は無釉となる。体部上半以上を欠損するが、高台や底部の調整等より、大宰府分類(山本2000)の椀Ⅳ類に分類される。

遺構の時期は、出土遺物より11世紀後半～12世紀前半と考えられる。(蔵本)



第124図　1-1・2-2区 SD1009 平・断面図、出土遺物

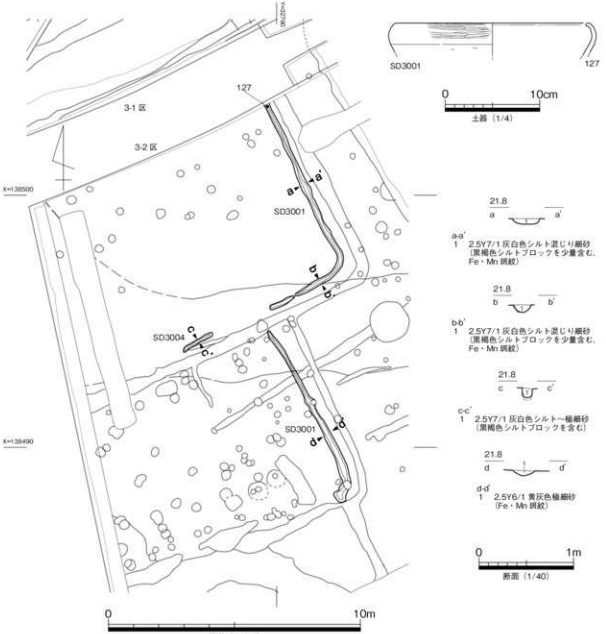


第125図　1-1区 SD1010 平・断面図

1-1 区 SD1010（第 125 図）

1-1 区南端付近で検出した東西溝で、東は調査区外へ延長し、隣接する 2-2 北区で延長溝は検出していない。また、調査区壁面に遺構埋土の記録がなく、検出面は不詳だが、検出レベルよりに帰属する遺構と考える。検出面幅 0.30 m前後、残存深 0.12 m前後、断面形はU字状を呈する。流路方向はN 61.41 ° Eに配され、丸亀平野の条里型地割の方向と概ね合致する。溝底面の標高は、東端部で 20.09 m前後を、西端部で 20.13 m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。埋土は、灰白色砂質シルトの単層であった。

遺物は出土していない。流路方向が条里型地割の方向と概ね合致することから、古代以降の可能性が考えられ、より詳細な時期についての特定は困難である。(蔵本)



第 126 図　3-2 区 SD3001 SD3004 平・断面図、出土遺物

3-2 区 SD3001・SD3004（第 126 図）

3-2 区中央～北側で検出した溝である。埋土は灰白色シルト～細砂を主体に少量の黄灰色細砂をラミナ状に含む。調査時には個別の遺構として理解しているが、埋土の特徴が共通することから、同一遺構と判断した。周辺の条里型地割に概ね平行し、SD3001 は SB3203 ～ 3205 の周辺を区画するようにクランク状に屈曲し、SD3004 はその内部を細分する。

重複関係から SR3001・SR3004・SD3010 に後出し、SP3057・SP3211 に先行する。

最大幅 0.29m、最小幅 0.11m、深さ 0.06 ～ 0.13m を測り、断面形は皿形～ U 字形となる。深度が極めて浅く、後世の削平により遺構上部が消失した可能性が高い。溝底面の標高は計測位置により異なり、流下方向の推定は困難である。黄灰色細砂をラミナ状に含む埋土から、一定深度までは流水下での自然堆積により埋没したものと考えられる。

遺物は、図示した出土状況から土師質土器と推定される細片が数点出土したのみである。127 は須恵器鉢である。口縁部が内湾する特徴から、いわゆる鉄鉢形須恵器鉢と考えられる。SR3001 との重複箇所の溝底から出土しており、SR3001 埋土からの混入の可能性がある。

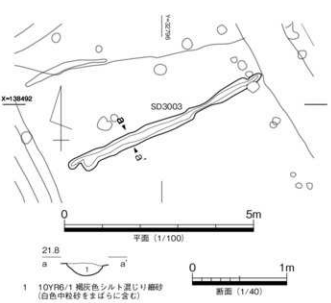
上記の出土状況から遺物による遺構時期の比定は困難だが、流路方向が条里型地割に合致すること、SD3005 と近接しほぼ平行する流形から、中世後半から近世前期と推定した。(益崎)

3-2 区 SD3003（第 127 図）

3-2 区中央部東側で検出した東西直線溝である。流路方向は N 56.96° E を測り、概ね丸亀平野の条里型地割に平行する。3-2 区中央部で消失しており、以西の状況は不明である。

重複関係から、SD3007・SP3049 に先行することがわかる。最大幅 0.5m、最小幅 0.2m、残存深は最大で 0.14m を測り、断面形は皿形～逆台形となる。底部の標高は概ね 21.6 m前後で一定であるが、周辺の地形を踏まえると西から東の流方向となる可能性が高い。

埋土中から遺物の出土はなく詳細な時期の比定は困難であるが、条里型地割に平行すること、SD3007 との重複関係から中世の遺構と推定した。(益崎)

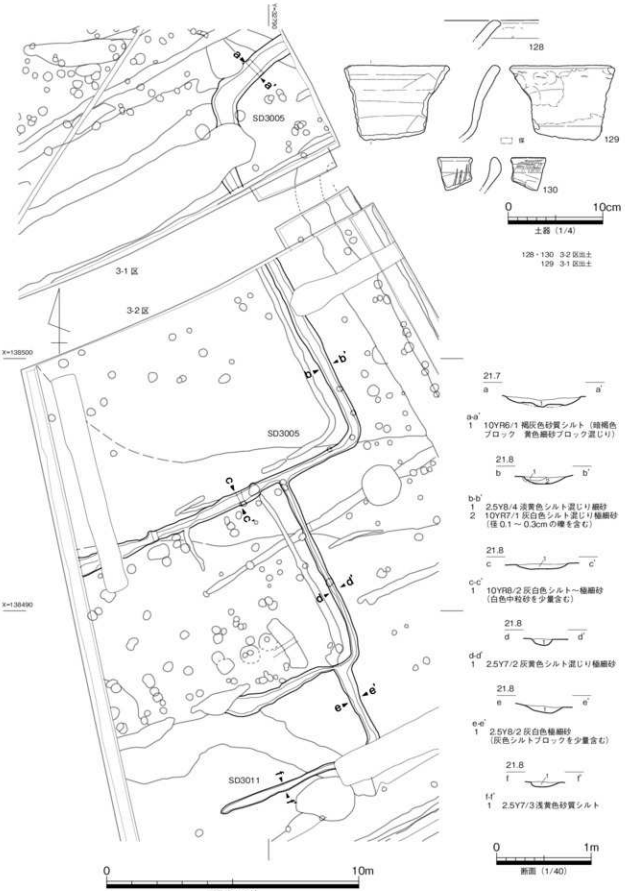


第 127 図　3-2 区 SD3003 平・断面図

3-1・3-2 区 SD3005・SD3011（第 128 図）

3-1 区南東端から 3-2 区で検出した溝である。調査時には個別の遺構として理解したが、位置関係から同一遺構と判断した。周辺の条里型地割に平行し、ほぼ直角のクランク状の屈曲と分岐を繰り返しながら、SB3203 ～ 3205 の周辺を区画するように流れる。

重複関係から、SR3001・SR3004・SD3010・SD3020 に後出し、SP3058・SP3004・SP3086・SP3087 ほか複数の柱穴に先行する。



第 128 図　3-1・3-2 区 SD3005　SD3011 平・断面図、出土遺物

最大幅 0.79m、最小幅 0.22m、深さ 0.05 ～ 0.07m を測り、断面形は皿形となる。深度が極めて浅く、後世の削平により遺構上部が消失した可能性が高い。埋土は褐灰色～灰白色のシルト～細砂を主体に黄灰色細砂を含む。土質は SD3001・SD3004 と類似するが、黄灰色細砂を多量に含む点に特徴がある。

出土遺物は 128 ～ 130 のほか、土師質土器の細片が少量認められる。128 は土師質土器焙烙の口縁部片。口縁部は体部から緩く外反する程度で屈曲せず、口縁端部は太く丸みを帯びる。外面にはほぼ全面に煤が付着する。129 は土師質土器焙烙。口縁部付近に厚みがあり、口縁部の外傾は弱い。17 世紀初頭に位置づけられる。130 は土師質土器擂鉢の口縁部片である。口縁端部は丸く肥厚し、端部下に狭い端面状の緩い屈曲がみとめられる。本書編年Ｄ期 (Ⅴ型式) に相当する。

出土遺物はいずれも細片のために詳細な時期の特定は困難であるが、128 ～ 130 から 17 ～ 18 世紀頃に位置付けたい。(益崎)

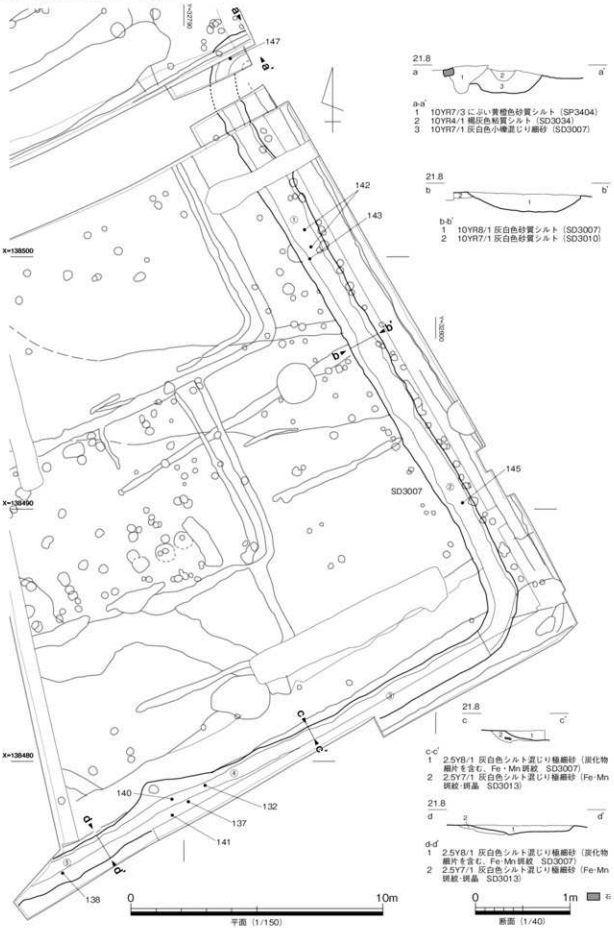
3-2 区 SD3007（第 129 ～ 131 図）

3-2 区東端および南端で検出した溝である。3-2 区南東隅部で直角に屈曲し、平面プランは逆Ｌ字形となる。流路方向はＮ 30.93° Ｗ・Ｎ 59.16° Ｅを測り、丸亀平野の条里型地割の方向に概ね合致する。北側は 3-1 区南壁で埋土を確認しているが、3-1 区内では検出できず、3-1 区南東隅部付近で再び屈曲して東へ向かうものと考えられる。

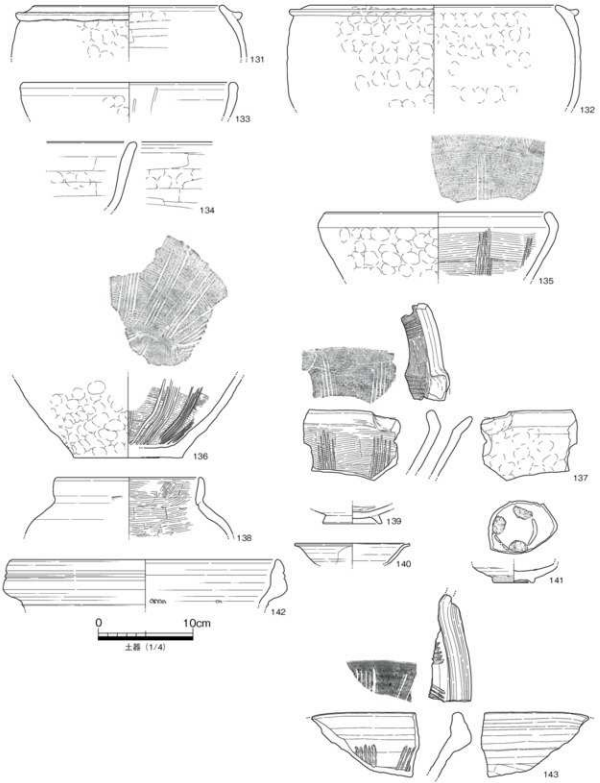
重複関係から、SR3001・SR3004・SD3010・SD3013・SD3014 に後出する。そのほか多数の柱穴との重複が認められるが、調査時の記録情報の不足から、先後は判然としない。調査時の SD3007 と重複柱穴群との掘削順序から推定すると、柱穴の大部分が SD3007 に先行すると考えられる。

最大幅 1.10m、最小幅 0.90m、深さ 0.11 ～ 0.26m を測り、断面形は皿形となる。残存深度が浅く、後世の削平により遺構上部が消失した可能性が高い。底面の標高は 3-2 区北壁で 21.5 m、南東部で 21.55 m、西壁で 21.6 m を測り、流方向は南西から北東方向と推定できる。埋土は灰白色細粒砂を主体とし、底部付近はややシルトがちで炭化物細片を含む。

遺構の深度は浅いものの、遺物出土量は比較的豊富である。図示した 131 ～ 147 のほか、土師質土器・陶器の細片、動物遺存体、木片等が認められる。131・132 は土師質土器足釜である。いずれも口縁端部に面を持たず、鍔部は短く小さい。131 は内面に板ナデが認められるが、132 は内外面ともに無調整である。133 は内外面ともに磨滅が著しいが、内面上部にわずかにスリ目様の線状痕が認められ、擂鉢と理解した。本書編年Ｄ期 (Ⅴ型式) に相当する。134 は土師質土器焙烙の口縁部片。135 ～ 137 は土師質土器擂鉢である。135・137 は口縁端部が丸く、口縁から 2cm ほどを内傾させる。135 は本書編年Ｄ期 (Ⅴ型式)、137 は本書編年Ｄ期 (Ⅳ型式) に相当する。138 は土師器壺か。磨滅が著しいが、内外面ともわずかにハケ目状の痕跡が認められる。139 は十瓶山産須恵器椀の底部片である。高台高約 1cm、高台径は一部欠損するが 6cm 前後と推定できる。内外面ともに磨滅するが、内面にはわずかに板ナデ様の痕跡が認められる。140 は肥前系陶器溝縁皿である。141 は肥前系陶器椀で、見込みには砂目積みの痕跡が認められる。140・141 ともに高松城跡様相 3(17 世紀中葉) に位置付けられる。142・143 は備前焼擂鉢の口縁部片である。厚みのある断面三角形から台形状の口縁で、口縁下内面の突起は丸みを帯びる。口縁外面の凹線は 2 条である。スリ目の状態は不明だが、乗岡編年近世 1c ～ 2a 期に位置付けられる。144 はサヌカイトの剥片。側縁部に二次加工の痕跡が認められる。145 はＸ線写真から鉄製握り鋏と理解したが、刃部を両切刃状に砥ぎ出す点に違和感が残る。146 は板状とみられる安山岩



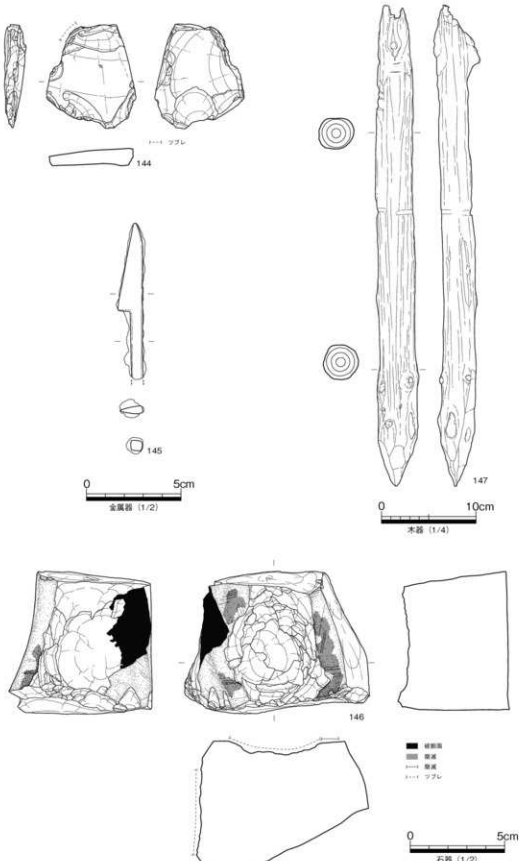
第 129 図　3-2 区 SD3007 平・断面図



第130図　3-2区 SD3007 出土遺物1

の自然礫を立方体状に打ち割って整え、そのうち自然面の残る2面を、叩き石として利用した可能性を考え図示した。使用面に顕著な敲打痕を認める。147はアスナロ材の木杭である。枝打ち後に樹皮を粗く剥ぎ取ったのち、先端部を4面から削り出す。

141・142・143から、17世紀中葉を中心とした時期に位置付けられる。(益崎)



第 131 図　3-2 区 SD3007 出土遺物 2

3-2 区 SD3010（第 132 図）

3-2 区中央東側で検出した東西直線溝である。流路方向はN 56.96° E を測り、概ね丸亀平野の条里型地割に平行し、東西方向に流れる。3-2 区中央で削平により消失しており、以西の状況は不明である。

重複関係から、SR3004 に後出し、SD3001・SD3005・SD3007・SK3001 に先行することがわかる。柱穴群との先後関係は判然としないが、調査時の遺構掘削順から推定すれば、柱穴群に先行すると考えられる。

最大幅 0.81m、最小幅 0.26m、深さ 0.05 ～ 0.06m を測り、断面形は皿形となる。底部の標高は概ね 21.6 m前後で一定であるが、周辺の地形を踏まえると西から東の流方向となる可能性が高い。

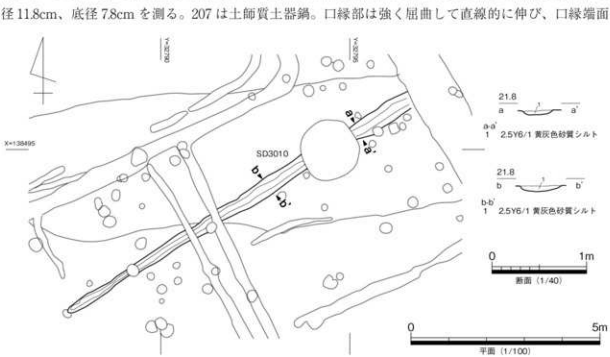
埋土中から遺物の出土はなく詳細な時期の比定は困難であるが、条里型地割に平行すること、SD3007 との重複関係から中世の遺構と推定した。(益﨑)

3-2 区 SD3013（第 133・137 図）

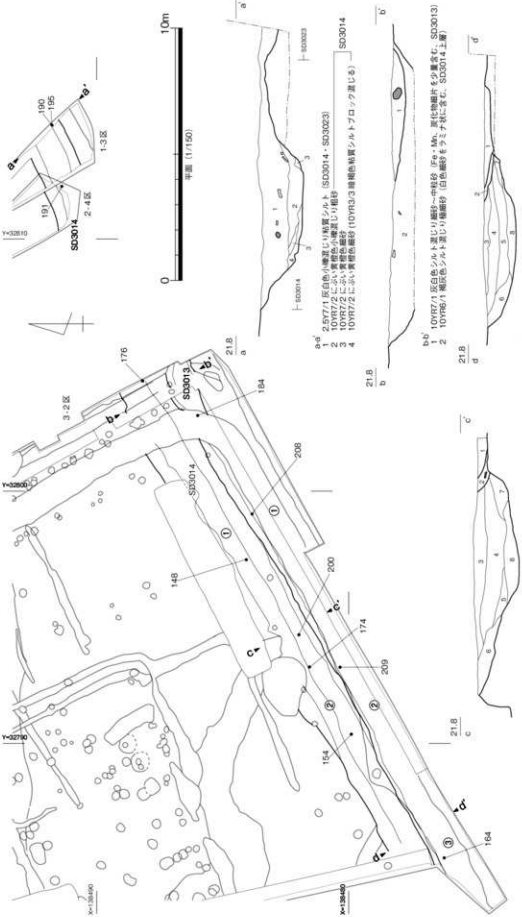
3-2 区南端部付近で検出した東西直線溝である。流路方向はN 61.26° E を測り、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致し、位置関係から鵜足郡条里の坪界溝と考えられる。南北方向の市道を挟んで東に隣接する 1-3 区・2-4 区では検出しておらず、市道下で消失または方向を変える可能性が高い。

重複関係から、SD3014・SD3025・SD3026・SD3027 に後出し、SD3007 に先行することがわかる。大部分が後出する SD3007 により破壊されるために規模および断面形は判然としないが、東壁では幅 1.40m、残存深 0.14m を測り、断面形は皿形となる。溝底面の標高は西壁付近で 21.5 m前後、東壁で 21.4 m前後を測り、東へ流下していた可能性が高い。埋土は灰白色シルト～細砂を主体とし、細砂～中粒砂をラミナ状に含むことから、流水下での自然堆積と考えられる。後世の削平により遺構上部が消失した可能性が高く、最終埋没の様相は不明である。

出土遺物は 204 ～ 211 を図示したほか、多量の土師質土器小片が認められる。204 は土師質土器皿。底部はヘラ切りで、口径 7.8cm を測る。205・206 は土師質土器杯である。205 は体部の外傾は弱く、口径 11.8cm、底径 7.8cm を測る。207 は土師質土器鍋。口縁部は強く屈曲して直線的に伸び、口縁端面

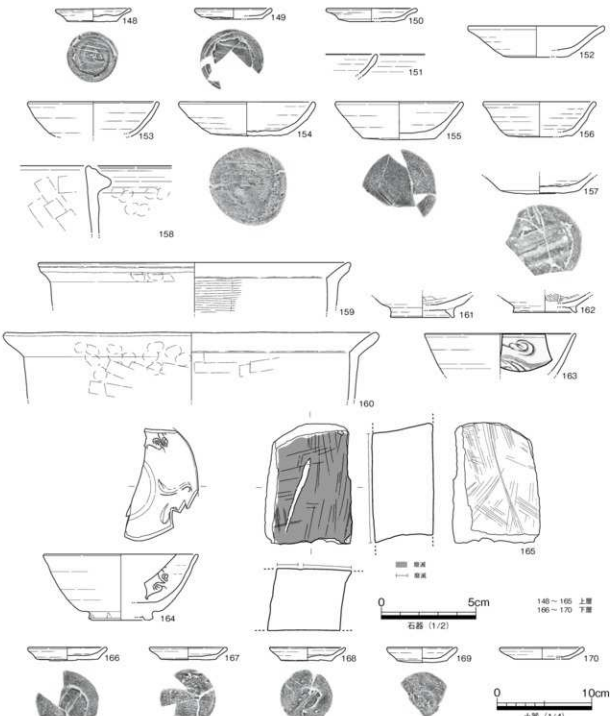


第 132 図　3-2 区 SD3010 平・断面図



第 133 図　1-3・2-4・3-2 区 SD3013 SD3014 平・断面図

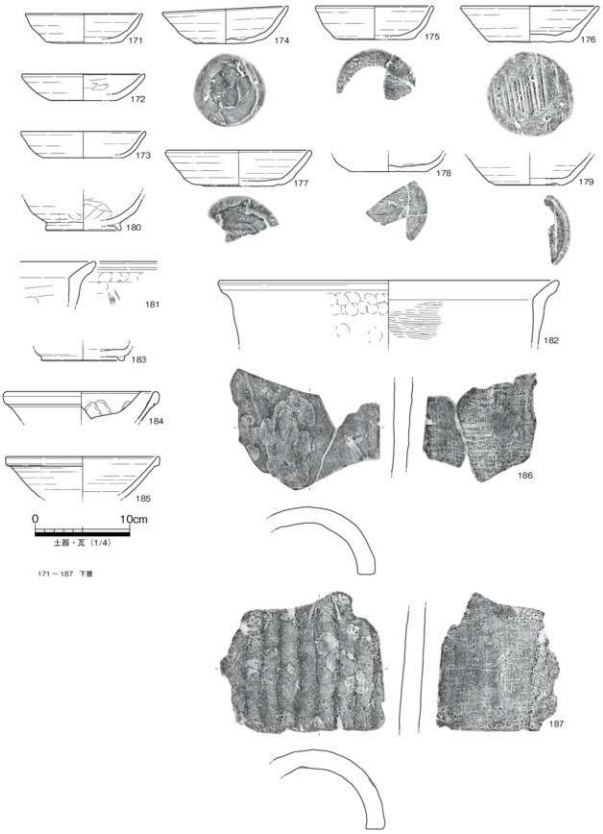
はナデ調整である。208は須恵器椀である。高台高8mm、高台径は推定で6cm前後となる。底部は回転ヘラ切りののち、高台が貼り付けられる。十瓶山系とは明らかに異なる胎土・形態であり、他地域からの搬入品の可能性がある。209は和泉型瓦器椀の底部片である。外面は指オサエのみでヘラミガキは認められず、高台は径4cm前後の略円形、断面半円形で粗雑な貼り付けである。内面は磨滅により判然としないが、見込みは粗い平行線状のヘラミガキ。尾上編年Ⅲ-3～Ⅳ-1期に位置付けられる。210は方柱状の砂岩の亜円礫を使用した叩き石で、1面のみ使用する。図上下端部は使用時に破損したとみられる。211は、板状の砂岩の広端面2面を使用した砥石である。使用後に被熱により変色し、また打



第134図　3-2区 SD3014 出土遺物1

ち割られている。磨滅はあまり顕著ではない。

205・208・209 から、佐藤編年中世Ⅱ-2 ～ 3 期 (13 世紀前葉～中葉) に位置付けられる。(蔵本・益崎)



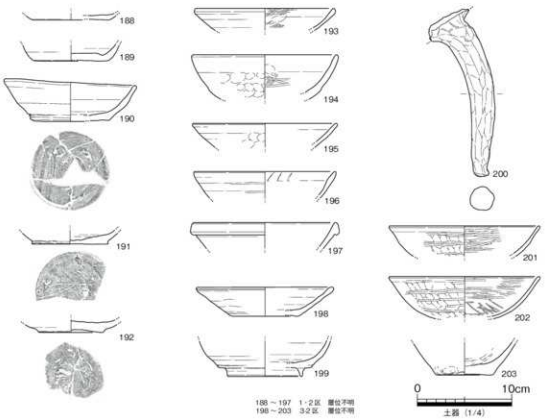
第 135 図　3-2 区 SD3014 出土遺物 2

1-3・2-4・3-2 区 SD3014（第 133 ～ 136 図）

1-3・2-4・3-2 区南端部付近で検出した東西直線溝で、溝の規模や流路方向等より一連の遺構の可能性を想定する。東西両端は調査区外へ延長し、間に市道を挟むものの 31.9 m を調査した。重複関係から、柱穴群や SX3003、SD3007、SD3013、SD3025、SD3026 より先行し、SD3020、SD3021 より後出する。流路方向は SD3013 と平行し、N 60.49° E を測る。概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致しており、位置関係から鵜足郡条里の坪界溝と考えられる。検出面幅 1.7 m 前後、残存深 0.34 ～ 0.55 m、断面形は概ね逆台形状を呈する。溝底面の標高は、2-4 区東端で 21.03 m 前後を、3-2 区東端部で 21.07 m 前後を、3-2 区西端で 21.31 m 前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。埋土は 4 ～ 6 層に細分され、大きく上下 2 層に大別する。上層 (d-d' 断面 3 ～ 5 層) は、下層埋没後に下層の一部を削奪して、灰色系細砂やシルトがレンズ状に堆積しており、改修溝の可能性を考える。下層 (d-d' 断面 6 ～ 8 層) は、灰白色シルトないし細砂がレンズ状に堆積し、溝開削時の堆積層と考える。

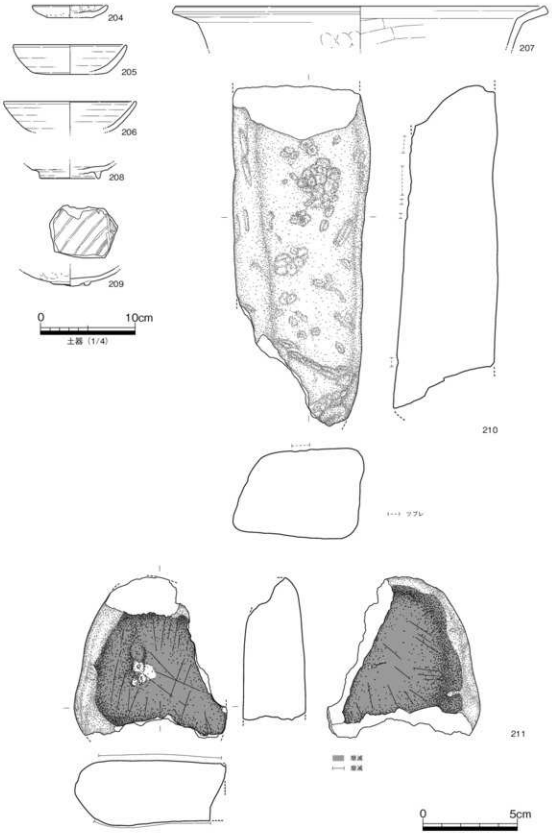
遺物は、図示した以外に土師質土器皿・杯等の小片 3 点や須恵器壺もしくは甕の体部小片 1 点等が出土したのみである。

148 ～ 165 は上層出土遺物である。148 ～ 150 は土師質土器皿である。いずれも底部は回転ヘラ切りで、板目圧痕が残る。佐藤編年中世Ⅰ-3 ～ Ⅱ-1 期に位置付けられる。151 ～ 157 は土師質土器杯である。いずれも底部は回転ヘラ切りで、154・155・157 には板目圧痕が認められる。いずれも直線的に外傾するが、152 は比較的外傾度が強い。口径は 12 ～ 14cm 前後となる。佐藤編年中世Ⅱ-1 ～ 2 期。158 は土師器羽釜。佐藤編年中世Ⅰ-3 期 (12 世紀前半) 頃の所産。159・160 は土師質土器鍋。口縁部は屈曲して直線的に伸び、端部は丸くなる。161 は十瓶山窯系須恵器椀、162 は土師質土器椀の底部片である。いずれも高台高 6 ～ 8mm、高台径は 6cm 前後と推定できる。内外面ともに著しい磨滅により調整は不



第 136 図　1-3・2-4・3-2 区 SD3014 出土遺物

明瞭である。163・164 は青磁椀である。いずれも外面無文、内面は片彫りの草花文か。164 の高台は断面四角形で、高台内部の刳りが浅く、底部が肉厚である。大宰府分類 (山本 2000) の龍泉窯系椀 I 類に分類される。165 は板状の安山岩を使用した砥石で、図左面の 1 面のみ使用する。



第 137 図　3-2 区 SD3013 出土遺物

166 ～ 187 は下層出土遺物である。166 ～ 170 は土師質土器皿、171 ～ 179 は土師質土器杯である。171 ～ 177 は外傾度の弱い体部で、口径 12 ～ 15cm、底径 7.4 ～ 9.6cm を測る。いずれも底部ヘラ切りで、174 ～ 179 には板目圧痕が認められる。いずれも佐藤編年中世Ⅰ-3 ～Ⅱ-2 期の所産と考えられる。180 は土師質土器椀である。181・182 は土師質土器鍋。183 は須恵器高台付杯の底部片。高台の貼り付け位置は底部外縁に近く、高台の外側から屈曲して体部に至る。全形は不明なものの高台の特徴から 8 世紀代と考えられ、混入の可能性が高い。184・185 は白磁椀である。大宰府分類 (山本 2000) の白磁椀Ⅳ類に分類される。186・187 は丸瓦片である。磨滅が著しいが凸面は叩きのちナデ、凹面は縦糸 12 ～ 16 本 /1cm の布目痕が認められる。

188 ～ 197 は 1・2 区 SD3014 出土遺物のうち、出土層位不明の遺物である。188 は須恵器皿。189 ～ 192 は土師質土器杯。いずれも底部は回転ヘラ切り。193 は土師質土器杯。口縁端部は上方へ摘まみ上げ気味に肥厚する。194 ～ 196 は土師質土器椀。194 の内面にはミガキ調整が施される。197 は白磁椀で、大宰府分類 (山本 2000) のⅣ-1 類に分類される。

198 ～ 203 は 3-2 区 SD3014 出土遺物のうち、出土層位不明の遺物である。198 は土師質土器杯で、底部はヘラ切りとなる。199 は杯状の体部に高台を貼り付けた、特徴的な形態の土師質土器椀である。底部は体部から明瞭に屈曲し、底部はヘラ切りののち、板目圧痕が認められる。200 は土師質土器足釜の脚部。201・202 は和泉型瓦器椀の口縁部から体部片である。体部内面は横方向のミガキ、202 の見込みにはジグザグ状の平行ミガキが認められる。尾上編年Ⅱ-2 ～ 3 期 (12 世紀中葉前後) に位置付けられる。203 は弥生土器甕の底部片か。内外面ともに磨滅が著しいが、わずかにヘラケズリ様の痕跡が残る。

出土遺物から、12 世紀前葉から 13 世紀初頭を中心とする時期に位置付けられる。上層・下層および SD3013 の出土遺物に大きな時期差は認められず、埋没と再掘削が繰り返されたものと考えられる。(蔵本・益崎)

3-2 区 SD3016（第 138 図）

3-2 区西端中央付近で検出した溝である。西端は調査区外西側へ延長しており全形は不明だが、検出部の方向は概ね条里型地割に平行する。重複関係から、SD3020 に後出することはわかるが、その他の遺構との切り合いはなく、開削時期の絞り込みには至らない。

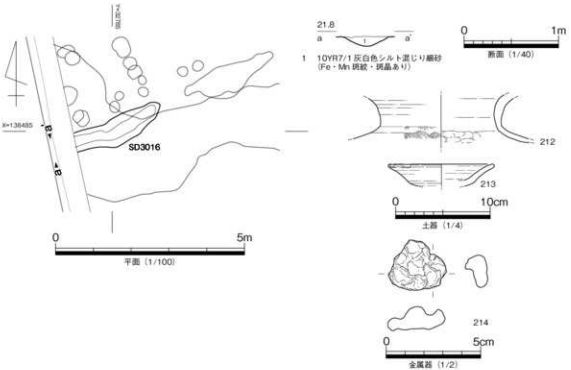
最大幅 1.08m、最小幅 0.45m、深さ 0.10m 前後を測り、断面形は皿形となる。埋土は灰白色のシルト混じり細砂で、検出写真から黄灰色細砂を多量に含むことがわかる。埋土の類似性から、3-1 区 SD3005・3-2 区 SD3005・SD3001 に連続する溝の可能性が考えられる。

出土遺物は、212 ～ 214 を図示した。212 は土師器壺の頸部片である。古墳時代前期の遺物と考えられ、重複する SD3020 からの混入の可能性が高い。213 は肥前系施釉陶器皿。磨滅が著しく、外面の一部に緑色系の釉薬がわずかに残るのみである。214 は形状から椀形鍛冶滓の破片として図化したが、自然科学分析の結果、鋳造鉄器片の可能性が高いことが明らかになった。厚さ 5mm 程の板状であり、鉄鍋等の可能性が考えられる。(第 4 章第 8 節参照)

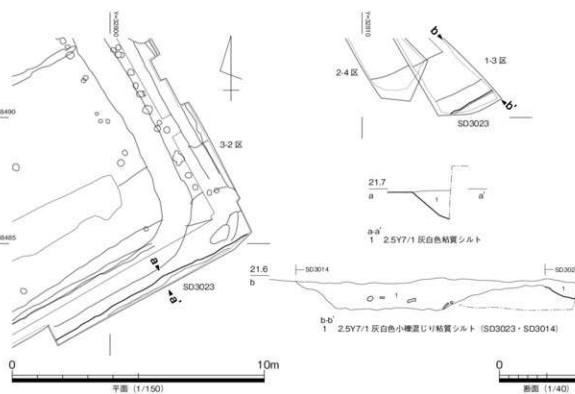
出土遺物による詳細な時期の特定は困難であるが、3-1 区 SD3005・3-2 区 SD3005・SD3011 との埋土の類似性から近世前期に位置付けたい。(益崎)

1-3・3-2 区 SD3023（第 139 図）

1-3・3-2 区南側拡張部でで検出した東西直線溝で、溝の規模や流路方向等より一連の遺構の可能性を想定する。調査区内で北側掘り方を検出したのみで、南側掘り方は調査区外へ延長し、溝の全形は不詳。東西両端は調査区外へ延長し、間に市道を挟むものの 19.9 m を調査した。流路方向N 61.16° E に



第 138 図　3-2 区 SD3016 平・断面図、出土遺物



第 139 図　1-3・3-2 区 SD3023 平・断面図

配され、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致し、位置関係から鵜足郡条里の坪界溝と考えられる。検出面幅 0.3 m以上、残存深 0.14 m以上、断面形は皿状を呈するとみられる。埋土は本溝上面に堆積したSD3014より連続する灰白色粘質シルトで充填されており、調査成果よりSD3014と同時期に廃絶した可能性が考えられる。

遺物はSD3023より出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。(益崎)

3-2区　SD3025・SD3027（第140図）

3-2区東端で検出した南北直線溝である。調査時には個別の遺構と理解していたが、埋土の類似性から同一遺構と判断した。流路方向はN 29.72°Wを測り、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致する。北端は調査区北側へ延伸するが3-1区では検出できず、3-1区東側の市道下へと続くものと考えられる。南端はSD3027の平面形から、調査区南東隅部で屈曲するものと考えられ、SD3007と平行する逆L字状の流路方向となる。

重複関係からSD3014に後出しSK3004に先行するが、SD3013との関係は判然としない。調査時にはSD3013→SD3025・SD3027の順で掘削されておりSD3013に先行する可能性があるが、後述の出土遺物の年代観とは矛盾する。調査時の重複関係の誤認の可能性があるが、重複部分の遺構検出時の撮影をしておらず、検証は不能となってしまった。

SD3025は東壁沿いで溝西岸を検出したのみであり、溝幅、深さは不明である。SD3027は幅0.38m、残存深0.21mを測り、断面形は皿形となる。SD3025も同規模の可能性が高い。

出土遺物は、215・216・222・223のほか、土師質土器細片、瓦片が少量出土した。215は須恵器杯の口縁片である。216は一部に自然面の残るサヌカイトの剥片で、稜線に敲打痕が顕著にみられることから、火打石として図示した。222は須恵器高台付杯の底部片。SR3001等からの混入の可能性が高い。223は備前焼擂鉢の口縁部片である。厚みのある断面三角形から台形状の口縁で、口縁下内面の突起は丸みを帯びる。口縁外面の凹線は2条である。乗岡編年近世4a・b期に位置付けられる。

SD3013との重複関係に疑問は残るが、223の存在とSD3007と共通する流路方向から、17世紀頃の遺構と理解したい。(益崎)

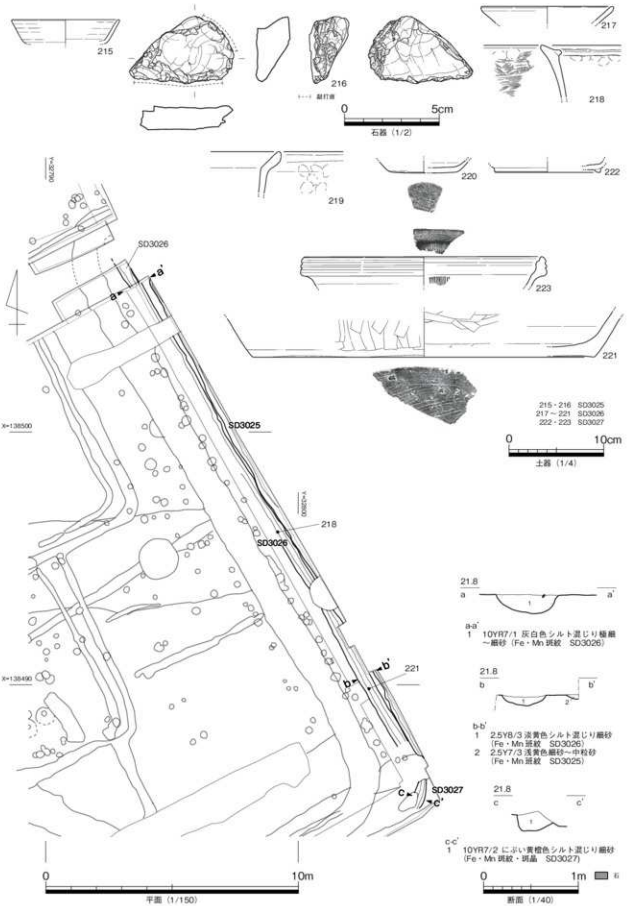
3-2区SD3026（第140図）

3-2区東端で検出した南北直線溝である。流路方向はN 32.31°Wを測り、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致する。北端は3-1区側に延伸するが、3-1区では検出されない。南端はSD3027に切られて消失しており、以南の状況は不明である。流路方向はN 30.39° Wを測り、概ね条里型地割に平行する。

重複関係からSD3027に先行しSD3014に後出するが、SD3025・SD3027と同様にSD3013との関係は判然としない。

最大幅0.67m、最小幅0.47m、深さ0.11～0.21mを測り、断面形は皿形となる。底面標高は測定箇所により大きく差があるが、周辺地形を踏まえると南から北へ流下する可能性が高い。

出土遺物は、217～221を図化した。217は土師質土器杯の口縁部片。218は土師質土器足釜の口縁部片である。鍔部は短く、破断面から口縁部－体部の成形後に紐状の粘土を接合したことがわかる。219は土師質土器鍋の口縁部片である。220は土師質土器杯の底部片で、底部は回転ヘラ切りである。体部の大部分を欠失しており、体部－口縁部の形状は不明である。221は備前焼甕の底部片で、体部・



第 140 図　3-2 区 SD3025 SD3026 SD3027 平・断面図

底部外面に板ナデ調整が施される。

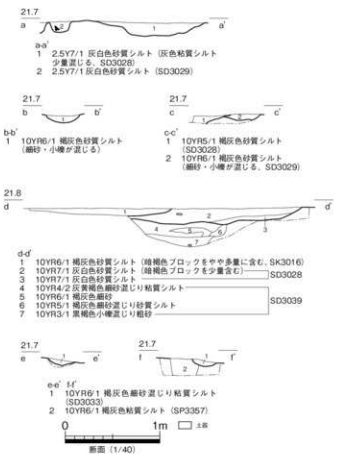
調査時に重複関係を十分に把握できなかったため詳細な開削・埋没年代の特定は困難であるが、出土遺物の年代観を重視し、中世後期の遺構と考えたい。(益崎)

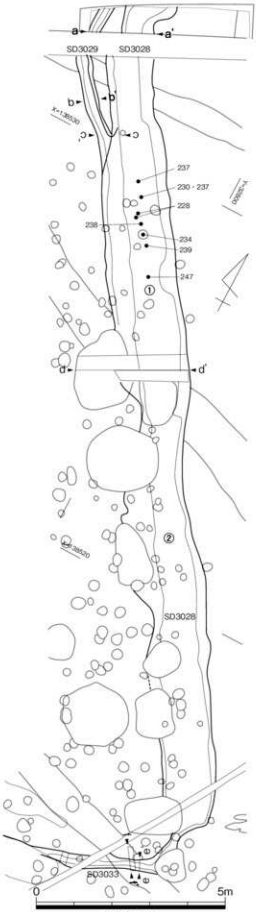
3-1 区 SD3028・SD3033（第 141 ～ 144 図）

SD3028 は 3-1 区北東付近で検出した南北溝で、北は調査区外へ延長し、隣接する 3-1 区北側拡張区(北)では延長溝は検出していない。SD3033 は位置関係から SD3028 と同一の溝と考えられ、SK3013、SK3017 付近で西へ屈曲して SD3033 へ続くと考えられる。重複関係より SK3008、SK3012、SK3013、SK3016 より先行し、SK3011、SK3021、SK3022、SD3029、SD3039 より後出する。検出面幅 0.9 ～ 1.9m、残存深 0.14m 前後をそれぞれ測り、断面形は皿状を呈する。流路方向 N35.08° W に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は 3-1 区北拡張部南にて検出された SD3028 の北端で 21.47 m 前後、3-1 区南端で 21.59 m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は灰白～褐灰色砂質シルトの単層であった。

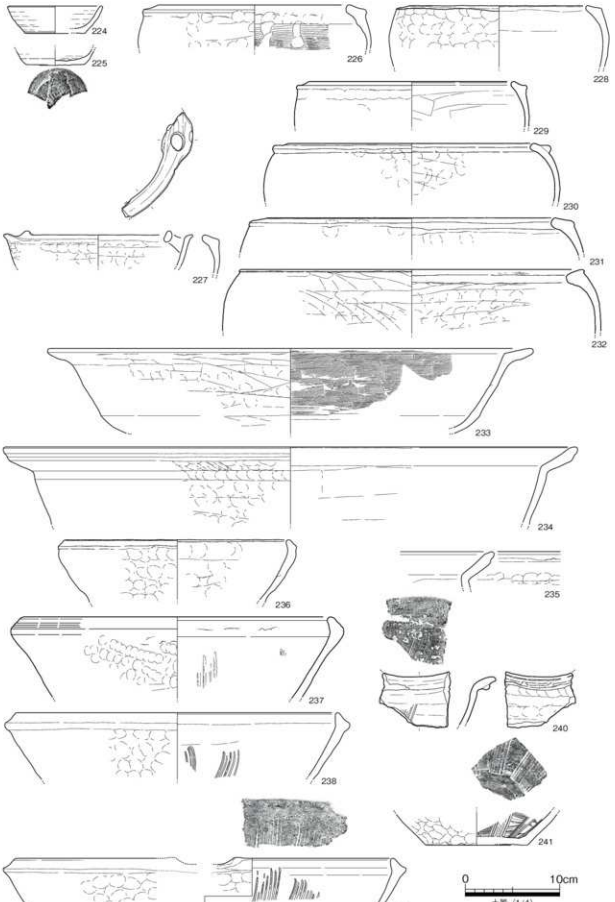
SD3028 は 3-1 区南部で西へ屈曲し SD3033 として検出した部分は、重複関係より、SK3017 に先行し、SD3040 より後出する。検出面幅 0.26 ～ 0.32m、残存深 0.06 mをそれぞれ測り、断面形は皿状を呈する。流路方向は N68.59° E に配され条里型地割の方向に合致しない。溝底面の標高は東端部で 21.55 m前後、西端部で 21.53 m前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下していた可能性が高い。埋土は褐灰色粘質シルトの単層であった。

遺物は図示した以外に、土師質土器擂鉢・足釜・把手付鍋・鍋、須恵器片、青磁片などがコンテナ 1 箱程度出土した。224 ～ 251 は SD3028 から出土した。224・225 は土師質土器杯。ともに底部は回転ヘラ切りである。226 ～ 231 は土師質土器把手付鍋。226 は体部内面を板ナデで調整、227 は体部外面に煤が付着する。228 は内外面ともに指オサエで調整する。226 は本書編年 C 期 (1-Ⅳ型式)、227・228・231 は本書編年 D 期 (1-Ⅴ型式)、229・230 は B 期 (1-Ⅱ型式) に相当する。232 は把手付鍋と比較すると口縁端部が内傾する。火鉢の可能性も考えられる。233 ～ 235 は土師質土器鍋。233 は口縁部は大きく外傾する。口縁部から底部の屈曲部までの距離が 10cm 未満と短く浅い鍋であったと想定する。234・235 は丸く収められる口縁部直下に沈線状もしくは段状の凹面が形成されるものでいずれも中讃地方に普遍的な形態である。236 ～ 241 は土師質土器擂鉢。236 は体部は全体的に赤茶色を帯び 1mm 程度の砂粒が胎土に混ざる。237・238 は 1mm 程度の砂粒が胎土に混入する。239 は一部欠損しているが、口縁部に注ぎ口を作り出す。238・239 は本書編年の A 期 (Ⅰ型式)、236 は A ～ B 期 (Ⅱ型式)、237 は B ～ C 期 (Ⅲ型式) に相当する。240 は擂鉢の口縁部は外傾し口縁部の下に段を作り出す。沖遺跡の擂鉢の中で出土したのはこの土器一点のみで、下川津遺跡に同様の形態の擂鉢を見ることができる。241 は底部のみの出土のため、全体形は不明である。242 は西村型土器椀で低平な高台が粗雑に貼り付けられる。243 は黒色土器椀底部片。244 は中国産白磁皿Ⅷ-1 類 (大宰府分類) の口縁部片。245 は中国産青磁 D 類 (上田分類) 椀。口縁部を明瞭に外反させ分厚く釉掛けされる。246 は軒平瓦。中心飾りは不明だが均整さに欠ける唐草文の形状で粗質の胎土から近世瓦と考えられる。247 は丸瓦。凸面はナデに消去されずに縄タタキ目が残り、凹面は布目が見られる。初期の近世瓦と考えられる。248 は用途不明土製品。土製品の中央部に円柱状のものを押し当てた痕跡が残る。図示していないが、同様の土製品は他にも出土している。249 は石英の火打石。石の稜線部のほぼ全てで火打金と打ち合わせた痕跡が残る。250・

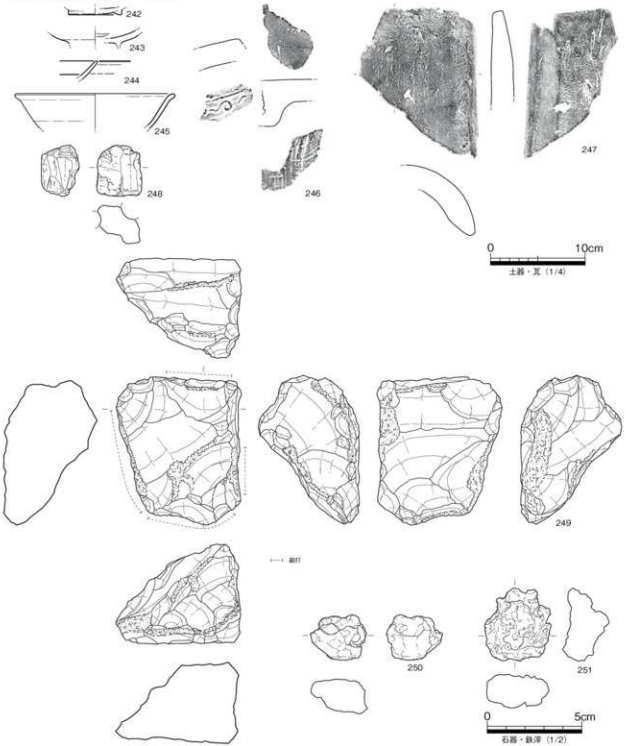




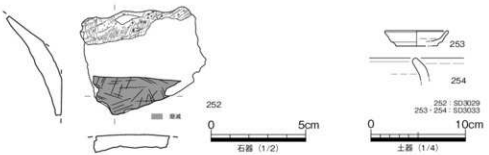
第 141 図　3-1 区 SD3028 SD3029 SD3033 平・断面図



第142図　3-1区 SD3028 出土遺物1



第 143 図　3-1 区 SD3028 出土遺物 2

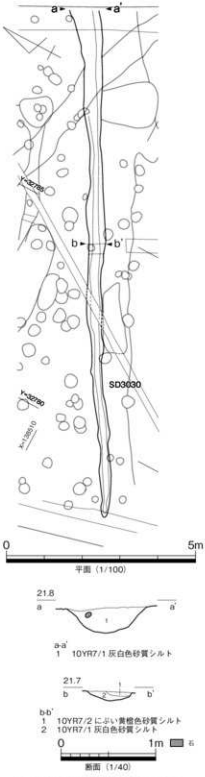


第 144 図　3-1 区 SD3029 SD3033 出土遺物

251 は椀形鍛冶滓。250 については分析を行っており、詳細については第 4 章 8 節に記載している。

253・254 は SD3033 から出土した。253 は土師質土器皿。復元した口径は 6.6cm を測る。底部はヘラ切り、体部は回転ナデ。254 は土師質土器擂鉢口縁部片。口縁部の内傾角度が緩い。

調査時には層別に取り上げられておらず、SD3028 の下層にある土坑の遺物が混入している可能性も考えられうるが、少なくとも 14 世紀以前には開削されていたことを想定する。完全に埋没するのは 17 世紀中葉以降であろう。(溝上)



第 145 図　3-1 区 SD3030 平・断面図

3-1 区 SD3029（第 141・144 図）

3-1 区北東付近で検出した南北溝で SD3028 の西側で検出した。北は調査区外へ延長し、隣接する 3-1 区北側拡張区 (北) では延長溝は検出していない。南は SD3028 に切られる。検出面幅 0.35m 前後、残存深 0.06m 前後をそれぞれ測り、断面形は皿状を呈する。流路方向は N42.81° W に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は 3-1 区北拡張部南にて検出された SD3029 の北端で 21.5 m前後、3-1 区 SD3028 の合流する手前で 21.52 m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は褐灰色細砂の単層であった。

図示していないが、本書編年の D 期 (2-Ⅲ型式) に相当する土師質土器把手付鍋と土師質土器片が数点出土している。252 は安山岩製の砥石。砥石として使用しているのは、図示した平面図のトーンをかけた部分のみで、中間部分は割れたままの状態である。底面もまた割れたままの状態であるため、大きな砥石から何らかの理由で割れた破片の可能性がある。

SD3028 より先行することから、中世頃に位置づけられる。(溝上)

3-1 区 SD3030（第 145 図）

3-1 区南部で検出した東西溝で東は調査区外に延長し、隣接する 2-2 区では延長溝は検出されていない。切り合い関係より SK3018、SD3040 より後出する。検出面幅 0.45 ～ 0.8m、残存深 0.1 ～ 0.28m をそれぞれ測り、断面形は浅い U 字状ないし皿状を呈する。流路方向は N59.98° E に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は東端部で 21.46 m前後、西端部で 21.58 m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が高い。埋土は 2 層に細分され、灰白色砂質シルトが概ね水平堆積する。

遺物は図示していないが器種不詳の土師質土器片が 20 点程度

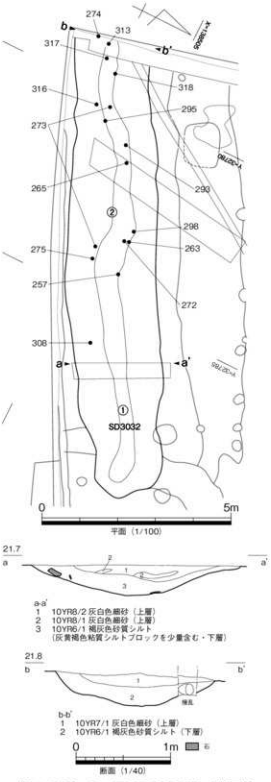
出土した。また、SD3032 出土の 270 と接合できた破片がある。

出土遺物より、17 世紀前半を上限とする。(溝上)

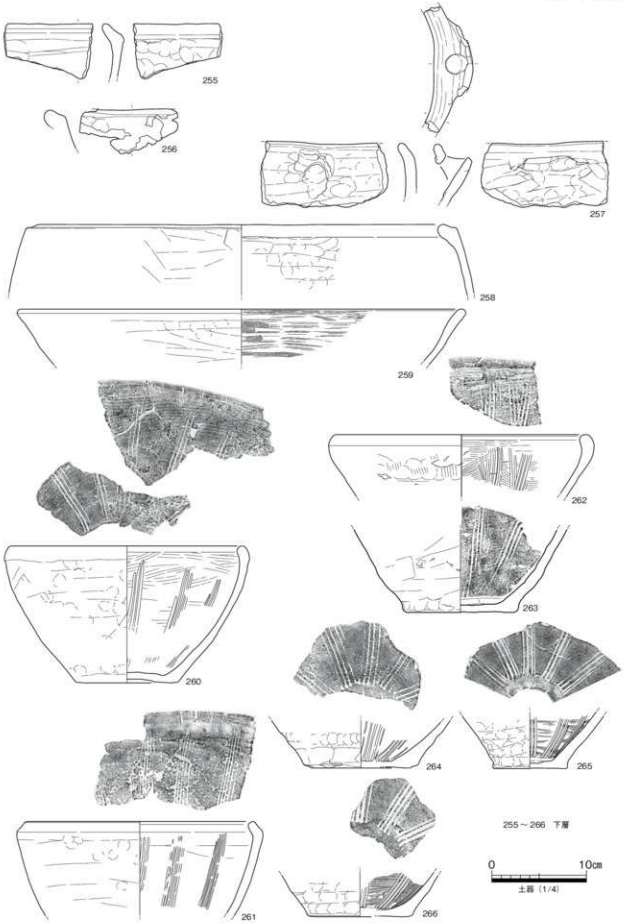
3-1 区 SD3032（第 146 ～ 151 図）

3-1 区南端部で検出した東西溝。西は調査区外に延長し溝の全形は不明である。切り合い関係より、SD3005、SR3001、SR3002 に後出する。検出面幅 1.8 ～ 2.3m 前後、残存深 0.34m 前後をそれぞれ測り、断面形は皿状を呈する。流路方向は N63.62° E に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は東端部で 21.32 m前後、西端部で 21.25 m前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下していた可能性が高い。埋土は 2 層に細分され上層に灰白色細砂、下層に褐灰色砂質シルトがレンズ状に堆積する。

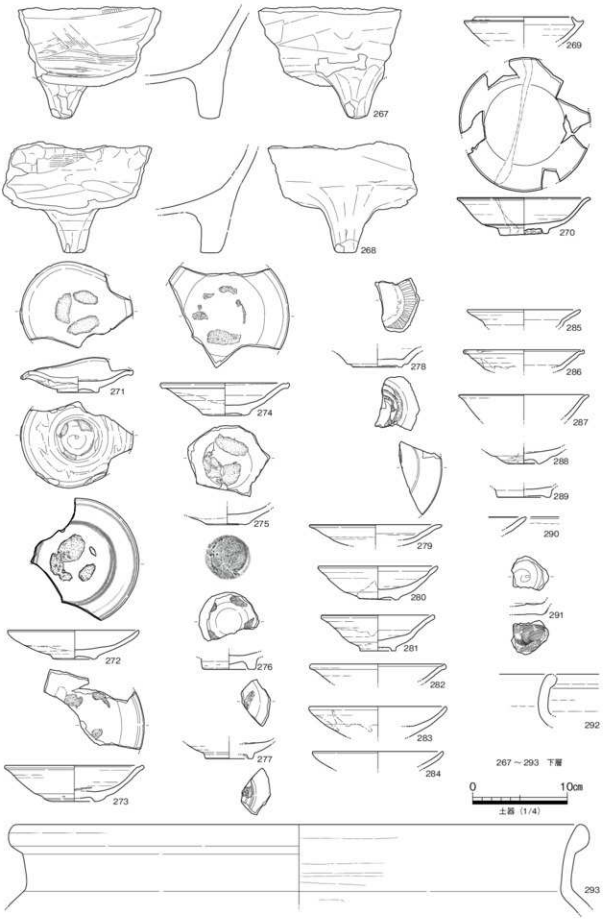
遺物は図示した以外に、土師質土器把手付鍋・鍋・足釜・擂鉢、磁器小片、陶器片、平瓦、丸瓦などがコンテナ 1 箱程度出土した。255 ～ 308 は下層から出土した。255 ～ 257 は土師質土器把手付鍋。256 は全体的に割れや剥落が激しく調整を確認することは困難。257 は把手部分の口縁の外傾は弱く、把手部分以外の口縁部の内傾も弱い。255・256 は本書編年 D 期 (1-Ⅴ型式)、257 は D 期 (2-Ⅲ型式) に相当する。258 は土師質土器火鉢。259 は土師質土器鍋。外面は一面に煤が付着する。260 ～ 266 は土師質土器擂鉢。260・262 は 4 条 1 単位、261 は 5 条 1 単位の卸目を施す。260・261 とも体部内面に煤の付着が確認できる。262 は卸目を重ねて施した跡が残る。261 は本書編年 B ～ C 期 (Ⅲ型式)、262 は D 期 (Ⅳ型式)、260 は D 期 (Ⅴ型式) にそれぞれ相当する。263 ～ 266 は擂鉢の底部。264 ～ 266 は体部内面、割れ断面の一部に煤が付着している。267・268 は土師質土器火鉢の底部片。269 は須恵器杯身の口縁部片。7 世紀に位置づけられる。270 は肥前系磁器皿で、内外面とも鉄釉と灰釉を掛け分ける。高台内に砂目が見られる。SK3018・SD3030 との接合資料である。271・273・274・282・286・290 は肥前系陶器溝縁皿で、内面から口縁部外面にかけて灰釉が掛けられ、271･273･274 には見込みに砂目が残される。この他に肥前系陶器皿には、緩やかに内湾する口縁部を持つもの (272・283・284)、見込みに段を伴い、外



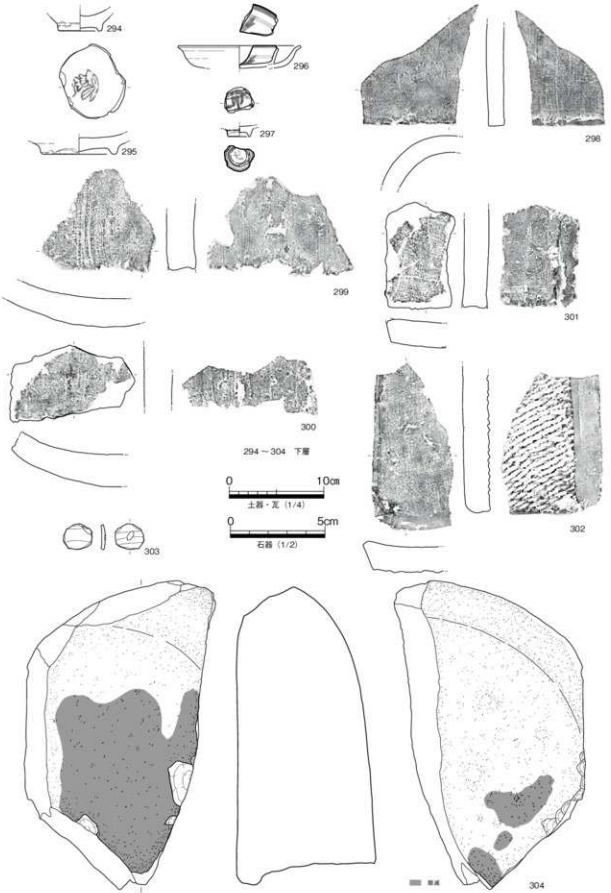
第 146 図　3-1 区 SD3032 平・断面図



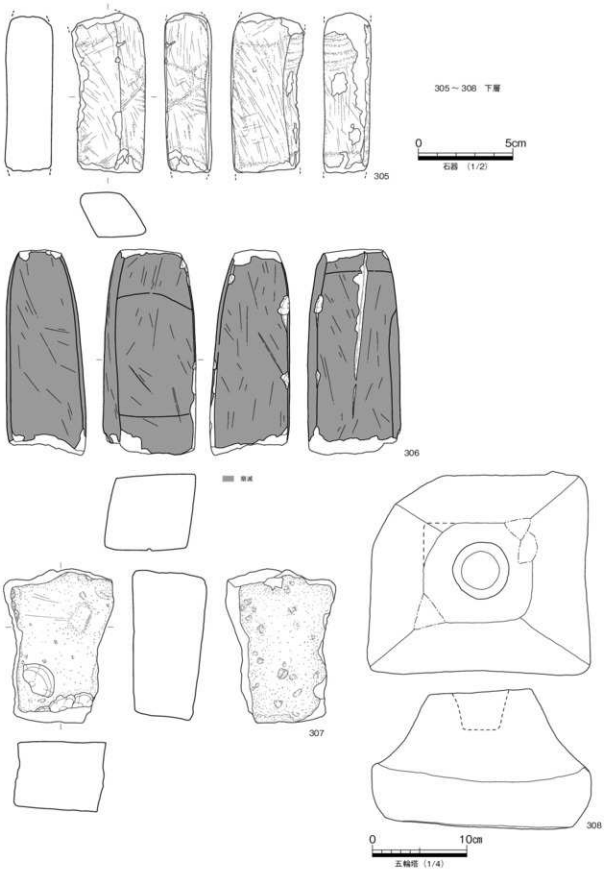
第147図　3-1区 SD3032 出土遺物1



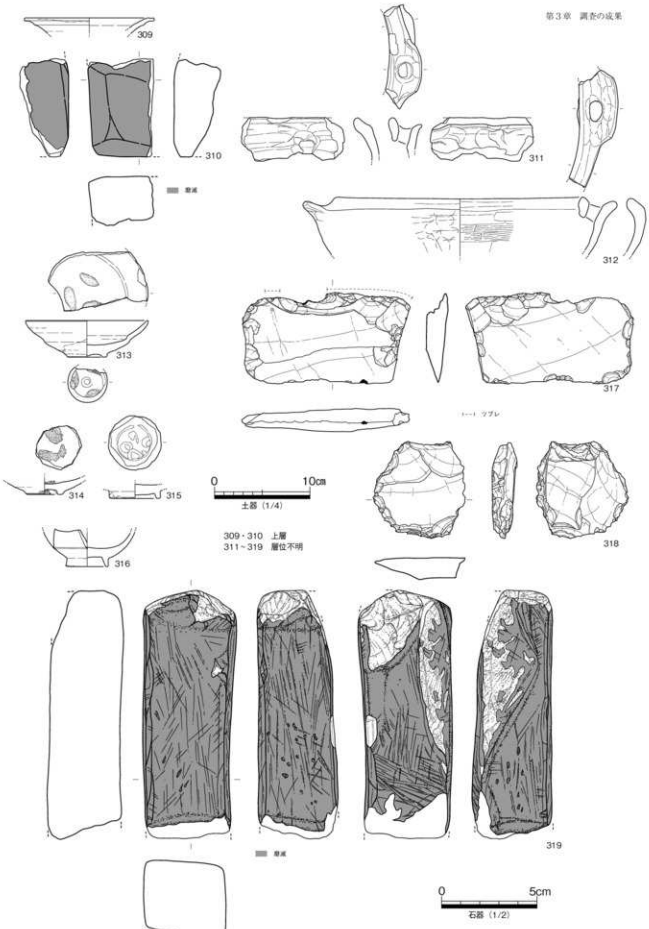
第 148 図　3-1 区 SD3032 出土遺物 2



第149図　3-1区 SD3032 出土遺物3



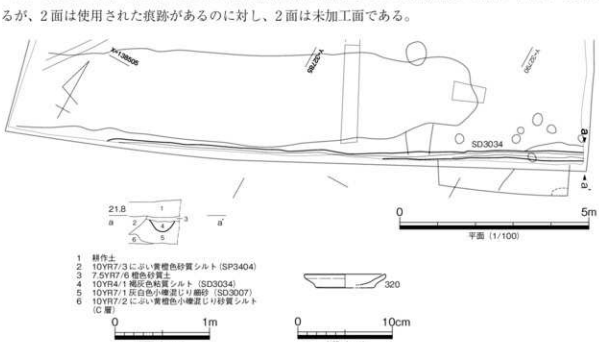
第 150 図　3-1 区 SD3032 出土遺物 4



第151図　3-1区 SD3032 出土遺物5

反気味の口縁部を持つもの (277・279 ～ 281) 等の形態のものがある。272・277・279 には見込みに砂目が残される。これらは高松城の様相 3 に相当する特徴を持つ。278 は瀬戸・美濃系陶器灰釉折縁皿。体部内面には丸ノミ状工具によるソギが施され、底部内面と高台内を除いて灰釉が施される。287 は肥前系磁器の端反皿。289・294 は中国産白磁Ⅳ類椀 (大宰府分類) の底部。291 は備前焼の壺底部。292 は備前焼壺、293 は同甕で玉縁状口縁の形態から乗岡編年中世 3 ～ 4 期の所産と考えられる。295 は中国産青磁椀Ⅰ類 (大宰府分類) で見込みに花文が施される。釉は畳付を越えて高台内に及ぶ。14 ～ 16 世紀の所産か。296 は肥前系磁器皿。端反りの口縁部と、やや白濁した釉調、にじむような呉須から、高松城様相 3 が考えられる。297 は中国産青花小杯。濁った濃い色調の呉須で、見込みに簡略化した風景図、高台内には「福」を描く。298 は丸瓦。凹面に布目が残り、凸面は板ナデで調整する。299 ～ 302 は平瓦。299 ～ 301 は凹面には布目が、凸面には板ナデの痕跡が残る。301 は凹凸面とも磨滅を強く受ける。302 は凹面に布目が残り、凸面は縄タタキ目が見られる。いずれも古代の所産で、法勲寺との関わりが注目される。303 は円盤状土製品。中世前半の土師質土器杯を転用して作成されたものと考えられる。304 ～ 307 は砥石である。304 は砂岩製の砥石。砥石専用に加工した跡はあまり見られず、自然石の形のまま使用している印象を受ける。砥石として使用しているのは表裏の 2 面のみで他の面は割れた状態のままである。305 は流紋岩製の砥石。断面形は平行四辺形のような形をしており、4 面ともに砥石として使用している。長辺の一部が打ち欠かれたようになっているが、使用当時の痕跡なのか、後世のものなのかは不明である。306 は流紋岩製の砥石。4 面とも砥石として使用している。他の流紋岩の砥石と比較すると有色鉱物の含有率が高い。307 は安山岩製の砥石。砥石として使用したのは 2 面のみで、他の面は割れた状態のままである。砥石として使用された頻度が低いのかあまり磨滅はしていない。308 は角礫凝灰岩 (天霧石) 製の五輪塔火輪。火輪の上面は風輪をうけるための枘穴を作るが、下面には枘を作らない。火輪が最大でも 24cm 前後であり、天霧石製の五輪塔の中でも小型のものである。16 世紀頃のものとみられる。

309・310 は上層から出土した。309 は肥前系陶器の溝縁皿。310 は流紋岩製の砥石。面として 4 面あるが、2 面は使用された痕跡があるのに対し、2 面は未加工面である。

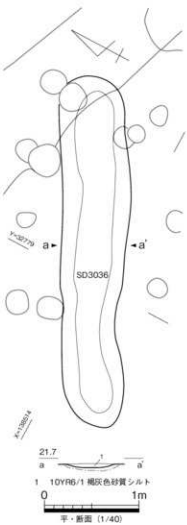


第 152 図　3-1 区 SD3034 平・断面図、出土遺物

311 ～ 319 は出土層位不明の遺物である。311・312 は土師質土器把手付鍋。両方とも外面の一部に煤が付着する。ともに本書編年 D 期 (1-V 型式) に相当する。315 は胎土が粗悪であるが、見込みに花文状のスタンプが見られることから、中世後半の中国産青磁椀と考えられる。316 は肥前系磁器椀。高台が細長く、腰の張りがやや弱い形態的特徴から高松城様相 3 に相当する。317 はサヌカイト製石包丁。318 はサヌカイトの剥片。319 は流紋岩製の砥石。断面形は平行四辺形のような形をしており、4 面ともに砥石として使用している。

第 153 図　3-1 区 SD3035
平・断面図

古代の須恵器や瓦を上限として、中世前期 (12 世紀) の中国産白磁、中世後期 (14 ～ 16 世紀) の中国産青磁、備前焼壺・甕、中世末～近世初頭 (16 世紀後半～ 17 世紀初頭) の中国産青花等は、いずれもほぼ細片である。これに対し、肥前系陶器・磁器皿は遺存状態がかなりいい。このことから、搬入品の主体は高松城様相 3(1640 ～ 50 年代頃) にあり、土師質土器擂鉢もこれに近い時期の所産と考えられる。このことから、遺物を多く含んでいた下層の埋没年代の下限を 17 世紀前半～中葉としておきたい。(溝上)



第 154 図　3-1 区 SD3036
平・断面図

3-1 区 SD3034（第 152 図）

3-1 区南端東部で検出した。SD3007 を切る溝で、隣接する 2-2 区で延長する溝は見つかっていない。遺構ラインの大部分が調査区の境界と接しており、全形は不明である。検出面幅 0.2m 前後、残存深 0.1 m をそれぞれ測り、断面形は浅い U 字形状を呈する。流路方向は N62.72° E に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は東端部で 21.48 m前後、西端部で 21.63 m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が高い。埋土は褐灰色粘質シルトの単層である。

遺物は図示した以外に、土師質土器の小片、陶器片が 10 点程度出土している。320 は土師質土器皿。出土遺物より佐藤編年中世Ⅱ-4 ～ 5 期に位置づけられる。(溝上)

3-1 区 SD3035（第 153 図）

3-1 区南部東壁沿いで検出した。小規模な溝であり、3-1 区東壁断面図では確認できていない。検出面幅 0.26m、残存深 0.04m 前後をそれぞれ測り、断面形は浅い皿状を呈する。流路方向は N61.93° E に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は東端部で 21.578 m前後、西端部で 21.583 m前後をそれぞれ測り、高低差があまりない。遺物は出土しておらず、時期は不明である。(溝上)

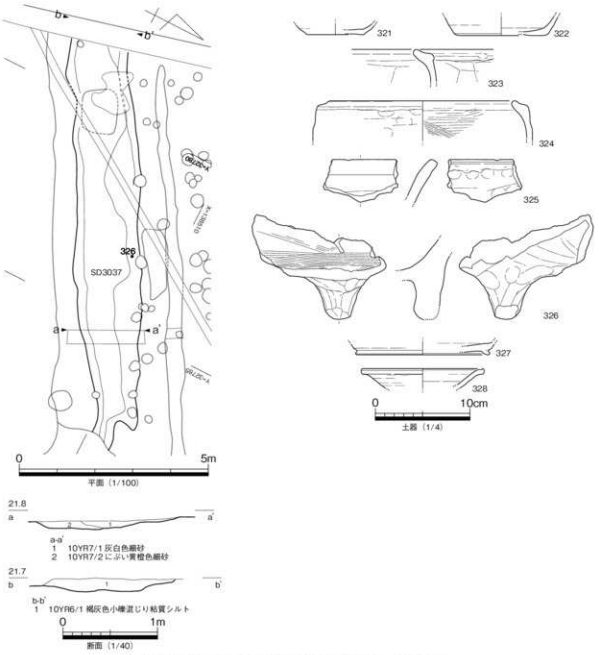
3-1 区 SD3036（第 154 図）

3-1 区南部で検出した。重複関係により SD3040 に後出する。なお、柱穴群は SD3036 掘削後に検出した。検出面幅 0.6m、残存深 0.06m をそれぞれ測り、断面形は浅い皿状を呈する。流路方向は N54.49° E に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は東端部で 21.66 m 前後、西端部で 21.58 m 前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下していた可能性が高い。埋土は褐灰色砂質シルトの単層である。

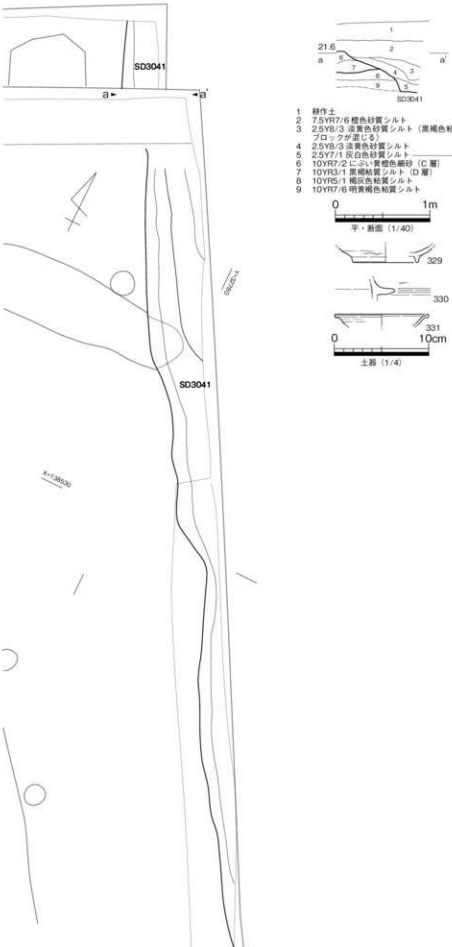
遺物は図示していないが、足釜脚部等の土師質土器片が 10 点程度出土している。出土遺物は乏しいが中世に位置づけられる。（溝上）

3-1 区 SD3037（第 155 図）

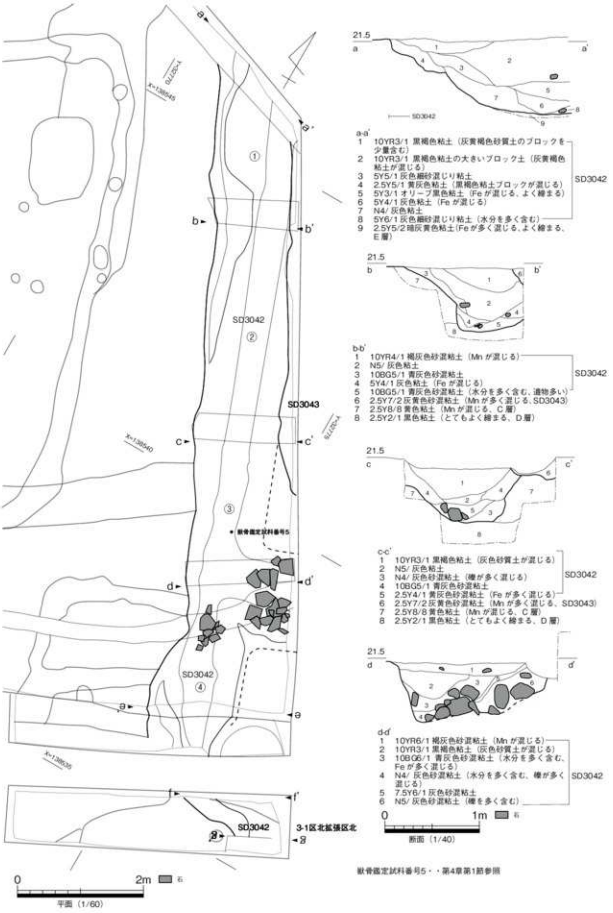
3-1 区南部で検出した。西は調査区外へ延長し、東は SD3005 に切られる。重複関係より、SR3001、



第 155 図　3-1 区 SD3037 平・断面図、出土遺物



第 156 図　3-1 区 SD3041 平・断面図、出土遺物



第 157 図　3-3 区 SD3042 SD3043 平・断面図

SR3002、SK3023より後出する。検出面幅1.6m前後、残存深0.1m前後をそれぞれ測り、断面形は概ね皿状を呈する。流路方向はN61.24°Eに配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は東端部で21.48m前後、西端部で21.49m前後をそれぞれ測り、高低差があまりない。埋土は記録位置により相違を認めるが、単層もしくは2層に細分され主に灰色系の細砂や粘質シルトが堆積していた。

遺物は図示した以外にも、本書編年D期(1-Ⅴ型式)の土師質土器把手付鍋、同じくD期(Ⅴ型式)の土師質土器擂鉢・足釜、器種不詳の土師質土器片などが70点程度出土した。SD3037掘削後にSK3023を検出したため、一部SK3023の遺物が混入している可能性も考えられる。321・322は土師質土器杯。323・324は土師質土器把手付鍋。体部内面を323は板ナデ、324はハケ目で調整する。323・324ともに本書編年D期(1-Ⅴ式)に相当する。325は土師質土器鍋。体部外面一面に煤が付着する。326土師質土器火鉢の底部。体部外面は指ナデで、内面はハケ目で調整する。327は須恵器杯。焼成不良で外側に踏ん張る高台をもつ。328は肥前系陶器溝縁皿。

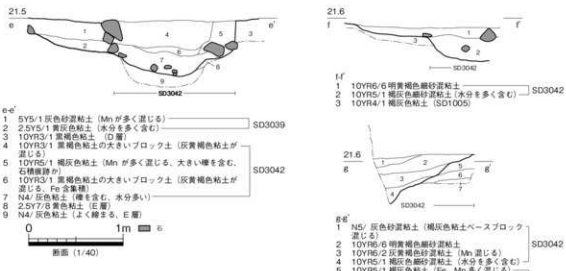
出土遺物より、17世紀前半～中葉の遺構と考える。(溝上)

3-1区 SD3041（第156図）

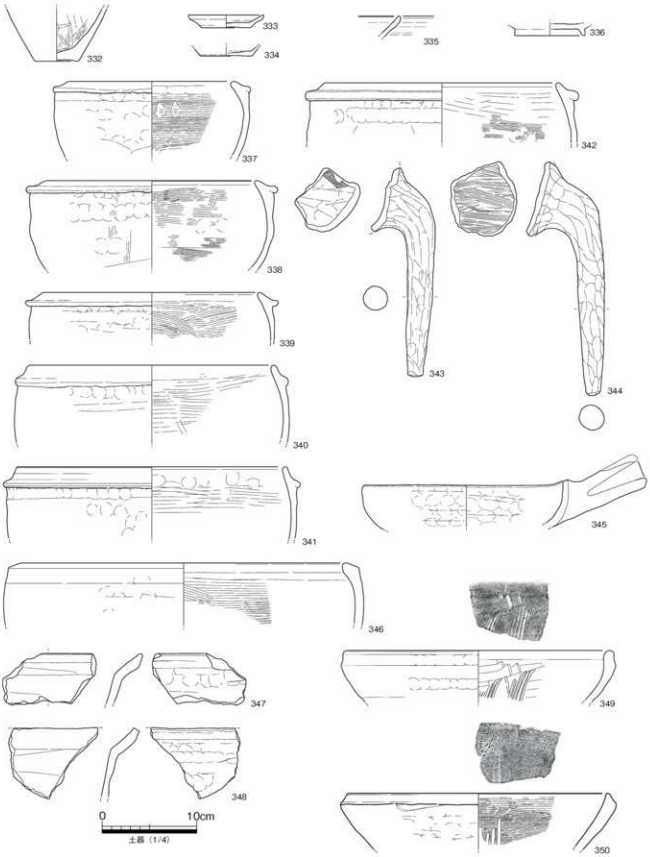
3-1区の東壁沿いで検出した南北直線溝である。南北両端は調査区外へ延長し、3-1区北拡張区北で西に屈曲する。また、調査区内では西側掘方を検出したのみで東側掘方は調査区外へ延長し、溝の全形は不詳である。調査区東側の市道は条里型地割の坪界線に想定されており、SD3041は坪界溝と考えられる。重複関係からSD1006より後出する。検出面幅1.35m以上、残存深0.34m前後をそれぞれ測り、断面形は逆台形状を呈するとみられる。流路方向はN31.14°Wに配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は北端部で21.39m前後、南端部で21.50m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は灰白～淡黄色砂質シルトが堆積する。

遺物は図示した以外にも、土師質土器擂鉢や備前焼小片が20点程度出土している。329は土師質土器椀。330は土師質土器羽釜。おそらく近世に普遍化する茶釜形の鍔部であろう。331は肥前系陶器の溝縁皿口縁部片。

遺構の先後関係と出土遺物より、17世紀前葉～18世紀前半の幅で捉えられる。(溝上)



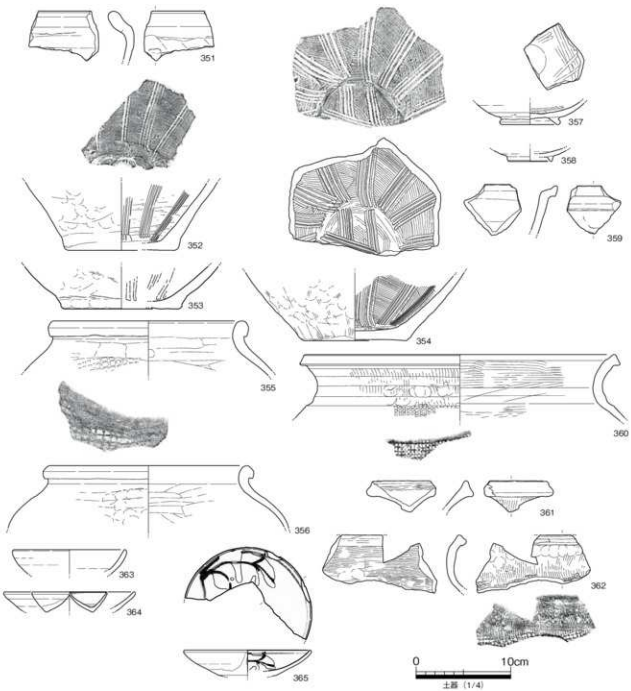
第158図　3-3区 SD3042 SD3043 断面図



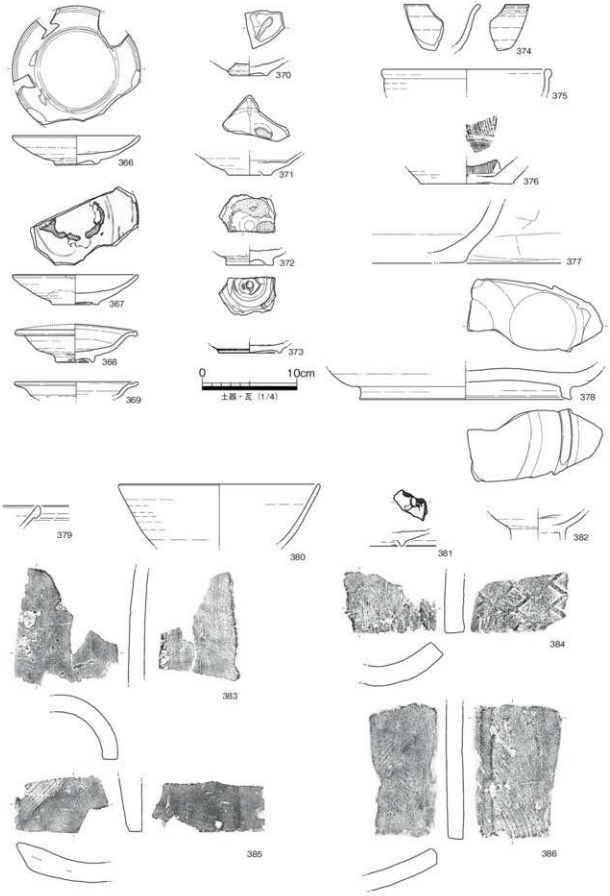
第 159 図　3-3 区 SD3042 出土遺物 1

3-3 区 SD3042・SD3043（第 157 ～ 165 図）

ともに 3-3 区東部で検出した南北溝である。南北とも調査区外に延長し、隣接する調査区では確認できていない。SD3042 が SD3043 に先行する溝である。重複関係より、SD1001、SD3047 が SD3042 より先行する。検出面幅 1.2 m前後、残存深 0.34 ～ 0.8m 前後をそれぞれ測り、断面形はＵ字状ないしは概ね逆台形状を呈する。流路方向は N28.06° W に配され、条里型地割の方向に概ね合致し、坪界溝に相当する。溝底面の標高は北端部で 20.71 m前後、南端部で 20.81 m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は、黒褐色や灰色系の粘土が複数層に分かれて堆積している。d-d′付近では礫が多く検出された。礫の中には、395 ～ 398 で図示したような石製品が出土しており、人工的に礫が設置された可能性が考えられる。

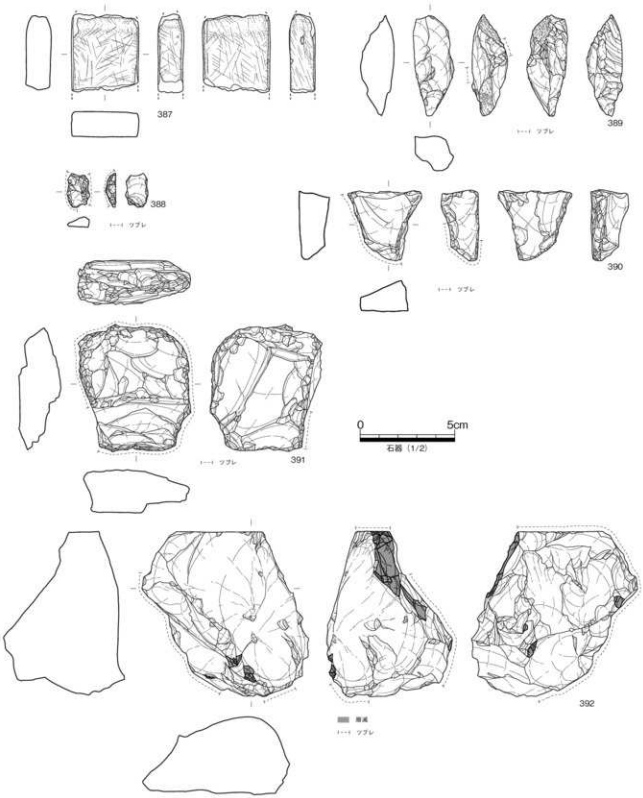


第 160 図　3-3 区 SD3042 出土遺物 2



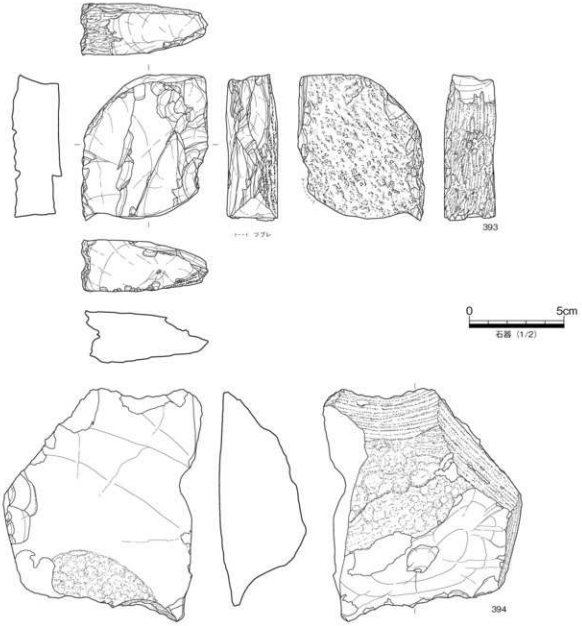
第 161 図　3-3 区 SD3042 出土遺物 3

SD3043はSD3042に重なるように検出した南北溝である。全体のほとんどが調査区外に延長し隣接する調査区では確認できていない。検出面幅0.3m以上、残存深0.2m前後、断面形は不詳である。流路方向はN28.39° Wに配され、条里型地割の方向に概ね合致し、坪界溝に相当する。埋土は灰黄色砂混粘土の単層であった。



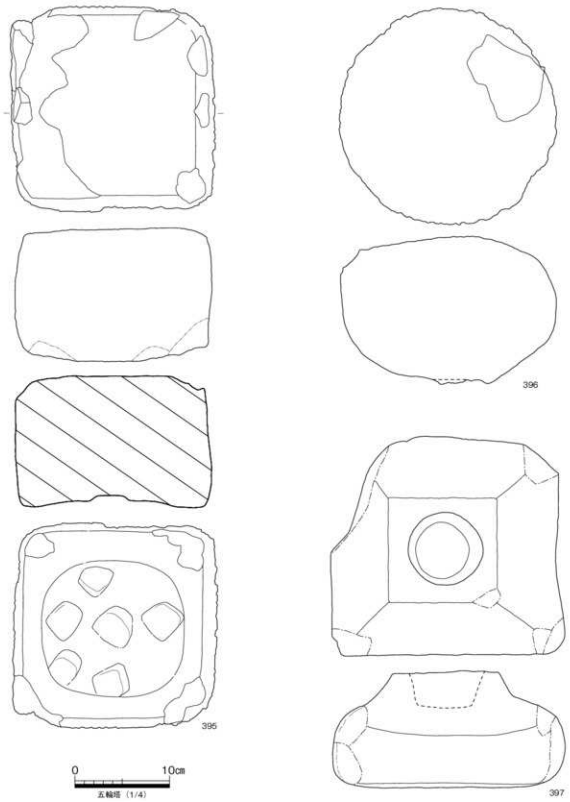
第162図　3-3区 SD3042 出土遺物4

遺物は図示した以外に、土師質土器擂鉢・足釜・把手付鍋・鍋、備前焼片、肥前系溝縁皿片、青磁・白磁片、平瓦、丸瓦などがコンテナ 1 箱程度出土したほか、ウシやウマの獣骨 (第 4 章第 1 節参照) が出土している。332 ～ 401 は SD3042 から出土した。332 は弥生土器の底部。底部の形より鉢の可能性も想定できる。体部外面は磨滅が激しい。333・334 は土師質土器皿。333 は外傾度が強く短い口縁部を持つ。佐藤編年中世Ⅱ-1 ～ 2 期で 12 世紀後半～ 13 世紀初頭。334 は全体的に薄手で比較的長い口縁部と考えられ、中世後期の可能性がある。ともに底部回転ヘラ切り。335 は土師質土器杯。336 は土師質土器椀。全体的に磨滅している。332 は弥生時代の遺物が、333 ～ 336 は中世の遺物が混入していると考えられる。337 ～ 344 は土師質土器の足釜。長い口縁部と短い鍔部をもつ 340・341 は楠井Ⅱ-2 期、内傾するがまだ比較的短い口縁部をもつ 339 は楠井Ⅱ-3 期、短い口縁部と瘤状の鍔部をもつ 337・338・342 は楠井Ⅲ期にそれぞれ該当する。345 は十能形鍋 (手焙烙)。内面には加熱による変色が認められる。346 は土師質土器把手付鍋。347・348 は土師質土器鍋。いずれも中讃地域に普遍的なものであ



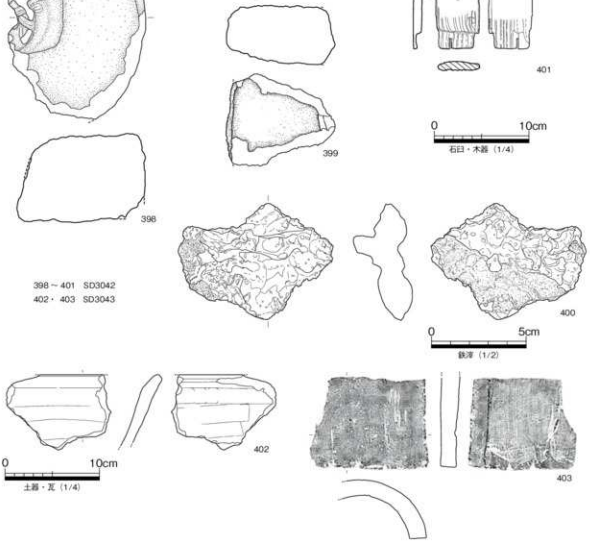
第 163 図　3-3 区 SD3042 出土遺物 5

るが、348 は口縁端部に平坦面を作り、鉄鍋に似た形状にする折衷的なものである。349 ～ 354 は土師質土器擂鉢。350 は体部内面に一部煤が付着する。349 は本書編年の D 期 (Ⅴ型式)、350 は本書編年の A ～ B 期 (Ⅱ型式) に相当する。351 は口縁部。本書編年の D 期 (Ⅴ型式) に相当する。352 ～ 354 は底部。354 のみ底部まで 4 条 1 束の卸目を施す。355・356 は土師質土器甕。355 は口縁部をヨコナデ、体

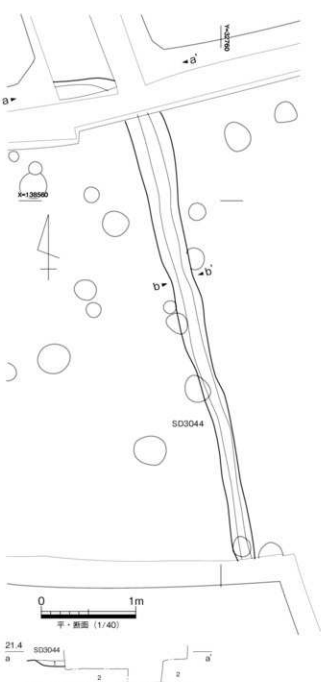


第 164 図　3-3 区 SD3042 出土遺物 6

部外面はタタキ目後板ナデ、体部内面は板ナデで調整する。356 は口縁部を外に折りたたむように成形する。国分寺楠井遺跡産である。357 は西村型黒色土器椀。底部外面中央に回転ヘラ切り痕、体部外面下半に回転ヘラ削り痕が見られる。また体部内面には 4 分割のヘラ磨きが施される。358 は土師質土器椀。359 は十瓶山窯系須恵器鉢。360 ～ 362 は亀山窯系須恵器甕。上下に拡張した口縁端部をもち、頸部外面に縦位の粗いハケ目、体部外面に格子叩き目を施す。荻野繁春編年Ⅴ～Ⅶ期 (14 世紀前葉～ 15 世紀後葉) に該当しよう。363 ～ 371 は肥前系陶器皿。口縁部が内湾する 363 ～ 367 と、溝縁をなす 368・369 の 2 者がある。見込みを確認できるものは全て砂目積である。釉は灰釉 (透明釉) を主体とするが、371 のように灰釉と鉄釉を掛け分けたもの、内面に鉄絵による草花文状の施文をする 365・367、界線を施す 366 がある。372 は肥前系陶器椀。高台内に「丸に大」の墨書が見られる。見込みに砂目積が残る。373 は瀬戸美濃系陶器灰釉皿。374 は肥前系陶器椀。内外面ともに薬灰釉を施すが焼成不良である。



第 165 図　3-3 区 SD3042 SD3043 出土遺物



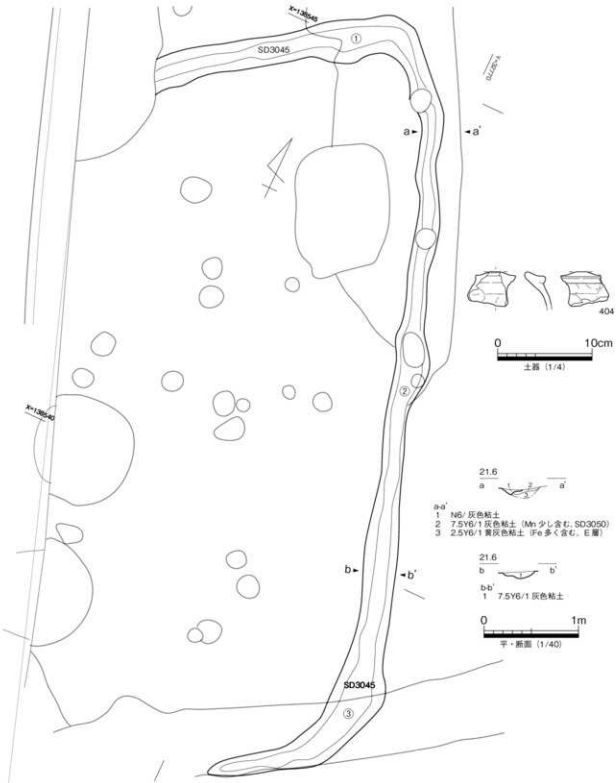
第166図　3-4区SD3044平・断面図

375は肥前系陶器鉢。376は備前焼擂鉢底部片。377は備前焼甕。378は備前焼大皿。高台は貼り付けで、見込みに胡麻と牡丹餅が交互に見られる。379は中国産白磁Ⅳ類(大宰府分類)(山本2000)。380は肥前系磁器鉢で、高松城様相3頃であろう。381はくすんでにじむ呉須から中国産青花皿と見るが、透明な釉調からあるいは肥前系磁器の可能性もある。382は中国産白磁椀Ⅳ類(大宰府分類)。見込みに沈線による界線が施される。383は丸瓦。焼成は土師質である。384は平瓦。384の凸面には1.5cm角の粗い斜格子叩き目が見られる。須恵質である。385は平瓦で、凹面の糸切り痕、凸面の縄叩き目、側縁の端部は、丁寧なナデ調整により消去される。焼成は堅緻な須恵質であり、古代前期の所産であろう。387は流紋岩製の砥石。面として4面ともに使用されていた痕跡が残る。先端にむかってやや薄くなるように加工する。388は赤色チャート製の火打石。両側面にツブレはあるものの、現存長が1.8cmと小さいため、火打石の剥片の可能性がある。389～394はサヌカイト製の火打石。389は使用痕跡が確認できる個所が少ない。390は一片のみに使用痕跡が集中して残る。391・392は火打石の周縁部を囲うように使用痕跡が確認できる。393の使用痕跡は確認できるものの乏しい。片面には未加工の面が残る。394は一部に加工痕跡が残るが、加工後の石面の風化具合が異なり、幾度か使用を試みた可能性がある。395～397は角礫凝灰岩(天霧石)の五輪塔部材。395は地輪。下面に刳り込みを施す。地輪の幅が20.8cmであり、天霧石製の五輪塔としては小型のものである。396は空輪。397は火輪。一部が大きく欠損するが、それ以外の目立った欠損はない。凝灰岩の中に混入する礫は径5～10mm程度である。398・399は角礫凝灰岩(天霧石)の石臼。398は芯棒孔、芯棒孔を中心に下臼のふくみが確認できる。2分の1程度破損しており、下臼のふくみ、外縁の一部に煤が付着する。399は石臼片。上下面、外周面、断面片側に煤の付着、被熱痕を確認することができる。激しく破損しており上臼か下臼の判別

はつかない。400 はガラス質滓。一部に強い熱影響を受けてガラス質化・還元化した部分が認められる。この遺物に関しては化学分析を行っており、分析結果は第 4 章第 8 節に掲載した。401 は板材。

402・403 は SD3043 から出土した。402 は土師質土器鍋。体部外面に煤が付着する。403 は丸瓦。

黒色土器や須恵器など中世前期頃の遺物は遺存状況が悪く細片である。したがってこれらは、直接的に遺構の埋没時期を示すものではない。肥前系陶器が多いことを踏まえると 17 世紀前半～中葉が最終



第 167 図　3-3 区 SD3045 平・断面図

埋没時期を示していると考えられよう。また中世後期の亀山系須恵器や土師質土器足釜の存在から、14～15世紀にまで溝の開削時期が遡る可能性がある。(溝上)

3-4区 SD3044（第166図）

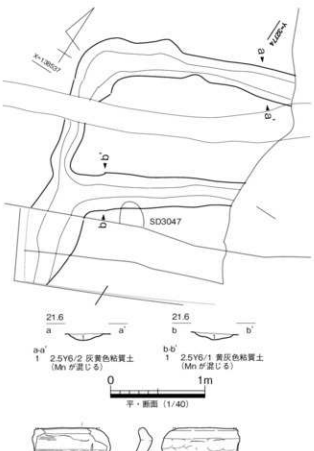
3-4区の中央からやや東寄りで検出した南北溝である。北端は3-4区北側拡張区で西に屈曲する。南端は調査区外へ延長するが、隣接する調査区からは確認されていない。SP3637、SP3639、SP3642、SP3643はSD3044を掘削後に検出した。検出面幅0.2～0.4m、残存深0.06mをそれぞれ測り、断面形は皿状を呈する。流路方向はN13.44°Wに配され、条里型地割の方向よりやや北へ振れる。溝底面の標高は北端部で21.30m前後、南端部で21.38m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は単層で褐灰～灰黄褐色シルトが堆積する。

遺物は図示していないが、備前焼片と器種不詳の土師質土器片が数点出土している。出土遺物より、近世以降の遺構と考えられるが、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

3-3区 SD3045（第167図）

3-3区中央部で検出した溝である。溝は3-3区西壁付近を通っていたと推察できるが、SK3028に切られ西壁付近の溝の流路は確認できない。調査区の中央部付近で南に流路を変えるが、SD1001と重なる付近で、流路を再度西へ変える。重複関係よりSK3028、SP3647、SP3648、SP3685より先行し、SD1001、SD3050、SP3710より後出する。検出面幅0.2～0.32m、残存深0.06mをそれぞれ測り、断面形は浅い皿型を呈する。流路方向は北部の西から屈曲部まではN54.97°E、南北方向はN16.39°Wに配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高はSK3028付近で21.14m前後、SD3046付近で21.48m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は単層で灰色粘土が堆積する。

遺物は図示した以外に、土師質土器片と用途不明土器片が10点程度出土している。404は土師質土器足釜ないし把手付鍋の口縁部片である。本書編年B期(1-Ⅱ型式)に相当する。出土遺物より、中世後期15～16世紀頃に位置付けられる。(溝上)



第168図　3-3区 SD3047 平・断面図

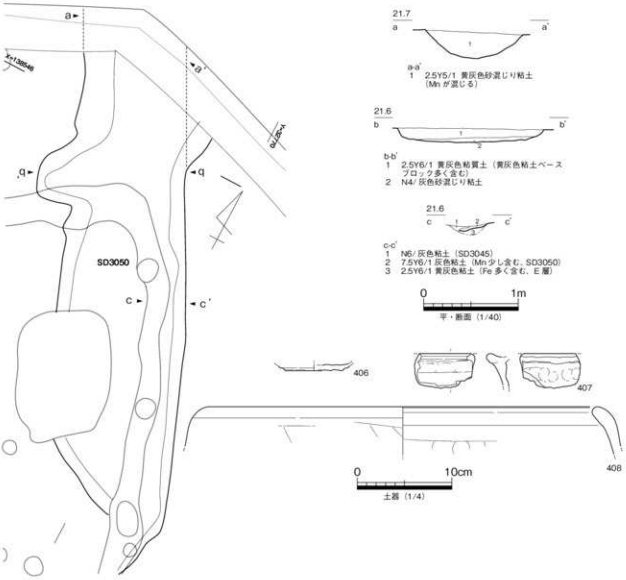
3-3 区 SD3047（第 168 図）

3-3 区の南東部で検出した。北端で二股に分かれて東へ直角に屈曲する。重複関係より SD3042 に先行する溝である。検出面幅 0.5m 前後、残存深 0.08m をそれぞれ測り、断面形は皿状を呈する。流路方向は南北方向が N15.7° W、東西方向は N64.43° E に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は a-a' 断面付近で 21.13 m前後、b-b' 断面の東側 SD3042 に接する付近では 21.09 m前後を測る。西側の南北溝の部分では、東に曲がり a-a' につながる部分は 21.17 m前後、b-b' につながる部分は 21.47 m前後を測る。高低差より北へ流下し、その流路は溝が曲がるのに従い東へ流下していた可能性が高い。埋土は単層で黄灰～灰黄色粘質土が堆積する。

遺物は図示した以外に擂鉢等の土師質土器片が 5 点程度出土している。405 は土師質土器擂鉢。口縁部は内側に屈曲しており、外端面はナデにより明確な面をなす。本書編年Ｂ～Ｃ期（Ⅲ型式）に相当する。SD3042 との切り合い関係を踏まえると中世後期、おそらく 15 ～ 16 世紀の遺構と考えられる。（溝上）

3-3 区 SD3050（第 169 図）

3-3 区北東部で検出した南北溝である。北端は調査区外へ延長し、隣接する調査区では確認できない。



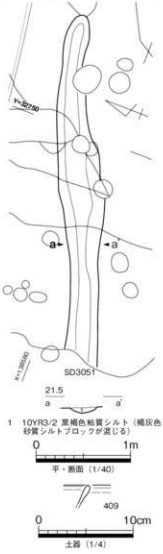
第 169 図　3-3 区 SD3050 平・断面図

南端は調査区内において溝の延長部が確認できなくなる。重複関係よりSD3045、SK3024、SP3647、SP3748に先行し、SD3054、SP3710に後出する。検出面幅1.56m、残存深0.16～0.26mをそれぞれ測り、断面形は概ね皿状を呈する。流下方向はN26.57°Wに配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は北端部で21.36m前後、南端部で21.44m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は記録位置により相違を認めるが、単層もしくは2層に細分され主に黄灰色の粘質土や灰色粘土が堆積していた。

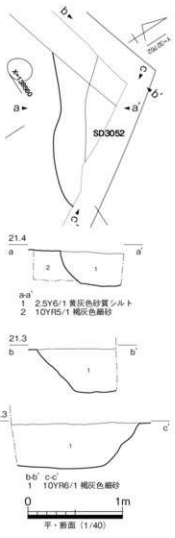
遺物は図示した以外に、土師質土器の小片、備前焼片が10点程度出土している。406は土師質土器皿。底部外面は回転ヘラ切り。407は土師質土器の把手付鍋。口縁部の一部が欠損している。408は土師質土器火鉢。口縁部は磨滅している。切り合い関係から中世後期の遺構であろう。(溝上)

3-4区 SD3051（第170図）

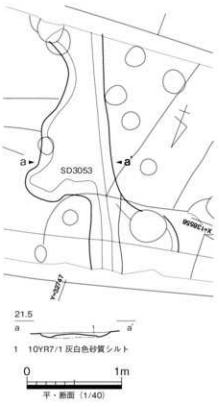
3-4区の遺構西部で検出した東西溝である。東端は遺構内で途切れ、西端はSD3053に切られる。重複関係よりSD3056、SD3057、SD3059、SP3704、SP3745より後出しSD3053、SP3687、SP3692、SP3704より先行する。検出面幅0.36～0.42m、残存深0.06mをそれぞれ測り、断面形は皿状を呈する。流下方向はN68.63°Eに配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は東端部で21.33m



第170図　3-4区 SD3051
平・断面図、出土遺物



第171図　3-4区 SD3052
平・断面図



第172図　3-4区 SD3053
平・断面図

前後、西端部で 21.35 m前後をそれぞれ測り、高低差はほとんどない。埋土は黒褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は図示した以外に、土師質土器の小片が 10 点程度出土している。409 は土師質土器杯の口縁部。内面は磨滅している。出土遺物より中世前期、12 ～ 13 世紀頃の時期が想定される。(溝上)

3-4 区 SD3052（第 171 図）

3-4 区北隅で検出した溝である。南側の掘方しか検出しておらず、溝の全形は不明である。検出面幅 0.8m 以上、残存深 0.44m 前後をそれぞれ測り、断面形は逆台形状を呈する。流下方向は N57.93° E に配され、条里型地割の方向に合致しない。溝底面の標高は溝の中央部で 20.85 m前後を測るが、部分的な検出のため流路方向までは確定できない。埋土は褐灰色系砂質シルト～細砂の単層であった。

遺物は図示していないが、土師質土器の小片、陶器片、磁器片 (青磁片か) が数点出土している。出土遺物より近世以降の遺構と考えるが、詳細な時期は不明である。(溝上)

3-4 区 SD3053（第 172 図）

3-4 区西部で検出した南北溝である。流域は不定形で、南北端とも調査区外へ延長する。重複関係より SP3696 より先行し、SK3031、SD3051、SD3058、SP3706、SP3759、SP3738 より後出する。検出面幅 0.38 ～ 0.8 m、残存深 0.06 mをそれぞれ測り、断面形は概ね皿状を呈す。流下方向は N35.1° W に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は北端部で 21.44 m前後、南端部で 21.39 m前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下していた可能性が高い。埋土は灰白色砂質シルトの単層である。

遺物は出土しておらず、切り合い関係より 13 世紀以降に位置付けられるものの、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

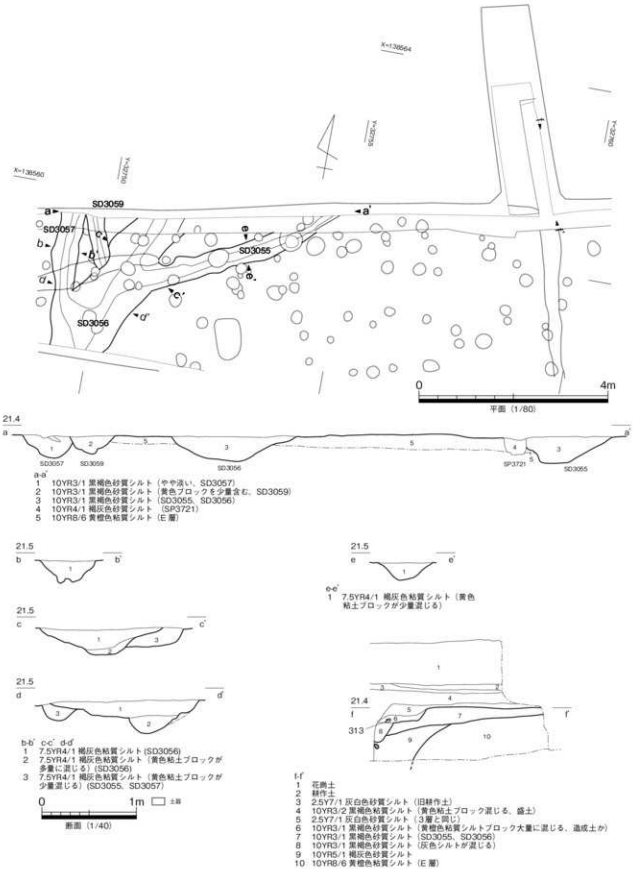
3-4 区 SD3055（第 173 図）

3-4 区西部で検出した東西溝である。東端は調査区外へ延長し、西端は SD3056 に切られる。重複関係より、SP(3671・3673・3675・3676・3683・3721) より後出し、SP3722 より先行する。検出面幅 0.42m 前後、残存深 0.18 mをそれぞれ測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。流下方向は N64.59° E に配され、条里型地割の方向に合致しない。溝底面の標高は東端部で 21.39 m前後、SD3056 と合流する西端部で 21.195 m前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下していた可能性が高い。埋土は黒褐～褐灰色砂質シルトの単層であった。

遺物は出土しておらず、SD3056 に切られることから 13 世紀以前に位置付けられるものの、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

3-4 区 SD3056（第 173 図）

3-4 区西部で検出した南北溝である。南北端ともに調査区外へ延長する。重複関係より SD3059、SD3057、SD3055、SP3761、SP3751 より後出し、SD3051、SP(3684・3686・3687・3688・3689・3690・3691・3692・3704) より先行する。検出面幅 1.0 ～ 1.6 m、残存深 0.24 ～ 0.36m をそれぞれ測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。流下方向は N19.71° E に配され、条里型地割の方向に合致しない。溝底面の標高は北端部で 21.13 m前後、南端部で 21.12 m前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下していた



第 173 図　3-4 区 SD3055 SD3056 SD3057 SD3059 平・断面図

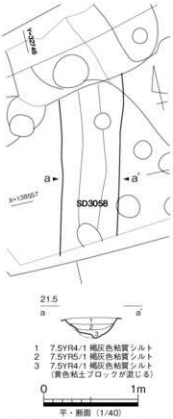
可能性が高い。埋土は記録位置により相違を認めるが、単層もしくは2層に細分され主に黒褐色砂質シルトや褐灰色粘質シルトが堆積していた。

遺物は出土しておらず、SD3051 に切られることから 13 世紀以前に位置付けられるものの、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

3-4 区 SD3057（第 173 図）

3-4 区西部で検出した南北溝である。北端は調査区外へ延長し南端は SD3056 に切られる。重複関係より SD3051、SD3056、SP3692 より先行し、SD3059 より後出する。検出面幅 0.38 ～ 0.56m、残存深 0.18 ～ 0.22 m それぞれ測り、断面形は U 字状を呈する。流路方向は N4.09 ° W に配され、条里型地割の方向に合致しない。溝底面の標高は北端部で 21.16 m前後、中間部で 21.15 m前後、SD3051 と合流する南端部で 21.18 m前後をそれぞれ測り、底面の標高は安定しない。周辺の溝の流下方向を考慮すると南に流下していたと想定する。埋土は黒褐～褐灰色シルトが単層で堆積する。

遺物は図示していないが、器種不詳の土師質土器の底部片のみが出土している。SD3051 に切られることから、13 世紀以前に位置付けられるものの、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

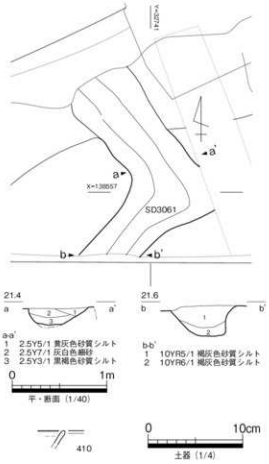


第 174 図　3-4 区 SD3058 平・断面図

3-4 区 SD3058（第 174 図）

3-4 区西端部で検出した南北溝である。北端は SK3031 に切られ、南端は調査区外へ延長する。重複関係より、SD3053、SP3740、SP3741 より先行する。検出面幅 0.6 m、残存深 0.22 m をそれぞれ測り、断面形は U 字状を呈する。流下方向は N12.45° E に配され、条里型地割の方向に合致しない。溝底面の標高は北端部で 21.19 m前後、南端部で 21.20 m前後をそれぞれ測り、高低差があまりない。埋土は3層に細分化されているが、概ね褐灰色粘質シルトが堆積する。

遺物は出土しておらず、SK3031 に切られることから 13 世紀以前に位置付けられるものの、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

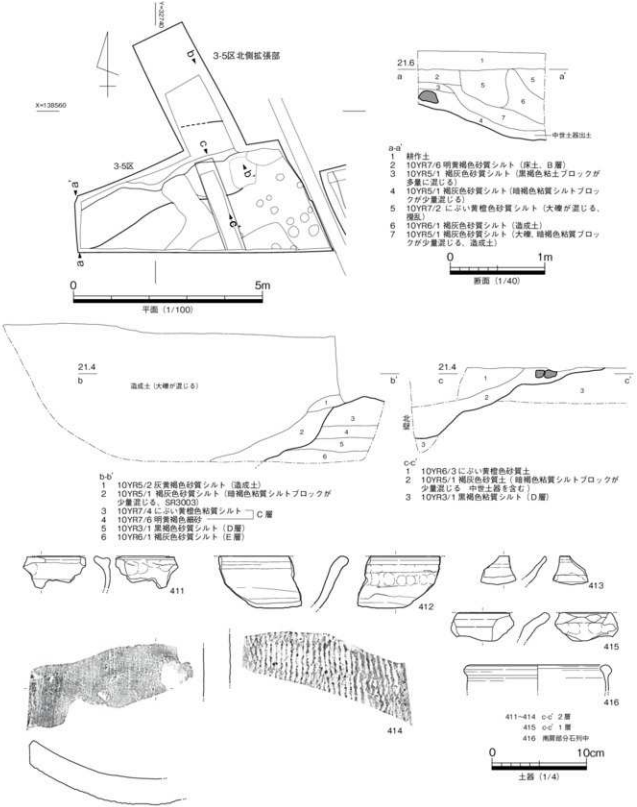


第 175 図　3-5 区 SD3061 平・断面図、出土遺物

3-4 区 SD3059（第 173 図）

3-4 区西部で検出した南北溝である。北端は調査区外へ延長し南端は SD3056 に切られる。重複関係より

SD3051、SD3056、SD3057、SP3704 より先行する。検出面幅 0.36m、残存深 0.18m をそれぞれ測り、断面形は U 字状を呈する。流下方向は N21.16° W に配され条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は北端部で 21.22 m前後、SD3056 と合流する南端部で 21.26 m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は黒褐色砂質シルトの単層であった。



第176図　3-5区 SR3003 平・断面図、出土遺物

遺物は出土しておらず、SD3056 に切られることから 13 世紀以前に位置付けられるものの、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

3-5 区 SD3061（第 175 図）

3-5 区西部で検出した溝である。溝は中央部で屈曲し、北部と南部が調査区外へ延長する。重複関係より SR3003 より後出する。検出面幅 0.5 ～ 0.66m、残存深 0.18 m前後をそれぞれ測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。流下方向は北部から南東方向へは N36.34° W、屈曲点から南西方向へは N39.81° E に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は北端部で 21.22 m前後、SD3056 と合流する南端部で 21.26 m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は記録位置により相違を認めるが、2 層もしくは 3 層に細分され主に灰白～褐灰色砂質シルトや黒褐色砂質シルトが堆積していた。

遺物は図示した以外に、青磁、土師質土器片が 10 点程度出土している。410 は土師質土器杯。全体的に磨滅している。SR3003 との切り合い関係より近世の遺構の可能性を想定する。(溝上)

⑤自然河川

3-5 区 SR3003（第 176 図）

3-5 区北部で検出した大東川の旧流路と考えられる自然河川である。西部は調査区外へ延長し、東部は攪乱によって延長が確認できない。SR3003 が東部で確認できるのは 3-5 区の北側拡張部東壁の壁断面であるが、流路の大部分が造成土によって消失しており北側への延長も確認できない。重複関係より SD3061 より先行する。検出面幅 2.0 m以上、残存深約 0.34 m以上をそれぞれ測り、断面形は概ね逆台形を呈する。流下方向は N 63.31° E である。溝底面の標高は東端部で 20.47 m前後、西端部で 20.96 m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が高い。埋土は記録位置によって相違を認めるが、1 層もしくは 3 層に細分され褐灰色砂質シルトが堆積する。砂質シルト中の暗褐色粘質シルトブロックの混入量によって分層を行っている。また、最下層から中世土器が出土している。

遺物は図示した以外にも、灰色砂質土層から陶器片 (備前焼、陶器片)、土師質土器足釜脚部・擂鉢、灰色砂質土層下部から土師質土器足釜脚部が 80 点程度出土している。411 は土師質土器の把手付鍋。本書編年 B 期 (1- Ⅲ型式) に相当する。412・415 は土師質土器の鍋口縁部。口縁部から底部まで、各部位間の屈曲が緩くなった浅い全形を持つ。体部外面にすすが付着する。413 は肥前系陶器皿。414 は平瓦。古代の所産であろう。416 は肥前系陶器の鉢。内外面ともに施釉する。出土遺物より、17 世紀代の遺構の可能性を想定する。(溝上)

4　柱穴（第177～185図、第2・3表）

柱穴は、第1遺構面において約820基を検出した。大部分は残存深10cm以下であり図示困難なことから、本報告では比較的残存深の深いもの、遺物の出土したものを中心に掲載した。前述のSA3201～3207、SB3201～3205以外にも柵列・建物等が存在した可能性があるが、現状では平面図・写真からの復元は困難である。

埋土は灰白色シルト主体と黄灰色砂質シルトを主体とするものに大別でき、混入するシルトブロックの特徴からさらに2～3に細分可能である。

遺物は、建物等を構成しない柱穴出土の遺物のうち、特に必要なもののみを掲載した。

個々の遺構の詳細は煩雑となるため第2･3表へ整理し、以下では出土遺物のみ詳細を記載する。(益崎)

2区柱穴

417は2-1区SP2015出土の土師質土器皿。「口縁部→体部ナデ」技法に伴い、先端の尖る口縁部直下に体部の回転ナデが被るように接する特徴的な形態を持つ。浜ノ町遺跡での編年を援用すると、15世紀(6～7段階)頃と考えられる。418・419は2-1区SP2013から出土した。418は土師質土器杯。底部は回転ヘラ切り。佐藤編年中世Ⅱ-1～2期(12世紀後半～13世紀初頭)。419は吉備系土師質土器椀。草戸千軒町遺跡(鈴木1996)でのⅠ期後半(13世紀後半頃)に相当する。(蔵本)

3区柱穴

420は3-1区SP3245出土の弥生土器の甕底部である。全体的に磨滅しているが、外面はタタキ目、内面は板ナデが確認できる。421は3-1区SP3339出土の肥前系陶器椀である。高松城様相1～2、17世紀前葉のものと考えられる。422は3-1区SP3384出土の土師質土器足釜口縁部片である。口縁部はナデ、体部外面は指オサエ後ナデ、内面はハケ目で調整する。423は3-1区SP3437出土の土師質土器杯である。424は3-1区SP3544出土の肥前系陶器皿である。内面に鉄絵の界線を伴う。(溝上)

425は3-2区SP3010出土の土師質土器杯の口縁部片。426は3-2区SP3034出土、427は3-2区SP3054出土の土師質土器である。ともに杯の底部片で、底部は回転ヘラ切りである。428は土師質土器擂鉢または捏鉢の口縁部片。口縁端面は回転ナデ調整により凹面をなす。取り上げ時の錯誤があるが、3-2区SP3083またはSP3084からの出土と考えられる。429は3-2区SP3100、430は3-2区SP3141出土の土師質土器擂鉢である。口縁端部が丸く、端部下に端面状の弱い凹面をもつ。本書編年のB～C期(Ⅲ型式)に相当する。431は3-2区SP3143出土の鉄製毛抜き。432は3-2区SP3143出土の土師質土器杯の底部片で、底部は回転糸切りである。433は3-2区SP3144出土で土師質土器足釜口縁部の小片である。剝落が激しいが口縁端部に面をもつようにみえる。434は3-2区SP3183出土で肥前系陶器皿。435は3-2区SP3195出土の土師質土器皿である。底部は回転ヘラ切りである。436・437は3-2区SP3203出土の土師質土器杯で、外傾度の強い口縁部をもち、起伏ある器面であることから、佐藤編年中世Ⅱ-1期(12世紀後半)の所産と見られる。438は3-2区SP3211出土の土師質土器足釜の口縁部片である。口縁端部は丸く、鍔部は短い。断面の観察から、体部－口縁部の成形ののちに、粘土紐を接合して鍔部を成形している。(益崎)

439は3-4区SP3633出土の土師質土器の壺底部である。体部外面は磨滅しているものの、板ナデの跡が確認できる。体部内面はナデによる調整が確認できる。440は3-4区SP3690出土の土師質土器の

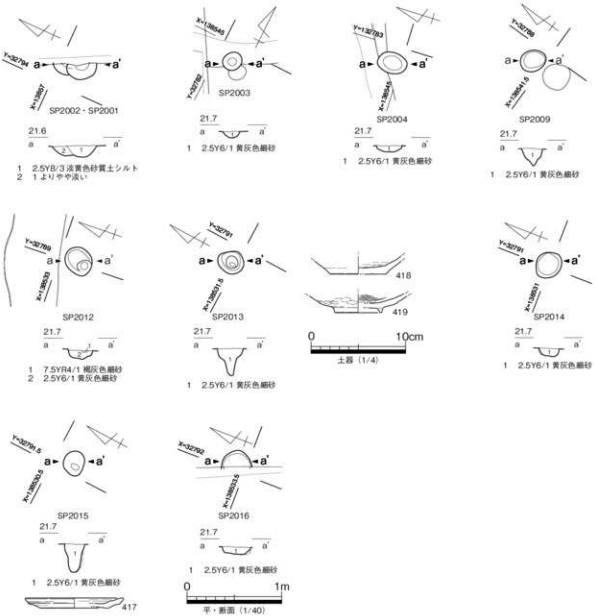
第２表　２・３区ピット一覧

区名	ピット番号	平面形	規模 (cm)（長軸×短軸）	深さ (cm)	掲載遺物	その他の出土遺物	その他
2-2	SP2001	円形か	31 ～	12		なし	SP2002 より後出
2-2	SP2002	円形か	15 ～	10		なし	SP2001 より先行
2-1	SP2003	円形	20	6		なし	
2-1	SP2004	楕円形	32 × 22	6		なし	
2-1	SP2009	円形	30	18		なし	
2-1	SP2012	円形	36	10		土師質土器杯片	
2-1	SP2013	円形	29	30	418·419		
2-1	SP2014	円形	32	10		なし	
2-1	SP2015	円形	28	30	417		
2-1	SP2016	円形か	31 ～	8		なし	
3-1	SP3243	楕円形	32 × 24	40		土器小片	
3-1	SP3245	円形	28	46	420	土器小片	
3-1	SP3248	円形	30	34		土師質土器小片	
3-1	SP3261	円形	20	10		土師質土器小片	
3-1	SP3264	楕円形か	30 × 24	26		須恵器甕片	
3-1	SP3266	楕円形	28 × 20	12		土師質土器小片	
3-1	SP3275	円形	32	5		なし	SP3276 より後出
3-1	SP3276	円形	20	4		なし	SP3275 より先行
3-1	SP3279	円形	24	28		土師質土器小片	
3-1	SP3284	円形	32	56		土器小片　焼土塊	
3-1	SP3291	円形	28	6		土器小片	
3-1	SP3292	楕円形	36 × 32	28		土師質土器小片	
3-1	SP3293	円形	32	40		土器小片	
3-1	SP3294	円形	24	36		土師質土器杯片	
3-1	SP3297	円形	26	20		土師質土器杯片	
3-1	SP3299	円形	22	44		なし	
3-1	SP3300	円形	24	30		土器小片	SP3303 より後出
3-1	SP3303	円形か	20 × 8	20		なし	SP3300 より先行
3-1	SP3304	楕円形	38 × 32	46		土器小片	
3-1	SP3310	楕円形	28 × 18	6		土器小片	
3-1	SP3312	円形	20	36		なし	
3-1	SP3319	楕円形	26 × 20	14		なし	
3-1	SP3323	円形	32	12		土師質土器杯片	
3-1	SP3333	円形	14	6		なし	
3-1	SP3336	円形	28	20		土器小片	
3-1	SP3338	楕円形	32 × 26	52		土器小片	
3-1	SP3339	円形	44	12	421	土師質土器杯小片	
3-1	SP3346	円形	22	12		土器小片	
3-1	SP3347	円形	26	6		なし	
3-1	SP3351	円形	30	2		土器小片	
3-1	SP3352	円形	32	34		土師質土器杯底部	
3-1	SP3354	円形	20	26		土器小片	
3-1	SP3355	円形	32	9		なし	
3-1	SP3360	楕円形	38 × 32	2		なし	
3-1	SP3384	円形	28	38	422	土師質土器小片	
3-1	SP3389	楕円形	30 × 20	26		土器小片	
3-1	SP3403	楕円形	30 × 24	16		なし	
3-1	SP3409	円形	28	32		なし	
3-1	SP3421	円形	20	36		土師質土器杯片	
3-1	SP3422	楕円形	40 × 32	26		土器小片	
3-1	SP3426	楕円形	28 × 22	32		土器小片	
3-1	SP3432	楕円形	32 × 24	20		なし	
3-1	SP3435	円形	26	38		土器小片	

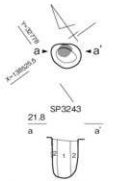
第３表　３区ピット一覧

区名	ピット番号	平面形	規模(cm)（長軸×短軸）	深さ(cm)	掲載遺物	その他の出土遺物	その他
3-1	SP3437	円形	20	16	423	土器小片	
3-1	SP3442	楕円形	30 × 22	14		なし	
3-1	SP3443	円形	26	30		なし	
3-1	SP3460	円形	30	14		土師質土器小片	
3-1	SP3544	円形	52	12	424	須恵器片	
3-1	SP3545	円形	40	8		なし	
3-2	SP3001	楕円形	26 × 24	18		土師質土器小片	
3-2	SP3004	円形	32	48		土師質土器小片	
3-2	SP3005	円形	28	20		土師質土器杯底部小片	
3-2	SP3010	円形	22	20	425	土師質土器小片	
3-2	SP3013	円形	28	40		須恵器体部片　土師質土器小片	
3-2	SP3016	楕円形	34 × 28			弥生土器又は土師器甕片	
3-2	SP3018	円形	30			土師質土器小片	
3-2	SP3019	円形	28	40		なし	
3-2	SP3034	円形	24	28	426	土器小片	
3-2	SP3047	円形	28	36		土師質土器杯小片	
3-2	SP3048	円形	22	50		土師質土器小片	
3-2	SP3053	円形	16	10		なし	
3-2	SP3054	円形	26	34	427	土師質土器小杯片	
3-2	SP3057	楕円形	34 × 28	30		土師質土器小片	
3-2	SP3066	円形	30	22		土師質土器体部片	
3-2	SP3067	円形	34	42		土師質土器杯小片	
3-2	SP3083	隅丸方形	64	38	428	土師質土器杯小片	SP3084 より後出する
3-2	SP3084	不整円形	48	40	428		SP3083 より先行する
3-2	SP3085	円形	28	44		土師質土器杯底部小片	
3-2	SP3090	円形	30	36		土師質土器小片	
3-2	SP3094	円形	28	34		土師質土器小片	
3-2	SP3098	不整円形	44	28		土器小片	
3-2	SP3100	円形	22	22	429	土師質土器小片	
3-2	SP3130	円形	38	20		土師質土器体部片	
3-2	SP3135	円形	20	44 ～		木片	
3-2	SP3141	楕円形	40 × 30	32	430		
3-2	SP3143	楕円形	46 × 30	10	431 432	土師質土器小片	
3-2	SP3144	円形	40	48	433	土師質土器脚体部片　土師質土器小片	
3-2	SP3146	楕円形	50 ～ × 30 ～	32		土師質土器小片	
3-2	SP3151	円形	38 × 36	16		土師質土器体部片　円盤状に整形	
3-2	SP3152	円形	36	34		土師質土器杯底部・脚小片	
3-2	SP3164	円形	38	54		須恵器体部片	
3-2	SP3165	楕円形	38 × 32	24		なし	
3-2	SP3170	円形	22	16		なし	
3-2	SP3173	円形	26	50		土器小片	
3-2	SP3179	円形	26	40		土器小片	
3-2	SP3183	円形	22	42	434	土器小片	
3-2	SP3184	楕円形	42 × 24	20		土器小片	SP3185 より後出する
3-2	SP3085	楕円形	40 × 20 ～	24		なし	SP3184 より先行する
3-2	SP3195	円形	12	10	435	土師質土器杯片　須恵器体部片	
3-2	SP3203	円形	24		436 437	土師質土器小片	
3-2	SP3211	円形	20		438		
3-4	SP3633	楕円形	36 × 22	22	439	土師質土器椀高台部	
3-4	SP3690	円形	32	52	440	土師質土器杯片	
3-4	SP3730	円形	24	7	441	土師質土器体部片	
3-4	SP3732	円形	18	8		土器小片	

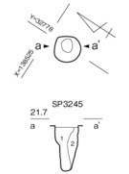
灯明皿である。口縁～体部は回転ナデで調整し、底部は静止糸切り。口縁部を中心に煤の付着が認められる。441 は 3-4 区 SP3730 から出土した土師質土器の焙烙 (岡本系) である。口縁部の直径を復元すると約 44cm ある。体部外面には煤が一面に付着する。(溝上)



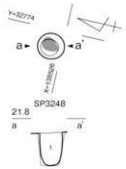
第 177 図　2 区ピット平・断面図



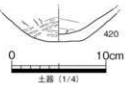
1　10YR6/1 褐灰色シルト混じり極細砂（灰黄色シルトをブロック状に含む）
2　10YR6/1 褐灰色シルト混じり細砂（白色中粒砂を少量含む）

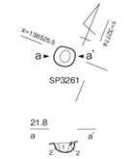


1　10YR5/1 褐灰色砂質シルト
2　10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト



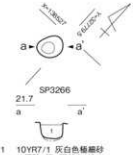
1　2.5Y6/1 黄灰色シルト混じり極細砂～細砂（灰白色シルトブロックを含む）



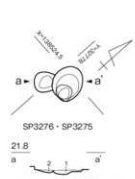


1　10YR6/1 褐灰色シルト混じり細砂（白色中粒砂を含む）
2　10YR7/1 灰白色シルト混じり細砂（Fe・Mn 斑紋あり）

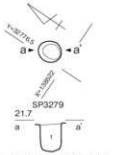
1　10YR6/1 褐灰色シルト混じり極細砂（ベースブロックを少量含む）
2　10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂



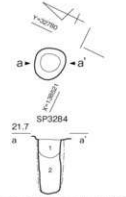
1　10YR7/1 灰白色極細砂～細砂（Fe 斑紋あり）



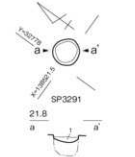
1　10YR5/1 褐灰色砂質シルト（白色細砂を少量含む SP3275）
2　10YR5/1 褐灰色砂質シルト（SP3276）



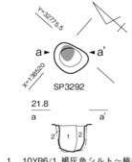
1　10YR5/1 褐灰色砂質シルト



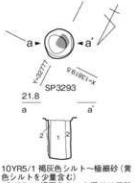
1　2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト（灰白色砂質シルトブロック混じる）
2　2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト



1　10YR6/1 褐灰色シルト混じり極細砂（Fe・Mn 斑紋あり）

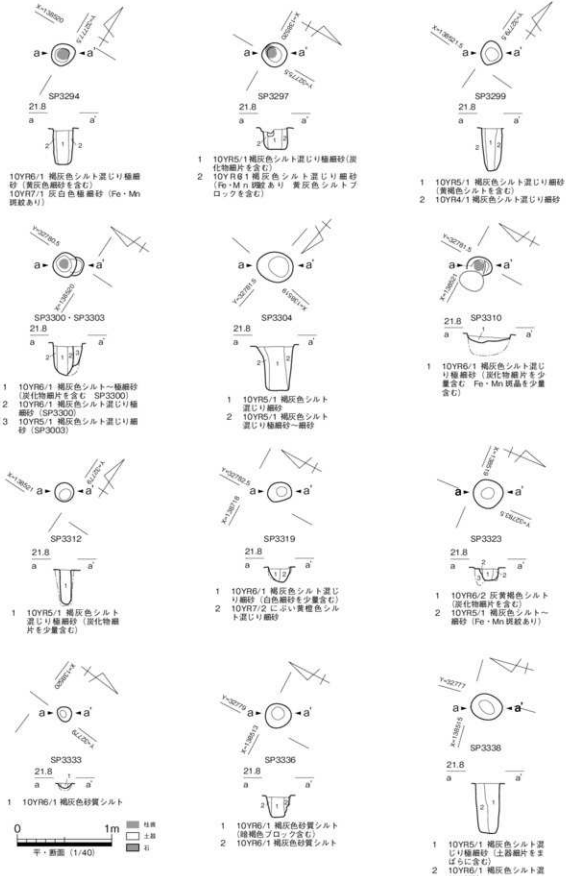


1　10YR6/1 褐灰色シルト～極細砂（黄褐色シルトを少量含む）
2　10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂

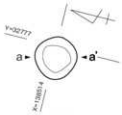


1　10YR5/1 褐灰色シルト～極細砂（黄色シルトを少量含む）
2　10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂（Fe・Mn 斑紋あり）

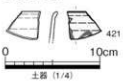
第178図　3-1区 ピット平・断面図1



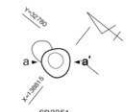
第 179 図　3-1 区ピット平・断面図 2



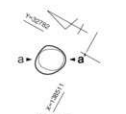
1　10YR4/1 褐灰色シルト～細砂（黒褐色シルトブロックを多量に含む）



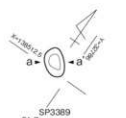
土器（1/4）



1　10YR4/1 褐灰色シルト（黄褐色細砂を含む）



1　10YR6/1 褐灰色砂質シルト

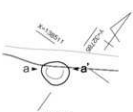


1　10YR6/1 褐灰色砂質シルト

1　10YR6/2 灰黄褐色シルト
2　10YR5/1 褐灰色シルト混じり極細砂

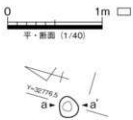
1　10YR5/1 褐灰色シルト混じり極細砂（炭化物細片を少量含む）

1　10YR6/1 褐灰色砂質シルト



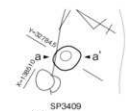
1　10YR7/1 灰白色砂質シルト
2　10YR7/1 灰白色砂質シルト（茶褐色ブロックが混じる）

1　10YR6/1 褐灰色シルト



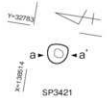
1　10YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂（Fe、Mn 斑紋あり）

1　10YR8/3 浅黄橙色砂質シルト
2　10YR6/1 褐灰色砂質シルト（にぶい黄橙色ブロックが混じる）

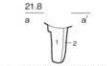


1　10YR8/3 浅黄橙色砂質シルト
2　10YR7/1 灰白色砂質シルト
3　10YR6/1 褐灰色砂質シルト（茶褐色ブロックが混じる）

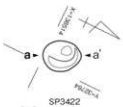
第180図　3-1区 ピット平・断面図3



SP3421

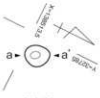


1　10YR7/1 灰白色砂質シルト
2　10YR6/1 褐灰色シルト（茶褐色ブロックが混じる）



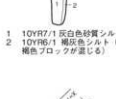
SP3422

1　10YR6/1 褐灰色砂質シルト（茶褐色ブロック，白色細砂ブロックが混じる）
2　10YR6/1 褐灰色シルト（茶褐色ブロックが混じる）

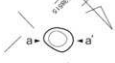


SP3426

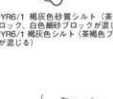
1　10YR6/1 褐灰色砂質シルト（茶褐色ブロックが混じる）



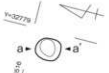
SP3432



1　10YR7/1 灰白色砂質シルト
2　10YR4/1 褐灰色砂質シルト（茶褐色ブロックが混じる）



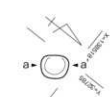
SP3435



1　10YR6/1 褐灰色砂質シルト（茶褐色ブロックが混じる）

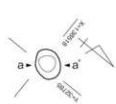
SP3437

0　10cm
土器（1/4）



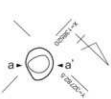
SP3442

1　10YR6/1 褐灰色砂質シルト（白色細砂ブロックが混じる）
2　10YR6/1 褐灰色砂質シルト

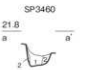


SP3443

1　10YR7/1 灰白色砂質シルト（茶褐色ブロックが混じる）
2　10YR6/1 褐灰色砂質シルト（茶褐色ブロックが混じる）

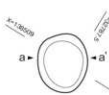


SP3460



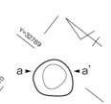
1　10YR7/1 灰白色砂質シルト
2　10YR6/1 褐灰色砂質シルト（茶褐色ブロックが混じる）

平・断面（1/40）



SP3544

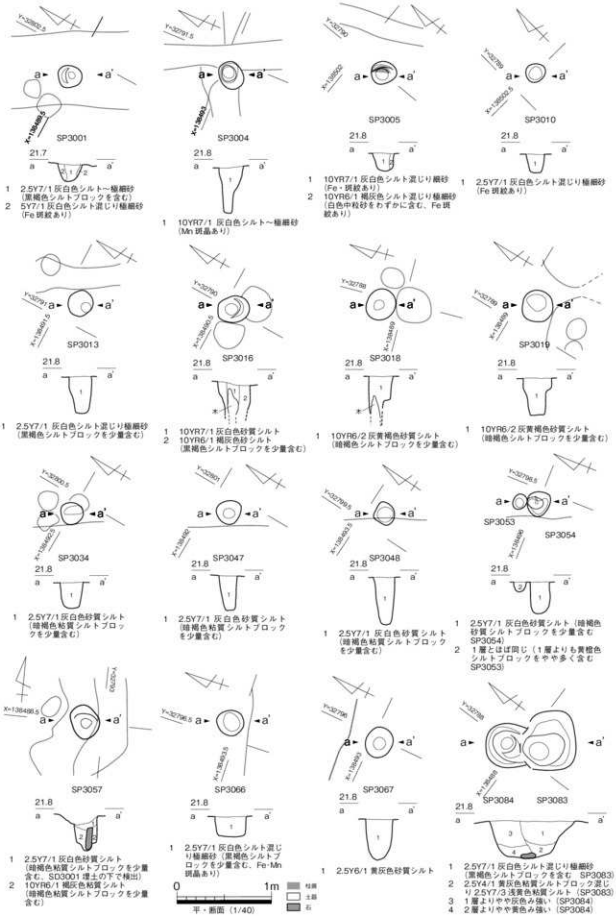
1　10YR4/1 褐灰色（茶褐色ブロックが混じる）
2　10YR4/1 褐灰色砂質シルト（茶褐色ブロックが多量に混じる）



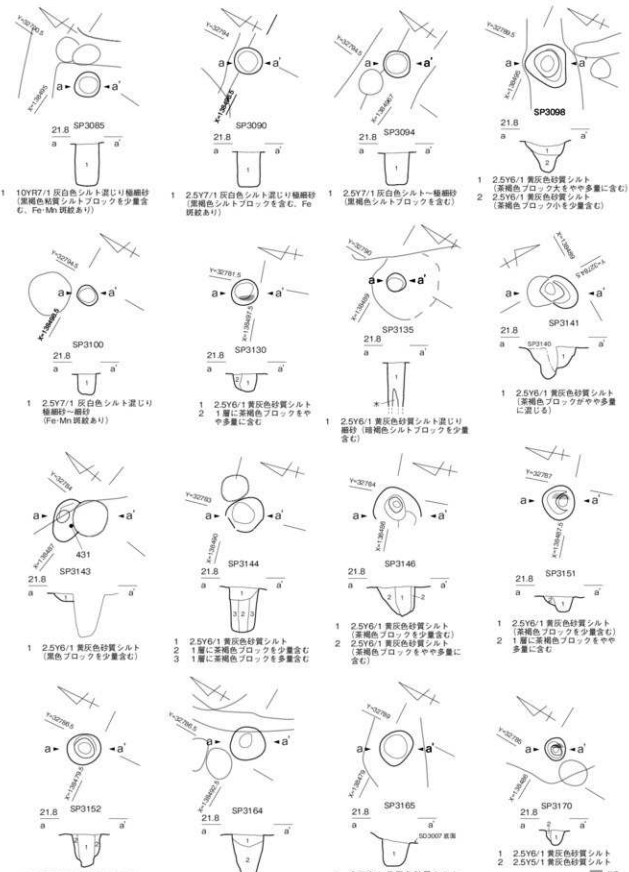
SP3545

1　10YR4/1 褐灰色砂質シルト

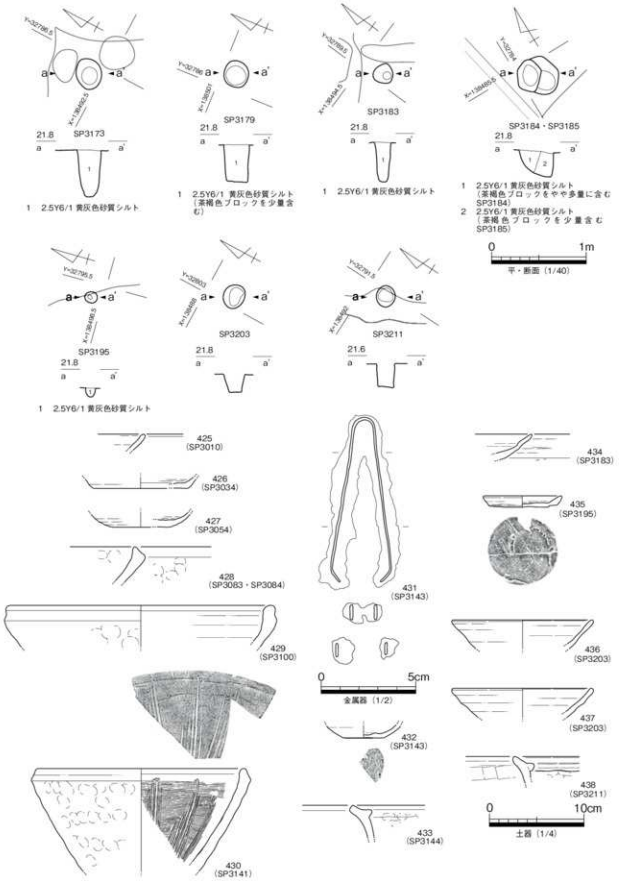
第 181 図　3-1 区 ピット平・断面図 4



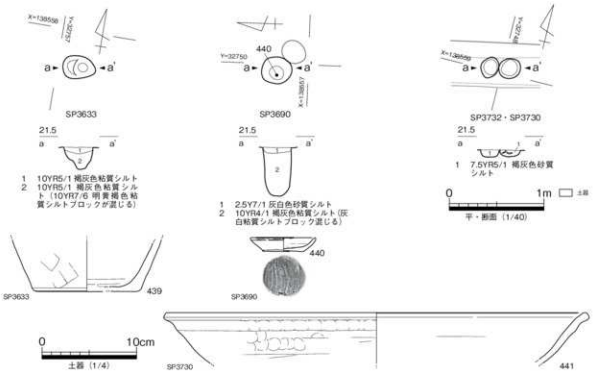
第182図　3-2区 ピット平・断面図1



第 183 図　3-2 区ピット平・断面図 2



第184図　3-2区 ピット平・断面図3



第 185 図　3-4･5 区ピット平・断面図

5　遺構外出土遺物

第 186 ～ 190 図は、包含層や遺構面精査中、側溝掘削時に出土した遺物や、出土遺構が不明な遺物について、必要と判断したものを図示した。以下では遺物の特徴について記載する。

1 区・2 区出土遺物（第 186 図）

442 ～ 446 は、1-1 区調査時に出土した遺物である。442 は、備前焼灯明皿である。西側壁面から出土した遺物で 18 世紀前半代に位置付けられる。443・444 は東壁面から出土した遺物。443 は、中国産青花皿の底部片。底部はいわゆる碁笥底を呈し、小野氏の染付皿Ｃ群Ⅰ類に分類 (小野 1982) される。444 は、青白磁梅瓶の体部片である。外面は、花渦文を印刻し施釉。内面は無釉。445・446 は遺構面精査中に出土した遺物。445 は土師器羽釜である。11 世紀中葉前後に位置付けられる。446 は、瀬戸・美濃系陶器灰釉折縁皿で、体部内面には丸ノミ状工具によるソギが施され、底部内面と高台内を除いて灰釉が施される。藤澤良祐氏 (2008) による大窯第 4 段階前半、16 世紀末前後に位置付けられる。

447 ～ 452 は 2 区調査時で出土した遺物である。447 は 2-1 区西側側溝掘削時に出土した、土師質焼成の管状土錘である。半損しており全形は不明。448 は第 2 遺構面精査時に出土した、弥生土器壺底部。内面には剥離痕が残る。449 は、2-1 区試掘トレンチから出土した瀬戸・美濃系陶器天目椀である。内外面には鉄釉が施される。大窯第 4 段階前半に位置付けられる。450 ～ 452 は 2 区排土より採集した。450 は肥前系陶器丸皿で、内外面に藁灰釉が施される。451 も肥前系陶器皿で、口縁部は小さく外反して開き内面口縁部下端に段を有し、藁灰釉を施す。いずれも肥前Ⅰ期 16 世紀後葉～ 17 世紀初頭に位置付けられる (盛 2000)。452 はサヌカイト製の火打石。いずれも正確な出土層位や帰属遺構等は不明である。(藏本)

3-1 区出土遺物（第 186・187 図）

453 ～ 464 は 3-1 区遺構面精査中に出土した遺物。453 は土師質土器皿。底部付近に明確な屈曲点を持つ。11 世紀第 4 四半期～ 13 世紀第 1 四半期のものとみられる。454 は土師質土器足釜口縁部片。口縁部内外面、体部内面はナデで調整を行い、体部外面は指オサエをした後ナデもしくは板ナデで調整を施す。口縁部形態より楠井Ⅱ-3 期 (14 世紀末～ 15 世紀前葉) のものと考えられる。455・456 は土師質土器鍋。455 は 441 の祖型的な形態であり、17 世紀前半頃のものと考えられる。456 は体部外面は指オサエ後ナデ、体部内面はハケ目で調整する。口縁部に明確な屈曲点があり、強く外傾する。口縁部外側に段が存在する。457 は土師質土器把手付鍋の口縁部片。本書編年 B 期 (1- Ⅲ型式) に相当する。外面は指オサエ後ナデ、内面は指オサエ後板ナデで調整を行う。口縁部形態より中世後期のものである。458 は瓦質土器香炉。口縁部と体部下半に沈線による 2 条の文様体を作り、上側には花菱文、下側には菊花文がスタンプされる。459 は須恵器蓋つまみ片。蓋の全体形は不明だが、つまみは扁平な擬宝珠形を呈し外面に分厚く濃緑色の自然釉が被る。8 世紀のものとみられる。460 ～ 462 は肥前系陶器皿。460 は溝縁皿。底部内面に砂目積が残る。461・462 は底部内面付近に段がみられる。いずれも 17 世紀前半～中葉。463 白磁椀Ⅳ類の底部片。底部は無釉で削り出し高台によって形成する。12 ～ 13 世紀。464 は和釘。465 は排土、466 は北拡張部第 1 遺構面精査中、467・468 は北拡張部表土掘削中に出土した遺物である。465・466 は平瓦。ともに凸面は縄叩き目、凹面は布目の跡が残る。467 は不明鉄器片。上部に折返しらしきものが確認できるため鎌の可能性がある。468 は釘。鉄釘が 3 ～ 4 本銹着している。釘頭の形状は銹により観察できないが、X 線写真に写る陰影から丸釘の可能性も考えられる。(溝上)

3-2 区出土遺物（第 188 図）

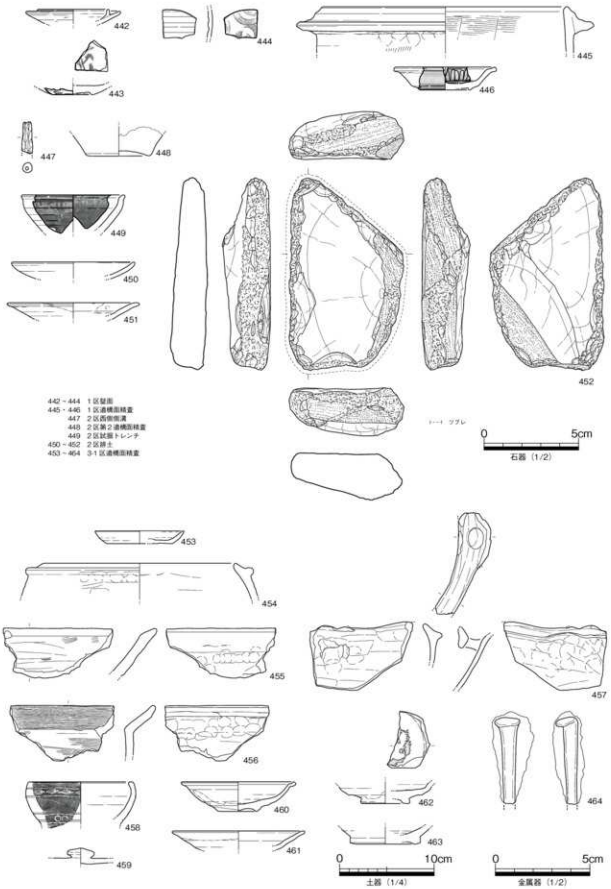
469・470 は耕作土・床土中出土遺物である。469 は肥前系磁器染付椀で、外面に青磁釉、見込みにコンニャク印判が見られる。470 は産地不明の施釉陶器椀ないし鉢で、体部外面に鉄釉が掛けられる。重機での掘削排土より出土しており、出土位置は不明である。

471 は土師器二重口縁壺の口縁部片として図示した。重機掘削中に出土しており、詳細な出土層位は不明である。

472・473 は南壁沿い側溝の掘削中に出土した土師質土器杯である。体部の外傾度は比較的小さい。南側側溝は SD3013 の一部を破壊しており、出土位置から SD3013 埋土より出土の可能性がある。

474 は東壁沿い側溝の掘削中に出土した、土師質土器杯である。出土位置は SD3026 に近接しており、SD3026 埋土より出土の可能性が考えられる。

475 ～ 488 は第 1 遺構面精査中の出土遺物である。475・476 は土師質土器皿。477・478 は土師質土器杯である。いずれも磨滅が著しい。479 は土師器高杯の脚部である。脚柱部はわずかに膨らみ、脚端部は短く開く。480・481 は土師質土器足釜の口縁部片。いずれも口縁端部は丸く、鍔部は小さく短い。482 は土師質土器鍋。口縁部は屈曲して直線的に伸び、端部は丸くなる。483 は土師質土器捏鉢か。一定部分が残存しているが、おろし目が見られない。口縁端部は丸く、端部下に端面状の弱い屈曲が認められる。484 は土師質土器鉢の口縁部片として図化した。口縁端部を内傾させたのち、複数箇所を浅い片口状に作る。485・486 は土師質土器擂鉢である。口縁端部は丸く、端部下に端面状の屈曲をもつ。485 は本書編年の D 期 (Ⅳ～ Ⅴ型式)、486 は本書編年の D 期 (Ⅴ型式) に相当する。487 は須恵器杯である。488 は肥前系陶器皿である。内面は、外反する口縁部と底部の境に段を作り、口縁部に鉄絵を描く。



第 186 図　1・2・3-1 区遺構外出土遺物

見込みに胎土目積みの痕跡が明瞭に残る。高松城様相1～2、17世紀前半である。

489は第2遺構面構成土中より出土した、平基式の打製石鏃である。蛍光X線分析による石材産地推定の結果、金山産サヌカイト製と推定される。出土層位から弥生時代後期以前に位置付けられるが、詳細は不明である。490は出土位置不明のサヌカイト剥片である。側面には自然面が残る。稜線に顕著な敲打痕がみられることから、火打石として図示した。(益崎)

3-3区出土遺物（第189図）

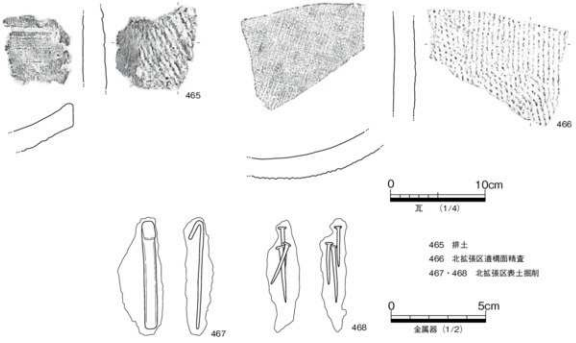
491は精査中に出土した肥前系陶器溝縁皿。17世紀中葉のものである。492は第2遺構面精査中に出土したサヌカイト製火打石。火打石として使用された部分は極一部である。片面と石の上部は、未加工のままであり、その部分を避けるようにして使用痕跡は形成されている。(溝上)

3-4区・3-5区・3区出土遺物（第190図）

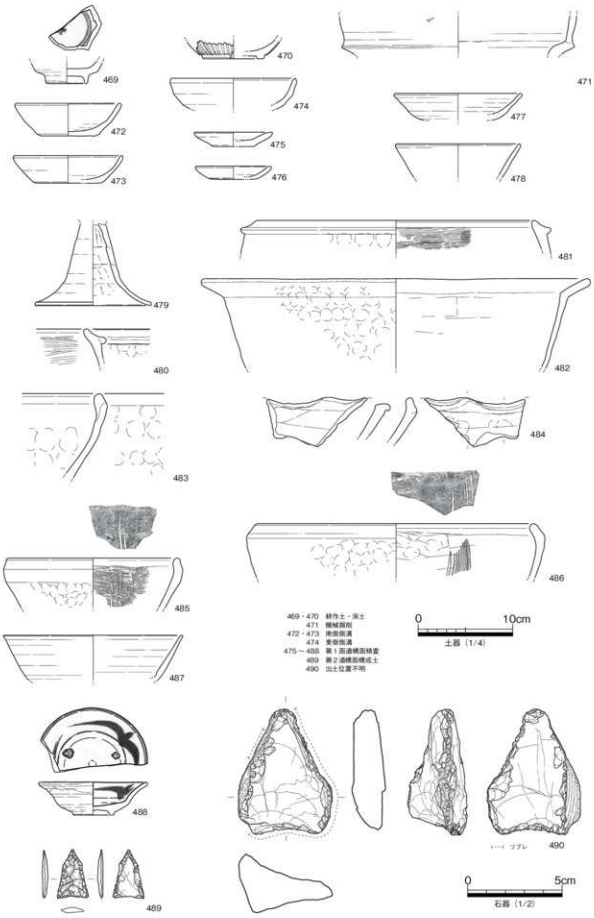
493・494は3-4区から出土した。493は機械掘削等で出土した土師質土器杯。内外面ともに回転ナデで調整する。494は遺構面精査中に出土した。破片のため器種は確定できないが、石鏃の可能性がある。

495・496は3-5区から出土した。495はSR3003と直交するトレンチから出土した土師質土器杯。体部は回転ナデで、底部は回転ヘラ切り。内面は回転ナデで調整する。496は遺構面精査中に出土した平瓦。凸面は縄目叩き、凹面は板ナデの跡が残る。

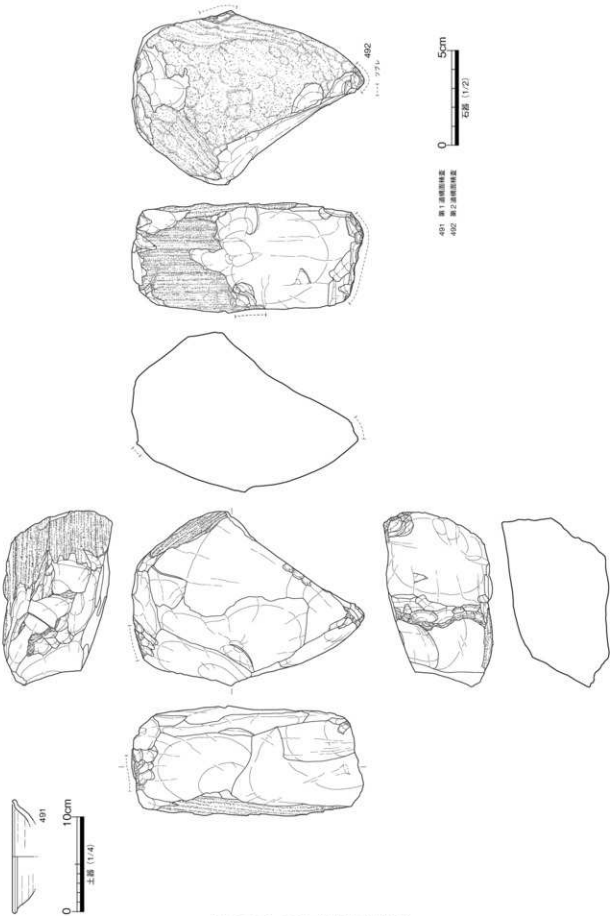
497は3区排土から出土した。用途不明石製品。上面の中央部付近が楕円形に磨滅する。楕円形に磨滅する部分の周縁には刃の平たい道具で外側に傾斜するように加工した痕跡が残る。中央部が磨滅しているのに対し、上面の外縁部には磨滅が見られないことから、中央部のみで磨滅を伴う作業が行われたと考える。(溝上)



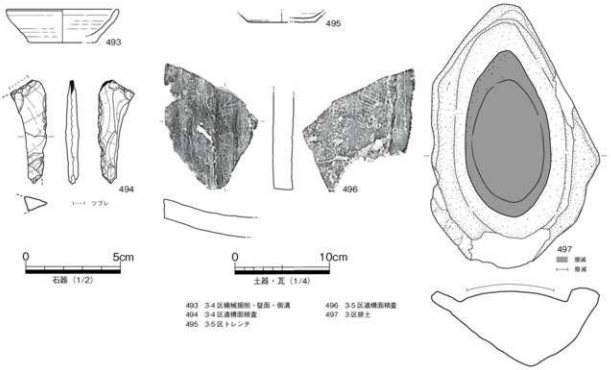
第187図　3-1区遺構外出土遺物



第 188 図　3-2 区遺構外出土遺物



第189図　3-3区遺構外出土遺物



第 190 図　3-4・3-5・3 区遺構外出土遺物

第 4 節　4・5 区の調査

1　遺構・遺物

①土坑

5 区 SK5013（第 192 図）

SK5013 は 5 区南部で検出した土坑である。重複関係より SD5014 より後出する。長軸 1.3 m以上、短軸 0.5 m、残存深 0.18 mをそれぞれ測り、平面形は溝状、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は単層で、にぶい黄褐色粘質土と褐灰色混細砂粘質土が混ざる。

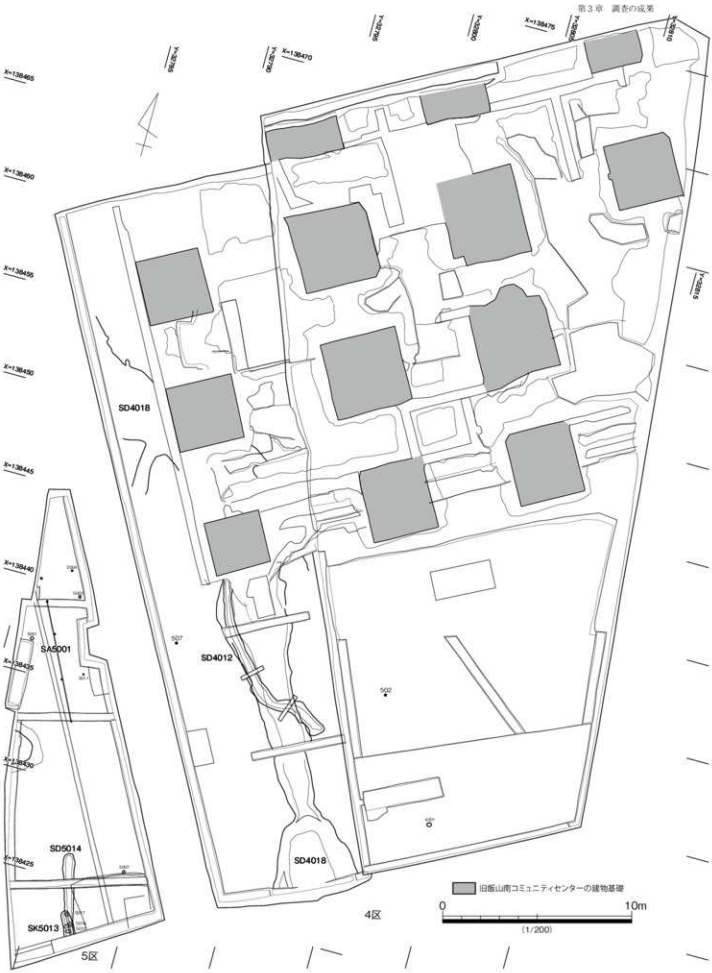
遺物は出土していない。検出面より古墳時代の遺構と考えられるが、詳細な時期決定は困難である。

②溝

4 区 SD4012（第 193 図）

SD4012 は 4 区南西部で検出した南北溝で、北部は攪乱によって検出できず、南部は途中で途切れ延長は検出していない。重複関係より SD4018 より後出する。検出面幅 0.3 ～ 0.5m 前後、残存深 0.16m 前後をそれぞれ測り、断面形は浅い U 字状を呈する。流路方向 N41.6° W に配され、周辺の条里型地割方向とは一致しない。溝底面の標高は北端で 21.47 m前後、南部で 21.46 m前後をそれぞれ測り、高低差がほとんどなく流路方向の決定には至らない。埋土は黄灰色混細砂粘質土の単層であった。

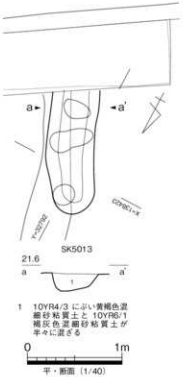
遺物は図示していないが、器種不明の土師質土器小片が 50 点程度出土している。いずれもローリングしたように磨滅しており、遠隔地から流入品の可能性がある。検出した遺構面より古墳時代と考えられるが、詳細な時期決定は困難である。



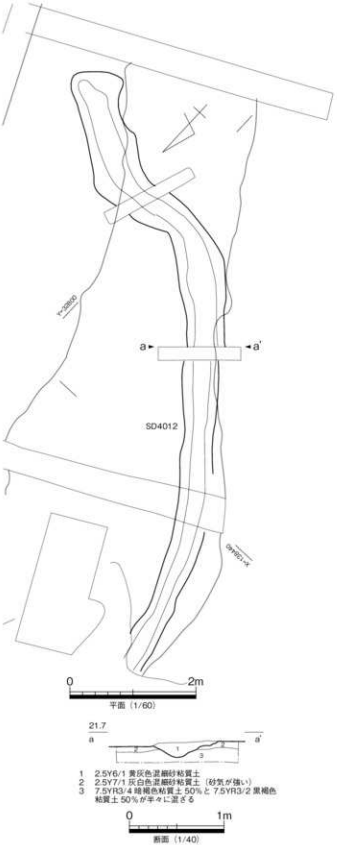
第191図　4・5区 遺構平面図

4 区 SD4018・SD4019
(第 194・195 図)

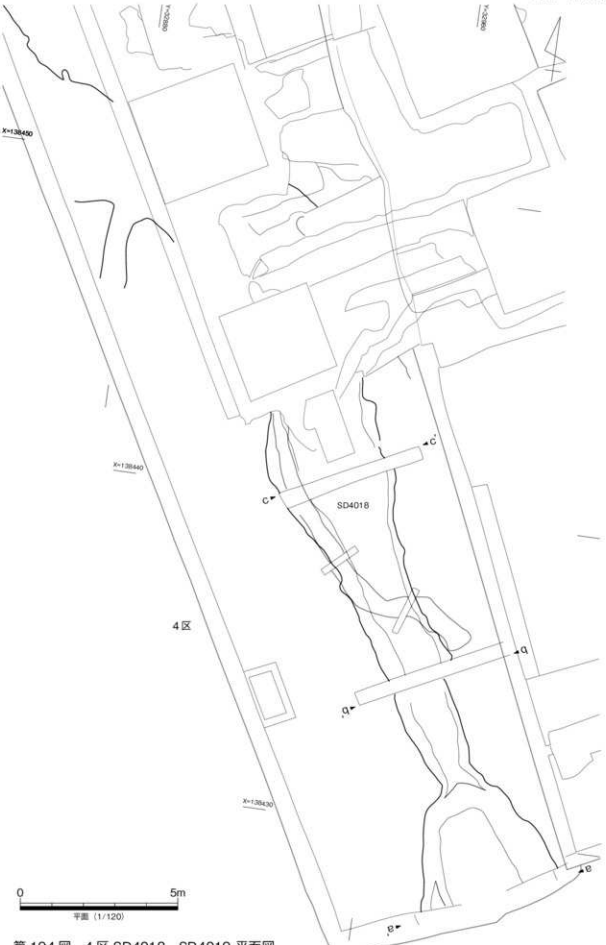
SD4018・SD4019 は 4 区西部で検出した南北溝である。c-c' 断面では SD4018 に切られるようにして SD4019 を検出したものの、b-b' 断面では 1 条しか溝が検出されなかったことから、この間で溝が合流したものと考えられる。北部は攪乱によって延長は確認できないものの、4 区西壁において SD4018 もしくは SD4019 の延長部と考えられる土層の堆積を確認している。南部は調査区外へ延長すると考えられる。重複関係より、SD4012 より先行する。検出面幅は最大 4.2 m前後、残存深 0.5 m前後をそれぞれ測り、断面形は中央に向かって深まる皿状を呈する。溝底面の標高は北部で 20.79 m前後、南部で 20.66m 前後を測り、高低差より南へ流下していた可能性が高い。埋土は記録位置により相違を認めるが、2 ～



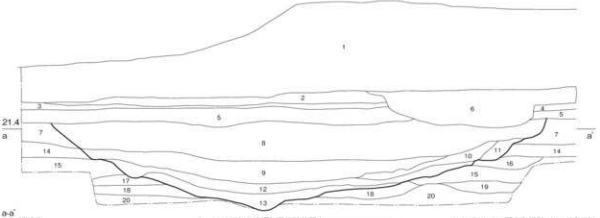
第 192 図　5 区 SK5013 平・断面図



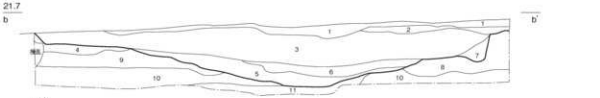
第 193 図　4 区 SD4012 平・断面図



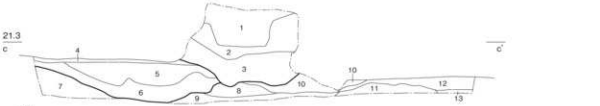
第194図　4区 SD4018　SD4019 平面図



a-a'
1 造成土
2 2.5Y7/2 灰黄色混細砂粘質土と 10YR6/6 明黄褐色混細砂粘質土が半々に混じる
3 2.5Y7/1 灰白色混細砂粘質土（所々に明黄褐色混細砂粘質土が混じる）
4 10YR7/1 灰白色混細砂粘質土 20% と 10YR5/8 黄褐色混細砂粘質土 80%
5 10YR4/3 にぶい黄褐色混細砂粘質土と 10YR6/1 褐灰色混細砂粘質土が半々に混じる（Mn を少量含む）
6 攪乱（コンクリートが埋まった跡）
7 10YR8/1 褐灰色混細砂粘質土 10% と 10YR5/8 黄褐色粘質土 90%
8 7.5YR3/3 暗褐色混細砂粘質土
9 10YR5/1 褐灰色粘土
10 10YR3/1 黒褐色粘土
11 10YR6/6 明黄褐色混細砂粘質土
12 2.5Y3/1 黒褐色混細砂粘質土（砂を多く含む）
13 10YR3/1 黒褐色混細砂粘質土
SD4018
14 2.5Y7/1 灰白色粗砂（Fe を含む）
15 10YR7/1 灰白色砂質土
16 2.5Y7/1 灰白色砂質土
17 2.5Y6/1 黄灰色砂質土
18 5Y7/1 灰白色砂質土
19 2.5Y6/1 黄灰色細砂
20 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粗砂



b-b'
1 2.5Y6/2 灰黄色砂質土
2 10YR5/2 灰黄褐色混細砂粘質土
3 10YR3/2 黒褐色粘土 80% 10YR4/4 褐色粘土 20% で混積する
4 2.5Y6/1 黄灰色混細砂粘質土
SD4018
5 10YR4/1 褐灰色粘質土
6 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土
7 10YR6/1 褐灰色砂質土と 10YR4/6 褐色粘土（半々の割合で埋没している）
SD4018
8 2.5Y7/1 灰白色混細砂粘質土（Fe を多く含む）
9 5Y6/2 灰オリーブ色粗砂
10 5Y5/1 灰色粗砂（9 層よりも細かい粗砂、上層が少しにごる）
11 2.5Y4/1 黄灰色粗砂



c-c'
1 攪乱
2 10YR3/2 黒褐色粘土
3 2.5Y5/1 黄灰色粘土
SD4018
4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
5 10YR3/1 黒褐色混細砂粘質土（砂が多く混じる）
6 2.5Y3/1 黒褐色粘土
SD4019
7 2.5Y7/1 灰白色粗砂
8 2.5Y4/1 黄灰色粗砂
9 7.5Y7/2 灰白色混細砂粘質土
10 10YR3/1 黒褐色混細砂粘質土
11 10YR4/1 褐灰色粗砂
12 5Y7/1 灰白色細砂
13 5Y5/2 灰オリーブ色細砂

0 1m
断面（1/40）

第 195 図　4 区 SD4018　SD4019 断面図

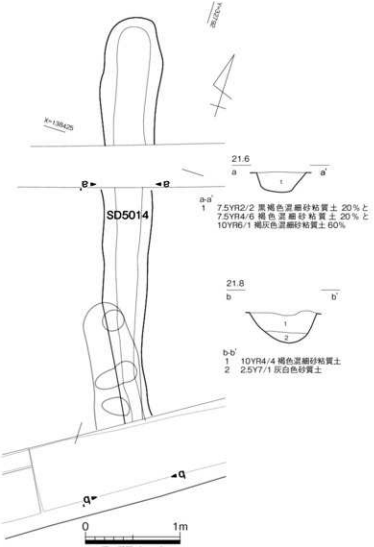
6層に細分され主に褐色系の粘土もしくは粘質土が堆積していた。

遺物は図示していないがSD4018の最下層からサヌカイトの剥片のみが出土している。検出面幅や南壁で検出した幅や深さから大型灌漑水路の可能性が考えられ、検出面から古墳時代と想定される。なお、遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難である。

5区 SD5014（第196図）

SD5014は5区南部で検出した東西溝で、北部は途切れ検出できず、南部は調査区外へ延長する。重複関係よりSK5013より先行する。検出面幅0.63 m、残存深0.2 mをそれぞれ測り、断面形は逆台形状を呈する。流下方向はN14.73° Wに配され、条里型地割とは一致しない。溝底面の標高は北部で21.36 m前後、南部で21.34 m前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下していた可能性が高い。埋土は単層もしくは2層で、褐色系混細砂粘質土と灰白色砂質土が堆積していた。

遺物は出土していない。検出面から古墳時代と考えられるが、詳細な時期決定は困難である。



第196図　5区 SD5014 平・断面図

第197図　5区 SA5001 平・断面図、出土遺物

③柵列

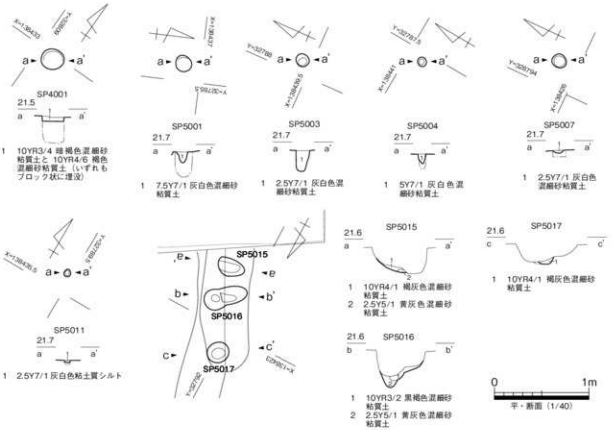
5 区 SA5001（第 197 図）

5 区北部で検出した南北延長 7.8 m の柵列である。主軸方向は N27.54° W で、周辺の条里型地割と概ね合致する。柱間間隔は 1.25 ～ 2.45 m と一定せず、柱通りも揃わない。柱穴の掘り方は 0.03 ～ 0.1 m の楕円形で、底面の標高 21.46 ～ 21.5 m、残存深は 0.05 ～ 0.15 m をそれぞれ測る。

遺物は SP5008 から 498 土師質土器杯が出土している。検出面と遺物より、中世以降と考えられるが、詳細な時期決定は困難である。

④柱穴（第 198 図）

4･5 区では、柱穴を 19 穴確認し、その一部を第 198 図に示した。図示した遺物の詳細は第 4 表に記した。



第 198 図　4・5 区 ピット平・断面図

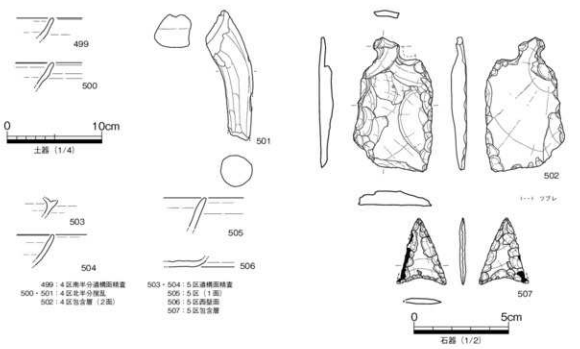
区名	ピット番号	平面形	規模(cm)(長軸×短軸)	深さ(cm)	掲載遺物	その他の出土遺物	その他
4	SP4001	円形	26	4		なし	
5	SP5001	円形	16	12		なし	
5	SP5003	円形	14	22		なし	
5	SP5004	円形	10	10		なし	
5	SP5007	円形	16	2		なし	
5	SP5011	円形	8	2		なし	
5	SP5015	楕円形	28 × 18	39		なし	
5	SP5016	楕円形	46 × 18	24		なし	
5	SP5017	円形	14	20		なし	

第４表　４・５区ピット一覧

⑤遺構外出土遺物（第 199 図）

包含層や遺構検出中、壁切作業中時に出土した遺物について必要と判断したものを図示した。以下では遺物の特徴について記載する。

499 ～ 502 は 4 区から出土した遺物である。499・500 は土師質土器杯。ともに全体を回転ナデで調整する。501 は土師質土器足釜脚部。全体的に指ナデで調整し、体部との接する部分も指ナデで調整する。502 はサヌカイト製の石匙。ツマミ付近にツブレが集中する。503 ～ 507 は 5 区から出土した遺物である。503 は須恵器杯身。焼成不良のため土器全体が橙色を呈する。504 は土師質土器杯。全体に磨滅している。505 須恵器杯口縁部片。8 世紀頃の所産と考える。506 は土師質土器杯。全体的に磨滅している。507 はサヌカイト製の石鏃である。



第 199 図　４・５区遺構外出土遺物